

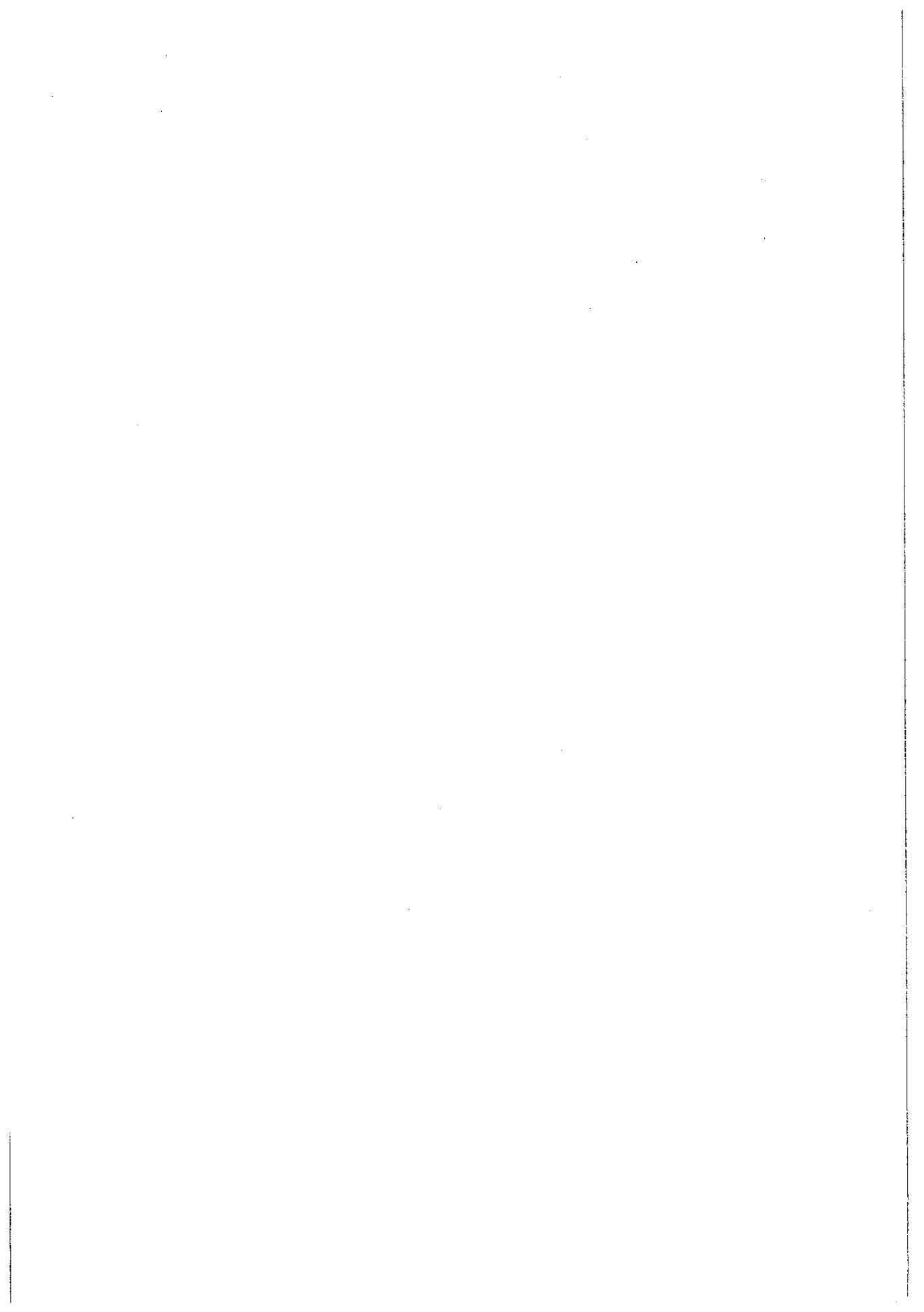
年報

—昭和 60 年度—

VOL. 4

昭和 61 年 10 月

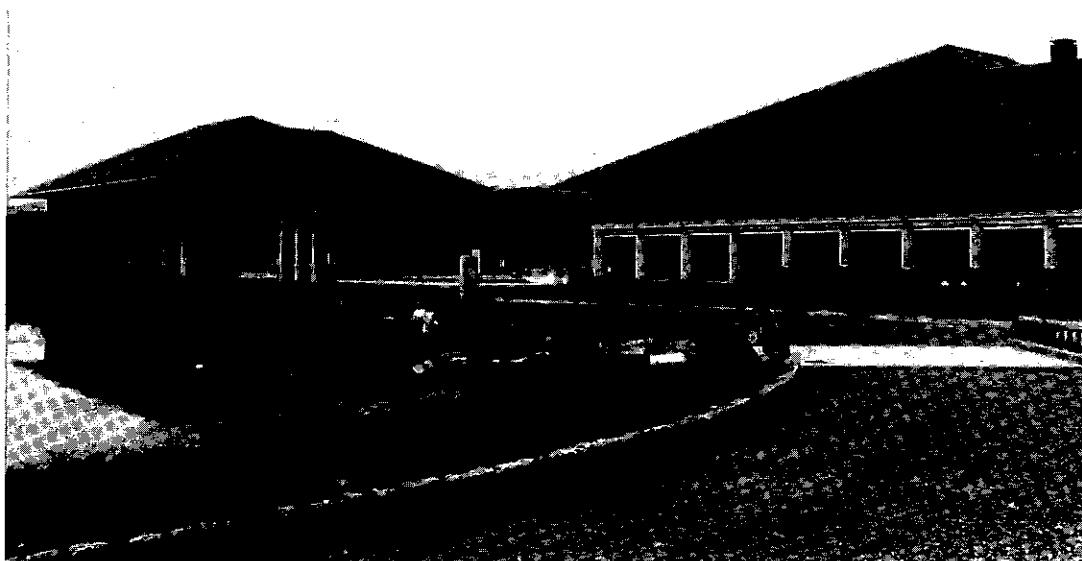
長野市立博物館



序

当長野市立博物館の昭和60年4月
から昭和61年3月までの活動と、御
利用の状況をまとめ、ここに年報第
4号を発行します。

昭和61年10月
長野市立博物館



目 次

I	博物館日誌	1
1	長野市立博物館一年の歩み	〈山口〉 1
2	茶臼山自然史館建設・開館までの沿革	〈塩入〉 3
3	茶臼山自然史館開館後の歩み	〈塩入〉 8
II	事業報告	9
1	展示活動	〈矢口・山口・和田・塩入〉 9
2	天体字習室	〈大蔵〉 28
3	調査研究収集活動	〈矢口・山口・大蔵・青木・安室・唐沢・藤森・西川〉 31
4	教育普及活動	〈山口・大蔵・唐沢・西川〉 49
III	博物館収蔵資料	54
1	購入資料	〈山口・大蔵・唐沢・藤森〉 54
2	寄贈資料	〈大蔵・安室・唐沢・藤森〉 58
3	寄託資料	〈安室・藤森〉 76
IV	博物館管理・運営	〈佐野〉 79
1	茶臼山自然史館建物等建設工事	79
2	茶臼山自然史館建物・設備の概要	79
3	茶臼山自然史館部屋別床面積	80
4	昭和60年度歳出予算概要	82
5	管理委託業務	82
6	入館者状況	83
7	入館者 5年間の動向	89
8	利用状況	91
V	彙 報	〈佐野〉 92
1	長野市立博物館条例改正	92
2	長野市立博物館協議会	92
3	組 織	93
VI	講演会収録	94
1	善光寺と庶民信仰(五来重)	〈奈須野〉 94
2	台所と人間性(倉島日露子)	〈奈須野〉 110
3	信州の漁業と文化(市川健夫)	〈安室〉 121
VII	特別寄稿	134
	長野県内古建築用材の年代測定(光谷拓実)	134

I 博物館日誌

1 長野市立博物館 1年の歩み

- 4月 7日 特別企画展「善光寺信仰」開催（5月26日まで）
- 4月 9日 長野市新規採用職員の施設見学、三輪遺跡の発掘調査開始
- 4月11日 小林計一郎先生来館
- 4月18日 苛小牧市市議会一行が視察
- 4月20日 中国石家庄市産業研修生一行7名が来館
- 4月26日 市内小中学校の新任校長一行35人が来館
- 4月30日 矢口学芸員が鎌倉円覚寺へ善光寺仏借用のため出張
- 5月 1日 大本願鷲司誓玉副住職が特別展に来館、円覚寺善光寺仏搬入展示
- 5月 4日 八木健三先生（北海道大学・東北大名誉教授）、大本願一条智光上人来館
- 5月 5日 今年最高の入館者（1072人）、プラネタリウムは6回投映
- 5月11日 群馬県伊勢崎市の円福寺御住職夫妻が来館
- 5月12日 特別企画展記念講演会「善光寺と庶民信仰」（講師 五來重大谷大学名誉教授）
- 5月14日 本願寺伏見副住職来館
- 5月18日 松本市立博物館佐藤館長来館
- 5月21日 丸山大勸進執事来館
- 5月27日～6月 5日 特別企画展借用資料返還
- 6月 1日 夏のプラネタリウム「水に浮く惑星一土星一」投影開始
- 6月 6日 武石村議会の議員視察
- 6月 7日 全国公園緑地大会参加者来館
- 6月 9日 春の地質教室開講（講師 富沢恒雄先生）
- 6月10日 文化財保存全国協議会全国大会参加者一行40名、長野県婦人会連合会交歓会一行21名来館
- 6月16日 岡谷市働く婦人の家交歓会一行44名来館
- 6月17日 副館長議会総務文教委員会に出席
- 6月18日 少年科学センターの職員が研修視察
- 6月21日 全国建築士大会出席者一行来館
- 6月25日 岩手県一関市の議会一行視察
- 6月26日 飯綱高原（芋井）の猪土手の調査（山口・安室）
- 7月 1日 博物館実習生3人を受入
- 7月 2日 みどりの見学約40人来館
- 7月 5日 上田市・小諸市の議会一行視察
- 7月10日 愛知県蒲郡市議会一行7名視察
- 7月12日 土口將軍塚古墳の調査会会議
- 7月17日 みどりの見学35名来館、川越市博物館建設準備委員会一行21名視察
- 7月21日～27日 「昭和59年度新収蔵資料展」のうち民俗資料展を開催（8月18日まで）、矢口学芸員が文化庁主催の第5回指定文化財展示取扱講習会に出席
- 7月24日 宮崎市と堺市の議会一行視察
- 7月25日 みどりの見学一行来館、働く婦人の家天体教室開講
- 7月26日 地附山東斜面一帯が地すべり
- 7月27日 長野市少年科学センターが開館
- 7月30日 松代城調査開始
- 7月31日 大分県議会議員一行視察、池に小鯉200kg放流
- 8月 1日 安室学芸員地附山地すべり災害の応援で出動
- 8月 3日 常設展示の新しいパンフレットを配布
- 8月12日 地附山地すべり災害松寿荘死亡者慰靈察
- 8月15日 盆中最高の入館者（718人）
- 8月17日 篠ノ井塩崎康樂寺本堂（浄土真宗）が落雷により全焼
- 8月20日 広島県福山市議会一行視察、「昭和59年度新収蔵資料展」美術歴史資料展開催（9月23日まで）

- 8月22日 明治大学大室古墳群調査団来長（9月4日まで）
- 8月27日 青森市議会議員一行が視察
- 9月1日 奈須野由美嘱託採用（学芸係）
- 9月3日 みどりの見学30名来館
- 9月6日 石家庄市代表団一行来館
- 9月7日 秋のプラネタリウム「1910年—ハレ彗星接近中PART1—」投影開始
- 9月12日 みどりの見学一行来館
- 9月19日 全国婦人問題会議出席者来館
- 9月20・21日 日博協自然史関係研修会出席のため館長上京
- 9月23日 開館記念日のため無料入館、茶臼山自然史館開館
- 9月24日 議会総務文教委員会に副館長出席
- 9月25日 みどりの見学一行来館
- 9月26日 塩崎松節遺跡発掘調査開始
- 10月4日 みどりの見学40名余来館
- 10月6日 中国石家庄市産業視察団一行6名来館
- 10月10日 企画展「台所と什器の世界」開催（11月17日まで）
- 10月12・13日 北海道忠類村ナウマン象発掘15周年記念式典に山口副館長出席
- 10月15日 勝田市教育委員会一行視察
- 10月22日 大竹市議員一行来館
- 10月24日 高岡市議会議員一行、千葉市博物館協議会一行視察
- 10月29日 高槻市議会議員一行12名視察
- 10月30日 茅野市議会議員一行8名視察
- 10月31日 博物館協議会開催
- 11月3日 企画展記念講演会「台所と人間性」（講師 倉島日露子・長野生活学園長）
- 11月4日～6日 日本博物館協会総会のため館長熱海市へ出張
- 11月7日 高崎市議会議員一行視察
- 11月8日 松本市教育委員会博物館建設事務局視察
- 11月9日 塩崎松節遺跡の弥生人骨取り上げ指導に信州大学医学部の西沢寿光先生来長
- 11月13日 議会の総務文教委員会に副館長が出席
- 11月17日 山梨市区長会一行視察
- 11月19日 議会の決算審議特別委員会に副館長が出席、松節遺跡を県史編さん委員一行7名が見学
- 11月20日 扉北館より佐久間象山資料を受入収蔵、石川条里の発掘調査開始
- 11月21日～24日 企画展借用資料返還
- 11月22日 図書館の研究集会参加者20名来館
- 11月26日 松節遺跡と木棺墓群を各報道機関が取材
- 11月28日 同和教育課職場研修の一行が来館
- 12月2日 奈良国立文化財研究所主催専門研修「遺跡保存整備課程」に青木学芸員が参加（12月19日まで）
- 12月5日 近江文化財研究所職員一行が来館
- 12月7日 冬のプラネタリウム「1986年—ハレ彗星接近中PART2—」投影開始、SBC主催ハレー彗星見学会（240人参加）
- 12月9日 働く婦人の家講座プラネタリウム教室開催
- 12月14日～15日 しめ縄教室開講
- 12月15日 松節遺跡人骨取り上げ全て終了
- 12月16日 議会総務文教委員会に副館長が出席
- 12月18日 昨夜來の降雪で一面銀世界
- 12月19日～20日 矢口学芸員が静岡市へ研修のため出張
- 12月22日 常設展2階民家内で餅つき
- 12月28日 仕事納め
- 1月4日 仕事始め
- 1月14日 企画展資料調査のため、諏訪へ出張（山口・安室）
- 1月18日 企画展資料調査のため、上田市へ出張（山口・安室）
- 1月19日～25日 館内くん蒸のため休館
- 1月21日 企画展資料調査のため松本・豊科へ出張、地質調査所で松代ボーリングコアの調査に来館
- 1月22日 企画展資料調査のため大町・穂高に出張
- 1月23日 企画展資料調査のため上田へ出張
- 1月29日～31日 企画展資料借用のため、諏訪・上田・松本・穂高に出張

2月 5日	渋川市議会一行 7人視察	到
2月 7日	特別展示室内に四つ手綱を仕掛ける	3月 11日・12日 松節遺跡の遺物鑑定会開催
2月 11日	冬の天体教室開講	(大参義一信大教授・神村透県史編さん委員・
2月 18日	大田区立郷土博物館西岡館長視察	永峯光一国学院大教授・笹沢浩県史編さん常
2月 13日	企画展「漁とくらし」開催(3月30日)	任委員)
2月 25日	川口市教育委員会博物館建設事務局一行視察	3月 13日 博物館協議会開催
2月 26日	尼ヶ崎市教育委員一行視察	3月 20日 福岡市少年科学文化会館・群馬県立歴史博物館の職員が研修のため来館
2月 27日	N H K が企画展取材、同和教育課の研究集会参加者20余名が来館	3月 21日 企画展記念講演会「信州の漁業と文化」(講師 市川健夫東京学芸大学教授)
3月 1日	春のプラネタリウム「こぐまのころちゃん」投映開始	3月 24日・25日 館長・塩入・唐沢が阿南町・瑞浪市へ出張
3月 4日	松代城発掘調査開始	3月 26日 柴崎高陽先生企画展に来館
3月 7日	ハレー彗星接近関係の問い合わせが殺	3月 30日 今年一番の人出でにぎわう(451人)、春遠からじ

2 茶臼山自然史館建設・開館までの沿革

1) 創設の趣旨

長野市では、社会教育の場として、長野市立博物館・蝶の博物館・真田宝物館・少年科学センター等の博物館施設を通じて、人文科学(歴史学・民俗学等)・自然科学(地学・化学・物理学・生物学等)の各分野の学問の成果を身近かな資料を用いて公開し、新しい地方文化の創造につくしてきた。加えて、博物館相当施設として、茶臼山地域に動物園・植物園・恐竜公園を設け、生物の進化と生態に係わりの深い施設がそろい、その学問的な体系化が求められていた。さらに、この地域が化石の宝庫として過去60年間にわたり多くの資料が収集され、その大半は長野市立博物館に寄贈・寄託されている。この際、生物学が究明した動・植物の進化と生態の様相を、これらの化石資料や動・植物園・恐竜公園の身近な資料とを合わせて展示するための施設として、自然史博物館(仮称)を建設し、市民文化の創造につくそうとするものである。

2) 展示の基本構想

地球は、誕生以来46億年にも及ぶ長い歴史を有する。その間、生物が誕生して動・植物に分化し、動物は魚類・両棲類・爬虫類・哺乳類と、植物はシダ植物から裸子植物・被子植物へと、それぞれ環境に順応しながら進化と滅亡をくりかえしてきた。自然史博物館はその46億年の歴史を身近かにわかりやすく展示する。また地元の茶臼山地籍産出の化石から遠くは欧米にまでわたって広く資料を収集する。特に国内で産出した大形の化石標本3体(クビナガリュウ・ナウマンゾウ・オオツノジカ)を一堂に展示する。

展示設計及び実施に当っては、日本古生物学会の亀井節夫先生の監修を受け、広範な視野から展示する。

以下に亀井先生よりいただいた「自然史展示構想についての覚書」を記す。(原文のまま)

長野市立博物館(自然史)の展示構想につきましては、これまで準備室の先生方や実施設計の関係者の方々と準備を進めてきました。その間、意見交換を何回も重ねながら仕事を進めてくるなか

で幾つかの重要な観点が浮かびあがってきました。ここにそれらの重要な事を8項目にまとめて覚書をつくりましたので、関係各位より忌たんのないご意見やご批判を戴きたく宣しくお願い致します。

- 1 この博物館は郷土の博物館として、長野盆地周辺の自然の特色を生かしたものとする。そのためには立地条件から見て、茶臼山とか柵層の化石を中心におき、それらとの関連で自然史の流れと言うものを示すような展示の方針をとることが望ましいと考える。これまでの日本の自然史関係の博物館では、とかく、互いにどれを見てもよく似たスタイルの展示を見掛けることが多いが、ここでは規模は小さくとも、世界の何処にもない独創的であり、しかも親しみのもてるような地方色の豊かな博物館を作ることを目標にしたい。
- 2 恐竜公園・動物園・植物園といった既設の施設と一緒になると言ふ立地条件を考えると、展示の内容や方法については、それらとの関係をよく生かすようにすることが必要である。つまり、レクリエーションにくる親子ずれが遊びの中から、何かを学ぶ節目を、この博物館に見出す事ができるようなものと言うことである。
- 3 地元の博物館として、上記の施設を利用する親子づれのひとたちが、家族みんなで、また一人できたり、友達ときた子供達と学芸員が一緒になってともに楽しみながら学ぶ、そのような博物館であって欲しい。したがって、展示室やパネルなどの位置とか配置について、子供達の目の高さといったことや、身障者の入館者に対しての配慮はきちんと十分にしておく必要がある。
- 4 博物館によくありがちな見せてやるとか、教えてやるといったようなことはぜったいに避けなければならない。みんなで楽しみ、みんなで考え、ともに話し合いながら勉強できる場であることが理想の博物館の姿ではあるまいか。いろいろと不十分な点が多くあってもよく、むしろかえってその方が良いのではなかろうか。博物館を訪れた人達が、自分で何かを付け足したくなったり、訂正したい意欲がわいてきて、それを学芸員が協力することによってみんなのものとすることができる場であって欲しいものである。つまり、博物館にきて何かがよく分かると言うものではなくて、何かを感じることを通して疑問をもったり、今後の学習の出発点とか道標になるようなものと言うことである。そのためには、展示はできるだけ変化に富ませ、オヤッと思うもの（秘密兵器？）がその中に含まれていることが望ましい。何よりも注意しなければならないことは、日本の博物館にありがちな決まり切ったパターンに陥らないようにすることである。
- 5 小規模な博物館であるので、すべてを充足させることは勿論できるものではない。したがって、網羅主義はやめて、重点をよく絞っておく必要がある。それには、生命の進化を軸として、長野盆地周辺の新第三紀の生物化石という身じかな具体的なものそのものに焦点をあてながら、郷土の自然の生い立ちをストーリーとして展開できるような展示方法をとりたい。
- 6 生命の進化と一口にいっても、それは表現しにくい難しいテーマである。下手をすれば混乱だけが残りかねない。ここでは、現在、この地球の上に生きている私達の目を通して生命の発展の道筋を眺めると言う視点をとり、時間の流れと多種多様な生物の存在について考えることから、大宇宙と私達とを結び付ける“何か”を感性的にとらえることをねらうものである。このような課題は、本質的には人間にとっては永遠に解くことのできない未知の世界であるかも知れない。しかしこれまでに、人間が英知によって科学的に明らかにしてきた一つ一つの事実は、こうした課題をとらえるための一つ一つの素材なのである。したがって、人間はそれらの素材をもととして総合的な認識をもつことで、その課題の本質に近付くことはできるであろう。この博物館の展示にあっては、この課題の主題は繰り返されることになろう。それは、シンフ

オニーの中で一つの主題が繰り返されるのと同じである。プレリュードは静かに奏でられ、樂章を追うにつれ主題は繰り返され、次第に高まるとともにフィナーレで再びプレリュードにつながることになるのである。その形成は、起・承・転・結であり、主題は“自然における人間の存在”と言うことであり、また“長野盆地での生命の歴史”ということで、それらが繰り返し奏でられることになるのである。

7 とは言うものの、この博物館や周辺にある施設だけでは、課題へのアプローチとしては満足できるものではない。これを補うためには、出来るだけ近隣にある博物館とか資料館などの諸施設と密接かつ幅広く連携をとることが期待される。それぞれが独立して特色を生かし、しかも全体として“自然史の中での人間の存在”と言う主題をとらえるための有機的なつながりを持てるようにしたいものである。たとえば、見学者たちが野尻湖博物館→戸隠村郷土資料館→長野市立博物館→自然史館→上田市立博物館→…→…などのように、自分たちで自由にコースを選び、それぞれ思いのまま一つの流れをつかむようにしたい。このような場合、長野市立博物館はそれらにとって、センターとしての役割を果たすことになるのではなかろうか。

8 長野と言えば、誰でも思い付くのは善光寺のことである。そこで、蛇足ではあるが思いつくままに一言付け加えることにする。確かに、善光寺と自然史博物館とは何の関係もないと言うこともできよう。しかし、考えようによつては何処かで根がつながっていると言えないこともないのである。つまり、宗教も科学も根本的に考えてみると同じ幹から枝分かれしたものだと言えないこともない。数万年も昔のネアンデルタール人たちの社会では、宗教も芸術も科学も混ぜん一体としていて未分化の状態であったと言われている。宗教も科学も芸術も人間が社会生活を押し進めるにあたりいずれも基本的で重要なものなので、根源的には同じといえるものなのである。実はこのことは、人間の進歩とか人類の未来のようなことを考える時には忘れる事のできないことであるし、科学を学ぶ場合には特に心しておくべきことだと思う。いささか牽強付会と思われるかもしれないが、善光寺参りのコースを博物館・美術館、それに自然史館を含む自然公園につなげたり、あるいはその逆コースをたどることは、上に述べたことからすれば大いに意義あることとして宣伝すべきであるかもしれない。そのようなコースを歩くことで、宗教・芸術・科学の根にある共通する心の一端に触れることができれば、これまた楽しいことではなかろうか。博物館のあり方といったことを考える場合に、こんなことを心の何処かに秘めておいてもよいのではないかと思い、あえてここに付け加えさせていただいた次第である。

3) 開館までの経過

- 昭和59年5月11日 市監査委員会が自然史館建設予定地を監査し、補正予算を提出する。
- 昭和59年5月17日 6月の定例市議会にて、自然史館建設の設計委託・調査費の予算を計上、可決される。
- 昭和59年6月22日 補正予算決まる（515万円、ポーリング120万円、設計38万円）。
- 昭和59年7月26日 関係部局と協議を重ね、自然史館建設地を茶臼山動物園下の駐車場に決定する。
- 昭和59年8月3日 市建築課と建物基本構想について話し合う。
- 昭和59年8月6日 館長、自然史館の展示について、亀井節夫先生を訪問する。
- 昭和59年8月10日 クビナガリュウの骨格標本を北海道穂別町に具体的に依頼する。
- 昭和59年8月22日 自然史館について、9月補正予算の内示がある。調査費昭和59年度に5千万円、昭和60年度に債務負担行為2億円が決定する。
- 昭和59年8月29日 穂別町よりクビナガリュウ骨格標本複製の許可返答を受ける。
- 昭和59年8月31日 ポーリングと建築設計委託の入札があり、ポーリング96万円で山我地盤技術株式会社、建物展示設計300万円で池田設計事務所が落札する。
- 昭和59年10月26日 京都科学標本より展示基本設計を池田設計事務所に提示する。
- 昭和59年11月16日 地元説明会を行なう。
- 昭和59年12月7日 館長、上越教育大学菅野三郎先生を訪問、自然史館について懇談する。
- 昭和59年12月26日 日本博物館協会とオオツノシカ骨格標本（レプリカ）を662万円で契約する。
- 昭和59年12月28日 建物主体工事を入札し、柳原工務店が8300万円で落札する。
- 昭和60年1月12日 亀井節夫先生が来長し、自然史館建設予定地等を現地視察する。
- 昭和60年1月14日 市長が記者会見で自然史館について発表する。
- 昭和60年1月25日 電気設備を980万円で光栄電設株式会社、機械設備を2450万円で山崎熱研工業株式会社（後に峰村工業株式会社に債権譲渡）がそれぞれ落札する。
- 昭和60年2月2日 京都科学標本が展示実施設計委託を200万円で落札する。
- 昭和60年2月15日 骨格標本レプリカ2体（クビナガリュウ・ナウマンゾウ）を1500万円で京都科学標本と契約する。
- 昭和60年2月28日 京都科学標本と最終段階の打合せを行なう。
- 昭和60年3月 建設地で杭打ち、基礎づくりが始まる。
- 昭和60年4月23日 京都科学標本が展示製作工事を5560万円で落札する。
- 昭和60年5月8日 建物の日照権問題で地元と協議を重ね、設計を一部変更する。
- 昭和60年5月9日 コンクリートの打込みを開始する。
- 昭和60年6月15日 建物の屋根葺きが完了する。
- 昭和60年7月31日 本体工事が竣工する。
- 昭和60年8月2日 京都科学標本が展示作業を始める。
- 昭和60年8月3日 亀井節夫先生が現場を視察、指導する。
- 昭和60年8月30日 展示関係の工事が完成する。
- 昭和60年9月11日 本館より化石等を搬入する。開館案内状を発送する。
- 昭和60年9月23日 茶臼山自然史館が開館する。

茶臼山自然史館指導協力者 (五十音順・敬称略)

■監修

亀井節夫 (京都大学教授)

■指導

尾崎公彦 (横浜国立大学助手)

菅野三郎 (上越教育大学教授)

斎藤 豊 (信州大学助教授)

田中邦雄 (信州大学教授)

富沢恒雄 (前長野工業高等専門学校講師)

八木健三 (北海道大学名誉教授)

■資料提供

上田市立博物館

大阪市立自然史博物館

大町市立山岳博物館

上屋久町教育委員会 (鹿児島県)

鬼無里村

信濃教育会

信濃町立野尻湖博物館

裾花グループ山と谷の会 (長野市)

大英博物館

東北大學古生物学教室

立科町教育委員会

戸隠村教育委員会

日本たばこ産業株式会社長野営業所

野尻湖発掘調査団

北海道開拓記念館

穂別町教育委員会 (北海道)

ひだ自然館

丸子中央小学校

石垣 忍 (大阪市)

大久保邦彦 (長野市)

大田 繁則 (長野市)

恩藤 知典 (神戸大学教授)

酒井 実 (長野市)

田野 正 (須坂市)

高橋美津夫 (北海道)

田中 邦雄 (松本市)

富沢 恒雄 (長野市)

中条 正勝 (長野市)

中塚敬之助 (京都市)

松本 史 (小川村)

森 啓 (仙台市)

森島 一夫 (名古屋市)

八木 健三 (札幌市)

湊 千代 (札幌市)

宮下 英子 (戸隠村)

武藤 登 (長野市)

行松 敏明 (名古屋市)

3 茶臼山自然史館開館後の歩み

- 9月23日 秋雨の中、開館式典を行なう、市長ほか招待者98名、篠ノ井西中学校生徒によるプラスバンド演奏のなかを正午にテープカット、開館記念特別展示として「地学を進めた郷土の先覚者たち」を11月末日まで開催
- 10月6日 上越教育大学の菅野三郎先生が来館
- 10月8日 上田国民健康協議会運営委員10名来館
- 10月24日 NHKラジオ放送で恐竜の鳴き声を放送
- 10月27日 秋の地質教室開講（参加者37名）
- 10月30日 メタセコイア2本、イチョウ1本を館のまわりに植樹
- 11月1日 篠ノ井公民館職員一行35名来館
- 11月9日 茶臼山動物園長來館
- 11月16日 北海道忠類村教育長一行視察
- 11月19日 戸隠村郷土資料館一行8名視察
- 11月24日 東京地学団研一行8名来館
- 12月1日 地附山地滑り写真撮影・小田切千木で化石採集・調査
- 12月12日 返目公民館一行40名来館
- 12月17日 篠ノ井有線放送取材のため来館
- 12月28日 仕事納め
- 1月4日 仕事始め
- 1月18日 山ノ内町公民館長來館
- 2月3日 市公社職員研修のため27名来館
- 2月13日 福島県いわき市教育委員会1名視察
- 2月18日 大田区立郷土博物館長ほか1名視察
- 2月28日 松本自然を愛する会来館
- 3月5日 化石包含砂岩を館内ロビーに搬入展示
- 3月12日 元信州大学教授中村一雄先生来館
- 3月19日 NHKディレクター取材のため来館
- 3月24日 阿南町化石館・瑞浪市化石博物館に視察出張（館長・塩入・唐沢）
- 3月25日 福岡県教育センター理科研究室研究主事2名視察
- 3月27日 戸隠村郷土資料館主事視察



自然史館開館記念式典より



II 事業報告

1 展示活動

1) 長野市立博物館常設展示

開館以来4年を経過し5年目を迎える。本年度も大勢の方のご利用をいたしましたことは、後記する入館者推移を見るとおりである。この間常設展示室の基本方針に変更はなく、同一内容資料間の展示替えを行ったにすぎない。

4年も経過すると展示がマンネリズムに落ち入り、入館者数の著しい減少をもたらすかと危惧の念をいたしたのであるが、その心配はいまのところないようである。また内容においても、初めての方はもとより当館を数回訪れている方々でも新しく何かを発見していくようである。展示室における説明・案内がこのような結果を生み出しているものと考えられる。即ち入館者と展示物のかかわりを視覚・聴覚だけでなく、解説者を媒介として生まれたものと思える。ともあれ、これに満足することなく、新たなわかりやすい資料の開拓に努めなければならないと痛感する。

本年度実施した展示替えは以下の小規模なものである。

「姿をかえる大地」コーナー

茶臼山自然史館開館に伴う化石類の一部変更。

「善光寺とその信仰」コーナー

善光寺瓦（長野市若槻出土）2点

尚、常設展示室2階民家では、例年のとおり、もちつき、ものづくりを行った。

2) 茶臼山自然史館常設展示

展示の構成と内容

展示意図や構成上の留意点は、前記の「展示構想についての覚書」に尽くされている。従って改めてそれらに触ることは、屋上屋を重ねるそしりをまぬがれないが、展示内容に即しつつ若干ふれてみたい。

展示に込めた基本的な願い即ち展示主題は単的に言えば、次のように要約される。

展示にふれることによって、太古からの地球の生成発展の長い歴史と、その上に環境の変遷に即応して記された生物進化の道程を理解し、その意味を考えることによって、意識的であると否とにかくわらず、時空的な自己の存在に気づいてほしい。

この願いに基づいて展示は受付附近の導入部に始まり、それを受けたスロープの展示を過ぎて上りきると、一転して視野が拡大し、開放感を与える。と共に広い空間には数多くの情報が展開されている。起承転結の展開構造は映像室で終了する。なおここを過ぎた階段踊り場からの長野盆地の眺望は、四季折々の景観を楽しませる。

■導入展示

受付前のエントランスロビー壁面には、広大な宇宙から未来を指向する子ども達の群像まで、12枚の組パネルによって展示意図を示唆したイメージ展示を提示してある。またそれに自然史のインテロ展示も加えた。

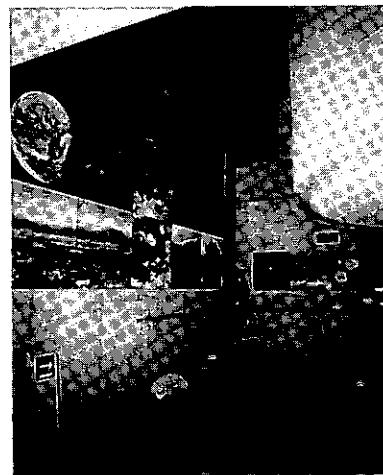
イメージ展示

- 宇宙・地球・生命の誕生
- 地質時代
- 概 説
- 年代区分と比較

■スロープ展示

地質年代の進展につれて、生物は水中から地上空間へも生活の場を拡大してきた。またそれらの痕跡を包含した層序は次第に累積して地層を形成している。

そのような自然史の展開を線状スロープで表現し、各年代の典型を把えて表現すると共に、年代変遷の契機も展示対象とした。

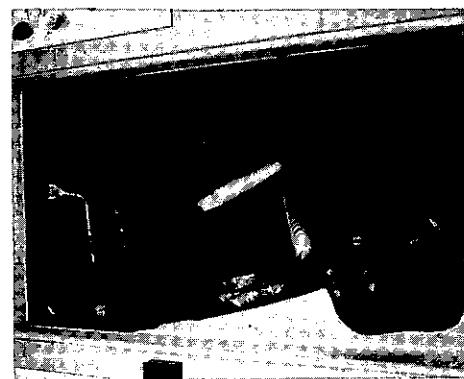


エントランス(導入展示)

海の時代

古生代後半には、日光の届く浅い海底が生活の場となり、その典型的な情景をオルドビス紀にとらえてジオラマ化した。

- 古生代の時代相
- オルドビス紀の海
- 古生代の生物（化石）
- 古生代の古地図
- 南極の岩石



オルドビス紀の海

古生代から中生代へ

生物が生活の場を水中から陸上へと変遷させた契機を環境の変化に求めて、古生代から中生代への進展をイラストに表現した。

- 変化する環境と生物の適応
- 海中から陸上へ上がる生物
- 陸にあがった生物

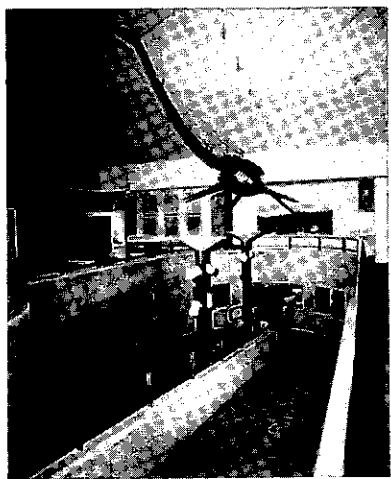


爬虫類の時代

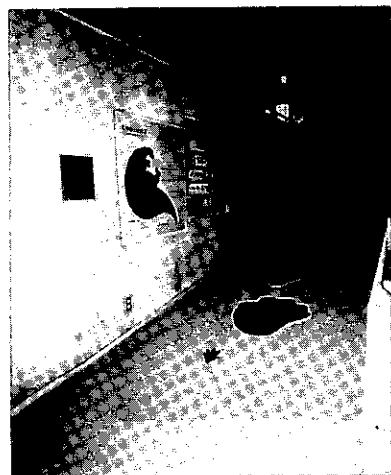
爬虫類の時代

アンモナイトの化石以外は、全て恐竜にしばって中生代のイメージ把握を図ると共に、恐竜公園との関連にも配慮した。

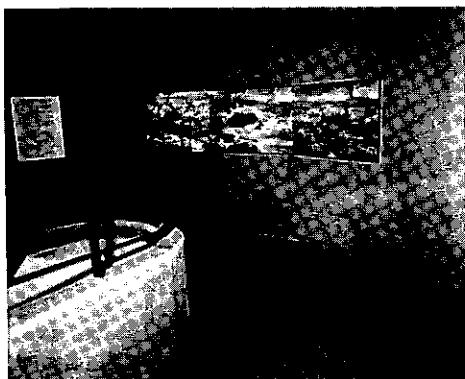
- 中生代の時代相
- いろいろな恐竜たち
- 恐竜の世界（環境と生物）
- 恐竜の鳴き声
- 恐竜の足跡（石膏型どり）



クビナガリュウ



恐竜の絶滅



哺乳動物の時代

恐竜の足跡クイズ

クビナガリュウ

アンモナイト化石

中生代の古地理

展示のうちクビナガリュウは北海道穂別町採集化石の復原骨骼標本で、館内いずれの方向からも見えるように空中展示してあり、石膏足跡はモロッコで採集されたものである。

中生代から新生代へ

自然史の変転は、恐竜の絶滅に特色づけられる。絶滅のなぞに対する種々の原因説を紹介すると共に、その契機は環境変化に基づく自然淘汰であることをイラストと解説パネルで構成し、やがて迎える新生代の哺乳類時代への伏線とした。

恐竜の絶滅

生きのびた生物

哺乳類の発展

哺乳動物の時代

中生代末から新生代始めにかけて、地球上に起きた自然状況の大変動のあげく、哺乳動物が大発展を遂げ、やがて人類も出現した。そのような新生代の様相をパネル中心に表現し、私達自身もそれにつながる時空的存在であることを示唆した。

新生代の時代相

古第三紀の古地図

新生代の幕明け（古第三紀）

現生動植物の起源（新第三紀中新世）

人類の誕生（新第三紀鮮新世）

新生代の化石

ここまでスロープ展示は、前述のように一般的通史の立場から各年代進展の追跡に主眼をしづめており、階上フロアへの展開の前提としても位置づけてある。またここまで展示してきた化石は、全て県外及び国外産である。

■階上展示室

主展示室を形成するこの展示は、スロープに於ける通史的展示を受けて、新生代の変遷過程上に於ける郷土という視点即ち郷土を時間的空間的にとらえて中核に据えた展開をしてある。また、アイラン

ド方式と呼ばれる展示手法をじゅうぶんに活用して、化石とは・化石のふるさと・第四紀の信州の3部門から構成した。

化石とは

化石は、環境の変化や生物の進化過程を示していることを様々な角度から提示した。それと共に、日常生活に直結する身近かな存在ばかりか、一步つめて我々自身体内に生物進化のあとを留めている事実にもふれ、自己の時空的存在を示唆してもある。

環境と生物

動植物の進化と分類

動く大陸・大陸の移動

地形の変化

(中新世の日本列島)
(鮮新世の日本列島)
(更新世の日本列島)

環境と生物

化石を知る

化石の生成

化石からのメッセージ

化石からの復元

エネルギーのかんづめ

(化石と人間の生活)
(石油と石炭)

岩 塩

顕微鏡で見る化石

手で触れる化石

グランドキャニオンに見られる地質年代

地質年代と私たち（私たちのからだと生物の進化）

化石のふるさと

茶臼山の時代

茶臼山や善光寺温泉附近など小川層から採集された化石や地層を手がかりとして、新第三紀中新世の郷土を語りかけ、関心をさそった。

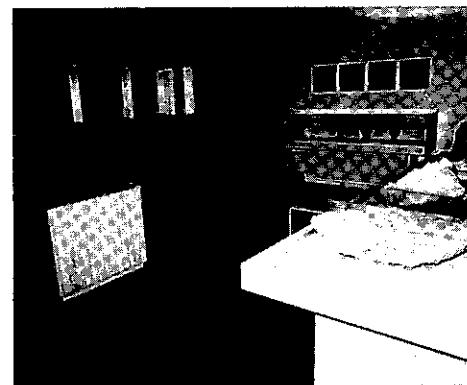
ここに展示した化石は次の鮮新世化石と共に、その大部分が自然史館建設の要因となったもので、これらのうちメタセコイアは東日本ではここから初めて発見された。

中新世の地域的様相

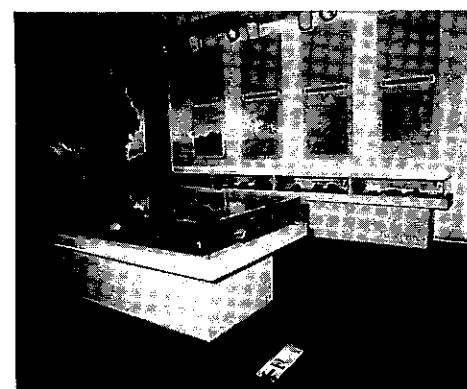
茶臼山の地層



環境と生物



化石を知る



茶臼山の時代



柵層化石群の時代

裾花凝灰岩

メタセコイア

暖帯林の樹相

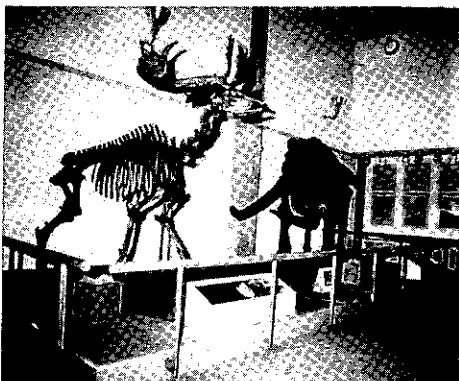
中新世の郷土の古地理と化石採集地

中新世の陸上動植物

中新世の海の生物

地域の植物化石

郷土の動物化石



ゾウの来たころ

柵層化石群の時代

裾花川流域は全国的にも著名な化石多産地域を形成している。ここでは前の茶臼山コーナーと対称的に全く同一手法を用いて郷土の鮮新世を構成し、親近感を持つことを期待した。

鮮新世の郷土の景観

化石包含層

鍵層

温帯林の植生景観

鮮新世の郷土の古地理と化石採集地

鮮新世前期の動植物

鮮新世後期の動植物

地域の化石

ゾウの来たころ

ステゴドンゾウはすでに新第三紀後半には姿を見せはじめていた。がここではナウマンゾウなどがいた更新世をあてた。岐阜県及び北海道出土の化石から復原したオオツノジカとナウマンゾウの骨骼標本を中心に構成してある。

この2体は中空に吊したクビナガリュウと共に当館で最も目をひく展示となっている。

更新世の郷土

オオツノジカ

骨骼標本

生棲想像図

化石採集地分布図

ナウマンゾウ

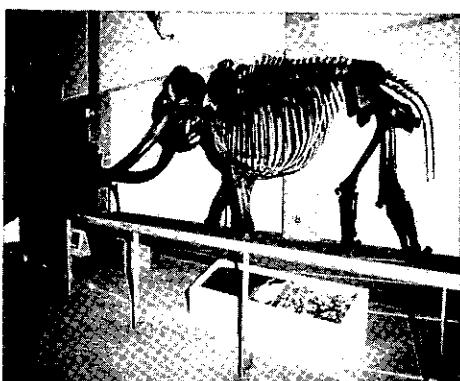
骨骼標本

ナウマンゾウの狩りをする旧石器人

県内の化石採集地分布図

寒冷期の植生

更新世の古地理



ナウマンゾウ

代表的な生物と旧石器人

■映像室

音響の影響を配慮して別室に設定し、押しボタンによって映像を選択する方式にした。

データバンク

地質年代

地域の代表的堆積層

観察と採集（4コース設定）

近隣地域の化石資料館案内

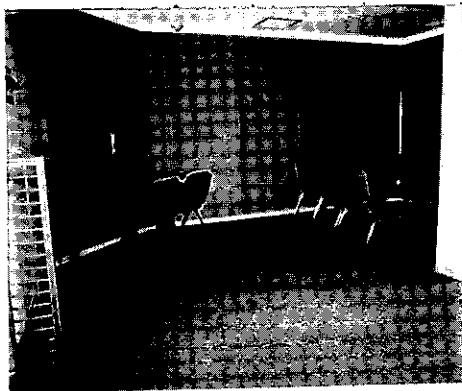
ビデオライブラリー

地殻の変動

地層

脊骨のある動物を分類する

長野の自然



映像室



長野盆地の眺望

展示資料分類一覧表

区分	ロビー	古生代	古生代から 中生代	中生代	中生代から 新生代	新生代	環境と生物	化石を知る	中新世	氷河のとき	鮮新世	第四紀	映像室	合計
実物	3	11		6		6		16	33		32	9		116
レプリカ				1								3		4
ジオラマ		1												1
パネル	写真	13						5(1)	5	1	6	1		31(1)
	行為	5		4	2		3	(1)	2		2	3		21(1)
ネル	解説	13	1		6	5	4(3)	6	6	7		4	3	55(3)
	概説	1	1		1		1	1	1		1	1		9
	地図		(1)		(1)		(1)	(4)		1		3	1	5(7)
映像								1	3				2	6
その他		7			(1)		6							13(1)
合計	42	14(1)	4	16(2)	5	20(4)	8(4)	31(2)	49	1	48	21	2	261(13)

()は同一パネルに画かれた再掲を示す

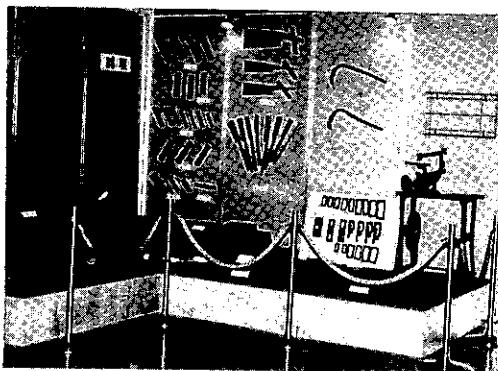
3) 特別企画展示・企画展示

(A) 昭和59年度新収蔵資料展

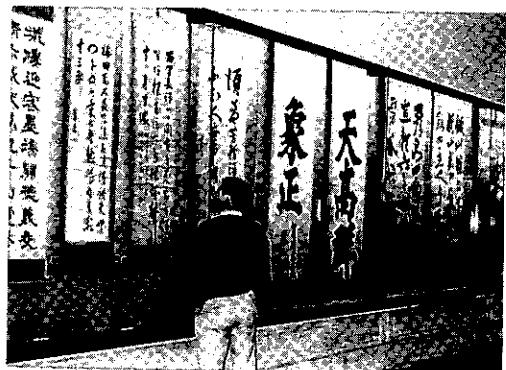
- (1) 期間 昭和60年7月21日～9月23日
(実質開館日数56日)
- (2) 趣旨 昭和59年度に寄贈・寄託・購入された資料を一般に展示公開するため企画した。
- (3) 展示構成と内容

①民俗 衣・食・住・農耕・山仕事・養蚕・製糸・機織り・手工・娯楽などのコーナーに分けて展示した。詳細な内容は年報Vol.3を参照願いたい。

②歴史・美術 甲冑・日本画・墨蹟・伎楽面・衝立など昭和59年度及びそれ以前の収蔵資料のうち未公開のものを展示した。内容については年報Vol.3及びVol.2を参照願いたい。



「諸職」のコーナー



「歴史・美術」のコーナー

(B) 第10回特別企画展「善光寺信仰」

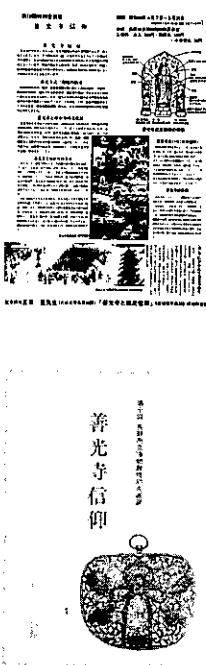
- (1) 期間 昭和60年4月7日～5月26日

(実質開館日数43日)

- (2) 出版物 B2版多色刷ポスター
B3版多色刷ポスター
B4版多色刷ポスター
B5版展示図録60頁
価格 500円

(3) 趣旨 長野市の前身は、善光寺町といわれるように善光寺の門前町として発展してきた。それは庶民信仰として根強い善光寺信仰に支えられてきたもので、単に善光寺があったからということではなく、かたづかない点が多々ある。

善光寺信仰は、全国津々



ポスター・パンフレット・図録

浦々まで広がっている特異な信仰で、老若男女・貴賤・宗派を問わない点、また各地に善光寺様式仏・縁起・絵伝等が残されていることに特色がある。

この展示では、こうした善光寺信仰とは何なのだろうかという問い合わせに対し、その対象になった、あるいは現在も生き続けている善光寺関係文化財を通して、歴史性・地域性を再考してみようとするものである。

また善光寺では7年に一度の御開帳が同期間にとり行なわれた。

(4) 展示構成

- ① 善光寺様式仏
- ② 善光寺縁起絵巻
- ③ 善光寺とゆかりの人々
- ④ 善光寺ゆかりの文化財

- ⑤ 善光寺と民間信仰
- ⑥ 善光寺と善光寺絵画
- ⑦ 縁起ジオラマ

(5) 資料点数 70点

(6) 催物

講演 「善光寺と庶民信仰」五来 重氏（大谷大学名誉教授）

5月12日

映画 「町のなりたち一門前町長野市一」白黒18分

長野市視聴覚教育センター

ビデオ 「善光寺縁起絵伝『絵解き』」、「ザ・善光寺—広がる信仰の秘密」

ビデオは信越放送提供

音声 「善光寺縁起解説」（テープ6分）

(7) 展示資料目録

No.	資料名	所有者(管理者)	所在地	指定等
1	銅造一光三尊像立像	東京国立博物館	東京都上野公園	重文・写真展示
2	銅造阿弥陀如来立像及び両脇侍像	甲斐善光寺	山梨県甲府市	" "
3	"	善光寺	長野市元善町	" "
4	"	法幢寺	福島県会津高田町	" "
5	"	如来寺	" いわき市	" "
6	"	浜乃木善光寺	島根県松江市	" "
7	"	専修寺	栃木県那須町	" "
8	"	金剛峯寺	和歌山県高野町	" "
9	木造	安国寺	広島県福山市	" "
10	石造善光寺三尊板碑	妻沼町教育委員会	埼玉県妻沼町	県指定・ 重文
11	銅造阿弥陀如来立像及び両脇侍像	円覚寺(鎌倉国宝館)	神奈川県鎌倉市	"
12	"	東京国立博物館(奈良国立博物館)	東京都上野公園	県指定
13	"	清光寺	千葉県酒々井町	"
14	"	円光寺	" 成田市	重文
15	"	向徳寺	埼玉県嵐山町	"
16	"	光明寺(埼玉県立博物館)	" 神川村	県指定
17	"	円福寺	群馬県伊勢崎市	"
18	"	善福寺	" 中之条町	"



入口の「仁王門」

19	銅造阿弥陀如来立像及び両脇侍像	川東善光寺（南照寺）	中野市本町	
20	"	無常院	長野市安茂里	市指定
21	"	願行寺(上田市立博物館)	上田市	"
22	金銅五鈷鉢	法音寺	山形県米沢市	県指定
23	" " 杵	"	"	"
24	" 舍利塔	"	"	"
25	" 三坪縗(瓔珞)	熊野神社	山形県南陽市	市指定
26	" 華鬘	"	"	"
27	木造金剛力士像	長勝寺	長野市信更町	県指定
28	" 聖徳太子立像	大本願	長野市元善町	市指定
29	" 本田善光坐像	甲斐善光寺	山梨県甲府市	
30	" 本田弥生坐像	"	"	
31	" 源賴朝坐像	"	"	
32	" 熊谷蓮生法師坐像	"	"	県指定
33	紙本着色阿弥陀如來來迎図	善光寺	長野市元善町	
34	" 善光寺縁起絵伝	大勧進	"	
35	" 善光寺如米絵伝	堂明坊	"	
36	絹本着色 "	瀬之坊	"	
37	紙本着色一遍上人像	神奈川県立博物館	神奈川県横浜市	国宝・模本・第一巻
38	絹本着色一遍上人絵伝	東京国立博物館	東京都上野公園	重文・第二巻
39	紙本着色遊行上人縁起絵巻	金台寺	佐久市野沢	県指定・第七巻
40	" "	清淨光寺(遊行寺)	神奈川県藤沢市	重文・熊皮御影
41	絹本着色親鸞上人像	奈良国立博物館	奈良県奈良市	市指定・第四巻
42	紙本着色親鸞上人絵伝	康栄寺	長野市篠ノ井	
43	" 法然上人像	大本願	長野市元善町	
44	紙本着色寺三尊像(摺)	奈良国立博物館	奈良県奈良市	
45	絵紙善光寺三国伝来之図	長野市立博物館		
46	" 善光寺みやげ	"		
47	" 善光寺參詣時の不思議	"		
48	" 牛に引かれて善光寺参り	"		
49	" "	関川千代丸	長野市	
50	" 信濃善光寺開帳行列図	善光寺	長野市元善町	
51	" 御本堂御開帳	"	"	
52	" 善光寺みやげ	関川千代丸	長野市	
53	紙本着色本堂平面図	兄部坊	長野市元善町	
54	" 立面図	"	"	
55	" 造営小屋図	"	"	
56	" 善光寺境内図	長野市立博物館	長野市	
57	" 信濃善光寺略絵図	関川千代丸	長野市元善町	
58	" 信州川中島善光寺古跡	善光寺	"	
59	" 信州善光寺境内并近傍	"		
60	" " 本堂御詠歌	長野市立博物館		
61	仏式御興	熊野神社	山形県南陽市	市指定
62	參額(永代御開帳)	世尊院	長野市元善町	
63	" 押絵絵馬	"	"	
64	善光寺講通行手形	"	"	
65	" 一新講旗	長野市立博物館		
66	" 出開帳道中日記	世尊院	長野市元善町	
67	油絵お朝事	長野市		
68	" 聖牛	"	"	
69	" "	世尊院	"	
70	" 善光寺おびんづる様	"	"	
71	" 堂内の図	大勧進		

(C) 第11回企画展「台所と什器の世界」

(1) 期間 昭和60年10月10日～11月11日

(実質開館日数33日)

(2) 出版物 A2版多色刷ポスター

A4版両面刷二ツ折パンフレット

B5版展示図録 頒価 500円

(3) 趣旨 私達は、朝昼晩3食の食事をして、生活の基礎とする食生活を長く続けてきた。これは食べるため山野をかけめぐり、生活のすべてが食べるための長い時代の行動であった。

火を使って調理し、一家が食卓を囲んで団らんの時を持つことは今も変わらない食事の風景だと思う。そこで使われた什器や調理する台所の様子を知ることは、それぞれの時代の内容を知ることになる。このような観点から旧石器時代から現代までの台所と什器・調理具の変遷を追い、食生活の意義を考える機会とする。

(4) 展示構成

- ① 旧石器・縄文時代の台所
- ② 弥生時代の台所
- ③ 奈良・平安時代の台所
- ④ 中世以降の台所
- ⑤ むかしの台所
- ⑥ 日常生活の什器
- ⑦ 祝儀・不祝儀用の什器
信仰と什器

(5) 資料点数 193点

(6) 催物

講演 「台所と人間性」

倉島日露子氏(長野生活学園長)

11月3日

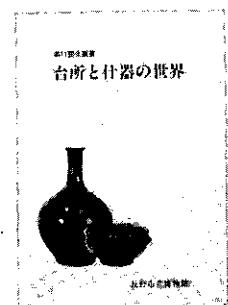
映画 「木曽漆器の産地をたずねて」

長野市視聴覚教育センター



長野市立博物館

長野市小島田町八幡原史跡公園内
(10m×10m×1.5m)休館日: 10月3日、11月3日



ポスター・パンフレット・図録



「ハレ」の什器



むかしの台所

(7) 展示資料目録

No.	名 称(員数)	遺 跡 名	所 �藏 者(館)	備 考
	■旧石器・縄文時代の台所			
1	ナイフ形石器 (4)	杉久保A遺跡	千曲川水系古代文化研究所	旧石器時代
2	石 刃 (ブレイド) (3)	"	"	"
3	搔 器 (スクレバー) (3)	柳又A遺跡	"	"
4	深 鉢 (2)	新道遺跡1号住居跡	諏訪考古学研究所	縄文時代中期
5	浅 鉢 (2)	"	"	" "
6	台付環形土器	"	"	" "
7	有孔鍔付土器	"	"	" "
8	深 鉢 (2)	十二ノ后遺跡	諏訪市教育委員会	" 後期
9	浅 鉢 (5)	"	"	" "
10	注口土器	"	"	" "
11	特殊磨石 (3)	飯綱猫又池周辺表採	長野市立博物館	早期
12	石 匙 (3)	赤萱平遺跡	熊井 恒雄	前期
13	横刃石器 (2)	安庭遺跡	島田ちづ子	中期
14	石皿と磨石	平柴平遺跡	長野市立博物館	後期
15	凹 石	赤萱平遺跡 他	熊井 恒雄	前期
	■弥生時代の台所			
16	甕 (2)	海戸遺跡27号住居跡	岡谷市立美術考古館	弥生時代後期
17	台付甕	"	"	" "
18	壺 (2)	"	"	" "
19	浅 鉢	"	"	" "
20	甕	平柴平遺跡	長野市立博物館	中期
21	壺	"	"	" "
22	台付甕, 壺, 浅鉢 (3)	"	"	" "
23	浅 鉢	"	"	" "
24	蓋, 無頸壺 (2)	"	"	" "
25	甕	四ツ屋遺跡	"	" (後期)
26	浅 鉢 (2)	塩崎小学校遺跡	"	後期
27	壺	聖川堤防上遺跡	"	" "
28	甕	四ツ屋遺跡	"	" "
29	台付甕	"	"	" "
30	炭化米	平柴平遺跡	"	中期
	■古墳時代の台所			
31	甕, 甌 (2)	牛札バイパスA地点遺跡 2号住居跡	長野市立博物館	古墳時代前期
32	甕	"	"	" "
33	浅 鉢	"	"	" "
34	高 坝	"	"	" "
35	杯 器 台	"	"	中期
36	甕 (2)	駒沢祭祀遺跡	"	" 中期
37	" (2)	県町遺跡	"	" 後期
38	"	塩崎小学校遺跡	"	" "
39	高 坝	駒沢祭祀遺跡	"	中期
40	壺 (2)	古屋敷遺跡第4号住居跡	"	" 後期
41	" (3)	"	"	" "
42	把手付甕	"	"	" "
43	甌	"	"	" "
	■奈良・平安時代の台所			
44	甕 (2)	県町遺跡	長野市立博物館	平安時代後期
45	羽 釜	城之内遺跡	更埴市教育委員会	" "
46	壺 (4)	県町遺跡	長野市立博物館	" "
47	" (5)	石川条里遺構遺跡	"	" "
48	" , 蓋 (2)	田子三才遺跡	"	奈良時代

No.	名 称(員数)	遺 跡 名	所 �藏 者(館)	備 考
49	■中世以降の台所 内耳付土器	下吉野遺跡 三才田子遺跡 田中沖遺跡 塙田城跡 塙田城跡	更埴市教育委員会 長野市立博物館 〃 上田市立国分寺資料館 〃 〃 〃	鎌倉～室町時代 室町時代(?) 江戸時代(?) 室町時代～戦国時代
50	"			"
51	"			"
52	壺 (5)			"
53	木製品(はし) (5)	"		"
54	" (曲物) (4)	"		"
55	" (桶片)	"		"

No.	名 称	寄 贈 者・寄 託 者	用 途
	■むかしの台所 <貯蔵用具>		
56	カ メ (2)	若林 典寿(松代町東寺尾) 長野市立博物館	水、その他の貯蔵 "
57	カ メ	岡宮 照子(北石堂町)	水汲み等
58	オ ケ	八田 勇(松代町)	漬け物
59	ツケモノオケ	酒井 英知(小田切)	酒の貯蔵
60	サカダル	八田 勇(松代町)	"
61	"	酒井 英知(小田切)	穀物の貯蔵
62	コクバコ	若林 典寿(松代町東寺尾)	"
63	"	酒井 英知(小田切)	米の貯蔵
64	コメビツ	"	干魚等の貯蔵
65	テ カ ゴ		
	<炊事用具>		
66	ヘツツイ	西沢 喜昭(篠ノ井ニッ柳)	火 床
67	シチリン	藤森 治幸(安茂里)	"
68	ドウコ	桑原 忠慶(川中島町今井)	沸かす道具
69	"	塙野入希幸(坂城町)	"
70	ゴトク	酒井 英知(小田切)	イロリ付属物
71	ハガマ	"	炊 飯
72	ドナベ	小林 強(県町)	煮る道具
73	テツナベ	酒井 英知(小田切)	"
74	"	酒井 佑治(篠ノ井布施高田)	"
75	スキヤキナベ	松本 才徳(川中島上水鉢)	スキヤキを煮る道具
76	ホウロク	若林 典寿(松代町東寺尾)	炒る道具
77	テツビン	塙野入希幸(坂城町)	湯沸し
78	"	県立更級農業高校	"
79	ヤカン (2)	酒井 佑治(篠ノ井布施高田)	"
80	" (4)	美谷島今朝雄(安茂里)	"
81	"	北村 正(東風間)	"
82	"	塙野入希幸(坂城町)	"
83	"	依田 寿朗(綿内川田)	"
84	"	酒井 英知(小田切)	"
85	"	松本 才徳(川中島上水鉢)	"
86	ユガマ	若林 典寿(松代町東寺尾)	"
87	セイロウ	"	蒸す道具
88	"	松本 才徳(川中島上水鉢)	"
89	トウジカゴ	酒井 英知(小田切)	茹でる道具
90	"	美谷島今朝雄(安茂里)	"
91	スイノウ	酒井 佑治(篠ノ井布施高田)	"
92	ウドンスクイ	松本 才徳(川中島上水鉢)	"
93	コメアゲザル	"	水切り
94	" (2)	酒井 英知(小田切)	"

No.	名 称	寄 贈 者・寄 託 者	用 途
95	コメアゲザル	美谷島今朝雄（安茂里）	水切り
96	フルイ（角形）	和田 秀次（戸隠村）	"
97	"（丸形）	酒井 佑治（篠ノ井布施高田）	製粉等
98	"	美谷島今朝雄（安茂里）	"
99	ハコフライ	中村 典三（三才）	"
100	ワタシ	小川 つね（松代温泉）	"
101	ハンギレオケ	今井 嘉正（戸隠村）	イロリ付属物
102	ツケギ（2）	中村千二三（篠ノ井小森）	水洗い等
103	洗いオケ	松本 才徳（川中島上氷鉋）	点火
104	ヒロブタ（2）	中村 典三（三才）	水洗い
105	カタテオケ	松下 達（松代鍛冶町）	食事用
106	チャコシ	小林 勇（県町）	水汲み等
107	ヒバシ	若林 典寿（松代町東寺尾）	茶こし
108	フチマキナワ	"	イロリ付属物
109	ナガシ	"	"
110	テオケ	酒井 佑治（篠ノ井布施高田）	水洗い等
111	ウス	館 蔵	水汲み等
112	イシウス	西沢 良一（稻葉）	穀類の調製
113	ヒスキダケ	小川 つね（松代温泉）	" 製粉
<醸造用具>			
114	ミソガマ	井堀 五郎（篠ノ井ニッ柳）	火たき、火起し
115	ミソカキボウ	八田 勇（松代町）	味噌調製
116	タマリトリ	若林 典寿（松代町東寺尾）	"
117	ミソコシ	小林 勇（県町）	タマリすくい
118	"	美谷島今朝雄（安茂里）	味噌調製
119	ショウユシボリ	桑原 忠慶（川中島今井）	醤油醸製
120	ショウユ用手桶	若林 典寿（松代町東寺尾）	"
121	" 容器	依田 寿朗（若穂川田）	"
<製造用具>			
122	マメツブシ	井堀 五郎（篠ノ井ニッ柳）	味噌等作り
123	豆腐製造器	酒井 英知（小田切）	豆腐作り
124	トコロテン突き出し器	酒井 佑治（篠ノ井布施高田）	トコロテン作り
125	パン焼き器	松本 才徳（川中島上氷鉋）	パン作り
126	今川焼器	"	今川焼作り
127	めん類製造機	若林 典寿（松代町東寺尾）	めん類作り
<調理用具>			
128	マナイタ	八田 勇（松代町）	切る
129	ホウチョウ	長野市立博物館	"
130	スリバチ	八田 勇（松代町）	擂る
131	"	依田 寿朗（綿内川田）	"
132	スリコギ	山崎 範夫（川中島今里）	"
133	"	依田 寿朗（綿内川田）	"
134	ノシイタ	小川 つね（松代温泉）	のす
135	メンボウ	米沢 進（鶴賀七瀬）	"
136	オロシガネ	美谷島今朝雄（安茂里）	すりおろす
137	ベニバチ（3）	八田 勇（松代町）	練る
138	"（2）	酒井 英知（小田切）	"
139	コネバチ	倉崎 安衣（小島田）	"
140	"	若林 典寿（松代町東寺尾）	"
141	カツオ節削り	小林 勇（県町）	カツオ節を削る
■祝儀・不祝儀用の什器			
<膳卓類>			
142	庚申講講具一式	綿内・おかね（庚申）講	信仰・供膳

No.	名 称	寄 贈 者・寄 託 者	用 途
143	ネコアシゼン	倉島 忠義（篠ノ井布施高田）	祝儀・不祝儀時の食事
144	〃 (4)	酒井 英知（小田切）	〃
145	〃 (二の膳)	〃	〃
146	カクゼン (一の膳)	柳島 皇（稻里田牧）	〃
147	〃 "	酒井 英知（小田切）	〃
148	〃 (二の膳)	柳島 皇（稻里田牧）	〃
149	ハコゼン	中村 典三（三才）	日常の食事
150	〃	長野市立博物館	〃
151	マルボン	酒井 英知（小田切）	祝儀・不祝儀時の食事運搬
152	〃	美谷島今朝雄（安茂里）	日常の食事運搬
153	給仕用盆	柳島 皇（稻里田牧）	祝儀・不祝儀時の給仕
〈飯器類〉			
154	メシビツ	酒井 英知（小田切）	祝儀・不祝儀時の飯入れ
155	〃	若林 典寿（松代町東寺尾）	日常の飯入れ
156	〃	長野市立博物館	〃
157	ジキリヨウ	酒井 英知（小田切）	不祝儀時の飯入れ
158	〃	小林宗太郎（芋井）	〃
159	シェウバコ	依田 寿朗（若穂川田）	祝儀・不祝儀時の飯盛
160	〃	山岸 勝（桐原）	日常の飯盛
161	シャモジ	酒井 英知（小田切）	祝儀時の料理入れ
162	〃	山崎 範夫（川中島今里）	〃
〈食器類〉			
163	内朱外黒漆椀（親椀）	柳島 皇（稻里田牧）	祝儀時の食器
164	〃 (3)	酒井 英知（小田切）	〃
165	〃 (汁椀)	柳島 皇（稻里田牧）	〃
166	〃 (2)	酒井 英知（小田切）	〃
167	〃 (平椀)	柳島 皇（稻里田牧）	〃
168	〃 (2)	酒井 英知（小田切）	〃
169	〃 (坪椀)	柳島 皇（稻里田牧）	〃
170	黒漆椀（親椀）	倉島 忠義（篠ノ井布施高田）	不祝儀時の食器
171	〃	酒井 英知（小田切）	〃
172	〃 (汁椀)	〃	〃
173	〃 (平椀)	倉島 忠義（篠ノ井布施高田）	〃
174	〃	〃	〃
175	〃	酒井 英知（小田切）	〃
176	〃 (坪椀)	〃	〃
177	漆塗銘々皿 (3)	徳成 孝一（小島田町）	祝儀時の食器
178	〃	柳島 皇（稻里田牧）	〃
179	キュウス	長野市立博物館	祝儀・不祝儀時の食器
180	大 皿 (2)	山口 純一（若穂綿内）	〃
181	小どんぶり	今井 嘉正（戸隠村）	日常の食器
182	小 皿 (5)	美谷島今朝雄（安茂里）	〃
183	オオビラ	徳成 孝一（小島田）	祝儀時の食器
184	シャモジ	酒井 英知（小田切）	〃
185	〃	山崎 範夫（川中島今里）	日常の食器
〈飲器類〉			
186	トックリ	美谷島今朝雄（安茂里）	祝儀・不祝儀時の酒器
187	〃	長野市立博物館	〃
188	〃	山口 純一（若穂綿内）	〃
189	ビール壜	中村 典三（三才）	ビール容器
190	カタクチ	大川 成司（中越）	日常の酒器
191	ユトウ	徳成 孝一（小島田）	湯 器
192	〃	酒井 英知（小田切）	〃
193	ヒサゲ	〃	祝儀・不祝儀時の酒器

(D) 第12回企画展「漁とくらし」

(1) 期間 昭和61年2月23日～3月30

(実質開館日数31日)

(2) 出版物 A2版多色刷ポスター

A4版両面刷二ツ折パンフレット

B5版展示図録 頒価 500円

(3) 趣旨 信州は海に面しない県であるため、川や湖では独特な漁撈方法が発達している。しかし、近年地域開発・河川や湖沼の水質汚濁および人々の食生活の変化といったことにより、こうした県内の独特な伝統漁撈は変貌・消滅の危機にさらされている。

この展示では県内で行なわれる内水面漁撈に注目して、民間知識として伝承されている漁法や漁具を収集記録・保存しながら、それらをわかりやすく展示する。また、更にこうした漁撈活動がになってきた庶民生活を郷土食（淡水魚を利用した食物）にも注目して展示する。

(4) 展示構成

① 川の漁 上流の漁

中流の漁

② 湖の漁

③ 育てる漁業

④ 古い記録の中の漁

⑤ 食物としての魚

(5) 資料点数 74点

(6) 催物

講演 「信州の漁業と文化」

市川健夫氏(東京学芸大学教授)

3月21日

ビデオ 「土佐・四万十川一清流と魚

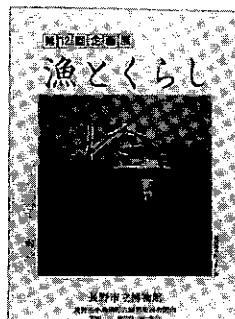
と人とー」 NHKサービスセンター



漁とくらし

1986年
2月23日
～3月30日
長野市立博物館
午前9時～午後4時
入場料：一般300円、高校生以下150円

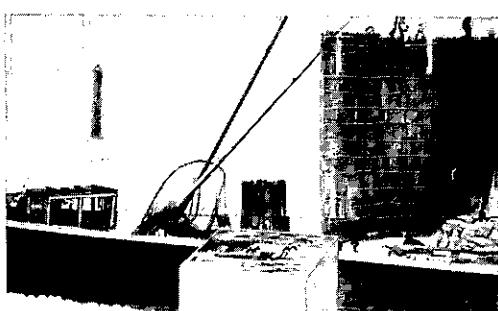
ポスター



パンフレット・図録



川の漁



湖の漁

(7) 展示資料目録

〈民俗〉

番号	漁具の機能	資料名	頁数	所蔵・寄贈者
1	つ く	ヤ ス	1	小林文雄氏蔵（長野市）
2	〃	〃	1	〃
3	〃	〃	1	穂高町郷土資料館蔵
4	〃	〃	1	〃
5	す く う	ヨ ツ デ	1	小林文雄氏蔵（長野市）
6	〃	マ エ カ キ	1	若林典寿氏寄贈（長野市）
7	〃	ケ ア ミ	1	穂高町郷土資料館蔵
8	〃	ケイ サン ド	1	平林愛明氏蔵（大町市）
9	〃	サカナアミ	1	中沢恒雄氏寄贈（長野市）
10	お い こ む	ヒ キ ア ミ	1	小林文雄氏蔵（長野市）
11	〃	オイダシボウ	1	穂高町郷土資料館蔵
12	か ぶ せ る	ナ ゲ ア ミ	1	杉村朝治氏蔵（長野市）
13	〃	ト ア ミ	1	塚田岩雄氏蔵（長野市）
14	〃	マ ス ア ミ	1	豊科町郷土博物館蔵
15	〃	マ ス ド	1	穂高町郷土資料館蔵
16	〃	ウ ゲ	1	平林藤吉氏寄贈（大町市）
17	〃	トアミ模型	1	上田市立博物館蔵
18	〃	ノリウチ模型	1	〃
19	か ら め る	サ シ ア ミ	1	平林愛明氏寄贈（大町市）
20	〃	〃	1	〃
21	〃	〃	1	〃
22	〃	〃	1	平林愛明氏蔵（大町市）
23	〃	タ ケ タ カ	1	下諏訪町立博物館蔵
24	〃	キ ヨ メ	1	〃
25	か き と る	エビオシアミ	1	〃
26	〃	シジミジョレン	1	〃
27	おびきよせる	アゲツケバ模型	1	長野市立博物館製作
28	〃	マヤツケバ模型	1	〃
29	〃	フセバリのコバリ	1	駒村由治氏寄贈（長野市）
30	〃	ヤツカ漁具一式	1	下諏訪町立博物館蔵
31	〃	ナガシバリ	1	〃
32	〃	ツケバ模型	1	上田市立博物館蔵
33	〃	イシヅカドリ模型	1	〃
34	さ そ い こ む	ハ コ ブ セ	1	杉村朝治氏蔵（長野市）
35	〃	〃	1	〃
36	〃	ロ ウ ャ	1	平林愛明氏寄贈（大町市）
37	〃	〃	1	〃
38	〃	〃	1	平林愛明氏蔵（大町市）
39	〃	ウ ケ	1	〃

番号	漁具の機能	資料名	頁数	所蔵・寄贈者
40	さそいこむ	コイウケ	1	小林文雄氏蔵（長野市）
41	〃	ツヅ	1	小林信栄氏寄贈（長野市）
42	〃	ウケ	1	〃
43	〃	ウケ半製品	1	〃
44	〃	ハコブセ	1	駒村由治氏寄贈（長野市）
45	〃	ウケ	1	北沢正美氏寄贈（長野市）
46	〃	ロウヤ	1	下諏訪町立博物館蔵
47	〃	〃	1	〃
48	〃	ウケ	1	〃
49	〃	〃	1	〃
50	〃	〃	1	〃
51	〃	エビカブト	1	〃
52	〃	ウケ	1	松本民芸館蔵
53	〃	陶製ウケ	1	〃
54	〃	ウケアゲ模型	1	上田市立博物館蔵
55	〃	ヤナ模型	1	長野市立博物館製作
56	〃	アゲカワ模型	1	〃
57	まちかまえる	ホッパアミ	1	穂高町郷土資料館蔵
58	〃〃	ヤナ模型	1	上田市立博物館蔵
59	〃	鯉稚魚選別用ざる	2	松本民芸館蔵
60	〃	鯉桶てんびん	1	穂高町郷土資料館蔵
61	そだてる	鯉子すくい	1	〃
62	〃	鯉子かいこみ	1	〃
63	〃	ビク	1	豊科町郷土博物館蔵
64	〃	カンテラ	1	小林文雄氏蔵（長野市）
65	補助具	カキンボウ	1	下諏訪町立博物館蔵
66	〃	カンテラ	1	穂高町郷土資料館蔵
67	〃	サカナオケ	1	〃
68	〃	網針	4	丸山袈裟雄氏寄贈（長野市）
69	〃	ビク	1	〃

〈歴史〉

番号	資料名	年代	頁数	所蔵者
70	鮭漁に関する文書	元和元年	1	長野市大豆島区
71	〃	元和4年	2	〃
72	鮭に関する文書	慶長～寛永	2	柳島利雄氏（長野市）
73	漁業に関する文書	弘化2年	1	穂高町郷土資料館
74	〃	嘉永3年	1	〃

- (E) 茶臼山自然史館開館記念特別展
「地学を進めた郷土の先覚者たち」
- (1) 期間 昭和60年9月23日～11月30日
(実質開館日数60日)
- (2) 趣旨 保科五無齊(1868～1911)・八木貞助(1879～1951)・小山進(1884～1935)・三沢勝衛(1885～1937)らの地学を進めた郷土の先覚者たちが、県内各地で先進的に進められた業績を再認識し、自然史研究の展望を探ることを目的とした。

- (3) 展示構成
- ① 保科五無齊氏の業績
 - ② 八木貞助氏の業績
 - ③ 小山進氏の業績
 - ④ 三沢勝衛氏の業績
- (4) 資料点数 134点



八木貞助肖像



保科五無齊愛用の帽子

(5) 展示資料目録

No.	資 料 名	所 藏 者	備 考
1	■保科五無齊 肖 像	信濃教育会	写真
2	化石採集の支度姿	立科町教育委員会	"
3	帽 子	信濃教育会	
4	売り歩いた筆・墨	"	
5	狂歌短冊	信濃教育会・立科町教育委員会	
6	ゲンノウ石及び展示用皿	立科町教育委員会	
7	略 歴	"	
8	岩石・鉱物標本説明書	"	文 献
9	信州産岩石鉱物標本	信濃教育会	
10	信州産岩石鉱物新案教授法	立科町教育委員会	文 献
11	筆墨売上帳	信濃教育会	
12	■八 木 貞 助 肖像・略歴	八木健三氏寄贈	写真
13	八木貞助先生頌徳碑除幕記念	"	"
14	良子女王殿下にご説明する八木貞助 おばすて公園にて(大正12年8月30日)	"	"
15	八木健三、柄沢伍郎とともに	"	"
16	田中館(東北大) ウィリス(スタンフォード大)とともに青木湖畔にて	"	"
17	主要造岩鉱物肉眼的検索表 八木貞助編	"	文 献

No.	資料名	所蔵者	備考
18	「鉱物学初步独修標本の設計」地学雑誌第26号大正9年抜刷 八木貞助	丸子中央小学校	文献
19	「弘化4年の善光寺大地震に隨伴し繼續したる陸地変形について」帝国学士院記事第五卷第23号抜刷昭和22年 八木貞助	八木健三氏寄贈	"
20	「浅間山昭和5年6月の爆発に就て」地学雑誌昭和5年11月抜刷 八木貞助、中条正勝	中条正勝氏	原稿
21	『信濃に於ける新第三紀層褶曲地帯の特性と其の成因』本間不二男著	"	文献
22	地学雑誌「信濃荒火山兜岩産の植物化石とその周辺地質との関係」抜刷八木貞助	"	"
23	地学雑誌「長野県山之内温泉に就いて」抜刷 昭和7年八木貞助	"	"
24	長野県地学雑誌「長野市附近の地質見学其ノ一、長野市より浅川まで」昭和23年9月 八木貞助	"	"
25	長野県地学雑誌「長野市附近の地質見学其ノ二、展望道路より都路山へ」昭和23年11月 八木貞助	"	"
26	長野県地学雑誌「長野市附近の地質見学其ノ三、長野市より裾花川を溯りて」昭和24年5月 八木貞助	"	"
27	長野県地学雑誌「長野市附近の地質見学其ノ四、大町街道を両都橋まで」昭和24年11月 八木貞助述	"	"
28	姫川流域の砂防技術に関する調査報告書	"	"
29	地学雑誌「長野県山之内温泉に就いて」抜刷 八木貞助	"	"
30	犀川砂防事務所管下地上の調査 昭和24年 長野県治水砂防協会	"	"
31	裾花川、浅川及土尻川流域等の砂防技術に就いて 長野県治水砂防協会	"	"
32	地学雑誌「浅間山火口底の昇降と爆発との関係及二三事項に就て」八木貞助	"	"
33	信濃講座山岳科上下高井火山地方実地指導要項 長野県	"	"
34	戸隠、黒姫、妙高火山野尻湖地指導要項	"	"
35	「信州南佐久郡畠八座像歯化石と其地層に就て」 八木貞助	丸子中央小学校	"
36	日本学術協会報告「上信火山帶に就て」 抜刷 八木貞助	"	"
37	信濃教育 長野県の自然界と其研究 八木貞助	"	"
38	地学雑誌「浅間山昭和4年9月の爆発に就て」抜刷 八木貞助、中條正勝	"	"
39	野帳（大正2年～昭和24年）71冊	八木健三氏寄贈	
■小山進			
40	肖像・略歴		写真
41	地学雑誌 昭和3年6月刊	小山	文献
42	長野県中部地方の地質構造（概報）本間不二男著	丸子中央小学校	"
43	信濃講座山岳科 四阿山籠登山浅間火山地方指導要項 昭和13年8月1日	"	"
44	野帳 10冊	"	
45	地質図の原図（五万分の一の地形図に記入したもの）	"	
■三沢勝衛			
46	肖像・略歴	"	写真
47	「郷土調査要目に就いて(特に気候及び地理について)」	諏訪清陵高校	文献
48	「地理教育上郷土地誌の価値に就て(別刷)」	"	"
49	鬼無里の渓谷	"	"
50	雑誌信濃「甲信越地方地形概観」	"	"
51	諏訪の地理	諏訪教育部会	"
52	「諏訪の温泉」信濃衛生第325号	"	"
53	郷土調査項目（気候）三沢記念文庫	"	"
54	千曲川流域の地理	"	"
55	郷土調査要目、地理	"	"
56	農村の地理的研究	"	"
57	農村の写真帳 2冊	"	写真

2 天体学習室（プラネタリウム）

1) 概要及び運営方針

当館の天体学習施設としてのプラネタリウムは、ドームの直径が12m、座席数が120の演出しやすい一方向座席となっている。

平日は学校教育の一環として理科教育センターが学習投影を行い、土曜・日曜・祝日に当館が一般向けに投影している。なお、一般投影はプログラムを組んで行うオート投影で、録音と原画作製以外は自主制作をしている。

天体学習室は、星空の世界への水先案内人であり、多くの人たちが宇宙への関心を持ち、その理解を深めるための手助けをする場所と考えている。したがって、投影の内容も、小学校高学年以上に理解できるように、また誰もが楽しく学習できるように配慮している。

投影番組は季節に合せて3ヶ月ごとに変えている。番組制作に当たり、外部委託は次のとおりである。

録音テープ製作…川長野トップ

原画作製…竹内理恵子(夏・秋・冬)・永野裕子(春)

2) 投影内容

(1) 夏の番組 「水に浮く惑星—土星—」

①投影期間 昭和60年6月～8月

②内 容

望遠鏡をのぞく対象として最も人気があるのは、何といっても土星である。帽子をチョコンとかぶったような姿は何とも愛らしく、そして神秘的な感じがする。

番組ではアメリカで打ち上げられた惑星探査機ボイジャー2号が自分の体験した土星訪問の様子と夏の星座を紹介していく。

ボイジャー2号は、1977年9月5日に打ち上げられ4年後の1981年8月、12億km以上離れた土星を訪れることができた。また、ボイジャー1号とともに、土星に接近する過程で土星の衛星たちにも次々と行き会い、まだ見たことのないそれらの姿を見せてくれた。外側からフェーベ、イアペトス、ハイペリオン、タイタン、レア、ディオネ、テチス、エンケラドス、ミマスの鮮明な映像を送り、さらに4つの新しい衛星も発見した。土星本体で驚いたことは、土星のシンボルとも言えるリングがレコード盤の溝のように無数のリングが集まっていたことであった。

新たな発見が新たな謎を生み、ボイジャー2号は土星を離れ、一路天王星へ向けてまた旅立って行った。

③神話・物語 正義の女神アストラエア(てんびん座)

④入館者数 5063人



パンフレット



正義の女神アストラエアは、人々に正義を説く。

(2) 秋の番組「1910年～ハレー彗星接近中パート1～」

①投影期間 昭和60年9月～11月

②内容

計子が父を夕飯に呼びに行くと、父は妙な新聞を読んでいた。中を見ると、「彗星と衝突を恐れて、84の老婆の縊死」という記事があった。その彗星はハレー彗星、そしてその新聞は1910年、明治43年のものである。「ほうき星（彗星）は不吉な星、地球と衝突して人類は滅亡する」と当時は本気で信じていたという。

計子は、このおばあちゃん（上水内郡中条村）も、世間の間違った噂の犠牲者であることを知り、何とも言えない気持ちになると同時に、そんなハレー彗星に対する興味がにわかにわき出した。今年76年ぶりに近づくハレー彗星について、計子は、世界を騒がした前回のハレー彗星の様子を父から話してもらう。そして、計子はいよいよこの秋ハレー彗星を自分で見ることができるということで、双眼鏡を用意して76年ぶりの訪問者を心待ちにしているのである。

③神話・物語

空気のなくなる日

④入館者数

4740人

(3)冬の番組「1986年～ハレー彗星接近中パート2～」

①投影期間 昭和60年12月～61年2月

②内容（前回の続き）

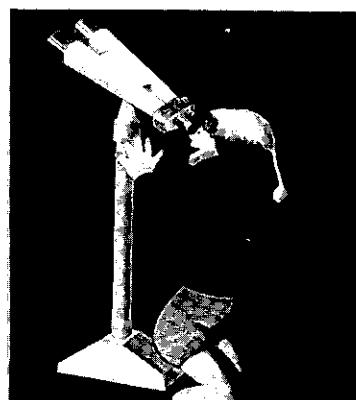
いよいよやってきたハレー彗星。計子は父の指導で秋のハレー彗星を見ることができた。その頃ハレー彗星には尾がなく、白い綿のようなものだった。しかし、すばる（プレアデス星団）のすぐそばを通って行ったのを見た時は、両者が双眼鏡の視野に一度に入り、計子も感動を覚えた。ハレー彗星の尾が長くなり明るくなるのは86年3月～4月だという。その時の様子を父



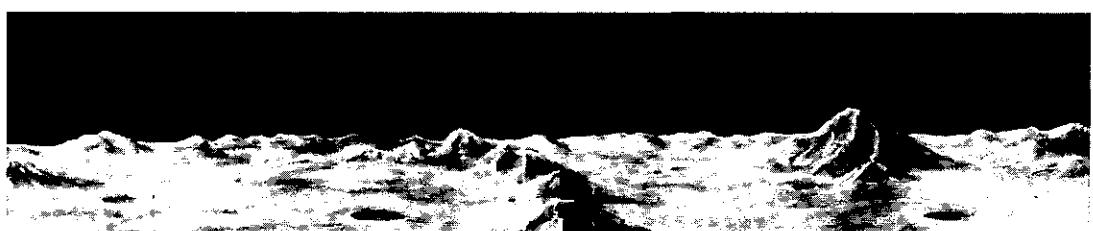
パンフレット



いよいよ、空気がなくなるという正午になった。
「空気のなくなる日」より



計子は双眼鏡でハレー彗星を見る



スカイライン

に話してもらうが、その時には、世界各国から打ち上げられたハレー彗星探査機が最接近するとも教えられ、計子は最後のクライマックスを再び待ちわびるのである。

③神話・物語

カストルとポルックス（ふたご座）

④入館者数 2495人

（4）春の番組「こぐまのクロちゃん」

①投影期間 昭和61年3月～5月

②内容

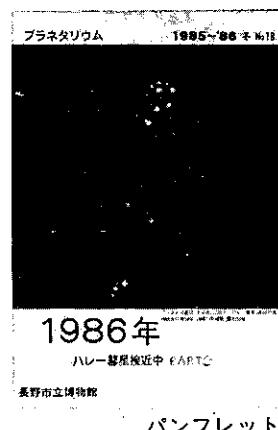
雪解けの進む戸隠の山。冬越えから目ざめた一頭の子ぐまが出てきた。名前をクロちゃんといい、両親のいないみなしごのくまであった。

ある晩、クロちゃんは星とはるか下の方に見える夜景を見ているうちに目まいがしてきたかと思うと、空へ落ちて行ってしまった。クロちゃんは星の世界へ行き、そこで行き会ったからすの勘三郎君と友達になった。それから勘三郎君の案内で、お母さんを探しに星空の旅を始めた。おとめのおばちゃんにポリマという美しい二重星を見せてもらったり、牛飼いのおじさんに追いかけられたり、かみのけ座のベレニケのかみのけをかぶってみたりと、楽しく旅をしているうちに道に迷ってしまった。そしていつしか恐しい化けじしの住処に足を踏み入れていた。クロちゃんと勘三郎君は現れた大きな化けじしに襲われそうになった時、つむじ風が吹いてクロちゃんは北の空へ飛ばされて行った。そこにはクロちゃんのお母さんがいたのだ！「そうおおぐま座だ。」

クロちゃんは大喜びをした。

しかし、そのあとすぐクロちゃんは、自分が山の上にいることに気がついた。寒さで目がさめたのだ。しかしクロちゃんは今までのことをよく覚えている。それ以来クロちゃんは晴れていればいつも星を見るようになった。そうすればいつでもお母さんや勘三郎君と話ができるのだから。

③入館者数 5500人



スカイライン

3 調査研究収集活動

1) 考古部門

(1) 三輪遺跡（三輪本郷）

期間 昭和60年4月9日～4月25日

調査原因 本郷住宅地造成に伴う緊急発掘調査

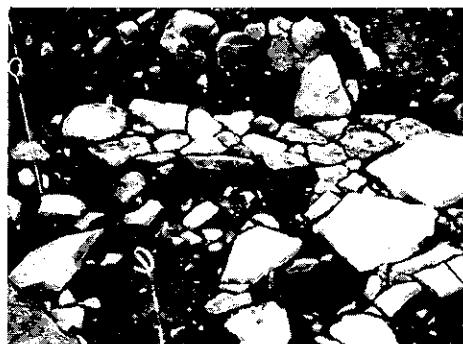
調査結果 浅川扇状地の扇端部湧水帯に位置し、各時代の遺跡が集中するものであり、今回の調査位置からは平安時代の住居址4軒等が検出された。北信地方では比較的出土数の少ない灰釉陶器が多量に出土しており、該期の一括資料として貴重である。

(2) 宮崎遺跡（若穂保科）

期間 昭和60年5月7日～6月2日

調査原因 団体営土地改良事業に伴う緊急発掘調査

調査結果 繩文晩期遺跡として著名なこの遺跡では、過去に敷石住居址の発見や、多量の遺物の採集がなされていたが、本格的な調査は今回が初めてといえる。調査は灌漑用の散水パイプ施設部分に限られたものの、繩文中期から晩期にかけての遺物包含層と、晩期の住居址等が検出され、遺跡の広がりをほぼ把握するに至った。出土遺物は晩期土器資料を中心として、多量の石器類がこれに伴い、獸骨等も良好に遺存する状況が確認された。また、敷石住居に伴う埋甕内から黒曜石原石が埋納された状態で検出されるなど、豊富な調査成果が得られており、今後の継続調査に期待がかけられる。



敷石住居跡（宮崎遺跡）

(3) 石川条里的遺跡・第4次（篠ノ井ニッ柳）

期間 昭和60年6月3日～6月16日

昭和60年11月19日～11月27日

調査原因 団体営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査

調査結果 前年にひきつづき、現在の水田下に埋没している平安時代の水田遺構の調査を実施した。今年度の調査対象地内においては、宮崎大学農学部藤原宏志氏により、プラントオパール分析が実施され、平安時代水田層のさらに下層、現地表面より2m下に良好な水田層が存在する点が明らかとされた。同水田層の年代は、平安時代以前であることが確実であり、隣接する遺跡群の状況から弥生時代に比定される可能性も考えられるところである。



平安時代の水田の「アゼ」（石川条里的遺跡）

(4) 浅川扇状地遺跡群バイパスD地点（若槻上野）

期間 昭和60年6月14日～7月20日

調査原因 県道バイパス建設に伴う緊急発掘調査

調査結果 前年にひきつづき調査が実施され弥生中期住居址2軒、平安時代住居址11軒等が検出された。平安時代住居址内からは、完形の軒平瓦を含む200点の瓦片が出土しており、集落址内からの瓦出土例として特筆される。瓦はいわゆる善光寺瓦と呼ばれている棟瓦を含み、焼損品がみられることから近隣に存在の予想されている瓦窯址から持ち込まれたものと推定され、瓦工集団との関連も想定される。

なお、昭和56年度より着手された県道バイパス内の調査は、今年度調査をもって完了されることとなり、B～D地点の調査報告書が刊行された。



住居跡内からの軒平瓦の出土
(浅川・バイパスD)

(5) 松代城跡（松代町松代）

期間 昭和60年7月29日～9月2日

9月25日～10月19日

昭和61年3月3日～3月31日

調査原因 史跡整備事業

調査結果 明治廢城以来、本丸石垣を残して改変され、往時の景観が失われた状況にある松代城につき、史跡指定地内を復原整備する計画がすすめられている。調査は文献等で類推し得る城郭規模と構造の検証を中心として、削平あるいは埋没している堀・土塁の位置と郭の平面形把握を目標としている。今年度は、城郭西半部が調査対象となり、二ノ丸～外堀・百間堀と土塁に関して、城郭復原のための基礎資料が得られ、整備に向けての第一歩が記された。

(6) 土口將軍塚古墳・第4次（松代岩野・更埴土口）

期間 昭和60年9月9日～9月28日

調査原因 重要遺跡確認緊急調査

調査結果 更埴市と合同ですすめられている本古墳の今年度調査は、前方部と後円部とのくびれ部分と、後円部北側の墳丘構造の確認を中心として実施された。くびれ部南側からは良好な状況で葺石・埴輪列が検出された他、頂部においても埴輪列の確認に至った。今回の調査により、本古墳の埋葬施設、墳丘構造についての全容が概ね把握され、当初の調査目標を一応達成することとなった。

次年度には、調査結果の整理及び報告書の刊行が予定される。



吉田式期の大形住居

(7) 長野吉田高校遺跡・第3次（吉田）

期間 昭和60年10月21日～11月18日

調査原因 体育館建設に伴う緊急発掘調査

調査結果 弥生後期土器型式「吉田式」の標式遺跡として著名な本遺跡は、過去2次にわたり調査されており、今回で第3次を数えることとなった。検出された遺構は該期の住居址10軒であり、第1次調査において検出された6軒とあわせて、全て吉田式期

に限られるものである。出土遺物も豊富であり、弥生後期前半の単純様相を示す集落址として貴重であり、従来不明確であった同期の土器型式を解明する上においても有効な資料が得られたものと言える。

(8) 平久保条里的遺構（篠ノ井塩崎平久保）

期間 昭和60年11月27日～11月29日

調査原因 団体営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査

調査結果 調査が継続されている石川条里的遺構に隣接し、千曲川自然堤防寄りに位置するものである。平安期と考えられる水田畦畔が2ヶ所において検出されたのみであるが、石川条里に連続する水田遺構の範囲内として理解され、その広がりが確認された点評価される。今後も石川条里と同様に継続して調査される予定である。

(9) 塩崎遺跡群・市道松節一小田井神社地点遺跡

（篠ノ井塩崎）

期間 昭和60年10月26日～12月15日

調査原因 市道拡幅工事に伴う緊急発掘調査

調査結果 塩崎遺跡群は、千曲川左岸に連なる篠ノ井遺跡群・横田遺跡群と同様の性格をもつ自然堤防上の遺跡である。この遺跡群南半分を南北に縦断する幅5mの大トレンチが今回の調査地である。この調査地内から、銅鉢及び同石製模造品が、また弥生時代前期の土器を含む中期初頭の土器群が、そして炭化米が出土していることで著名である。

調査地内の遺構は複雑に重複し合い、万遍なく弥生時代中期初頭から平安時代に比定される住居址等を検出した。特記すべき遺構に、弥生時代中期前半の人骨と副葬品を含む木棺墓及び墓壙30基及び数基の土壙（ピット）があり、同時期と比定される住居址を確認したこと、古墳時代前葉に位置すると思われる住居址床面直上より内行花文鏡が出土したことである。

ちなみに今調査で番号を付した遺構は、住居址192軒・土壙（井戸址を含む）111基・井戸址2基・ファイアーピット3ヶ所・溝址33ヶ所にのぼる。

尚、調査の詳細については、『塩崎遺跡群4一市道松節一小田井神社地点遺跡』（昭和61年3月刊）を参照していただきたい。



自然堤防に大トレンチを入れる（塩崎）



5号木棺墓（3体）



21号木棺墓

2) 民俗部門

(1) 古民家の調査

(A)若林典寿氏宅（松代町東寺尾）

調査月日 昭和60年6月15日～6月20日

調査者 山口明・安室知

調査内容

この調査における聞き取りは典寿氏および夫人に行なったものである。典寿氏は職業軍人として夫人とともに全国を赴任してまわった経歴を持つ。

この屋敷は、典寿氏から数えて4代前の当主により建てられた。近世末期頃の建築と思われる。4代前の当主は現松代町大室出身の松代藩士であったが、江戸末期の松代藩では何度も廻約令が出され、柱の太さにいたるまで制限が加えられていたという。そのため、この屋敷に使用された柱材も3寸角程度のものばかりである。

屋敷の現状（調査時）は、平面図および配置図に示した通りである。家の構造は当初のものとはだいぶ変化しているし、また各部屋の用途もその時代の世相を反映しながら変化していく。主な変化を追ってみる。

《主屋の変化》

- はたおりベやの増築（明治）
- おかげの拡張とそれによるこべやの消滅（不明）
- 浴室の増築とそれによるどまの縮少（昭和）
- 二階への蚕室の増築とその消滅（明治）

《屋敷配置の変化》

- 下屋敷の消滅（不明）
- 出入口の変化と表門の消滅（不明）
- きたのくらへのいんきよべや増築（不明）
- 屋敷神（大日様）の撤去（先々代のとき）
- 蛭川の河川改修による庭の縮小（昭和）
- みなみのくらの撤去ときたのくらの移動（昭和）
- 仮住居の建設（昭和60年）

なお、本調査後この屋敷は蛭川の河川改修により、さらに敷地は縮少し、主屋は解体された。



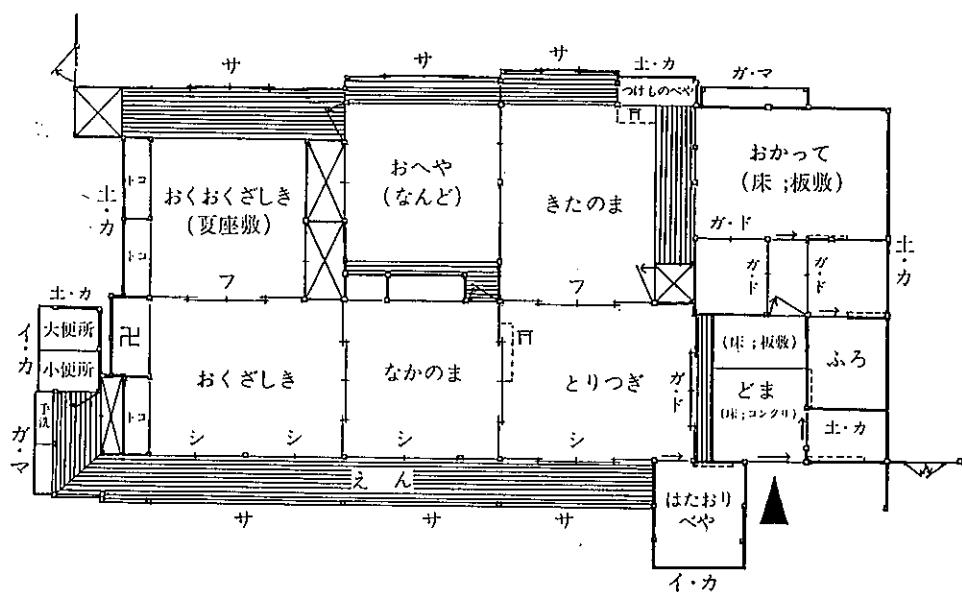
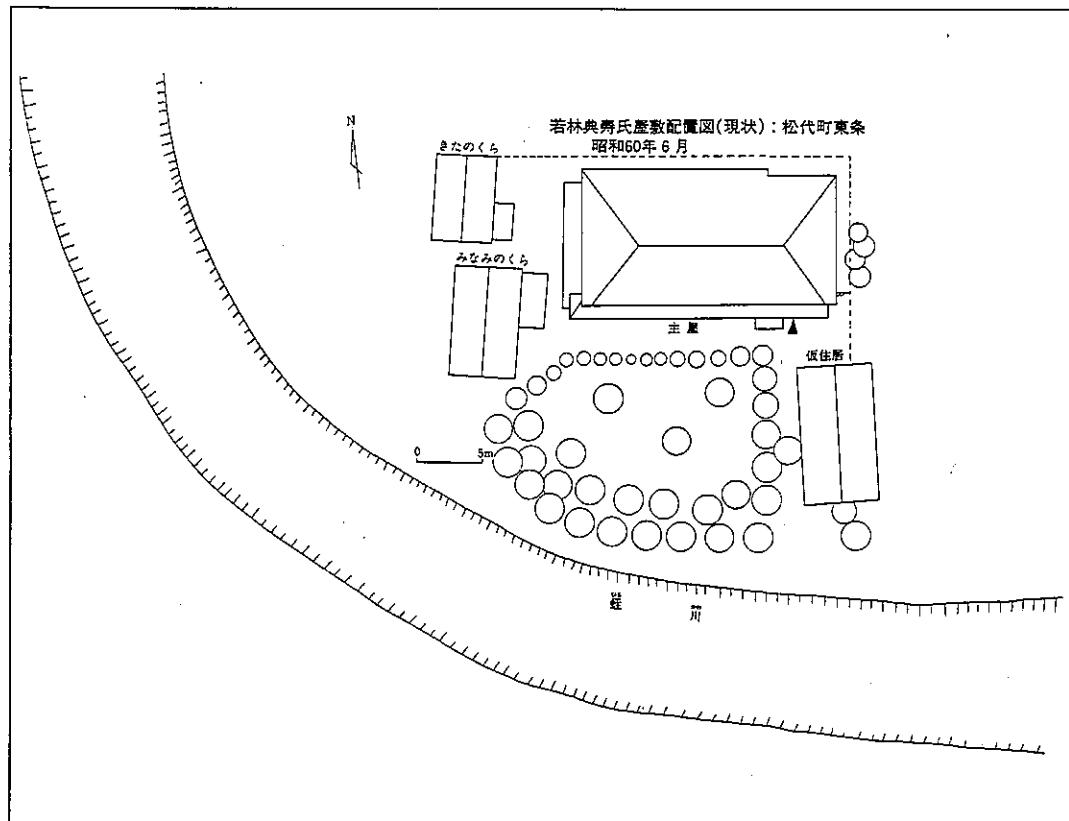
主屋（南より）



主屋と土蔵（西より）



「とりつぎ」から「なかのま」「おくざしき」を見る



若林典寿氏宅現状平面図

(B)上野千鶴子氏宅（若穂綿内菱田）

調査月日 昭和60年7月9日～7月11日

調査者 山口明・安室知

調査内容

この調査における聞き取りは千鶴子氏を行ったものである。そのため調査内容は千鶴子氏の嫁入り（昭和18年）以降が主となった。

屋敷は現在の当主今朝徳氏（千鶴子氏長男）から数えて4代前の当主により建てられたといわれるが、はっきりとしたことは分からぬ。

屋敷の現状（調査時）は、平面図および配置図に示した通りである。昭和18年以降に限って屋敷の変遷を追ってみる。

- 千鶴子氏夫婦のために二階をおへやに改築する。（昭和18年）
- おかげの拡張とそれに伴うみそべやの移動。（昭和27年以降）
- みそべやの移動によるねどこの消滅（同上）
- だいどころにあった風呂の移動と独立した浴室の改築（同上）

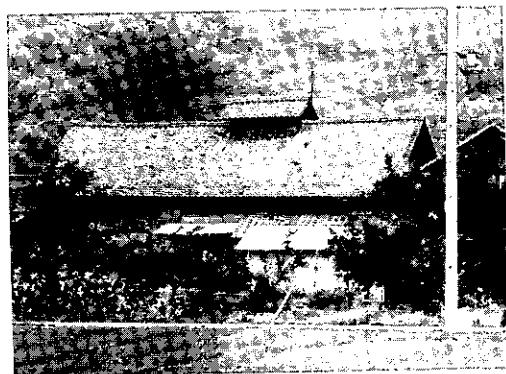
- 母屋北西に新しいくらを建築（昭和32年）

ここで1つ問題となるのが隠居制と住居の関係である。長野市には、隠居部屋を作っただけの同居隠居の例の他に、インキョイエモチと呼ばれる別居をたてまえとする隠居分家の例も存在している（篠ノ井小松原段ノ原）。その中で、
上野家の事例は同じ主屋の中に2つのおかげ（イロリのある部屋）と出入口を持つことなど、別居隠居と同居隠居との中間形態として大変興味深い。長男の結婚に伴うオヘヤの改築と、家督移譲に伴うと考えられる老父のねどこ（穏居部屋）への移動、および長男の夭折を契機とした老父のきたのまへの再移動、というように、家督の移動に伴って複雑に主屋の構造と使用法が変化していることがわかるのである。

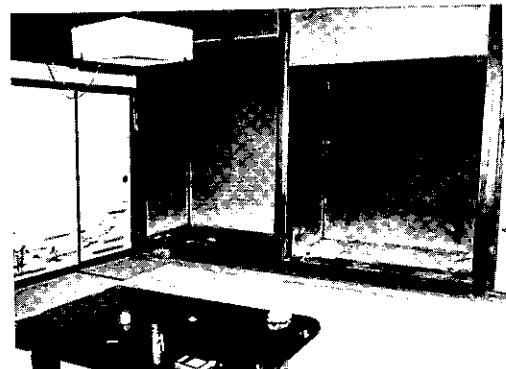
このように民俗学における隠居制の研究と居住制度の変遷を探る上で、上野家の事例は非常に貴重なものになるに違いない。今後は、こうした観点に立って継続調査を行う予定である。



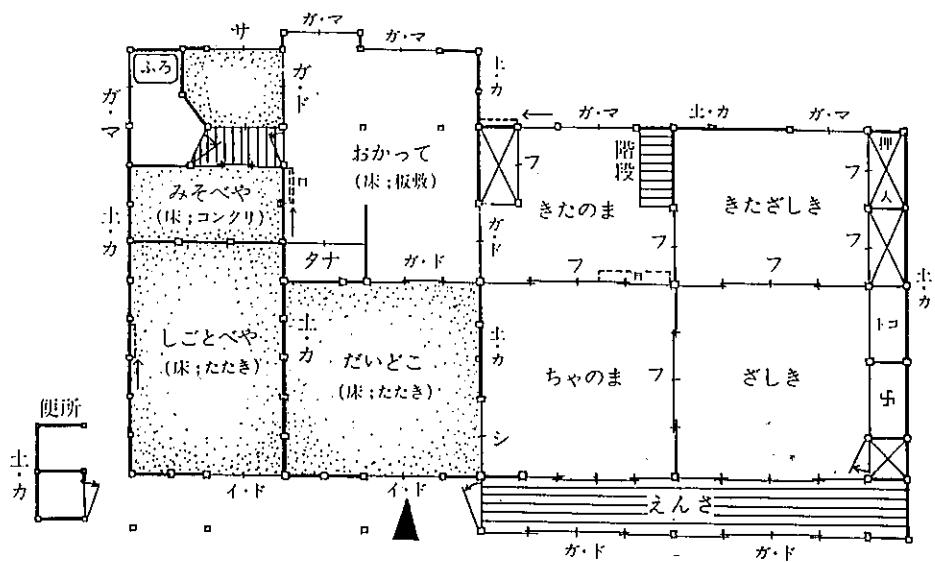
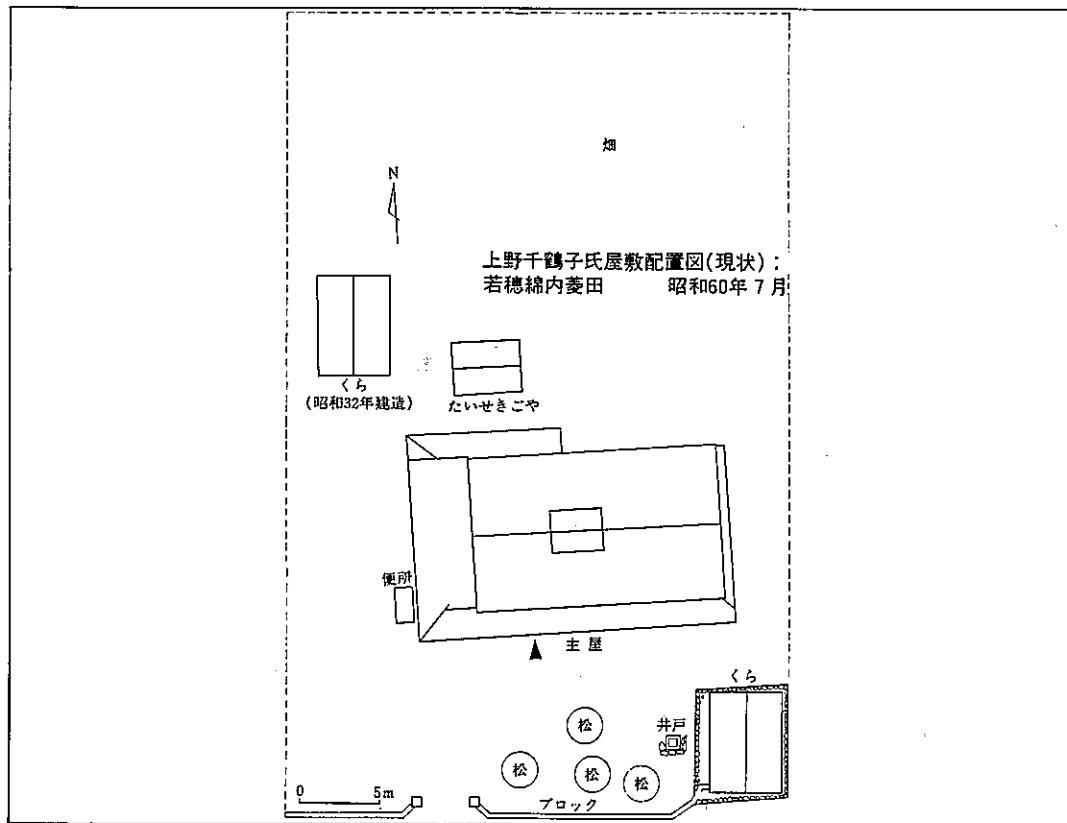
主屋（南より）



主屋（北より）



ざしきの「トコ」(左)と「仏壇」(右)



上野千鶴子氏宅現状平面図

(2) シシドテの調査

調査月日 昭和60年6月26日

調査地 長野市芋井大字上ヶ屋軍足、大字広瀬新屋

調査者 山口明・安室知

調査内容 芋井地区は長野市の北部に位置し、西は戸隠村に接している。芋井は昭和29年に旧芋井村が長野市に編入され、現在に至っている。

地元の麻場長男・大日方喜一郎両氏の案内で2ヶ所のシシドテを実見した。1つは軍足集落の南側にコブ状の小山があり、その尾根沿い及び北側斜面に構築されているものである。通称大軍足という地籍にあたる。軍足の集落は標高880mほどの所に位置し、シシドテのある山の頂部は911mである。尾根は北東から南西方向に走り、北側は水田となっている。北に高く、南に低い地形で、一段低い所に百舌原・新屋などの集落がある。また西には軍足池がある。

シシドテは尾根沿いとそれより2~3m低い北側と2段平行に構築されている。ドテは斜面の上を削りとり、その土を下に盛りあげてドテ状にしたものと思われる。1段のドテの高低差は60~80cmを計る。このシシドテは農作物を荒す猪除けに築かれたと言われるので、百舌原や新屋などの集落を守るために築かれたのであろうか。構築時期については、近世以降ではないかということであるが、判然としない。

他の1つは大字上ヶ屋栄峰の南に位置し、通称カルカ峰と称する東西に走るやせ尾根沿いに構築されているものである。ざっと、500m余りが連綿として続いているのを確認した。ドテの高低差は70~80cmである。尾根の北側を掘りあげ、その土を南側に盛りあげて築いたと思われる。従ってカットされたこのドテは標高1060m位の所に位置する。

文献（「戸隠のシシ土手」関保男・長野85号）によれば、このシシドテは更に西に延びて、戸隠村諸沢あたりまで続くとしている。30km以上も続くことになり、壮大なシシドテであるが、現状はどうになっているのかは未確認である。これらも近世の構築と考えられる。

これらのシシドテについては古文書等の記録にあたり、年代などを明確にする必要がある。更に測量を行ない、正確に地図上に落とし、記録保存をしなくてはならないだろう。

(3) 資料収集

収蔵庫が満杯に近い状態なので、市民からの寄贈・寄託の申し出に対して、重複資料をさけるため、お断りの連絡が以前にもまして多くなった。それでも各項目にわたり、本年度も多くの資料を収集した。特に、衣服・医療について、一括資料を受け入れた。全体の中では「衣食住」と「生産・生業」の収集資料が大部分となっている。また、「漁とくらし」の展示を通じて、漁具を収集した。これまで、ほとんど収蔵していなかったものである。これらは本年度と次年度にわたって受け入れた。

昭和60年度の寄贈資料は831点、寄託資料は373点であった。



シシドテのある山（芋井 軍足）



シシドテのあるカルカ峰（芋井 新屋）

3) 自然部門

(1) 温泉調査

温泉の調査も今年で3年目になる。そこで今回は、過去2年間のデータを交えて、本年度の結果を比較検討する。

調査月日 昭和60年6月19日

調査地点 森・倉科(更埴市)、松代温泉・一陽館・長野市保健保養訓練センター(松代町)、温湯(若穂)

調査者 大蔵満・西川昭史

調査内容 調査方法については前回と同じである。

測定結果

本年度は、1回だけの測定ではあったが、過去2年と同様な結果となった。

1つは、森・倉科・温湯のグループ(以下Aグループ)で、弱アルカリ性で4つのイオンの含有量が少ない温泉、もう1つは松代温泉・長野市保健保養訓練センター・一陽館(以下Bグループ)で、弱酸性で4つのイオンの含有量が大きい温泉である。今回調査の結果を表1に示す。

また表1中にある4つのイオンの含有量を各温泉ごとにプロットしたものが図1と図2である。

図1がAグループで、図2がBグループである。

Aグループでは、マグネシウムをのぞいて他の3つのイオンは、少しばらつきがある。一方Bグループでは、塩化物イオンだけが少しばらついたが、他の3つのイオンは、ほとんど変化がない。

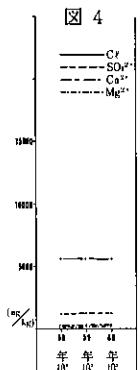
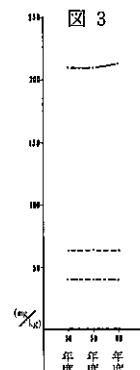
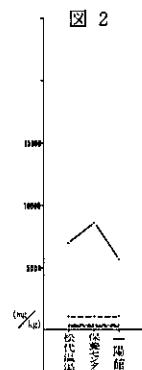
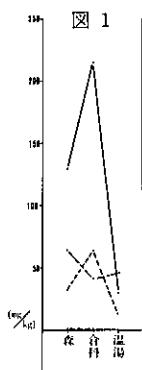
さらに3年間の動向を調べるために、例としてAグループから倉科、Bグループから一陽館を取り上げ、図3・図4にプロットした。グラフより、倉科も一陽館もほとんど変化がないことがわかる。また、他の温泉についても同様な結果を得た。つまり、ここ3年間では4つのイオンの含有量は、調査したすべての温泉で、変化がないことがわかる。

認められないことがわかる。

しかしながら名温泉における4つのイオンの含有量は、今後変化することも十分に考えられる。

今後は、調査回数を増やしたり、またナトリウムイオンやカリウムイオンの含有量を調べ、さらにアルカリ度等も測定し、地震との関連を調べていきたい。

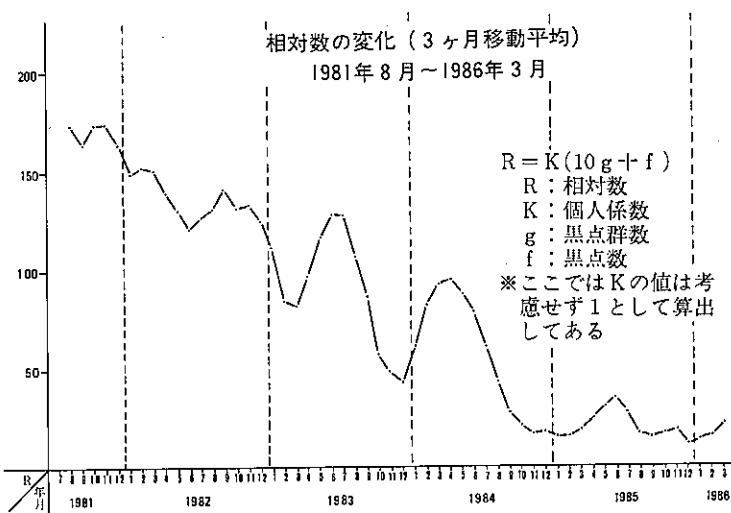
場所	泉温(℃)	pH	RpH	K×10 ³ (Ω ⁻¹ cm ⁻¹)	Cℓ ⁻ (mg/kg)	SO ₄ ²⁻ (mg/kg)	Ca ²⁺ (mg/kg)	Mg ²⁺ (mg/kg)
森	32.8	8.6	8.6	1.05	131.2	65.0	33.0	1.5
倉科	24.4	8.4	8.4	1.50	215.3	41.5	64.1	1.5
温湯	28.8	8.6	8.6	0.65	30.5	46.0	12.8	0.8
松代温泉	45.8	6.7	7.3	5.5 (23℃)	7054.6	300.0	1026.1	335.6
松代保養センター	49.2	6.7	7.2	6.0 (23℃)	8685.0	265.0	1026.0	287.0
一陽館	40.9	6.5	7.2	4.0 (23℃)	5707.4	300.0	1226.4	379.4



(2) 太陽黒点の観測

① 概要

当館では1981年7月以来太陽黒点の観測を行っている。黒点活動は周期性があり、約11年の周期で増減を繰り返していることは現在よく知られていることである。ところが、毎回の周期は正確に11年ではなく、長い時もあれば短い時もあり、相対数もその度に違っている。つまり、その活動を予測することは極めて困難である。それがゆえ太陽黒点活動を監視していくことは重要なことである。

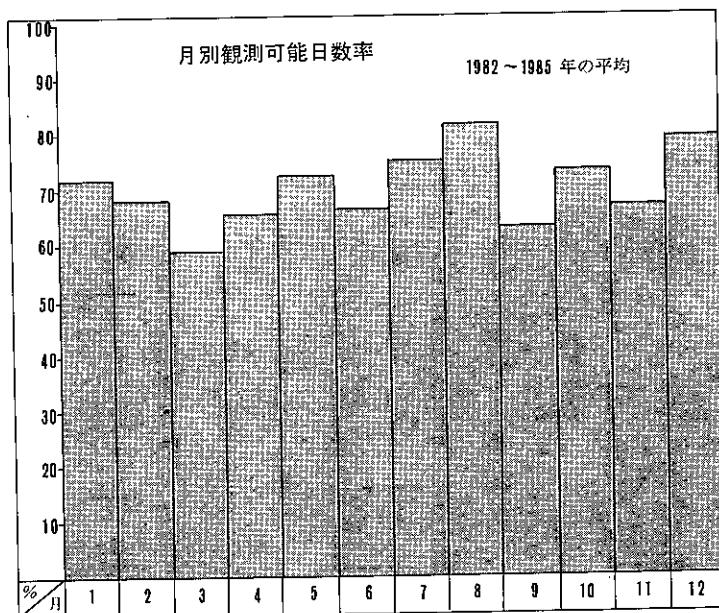


第21期の活動が1976年の極小から始まっている。当館ではその極大(1979年)を過ぎた頃から観測を始めたために、現在では1周期の後半部分のみの様子しかわからないが、次第に極小期を迎えていく過程はグラフからも明らかであろう。

②長野（八幡原）の観測条件

気象 長野は日本海側の気候と太平洋側の気候の中間的な性格の場所である。冬は季節風の影響で雪の降る日が多いものの、強い寒気の時以外はわずかでも陽が出る日が結構多い（博物館が長野盆地の南端付近に位置しているせいでもある）。また、梅雨と秋霖の季節は太平洋側とほとんど同じに影響を受ける。

従って、太平洋側よりやや観測可能日数が少ないという傾向にある。



観測可能日数と観測日数

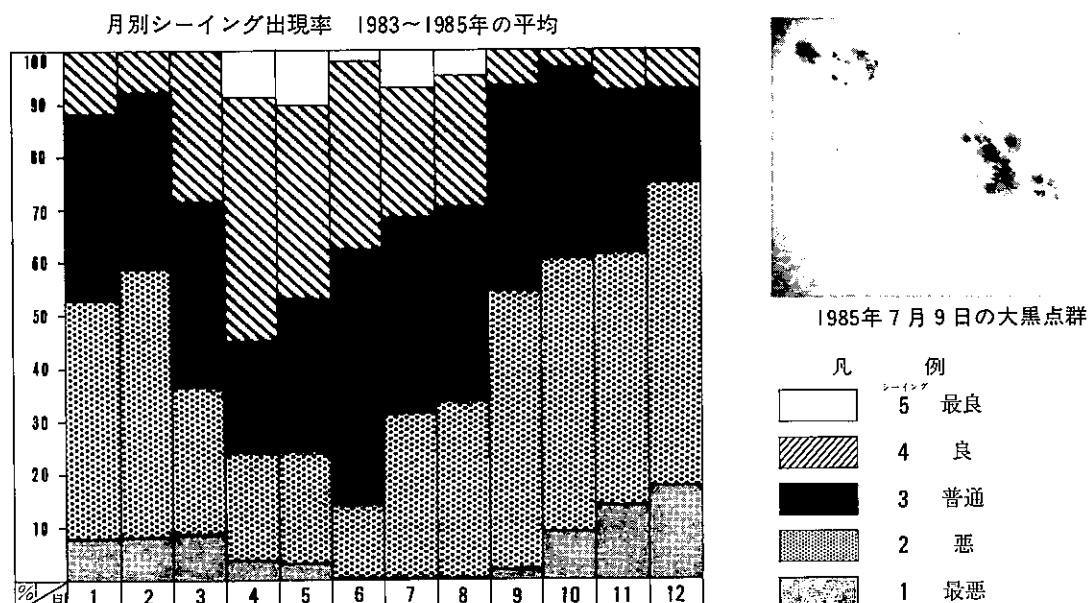
	観測可能日数	観測日数
1982	232	130
1983	264	236
1984	263	246
1985	271	268

シーディング 太陽面を観測するうえでもう一つ障害となるのはシーディング(望遠鏡で天体を見た場合の天体の形や位置の時間的変動)の良否である。シーディングが良いと像が揺れずにはっきり見えるために観測精度も上がるが、逆に悪い時は黒点数さえも数えられないほど乱れた像になる。これは大気の揺れによって生じる現象で、その状況を当館では5段階(1が最悪で5が最良)で評価している。

グラフからも明らかなように最も大きな要因は季節的な変化である。春から夏にかけて4~5が増え、特に6~8月は1(最悪)が見られない。ところが、秋~冬はその逆で、1~2が多く、5は見られなくなる。これは上空のジェット気流の影響によるものと思われるが、その因果関係はまだ確めていない。

この季節的変化が大局的なシーディングの変化とすれば、もっと短かい時間的変化と狭い空間的要因による変化、地域的な気象の変化によって影響されるシーディングもあると思われる。

シーディングというのは個人的要素が多く客觀性に欠けるが、同一場所で同一人物が評価すればその変化の様子はある程度客觀性がでてくるのではないだろうか。



③観測機材・方法

当館の観測は主にスケッチによっている。そして、大黒点が出現した時などはなるべく写真撮影をするように心がけている。

◎スケッチ…15cm屈折望遠鏡で、投影法による。投影像は直径19cm・接眼レンズはK40mm使用（倍率56倍）

◎写真…15cm屈折望遠鏡・焦点距離2250mmに、接眼レンズMH12.5mm、ハーシェルプリズム、フィルター（PO1、ND4）を使用。

フィルム…ミニコピーHR II・現像…コピナール、D-19

④おわりに

さて、第21周期の終り（極小期）がいつになるかということであるが、今後相対数が増加していくまでは結論が出ない問題である。しかし、新周期を知らせる高緯度黒点群が現れれば過去の経験によっておよその極小時期が予測できる。今、高緯度黒点群がいつ現れるか、そして極小はいつになるかが最大の関心事である。

(3)ハレー彗星騒動—1910年（前回）・1985年～1986年（今回）—

(A)ハレー彗星がやってくる

1985年の秋から1986年冬にかけてハレー彗星はやはり約束を破らずに76年ぶりに私たちの前に姿を見せた。前回と今回、ハレー彗星がやってくる時に共通して起こることがあった。それは異常とも思える騒動である。もちろん時代的背景が大きく異なるため、その騒動の種類も違ってはいるが、ハレー彗星がやってくるということで起きていることに変わりはない。

(B)1910年（前回）

前回ハレー彗星がやってきた時の様子は東京天文台などの報告が残っているが、さて長野では、というと見当らない。そこで、前回のハレー彗星を見た人を探し、その様子を聞いてみることにした。新聞等の協力を得て県内で50人の方々から「明治43年のハレー彗星を見た」という知らせをいただいた。とても全部を掲載することはできないため、その一部を紹介する。

地球がこっぱみじんになる!!

長野市箱清水 新井正尾さん（明治37年1月1日生）

〃 内田とみさん（明治35年9月2日生）

新井「5月の初めごてだと思っているんですよ。ほうき星がぶつかるかもしれないっていうんですよ。もしぶつかれば地球なんてこっぱみじんだって言つっろいたなー。それを聞いたのは小学校へ上がったばかりだから学校で聞いたのかもしれない」

内田「私は3年生の時だったけど、やはり5月だったように思います。まだ肌寒かったもの」

新井「地球がめちゃくちゃになると聞いてからは、その当日まで学校へ行っても家に帰っても、さびしくてさびしくてしようがなかった。そして当日、「おい、家中で庭へ出よう。ほうき星が出るんだと、でっかいほうき星だと」とおやじに言われて庭へ出たんだね。そしたら、その雄大というか壮大というかね。そのながめは美しかった。さびしさなんて何もなかつたですね」

内田「私はこの家（新井さんのこと）のお父さんに『こういうことは二度と見られないからよく見ておけ』と言われて、城山で見たの。やはり旭山の上にとまっていましたよ。よくよく竹ぼうきだね。竹の柄が南を向いて北の方にぼーと長くて、1時間半くらい見ていた。

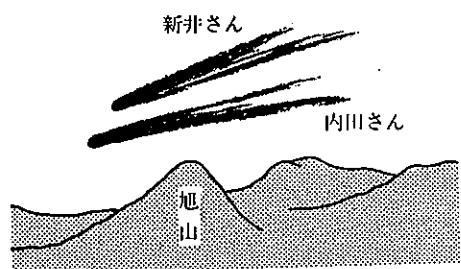
伝染病にかかるから見てはいけない

長野市新町 塚田きくさん（明治33年2月23日生）

「私は10歳の時、この家の前の道で見ていました。方角は西、いやちょうど南西ですね。ほら、西に見える旭山の上です。上方にはほうきの薄い方が広がっていて、本当にほうきの手のようでした。

私は『あんなものを見れば伝染病にかかる』と言われましてね。見たなんて言えば大変だから、そっと見ていました。案の定、その年に母が大病してさ、あんなの見たからだってすぐ思ったの。でも今の医学から考えればそんなはずないんですけどね。母は達者になったからよかったけど、当たったなあと思ってました。

私の隣にも私と同じ年の娘さんもいたし、上のお兄さんやお姉さ



んもいたけど、あの方たちはごらんにならなかつた。

今考えるに、伝染病になれば困ると思って出られなかつたんでしょう。利口だったんですよ。」

「今でも伝染病はこわいんですけどね、当時はもつ
とこわかつた。でも見事でしたよ。どうしてあんな
ものがあそこにポロッと出ているのか不思議でした。
今、これを見て伝染病にとりつかれれば困るから
て、あわてて家へ入って手をよく洗ってから、やつ
と夕飯になったのを覚えています。

土蔵の上に見えた

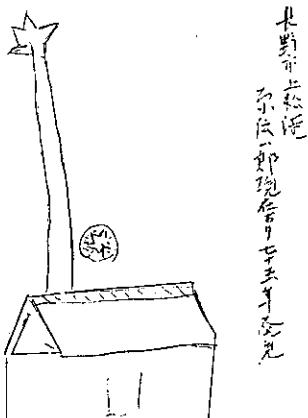
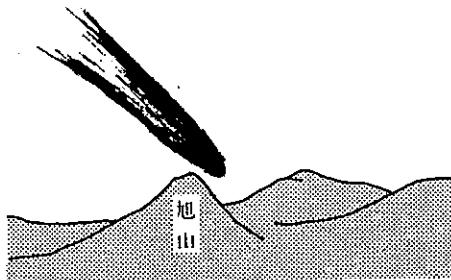
長野市上松 原伝一郎さん（明治33年2月19日生）

長野市上松の原さんは、明け方のハレー彗星を見た数少ない人の中の1人です。

「夜中の2時頃だったかな。ばあさんと一緒にいたけど偶然見たんだな。マントのように白っぽい銀色に見えたんだ。ばあさんに『そんなものを見ると病気になって早く死んじまうぞ』と言われてあわてて家の中へ入って寝た。昔はハレー彗星なんて呼んでいたから、ほうきのようになっているからほうき星ってせつた（言った）んだ。とにかくきれいだった。そばに黄色くチャカチャカン光る星があって、その横にほうき星が見えたんだ。何せ初めて見たからたまげちゃって、ものすごくきれいだった。

右の図は原さんが描いたハレー彗星の模様である。黄色くちやかんちやかん光る星は宵の明星金星で、尾の上の大きな星はアルタイル（わし座）ではないかと思われる。

当時の長野の天気と照らし合せてみると、新井さん、内田さん、そして塚田さんは5月23日、24日、26日、27日のうちのいずれかの日、そして原さんは5月13日か15~18日の間のいずれかの日に見ただろうことが推測できる。



当時の新聞より

壯觀なる彗星

信濃毎日新聞 5月17日

水内郡日里村字大坦平民潤吉母大内ト
と云ふ本年八十四歳なる老婆は去る十
日前午前十一時頃自宅に於て終焉したり
因は目下取調べ中なれども聞くところ
依れば来る十九日ハレ彗星が地球を
突する云ふ世界の事實に付ける
らむとの風説なり

5月14日

(C)届いた手紙から

明治43年のハレー彗星を見た時の様子は手紙でもたくさんの方々が知らせてくださった。その中から長野市松代町、栗林享さんの手紙をそのまま紹介させていただく。

1910（明治43）年5月当時の状況

- ①大人達があまり長く見ていてはいけないので5~10分位で家に入り、家の中から戸を開けて見ていた事もある。
- ②お米がよく出来ると言う者はずいぶんあった。
- ③悪い病気がはやると言われたり、あのほうき星を長く見ていると頭がはげると言われて、手拭ではうかむりをしたり、少しはげている人など両手で頭をおさえていた。しかし、あとではげもしなかった。
- ④恐怖の話の方が多かった様な気がする。後になってすい星が見えなくなつても別に病気もはやらなかつたし、稻も豊作じゃなかつたという。中には来年は不作だと言う人もあつたが、子供の事でそこまでは判らない。

学校へ行って、先生のいない時、黒板にはうき星（みんなほうき星と言って、すい星なんて言う人は少なかつた）の絵を書いたが、先生は黒板一杯に大勢で書いたほうき星を眺めて叱りもしなかつた。柄のついた本当のほうきの様な絵もあつた。ほうき星の尾が散り散りになり、稻田の上に雨かあられの様に降っている絵もあつた。随分明るい星だった。

私の家で父が読んでいた「萬朝報」という新聞にも記事やスケッチが出ていた様な気もするが、はっきりとは覚えていない。天気の都合で曇ったり色々するので毎日見たわけではない。見えなくなるまで20回くらいは見た様な気がする。上級生達は校庭で棒ではうき星の絵を書いたり、作文なんかを書いた生徒もいた様だ。あの時の作文も見たら随分面白いがなあと、今つくづく思う。何せ70余年前の事で、とてもだめかな。どこかの小学校や中学校（昔の5年制）の作文集でもあつたらなあと思うが、無理な話か。（昭和60年11月5日）

(D)1985年～1986年（今回）

今回は、専門家やアマチュアの天文愛好家の間ではだいぶ前から話題になっていたハレー彗星だが、一般の人達の関心が高まってきたのは第1回目の地球へ最接近した11月であった。11月の中頃ともなると双眼鏡でも見えるようになったこともあり、新聞社やテレビ局の報道機関がハレー彗星の話題を扱う量が増えてきた。

《当館の様子》

当館でもプラネタリウムや天体教室を通じてハレー彗星の情報の提供を始めた。また、ハレー彗星に関する問い合わせの電話が次第に増え始め、11月27日前後（第1回目の最接近時）が最も多くなった。次から次へと問合せの電話があり、毎日同じ応対を何回も行った。というのも次のようにはとんど同じ質問内容であったからである。

（問合せの内容）

何時頃、どの辺に見えるか

この頃は肉眼ではまず見えなかつたために、この質問に対しても、「星座を御存知ですか」と聞き返した。すると、ほとんどの人は知らないという答えであったために、しかたがなく、「ある程度星座の形や位置を知らないと、肉眼では見えないハレー彗星を双眼鏡や望遠鏡の視野に入れるこことはむずかしいのです」と答えざるを得なかつた。



こうした電話は翌年1月の前半まで続き、その後、静かになった。地球から一旦ハレー彗星が見えなくなったからである。そして3月になると、前よりも激しく電話がかかってきた。質問の内容も「どこへ行けば見えるか」という項目も加わった。南東～南の空低い所に見えるという知識をだいぶ得ているためである。このような電話は第2回目の最接近の日（4月11日）をピークに4月24日（皆既月食）まであり、その後は全くなかった。

(E) 結末

ハレー彗星騒動のすさまじさはその他にも次の数字を見ればよくわかるであろう。

① プラネタリウムの入場者数

○1985年秋（1910年ハレー彗星接近中パート1） 4740人（前年秋3449人 前年比39%増）

○1985～86冬（1986年ハレー彗星接近中パート2） 2495人（前年1548人 前年比61%増）

② 天体教室等

○ハレー彗星観測会（1985年12月7日） 定員 240人に対して申込み約500人

○春の天体教室

～最後のハレー彗星観測会～（1986年5月11日）

定員 100人に対して申込み約1000人

③ 市内望遠鏡販売店昭和60年10月～61年4月の望遠鏡販売台数

の伸び

	前年同期を100とした場合の売り上げ	備 考
A店	150(1.5倍)	望遠鏡100台・双眼鏡150台など
B店	200(2倍)	

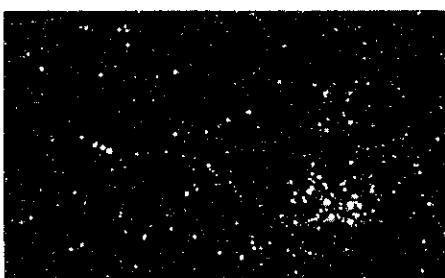


ハレー彗星観望会

さらに、ハレー彗星によって利益があったのは、出版社・旅行会社と航空会社（ハレーツアー）電電公社・望遠鏡メーカー・便乗商品を出した所など非常に広範囲に渡っている。その反面では、損害のあった人もいることは事実であろう。

ハレー彗星は再び地球からどんどん離れていっている。結局、長野では肉眼ではほとんど見ることができなかった（南へ行っても期待していたようには見えなかつたようだが）。当館の観測では、むしろ騒ぎが終つてからの方が立派に見えたから皮肉なものである。

ハレー彗星がもたらしたものは利害さまざまであるが、今まで星に無関心だった人々が何回も夜空を見上げ、その中には星が好きになった人もいる。また、望遠鏡を買った人々の中には今でもそれを十分に活用している人もいる。これらは良い方へ結果が出た例であろう。



1985年11月14日ハレー彗星とすばる



1986年5月12日のハレー彗星

(4) 化石の収集

開館(昭和56年)から現在までに収集した化石資料は、県内産化石418点、県外産化石152点、購入化石11点の計581点に及んでいるが、これらの資料の大半は、地質学を専門に学ばれてきた諸先生方から寄贈・寄託されたもので、博物館独自に調査研究を行い収集した資料は、残念ながらほとんどないのが現状である。

しかし、本年度9月には、茶臼山自然史館が分館として開館し、自然史部門の充実をはかる機会が得られたので、今後、長野市とその周辺地域を中心に調査研究を進めていく予定である。

ところで、本年度は茶臼山自然史館の開館準備に追われ、主体的な調査研究はほとんど行っていない。ここでは、一般市民から寄せられた情報をもとに行った化石収集について記す。

長野市西方の裾花川中流域に広がる新第三系は、下位より青木累層、小川累層、柵累層、猿丸累層に区分され、このうち柵累層は、下位より高府泥岩部層、荒倉山火碎岩部層、荻久保砂岩泥岩部層に細分されている(矢野・村山 1976)。また、柵累層からは、豊富な貝化石が報告されていて、下榎木化石動物群(富沢、1958)または柵動物群(Akiyama, 1962)として知られている。

今回、後述する長野市小鍋および戸隠村より採集した貝化石は、いずれも柵累層に含まれる。

①長野市小鍋産化石

調査月日 昭和60年12月1日

調査場所 長野市小鍋千木部落北方の林道沿いの露頭(地点①)

調査結果

本調査地には、中礫～大礫大の安山岩角礫および細礫～中礫大の浮石を多く含んだ、黄褐色～灰色の細粒砂岩層が露出する。本層は矢野(1981-b)の荒倉山火碎岩部層下部に相当し、従来化石の产出に乏しく、化石に関する報告はほとんどない。しかし、今回の調査により、殻は溶けて保存は良くないが表に示すような7種の貝化石を採集した。

ここから産出した化石には、特にPectinidaeが豊富なこと、また、戸隠村の裾花川流域において知られている下榎木化石動物群(富沢、1958)または柵動物群(Akiyama, 1962)より下位の層準であることから、柵累層中の化石群集の変化を明らかにするのに重要と考えられる。



調査地点(国土地理院発行 5万分の1 長野・戸隠を使用)

②戸隠村産化石

調査月日 昭和61年2月12日

調査場所 上水内郡戸隠村川下部落西方の道路沿いの露頭（地点②）

調査結果

荻久保砂岩泥岩部層（鈴木、1938）中の緑灰色～灰色の細粒砂岩より、表に示すような12種の化石を採集した。貝化石の多くは*Lucinoma acutilineata*であるが、*Conchocele bisecta*, *Anadara amicula*, *Mizuhopecten yamasakii*なども普通に認められる。このうち前2者は合弁で自生的な産状を示す。また、その他は離弁または破片で、砂岩中に散在またはレンズ状に密集して産出する。この化石群集は富沢（1958）の下榆木化石動物群に相当し、貝化石の多くは寒流系浅海種である。また、これと似た群集が戸隠村下楠川部落南方の楠川沿いの露頭にも認められる。

長野市小鍋（地点①）より産出した化石

Arca sp.
Anadara sp.
Chlamys cf. cosibensis (Yokoyama)
Chlamys sp.
Mizuhopecten cf. yamasakii (Yokoyama)
Mizuhorecten sp.
Acmaea sp.



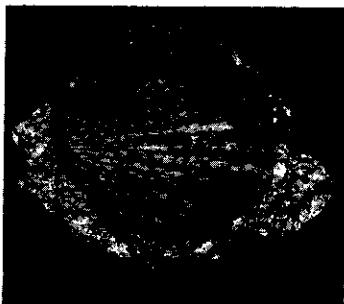
長野市小鍋採集地



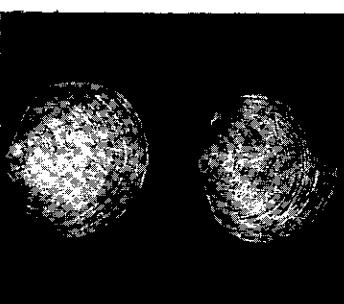
戸隠村採集地

戸隠村（地点②）より産出した化石

Anadara amicula (Yokoyama)
Glycymeris sp.
Mytilus sp.
Chlamys tanakai Akiyama
Mizuhopecten yamasakii (Yokoyama)
Crassostrea sp.
Lucinoma acutilineata (Conrad)
Conchocele bisecta (Conrad)
Spisula cf. voyi (Gabb)
Solen grandis Dunker
Acmaea sp.
Buccinum sp.



採集化石より



ツキガイモドキ

4) 歴史部門

佐久間象山資料について

江戸末期の先覚者佐久間象山（1811～1864・長野市松代町出身）に関する資料を、昭和60年11月に長野市内の象山資料収集家近山家から数多く購入した。

書籍・書簡・写本・文書・印譜・印額・着衣・写真など多種にわたっている。

書籍では、当時の主要外国文献であった蘭書類が19種33冊、蘭書雑誌4種14冊があり、この中には、松代藩主真田幸貫が金600両を投じて象山の為に買い与えた、マリン編蘭仏辞典、本邦最古のナポレオン文献のワーテルロー戦記などの貴重な文献が含まれている。これらの書物の巻頭や末尾に「象山書院」「長崎東衙官許」の朱印の押されたものも多く読破した跡がうかがわれる。

和本では、木版書13種232冊や写本9冊があり、書籍には「象山書院」の印や、象山自筆の表題のあるものが見られる。写本は象山の筆と思われる。

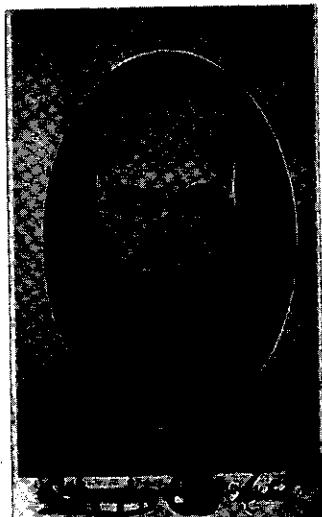
書簡は、象山が友人や子弟にあてたもの20通、象山宛てのもの14通、この中に高井鴻山（長野県小布施町の学者）、京都山階宮家執事国分番長からのものが含まれている。国分からのものは、遭難直前に届けられた、当時の象山を取り巻く異様な緊張が伝わってくるような生々しいものである。

象山は、元治元年（1864）7月11日、山階宮邸からの帰途、京都木屋町の路上で尊攘派の刺客に襲われて馬上において遭難したが、その死に關係する文書も16通あり、松代藩へ親類から出された口上書（届書）12通、深手疵改め書き、子息恪二郎に仇討ちを促がす渡辺才太郎の激越な書状もある。又遭難時に使用していた血痕のついた乗馬用馬具ゼッケの遺物資料もある。

更に、京都三条小橋の高札場に掲げられたものと伝える、皇國忠義士名の「斬奸状」（象山断罪の趣旨を述べたもの）もある。

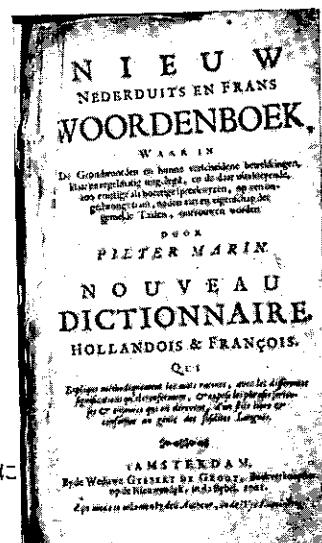
象山は、文武両道に通じ、和漢洋の書を読み、多方面に活躍したが、それを証する資料も収められている。

ペルリ一行来日の応接に着用したと伝えられる「白羅紗割羽織」、高久靄崖（江戸末期の画家、疎林外史）が贊をしてある「竹之図」、書の手本とした「顏真卿の石刷帖」、千曲川の川舟の廃材で自ら作った「七絃琴」、自詠の和歌を録した短冊6枚、象山の序文がある長さ12mに及ぶ毛筆書きの天文學（星座の図に解説をつけたもの）の巻子、友人の子息白井元吉が病名不明の急病に苦しむのを、専門の医師以上の医学知識を、臨床的に駆使した8日間に亘る治療記録などがある。



未公開の佐久間象山の写真

蘭仏辞典
(真田幸貫が象山に
買い与えたもの)



(2) 夏の天体教室

日時 昭和60年8月9日・8月10日・8月11日18時30分～21時

会場 天体学習室・天体観測ドーム

資料 天体教室資料12頁

視聴覚機器 プラネタリウム・16mm映画「星の動きを調べる」

受講者 8月9日、40人、8月10日、40人、8月11日、54人

内容 3回とも天気に恵れたために、プラネタリウム内での学習は、星座早見盤の使い方と、さそり座やこと座のようにわかりやすい星座を説明しただけである。

天体ドームでは、受講者を5つの班に分け順番に、土星を15cm屈折望遠鏡を使って観察した。また屋上に出ての実際の星空学習は、プラネタリウム内とは違って多大な学習効果があったようだ。

(3) 秋の天体教室

日時 昭和60年10月13日18時30分～21時

会場 天体学習室

資料 天体教室資料12頁

視聴覚機器 プラネタリウム・16mm映画「星の動きを調べる」・スライド

受講者 10月13日、64人、

内容 曇天となり、望遠鏡を使って、星を見ることができなかったためにプラネタリウム内での学習となった。

プラネタリウム内では、星座早見盤の使い方を説明し、そのあとでカシオペア座を出発点として話しを進め、北極星の見つけ方やケフェウス座・アンドロメダ座・ペハセウス座などの古代エチオピア王家の星座を神話を交えて解説した。

さらに接近中のハレー彗星についても、経路や位置を解説した。

(4) 冬の天体教室

日時 昭和61年2月11日18時30分～21時

会場 天体学習室

資料 冬の星座案内2枚

視聴覚機器 プラネタリウム・16mm映画「星の動きを調べる」・スライド

受講者 2月11日、93人

内容 曇天のため、望遠鏡を使って、星を見ることができなかったためにプラネタリウム内での学習となった。

プラネタリウム内での学習は、南の空にあり、冬の代表的な星座であるオリオン座をはじめとして、おおいぬ座・こりぬ座・ふたご座やぎよしゃ座などの星座を神話を交えて説明した。さらにハレー彗星の経路や当館が撮影したハレー彗星を解説した。

(5) 第3回プラネタリウムコンサート

日時 昭和60年8月25日18時30分～20時

特集 天の川

ナレーター 大久保千恵子

対象 高校生以上

入場料 150円

入場者数 92人

(以下、対象・入場料は以下同様)

第3回コンサート曲目

No.	曲 名	演 奏 者
1	〈南極物語〉 メインテーマ(オリジナル・サウンド・トラック)	ヴァンゲリス
2	〈〃〉 奇跡の生存 (〃)	〃
3	〈幻想惑星〉 躍動・遠ざかる衛星群	J. M. ジャール
4	〈イン・パースン〉 鐘櫻・朝の祈り	喜多郎
5	〈大地の祭礼〉 ムーブメント7	ヴァンゲリス
6	精霊流し・飛梅	新日本フルハーモニー管弦楽団
7	〈大地〉 オーロラ・フル・ムーン	喜多郎
8	さよなら	オフコース

(6) 第4回プラネタリウムコンサート

日時 昭和60年11月3日 18時～19時

特集 黄道12星座

入場者数 72人

第4回コンサート曲目

No.	曲 名	演 奏 者
1	ミスター・ロンリー (MR. LONELY)	フレデリック・ダール and オーケストラ FREDERIC DARR and HIS ORCHESTRA
2	ナイト・バース (NIGHT・BIRDS)	シャカタク (SHAKATK)
3	ティキン・オフ (TAKIN' OFF)	
4	①オネスティ (HONESTY) ②シーズ・ゴッド・ア・ウェイ (SHE'S GOT A WAY)	比利ー・ジョエル (BILLY JOEL)
5	あこがれ／愛 (LONGING/LOVE)	ジョージ・ウィンストン (GEORGE WINSTON)
6	オリスタノ・ソジャーン (ORISTANO SOJOURN)	スコット・コッス (SCOTT COSSU)
7	アイ・ライク・ショパン (I LIKE CHOPIN)	ガゼボ (GAZEBO)
8	心の愛 (I JUST CALLED TO SAY I LOVE YOU)	スティービー・ワンダー (STEVIE WONDER)
9	無幻飛行 (MIDNIGHT CRUISE)	フレデリック・ダール and オーケストラ FREDERIC DARR and HIS ORCHESTRA

(7) 第5回プラネタリウムコンサート

日時 昭和61年3月29日 18時30分～19時30分

特集 映画音楽・メシエ天体 (その1)

入場者数 92人

第5回コンサート曲目

1	ホワット・ア・フィーリング WHAT A FEELING	～フラッシュ・ダンス～ FLASH DANCE
2	ゴースト・バスターズ GHOST BUSTERS	～ゴースト・バスターズ～ GHOST BUSTERS
3	アイ・キャン・ウェイト・フォーエヴァー	～ゴースト・バスターズ～ GHOST BUSTERS
4	フット・ルース(メインテーマ) FOOT LOOSE	～フット・ルース～ FOOT LOOSE
5	海道を行く PartI	～ぐるっと海道30000km～
6	007/美しき獲物たち A VIEW TO KILL	
7	イン・ザ・ムード IN THE MOOD	
8	ワン…君だけは ONE (FINALE)	～コーラス・ライン～ A CHORUS LINE
9	バーニング・ハート BURNING HEART	～ロッキー4～ ROCKY4
10	若葉のころ FIRST OF MAY	～小さな恋のメロディ～ MELODY
11	メロディ・フェア MELODY FAIR	～小さな恋のメロディ～ MELODY

(8) 春の地質教室

日時 昭和60年6月9日 9時～16時30分

会場 教室・千曲川東縁

講義 「長野盆地の生いたち」

講師 富沢恒雄（元長野高専講師）

受講者 10名

内容 千曲川東縁の地層観察と火成岩の採集を行った。現地では、午前中、火成岩の産状や鉱物組成などについて説明を聞いたあと、実際に自分の手で岩石を割り、その硬さなどを確かめながら採集を行った。また、午後は、盆地東縁に分布する堆積岩を見学し、火成岩との違い等を観察した。

現地学習を終えた後、教室において「長野盆地の生いたち」についての講義を受け、自分の採集した岩石が、土地の生いたちを知る手掛りになること等を学習した。



地質教室

(9) 秋の地質教室

日時 昭和60年10月27日 9時～16時30分

会場 茶臼山自然史館・茶臼山周辺

受講者 40名

内容 茶臼山付近の地層観察と化石採集を行った。午前中は、茶臼山自然史館を見学した後、茶臼山に向い、地すべりと深い関わりをもつ岩石や過去の環境を知るのに役立つ植物化石等の採集を行った。

また、午後は茶臼山西方に広がる地層の観察を行い、実際にクリノメーターを使って地層の走向・傾斜を測定することによって、地層が褶曲していること等を体験的に学習した。

(10) 考古学教室「石器をつくろう」

日時 昭和60年8月25日 13時～16時30分

会場 会議室・教室

視聴覚機材 16mm映画「縄文時代」

講師 森山公一（石器づくり研究家）

教材 黒曜石・たこ糸

受講者 5人

教材費 500円

持ち物 軍手・拳大河原石・ビール瓶又は洋酒瓶・新聞紙・ダンボール・わりばし



「石器をつくろう」考古学教室

石器時代における石器づくりの技術の講義をまじえながら、実際に黒曜石を使って、石刀やナイフ形石器を作成した。また各人が作った石器を用いて、新聞紙やダンボールを切り、切れ味を試した。

(1) しめ縄教室

日時 昭和60年12月14日・15日 9時30分～15時30分

会場 会議室

教材 わら2把・わらすべ・針金・タイ等の飾物・松の小枝

受講者 各回30人

教材費 500円

持ち物 はさみ・昼食

前回は縄をなうことから実習し、大変に時間を要したので、今回は縄のなえる人と限定して募集した。従って、前回よりスムーズに進行し、ごぼうじめ・しゃくじめ・輪じめ・大黒じめ等のしめ縄を作り、持ち帰った。

4) 刊行物

名 称	月 日	規 格	備 考
善光寺信仰	3月31日	B5・60頁	特別企画展展示図録
"	"	B4両面刷	入館者用パンフレット
水に浮く惑星 一土星一	6月1日	A4二ツ折	プラネタリウムパンフレット No.16
1910年 ハレー彗星接近中 PART1	9月1日	"	" No.17
茶臼山自然史館展示案内	9月23日	B5・35頁	自然史館展示図録
恐竜の声と化石の茶臼山自然史館	"	A4二ツ折	" 入館者用パンフレット
台所と什器の世界	10月10日	B5・52頁	企画展図録
"	"	A4二ツ折	" パンフレット
年報 一昭和59年度 VOL.3	10月30日	B5・97頁	博物館活動報告
1986年 ハレー彗星接所中 PART2	12月7日	A4二ツ折	プラネタリウムパンフレット No.18
漁とくらし	2月23日	B5・43頁	企画展図録
"	"	A4二ツ折	" パンフレット
こぐまのクロちゃん	3月1日	"	プラネタリウムパンフレット No.19

5) 博物館実習

期 間 昭和60年7月1日～7月7日（7日間）

実習生 宮林正樹（大正大学大学院）

橋井昌子（国士館大学）

畠森みな子（多摩美術大学）

実習日程概要

月/日	時間	ねらい	研修事項	研修内容	指導担当者
7/1	午前	博の 物 館 理 概 要 解	実習にあたって	実習計画・実習心得・博物館の業務	山口 純一
	午後			他施設と文化財	"
7/2	午前		博物館の機構と施設 館長講話	博物館の機構と施設	佐野 孝康
	午後			館長講話	掛川 一夫
7/3	午前	実務 の 理 解 と 実 務 実 習	調査研究の実務	埋蔵文化財発掘調査実習	青木 和明
	午後			埋蔵文化財整理の実習	矢口 忠良
7/4	午前		収蔵・整理の実務	収蔵のシステム	山口 明
	午後			民俗文化財収蔵整理の実習	安室 知
7/5	午前		歴史資料整理の実習 常設展示	歴史資料整理の実習	藤森 治幸
	午後			展示の構想と構成	和田 博
7/6	午前		企画展示	企画展示	大藏 満
	午後			展示の構想と資料の取扱い	矢口 忠良
7/7	午前	整理	入館者応待	受付・説明案内	相原敬子・竹内 栄
	午後		まとめと反省	館長講話・実習整理と反省	掛川一夫・山口純一

III 博物館收藏資料

1 購入資料

1) 図書

大田区史(資料編)考古II	東京都大田区	天文月報16 1923年	第一書房
考古学会雑誌 第一編(明治29年)	学生社	, " 17 1924 "	"
" 第二・三編(明治31・32年)	"	" 18 1925 "	"
考古 第1編(明治33年)	"	" 19 1926 "	"
考古界 第1編(明治34年)	"	" 20 1927 "	"
" 第2編(" 35 ")	"	新潟県史 資料編16 近代4	新潟県
" 第3編(" 36年)	"	" 21 現代2	"
" 第4編(" 37年)	"	昭和60年天体位置表	海上保安庁
" 第5編(" 38年)	"	昭和61年 "	"
" 第6編(" 39年)	"	写真記録日本伝統狩獵法	出版科学 総合研究所
" 第7編(" 41 ")	"	惑星への旅	日本放送 出版協会
" 第8編(" 42 ")	"	太陽黒点観測報告	河出書房新社
考古学雑誌 第35・36巻(昭和23~25年)	"	角川日本地名大辞典30 和歌山県	角川書店
" 第37・38巻(" 26~27年)	"	第5回三県シンポジウム古墳出現期の地域性 1984年	北武蔵古代 文化研究所他
" 第39・40巻(" 28~30 ")	"	日本仏教基礎講座1 奈良仏教	雄山閣出版
" 第41・42巻(" 30~32 ")	"	" 2 天台宗	"
" 第43・44巻(" 32~34 ")	"	" 3 真言宗	"
" 第45・46巻(" 34~36 ")	"	" 4 净土宗	"
" 第47・48巻(" 36~38 ")	"	" 5 净土真宗	"
" 第49・50巻(" 38~40 ")	"	" 6 律宗	"
" 第51・52巻(" 40~42 ")	"	" 7 日蓮宗	"
" 第53・54巻(4 42~44 ")	"	講座 日本の民俗宗教1	弘文堂
" 第55・56巻(" 44~46 ")	"	" 3	"
" 第57・58巻(" 46~48 ")	"	" 4	"
" 第59・60巻(" 48~50 ")	"	" 5	"
天文月報1 1908年	第一書房	" 6	"
" 2 1909 "	"	" 7	"
" 3 1910 "	"	人類学講座2 獣長類	雄山閣出版
" 4 1911 "	"	" 3 進化	"
" 5 1912 "	"	" 4 古人類	"
" 6 1913 "	"	" 5 日本人I	"
" 7 1914 "	"	" 6 日本人II	"
" 8 1915 "	"	" 7 人種	"
" 9 1916 "	"	" 8 成長	"
" 10 1917 "	"	" 10 遺伝	"
" 11 1918 "	"	" 11 人口	"
" 12 1919 "	"	" 12 生態	"
" 13 1920 "	"	" 13 生活	"
" 14 1921 "	"	木竹工芸の事典	朝倉書店
" 15 1922 "	"	農業図絵	鹿島村文化協会

縄文文化の研究 1 縄文人とその環境	雄山閣出版	増補改訂地学事典	平凡社
" 2 生業	"	火山灰は語る 一火山と平野の自然史—	蒼樹書房
" 3 縄文土器 I	"	海流の話	築地書館
" 4 " II	"	地学の語源をさぐる	東京書籍
" 5 " III	"	双書地球の歴史 1 生命の誕生	共立出版
" 6 縄繩文・南島文化	"	" 2 無脊椎動物群の海	"
" 7 道具と技術	"	" 3 魚類の時代	"
" 8 社会・文化	"	" 4 大森林の時代	"
" 9 縄文人の精神文化	"	" 5 恐竜の王国	"
" 10 縄文時代研究史	"	" 6 哺乳類の時代	"
原色日本林業樹木図鑑 第1巻	地球社	" 7 水河時代と人類	"
" 第2巻	"	地学概論 上巻	朝倉書店
" 第3巻	"	" 下巻	"
" 第4巻	"	東京の動・植物園と博物館、化石 etc. めぐり	築地書館
" 第5巻	"	地すべり・山崩れ	大明堂
明治初期長野県町村絵地図大鑑 I 東信篇	郷土出版社	一般地質学 I	東京大学出版会
" II 北信篇	"	" II	"
" III 中信篇	"	" III	"
" IV 南信篇	"	地質調査法	古今書院
" 別巻市長村変遷表	"	地質図の書き方と読み方	"
植物怪異伝説新考		地形の教室	"
太古の世界を探る	東京書籍	鉱物・岩石学入門	共立出版
縄文土器大成 5 続縄文	講談社	岩石磁気学入門	東京大学出版会
恐竜時代の「生物と自然」	築地書館	原色岩石図鑑	保育社
恐竜図解事典	"	偏光顕微鏡と岩石鉱物	共立出版
ディノサウルス	"	地球資源学入門	"
濃尾平野の地盤沈下と地下水	名古屋大学出版会	石炭 一昨日 今日 明日—	築地書館
象のきた道	中公新書	古脊椎動物図鑑	朝倉書店
日本考古学史辞典	東京堂出版	地球生物学入門	共立出版
日本震災凶縛致	有明書房	陸の古生態 一古生態学論集 I —	"
科学図画の方法	共立出版株式会社	植物化石図譜	朝倉書店
昭和59年版筑波研究学園都市研究便覧	実業公報社	大型化石研究マニュアル	"
宇宙天文大事典	旺文社	古環境学入門	共立出版
南佐久郡地質誌	南佐久教育会	生痕化石の世界	築地書館
角川日本地名大辞典 2 青森県	角川書店	脊椎動物の歴史	どうぶつ社
COLLINS GUIDE TO DINOSAURS	COLLINS	脊椎動物の進化様式	法政大学出版会
角川日本地名大辞典37 香川県	角川書店	原色世界貝類図鑑 (I)	保育社
昭和58年長野県統計書	長野県統計協会	" (II)	"
新版古生物学 I	朝倉書店	原色日本貝類図鑑	"
" II	"	続 "	"
" III	"	ディノサウルス 一恐竜の進化と生態—	築地書館
" IV	"	地球はいつ生れたか	東京大学出版会
新版地学辞典 (第1巻)	古今書院	生きている地球	サイエンス社
" (第2巻)	"	大陸と海洋の起源	講談社
" (第3巻)	"	地球物理学入門	共立出版

一般地球化学	岩波書店	氷河時代の世界	築地書館
気象の教室	東京堂出版	大氷河時代	東海大学出版会
海洋科学基礎講座 1 海洋物理 I	東海大学出版会	地学 (I)	森北出版
〃 2 〃 II	〃	〃 (II)	〃
〃 3 〃 III	〃	地学 (II)	東京教学社
〃 4 〃 IV	〃	地学入門	築地書館
〃 5 海藻・ペントス	〃	地学への道	学術図書出版社
〃 6 海洋プランクトン	〃	地学の調べ方	コロナ社
日本の衛星写真	朝倉書店	地学のガイド 一長野県一	〃
世界人工衛星写真集	〃	地学野外調査の方法	築地書館
海洋科学基礎講座 7 浅海地質学	東海大学出版会	日本地方地質誌 中部地方	朝倉書店
〃 8 深海地質学	〃	図説花粉 走査電顕写真を中心として	講談社
〃 9 海底物理	〃	生態学方法論	古今書院
〃 10 海水の化学	〃	生態学辞典	築地書館
〃 11 海洋生化学	〃	磯魚の生態学	創元社
〃 12 堆積物の化学	〃	現代の進化論	岩波書店
〃 補巻 海洋研究発達史	〃	図説種の起源	平凡社
海洋の事典	東京堂出版	古生物学の基礎	どうぶつ社
陸水学史	培風館	地形の教室	古今書院
日本の湖沼	内田老鶴圖	日本地方地質誌 関東地方改訂版	朝倉書店
水 一地球の彫刻家一	共立出版	日本の山地形成論	蒼樹書房
日本の活断層	東京大学出版会	原色化石図鑑	保育社
「目でみる」日本列島のおいたち=古地理図鑑	築地書館	理論地形学	古今書院

2) 歴史資料

分類	資料名	数量	分類	資料名	数量
一般	唐墨	1		国分番長書簡	1
	佐久間象山印額	5		佐久間家伝来雄錄集	1
	佐久間象山ほか写真	4		象山遭難につき藩への届書等	12
	白羅紗割羽織	1		象山改革予告書ほか	5
	象山乗馬用馬具ゼッケ	1		高野車之助書簡	1
	象山自製七絃琴	1		渡辺才太郎書簡	1
	地震予知器マグネット	1		佐久間先生深手疵改留	1
文書	軍容の事	1		恪一周忌法事配り物并香奠帳	1
	蠻国旗印	1		象山十七回忌法事執行控	1
	佐久間修理及男格ニ大略	1		佐久間恪七回忌法事控	1
	俊約に付御書下ヶほか	7		佐久間象山23回忌法事控	1
	象山先生寄畏堂・七絃琴之翰	1		贈正四位縁故贈答簿	1
	象山序天文学	1		斬奸狀	1
	呈豊山長野君足下書	1		マリン編蘭仏新辞典	1
	第32号佐久間象山書簡集	1		ヘンリー著イペイ訳「化学」	9
	第29号〃	1		ペーメル著結婚に関する男女の生理解説	1
	第30号〃	1		ヤステレイン著物理化学一般愛好者……	3
	象山筆白井元吉医業	1		ワーテルロー戦記	1
	小曾根乾堂刻印譜	1		オランダ官軍砲兵演習備要	1
	児玉果亭之書翰	1		サハルエ著工兵初間	1
	佐久間三左衛門宛知行状ほか貼込帳	1		ヨーロッパに於ける野戦隊の現状	1
	象山宛高井鴻山書簡ほか貼込帳	1		ナニング訳要塞初問	1
	山階家執事国分番長書簡ほか貼込帳	1		ヘツイル歩騎砲三兵古知機	2

文芸協会雑誌	4		揖取魚彦著古言梯	1
雑誌「国民運動」	4		莊子南華真經	5
「評論」	3		周 礼	8
ホースヘル砲兵学・理論と実際下士官用	1		神相全編	10
大砲操縦法	1		唐六如集	6
オランダ野砲隊の過去と現在	1		欽定儀礼義疏	50
オランダ軍陣医学史	1		欽定周官義疏	40
顕微鏡用法	1		御製日講四書解義	20
ラスパイアル万病素人早期療法	1		字 紙	14
共益商会編オランダ文典	1		欽定札記義疏	70
フーヘランド医学総論病気の起源と発生・病理学講義	4		真田幸貫筆大黒天画幅	1
学芸雑誌「美術と趣味」	3		象山先生臨書塵鶴銘并序	1
オランダ陸軍騎・砲・工兵下士官用教練書	1		佐久間象山翁顏法臨書	1
春秋辞命準繩	2		顏魯公争座帳石刻	1
古琴辨	1		佐久間象山筆私歌短冊	6
春渚記聞 卷入	1		横浜開港寄図	1
象山幼時の写本	1		ペルリ来航饗応図并銅の図	1
依田利継書魯英國使渡來記	1		疎林外史贊象山先生之画	1
呂宗国漂流記	1		佐久間恪二郎書長歌	1
丙午前重譯誌	1		佐久間神溪詩文	2
函館港のさかえ	1		順子夫人私歌二首	1
塚田大峯著塚注六記	5		題陶朱公像	1

3) 民俗資料

漁具	ウ ゲ	大町市海ノ口
----	-----	--------

4) 視聴覚資料

ビデオ	土佐・四万十川 一清流と魚と人とー	N H K サービスセンター
-----	-------------------	----------------

5) 自然資料

学 名	和 名
<i>Desmostylus hesperus</i> (MARSH)	デスマスチルスの歯
<i>Trigonia interlaevigata</i>	三角貝（トリゴニア）
<i>Vicarya yokoyamai</i>	巻貝（ビカリヤ）
<i>Paraspirifer bownockeri</i>	腕足貝（パラスピリファー）
<i>Carcharodon megalodon</i>	ホホジロザメの歯（カルカロドン）
<i>Nummulites boninensis</i> HANZAWA	大型有孔虫（ヌムリテス）
<i>Orthoceras</i> sp.	直角貝（オルソセラス）
<i>Glossopteris browniana</i> (BRONGNIART)	シダ状種子植物（グロッソブテリス）
<i>Calamites</i> sp.	蘆木（カラミテス）
<i>Sigillaria boblayi</i>	封印木（シギラリア）
<i>Paleoloxodon naumannii</i> MAKIYAMA	ナウマンゾウの臼歯

2 寄贈資料

1) 歴史資料

分類	資料名	数量	寄贈者
文書	源氏唐扇弓	1	久保田佐二（稻里町）
典籍	算法自在卷之下	1	"

2) 自然資料

① 県外産化石

学名	和名	寄贈者
<i>Inoceramus</i> sp.	イノセラムス	高橋美津夫（三笠市）
<i>Jinboiceras mihoensis</i> MATSUMOTO	アンモナイト（シンボイセラス）	"
<i>Polyptychoceras (Subptychoceras) jimboi</i>	" (ポリプチコセラス)	"
<i>Gaudryceras denseplicatum</i> (JIMBO) ^{MATSUMOTO}	" (ゴードリセラス)	"
<i>Gaudryceras tenuiliratum</i> YABE	" (")	"
<i>Anagaudryceras limatum</i> (YABE)	" (アナゴドリセラス)	"
<i>Mesopuzosia yubarensis</i> (JIMBO)	" (メソブゾシア)	"
<i>Puzosia intermedia orientalis</i> MATSUMOTO	" (ブゾシア)	"
<i>Neophylloceras ramosum</i> (MEEK)	" (ネオフィロセラス)	"
<i>Halyites cf. cratus</i> ETHERIDGE	クサリサンゴ	森 啓（仙台市）
<i>Syringopora</i> sp.	四放サンゴ	"
<i>Siphonodendron pseudomartini</i> (YABE & HAYASAKA)	床板サンゴ	"
<i>Kueichouphyllum</i> sp.	四放サンゴ	"
<i>K. yahagiense</i> MINATO	"	"
<i>Siphonodendron</i> sp.	"	"
<i>Diphyphyllum flexuosum</i> YABE & HAYASAKA	"	"
<i>Amplexus</i> ? sp.	"	"
<i>Marginatia</i> sp.	腕足類	"
	こけ足	"
	腕足類	"
	巻貝	"
<i>Diphyphyllum</i> sp.	四放サンゴ	"
<i>Dibunophyllum</i> sp.	"	"
<i>Syringopora</i> sp.	床板サンゴ	"
<i>Yatsengia kabayamaensis</i> MINATO	四放サンゴ	"
	フズリナ	"
	海百合	"
	二枚貝	"
	腕足類	"
<i>Spirifer</i> (Choristites) sp.	"	"
<i>Orthotetina</i> sp.	"	"
<i>Leptodus nobilis</i> (WAAGEN)	"	"
	フズリナ	"
	"	"
<i>Monodierodina matsubaisi</i> FUZIMOTO	"	"
<i>Cyrena</i> cf. <i>shiroiensis</i> YABE & NAGAO	二枚貝	"
<i>Monotis</i> (Entomonotis) <i>typica</i> (KIPARISOVA)	"	"
<i>Cucullaea</i> sp.	"	"
<i>Trigonia</i> sp.	" (トリゴニア)	"
<i>Cladophlebis argutula</i> (HEER)	アザヤカエダワカレシダ	"
<i>C. exilitormis</i> (GEYLER) OISHI	コガタエダワカレシダ	"

<i>Oychiopsis elongata</i> (GEYLER) YOKOYAMA	ホソバタチシノブダマシ	森	啓(仙台市)
<i>Ficus</i> sp.	イチジク	"	
<i>Densatroma pexisum</i> (YAUORSKY)	層孔虫	"	
<i>Lophiostroma schmidtii</i> (NICHOLSON)	床板サンゴ	"	
<i>Sphaerocodium gotlandicum</i> ROTH.P.	層孔虫	"	
	石灰藻類	"	
	四放サンゴ	"	
	床板サンゴ	"	
<i>Syringopora</i> sp.	"	"	
<i>Aulopola</i> sp.	四放サンゴ	"	
	腕足類	"	
<i>Macrospirifer</i> sp.	日石サンゴ	山腰	悟(上宝村)
<i>Heliolites bohemicus</i>	腕足類	"	
<i>Brachiopoda</i> gen. et sp. indet.	"	"	
"	ハチノスサンゴ	"	
<i>Favosites cf. baculoides</i>	"	"	
<i>Favosites forbesi</i>	四放サンゴ	"	
<i>Tryplasma</i> sp.	層孔足	"	
<i>Amphipora</i> sp.	"	"	
<i>Clathrodictyon</i> sp.	"	"	
<i>Amphipora</i> sp.	"	"	
<i>Stromaloporoides</i> sp.	"	"	
<i>Favosites hidense</i>	ハチノスサンゴ	"	
<i>Tipheophyllum dilatoseptaum</i>	四放サンゴ	"	
<i>Fusulinid</i> sp.	フズリナ	"	
<i>Crinoid</i> sp.	海百合	"	

② 県内産化石

学名	和名	員数	寄贈者
	シダ類	5	大田繁則(長野市)
<i>Dicksonia</i> ? sp.	"?	1	"
<i>Conopteris</i> sp.	チケチシダ属	1	"
<i>Diplazium</i> sp.	ヘラシダ属	2	"
<i>Woodwardia</i> sp.	コモチシダ属	3	"
<i>phyllites</i> sp. (<i>Carpinus</i> sp. ?)	ウラボシ(カバノキ?)	1	"
<i>phyllites</i> sp.	"	4	"
<i>Bambusium</i> sp. or <i>Poasites</i> sp.	ササ	1	"
<i>Poasites</i> sp.	"	1	"
<i>Bambusium</i> sp.	"	1	"
<i>Thuja</i> sp.	ネズコ	2	"
<i>Cyperites</i> sp.	スゲ属	2	"
<i>Equisetum</i> sp.	トクサ属	1	"
<i>Glyptostrobus europaeus</i> HEER	オウシュウイヌスギ	10	"
<i>Glyptostrobus</i> sp.	"	20	"
<i>Sequoia</i> cf. <i>sempervirens</i> ENDL.	セコイア	7	"
<i>S. langsdorffii</i> HEER	ムカシセコイア	1	"
<i>Sequoia</i> sp.	セコイア属	10	"
<i>Sequoia Cone</i>	セコイア球果	3	"
<i>Alangium mikii</i> WOLFE et TANAI	ウリノキ	12	"
<i>Alangium</i> cf. <i>mikii</i> WOLFE et TANAI	ウリノキ近似	2	"
" <i>Alangium</i> " sp.	ウリノキ属	20	"
<i>Alnus</i> sp. cf. <i>Alnus japonica</i> STEUD.	ハンノキ	4	"
<i>Alnus</i> sp. cf. <i>Alnus proto japonica</i>	ムカシハルニレ近似	1	"

<i>Alnus</i> sp.	ハンノキ属	50	大田 繁則 (長野市)
<i>Alnus</i> ? sp.	ハンノキ属?	1	"
<i>Alnus Cone</i>	ハンノキ球果	2	"
<i>Rhododendron hokienense</i> OZAKI	ツツジ	4	"
<i>Rhododendron</i> sp.	ツツジ属	1	"
<i>Taxodium</i> sp.	ヌマスギ	3	"
cf. <i>Taxodium</i> sp.	"	1	"
<i>Acer nordenskioeldii</i> NATHORST	モガカエデ	1	"
<i>Acer</i> cf. <i>nordenskioeldii</i> NATHORST	ヤマモミジ近似	1	"
<i>Acer rotundatum</i> HUZIOKA	イタヤカエデ	3	"
<i>Acer</i> sp. cf. <i>Acer pycnanthum</i>	ハナノキ (ハナカエデ)	1	"
<i>Acer</i> cf. <i>tricuspidatum</i>	ハナノキ近似	2	"
<i>Acer</i> sp.	ハナノキ属	6	"
<i>Fagus</i> cf. <i>crenata</i> BL.	ブナ近似	1	"
<i>Fagus stuxbergii</i> (NATHORST) TANAI	ムカシブナ	1	"
<i>Fagus</i> sp.	ブナ属	9	"
<i>Fagus</i> sp. Cupula	ブナ殻斗	1	"
<i>Euonymus</i> sp.	ニシキギ属	1	"
<i>Picea</i> sp.	トウヒ	1	"
<i>Castanea</i> cf. <i>miocrenata</i> TANAI & ORSE	クリ近似	1	"
<i>Zelkova ungeri</i> KOVATS	ニレバケヤキ	3	"
cf. <i>Zelkova ungeri</i> KOVATS	ニレバケヤキ近似	2	"
<i>Zelkova</i> sp.	ニレ属	1	"
<i>Myrica</i> sp.	ヤマモモ属	2	"
<i>Myrica</i> ? sp.	" ?	2	"
<i>Populus</i> cf. <i>hokiensis</i> OZAKI	ホウキヤマナラシ近似	1	"
<i>Populus</i> ? sp.	ヤナギ属?	1	"
<i>Quercus</i> cf. <i>subrabilis</i>	ナラ近似	1	"
<i>Quercus</i> sp.	クヌギ属	1	"
<i>Rosa</i> cf. <i>usyuensis</i> HUZIOKA	バラ近似	1	"
Rosaceae gen. et sp. indet.	バラ科	3	"
cf. <i>Sorbus alnifolia</i>	アズキナシ近似	1	"
<i>Carex</i> sp.	スゲ属	20	"
<i>Sasa</i> sp.	ササ属	10	"
<i>Sasa</i> sp. ?	" ?	1	"
<i>Carpinus</i> sp.	カバノキ属	2	"
<i>Liquidamber</i> ? sp.	フウ属?	1	"
<i>Wisteria</i> ? sp.	フジ属?	1	"
<i>Clethra</i> sp.	リョウブ属	1	"
<i>Ilex subcoriaria</i> HUZIOKA & UEMURA	ヒイラギモチ	1	"
<i>Onoclea</i> ? sp.	コウヤワラビ?	1	"
<i>Rhus</i> cf. <i>succedanea</i>	ハゼノキ	1	"
<i>Sophor</i> ? sp.	クララ属?	1	"
<i>Vitis</i> ? sp.	ブドウ属?	1	"
<i>Salix</i> cf. <i>parasachalinensis</i> TANAI & SUZUKI	ムカシオノエヤナギ	1	"
<i>Pteris</i> ? sp.	イノモトソウ属?	1	"
<i>Cinnamomum miocenum</i> MORITA	モリタクス	1	"
<i>Wisteria fallax</i> (NATHORST) TANAI	ムカシフジ	1	"
<i>Carpinus</i> ? sp.	シデ属?	1	"
<i>Phragmites</i> ? sp.	アシ?	1	"
<i>Magnolia</i> ? sp.	ホウノキ属	1	"
<i>Sassafras</i> ? sp.	サッサフラス?	2	"
	戸隠産化石	4	新成工業 ()
	埋れ木	1	山口武人 (戸隠村)

(3) 八木貞助先生資料

No.	資料名	寄贈者	数量
1	八木貞助肖像写真・略歴	八木健三	2
2	八木貞助先生頌徳碑除幕記念・写真	"	2
3	良子女王殿下にご説明する八木貞助・写真	"	1
4	八木健三・柄沢五郎とともに・写真	"	1
5	田中館(東北大)・ウイリス(スタンフォード大)とともに・写真	"	1
6	野帳(大正2~昭和24年)	"	71
7	懐中時計	"	1
8	原稿(弘化4年の善光寺大地震……)	"	1
9	書簡(八木健三あて)	"	1

3) 民俗資料

分類	収蔵番号	名 称	数 量	寄 贈 者
1-a 衣(被物)	60A339	すげ笠	1	若林重光(稻里町)
(服物)	60A152	"	1	西沢武彦(松代町)
	60A361	単衣着物	17	若林重光(稻里町)
	60A362	裕着物	20	"
	60A324	裕着物(小供用)	1	藤森治幸(安茂里)
	60A367	羽織	8	若林重光(稻里町)
	60A365	はんてん	2	"
	60A323	はんてん(小供用)	1	藤森治幸(安茂里)
	60A364	綿入はんてん	4	若林重光(稻里町)
	60A369	ねんねこ	2	"
	60A366	ちゃんちゃんこ	2	"
	60A325	"	1	藤森治幸(安茂里)
	60A321	合着	1	岡宮照子(北石堂町)
	60A371	長着	4	若林重光(稻里町)
	60A372	じゅばん	5	"
	60A368	道行	2	"
	60A258	二重まわし	1	岩下安好(大門町)
	60A370	"	1	若林重光(稻里町)
	60A322	"	1	岡宮照子(北石堂町)
	60A373	はかま	1	若林重光(稻里町)
	60A374	けだし	1	"
	60A375	前掛	1	"
	60A376	袋帯	7	若林重光(稻里町)
	60A326	帯(小供用)	1	藤森治幸(安茂里)
	60A377	ブラウス(小供用)	2	若林重光(稻里町)
	60A378	半ズボン(")	1	"
	60A379	ワンピース(")	1	"
(履物)	60A292	ゲートル	2	美谷島今朝雄(安茂里)
	60A165	ハバキ	1	西沢武彦(松代町)
	60A147	わらじ	1	"
	60A217	"	1	八田勝行(若槻田子)
	60A215	ウソ	5	"
	60A327	足袋(小供用)	1	藤森治幸(安茂里)
	60A182	高下駄	3	大室昂(川中島町)
	60A183	日和下駄	1	"
	60A184	塗高下駄	4	"
	60A348	ゴザ打下駄	1	若林重光(稻里町)
(理髪)	60A221	髪結道具	6	若林典寿(松代町)
(裁縫・洗濯)	60A220	針箱	1	"
	60A240	炭火アイロン	1	"

	60A295	アイロン	1	美谷島今朝雄（安茂里）
	60A290	ヒノシ	1	"
	60A225	張板	5	若林典寿（松代町）
1-b 食（貯蔵用具）	60A 43	かめ	1	若林典寿（松代町）
	60A350	桶	1	上平実（篠ノ井）
	60A 2	穀箱	1	若林典寿（松代町）
	60A 7	"	1	"
	60A109	穀類貯蔵器	1	中条正勝（徳間）
(炊事用具)	60A 37	羽釜	1	若林典寿（松代町）
	60A224	"	2	"
	60A228	"	2	"
	60A 38	羽釜台	1	"
	60A 39	羽釜ぶた	2	"
	60A 50	湯釜	1	"
	60A227	鍋	3	"
	60A254	"	1	岩下安好（大門町）
	60A296	"	1	美谷島今朝雄（安茂里）
	60A337	"	1	若林重光（稻里町）
	60A297	片口鍋	1	美谷島今朝雄（安茂里）
	60A229	ヤカン	3	若林典寿（松代町）
	60A251	"	1	岩下安好（大門町）
	60A 47	ホウロク	1	若林典寿（松代町）
	60A236	卵焼き器	1	"
	60A244	パン焼き器	1	"
	60A245	カルメ焼き器	1	"
	60A 46	胴ぶかし	1	"
	60A 40	せいろ	1	"
	60A310	"	1	滝沢良辰（篠ノ井）
	60A 27	トウジカゴ	1	若林典寿（松代町）
	60A 45	米の水切り	1	"
	60A117	洗米桶	1	野口市雄（栗田）
	60A309	竹簍	1	滝沢良辰（篠ノ井）
(調理・調製用具)	60A308	まな板	1	"
	60A114	のし板	1	野口市雄（栗田）
	60A116	めん棒	1	"
	60A242	おろし金	2	若林典寿（松代町）
	60A 41	すり鉢	1	"
	60A234	"	1	"
	60A 28	こね鉢	1	"
	60A218	べに鉢	3	"
	60A311	"	1	徳武柳平（真島町）
	60A343	ふるい	4	若林重光（稻里町）
	60A178	箱ふるい	1	西沢武彦（松代町）
	60A115	杵	1	野口市雄（栗田）
	60A140	臼	1	野村堯春（松代町）
	60A111	"	1	野口市雄（栗田）
	60A112	石臼	1	"
	60A137	焼酎がめ	1	野村三男（松代町）
	60A 5	醤油樽	1	若林典寿（松代町）
	60A 4	醤油手桶	1	若林典寿（松代町）
	60A144	味噌豆踏用わらぐつ	1	西沢武彦（松代町）
	60A243	味噌用杓子	1	若林典寿（松代町）
	60A 6	タマリトリ	1	"
	60A 99	"	1	中条正勝（徳間）
(醸造・製造用具)	60A 48	めん類製造機	1	若林典寿（松代町）

(飲食用具)	60A 260	あんずつぶし機	1	岩下 安好 (大門町)
	60A 77	親 梶	16	柳 島 皇 (稲里町)
	60A 78	吸物梶	30	"
	60A 79	平 梶	16	"
	80A 80	坪 梶	15	"
	60A 81	銘々皿	20	"
	60A 83	膳 (1 尺角)	16	"
	60A 84	膳 (8 寸角)	6	"
	60A 344	箱 膳	3	若林 重光 (稲里町)
	60A 345	両足膳	9	"
	60A 82	盆	4	柳 島 皇 (稲里町)
	60A 33	モロブタ	1	若林 典寿 (松代町)
	60A 44	飯びつ	1	"
	60A 222	"	2	"
	60A 51	オカモチ	1	"
	60A 230	柄 枠	1	"
	60A 235	オタマ	1	"
	60A 349	漆器用木箱	1	若林 重光 (稲里町)
	60A 32	タバコ盆	2	若林 典寿 (松代町)
	60A 356	キセル	1	田口 直衛 (松代町)
1-c 住 (住居)	60A 286	ヘツツイ	1	西沢 武彦 (松代町)
	60A 31	鉤つけ	1	若林 典寿 (松代町)
	60A 170	"	1	西沢 武彦 (松代町)
	60A 249	"	1	若林 典寿 (松代町)
	60A 49	ドウコ	1	"
	60A 98	"	1	中条 正勝 (徳間)
	60A 11	ワタシ	2	若林 典寿 (松代町)
	60A 12	五 德	1	"
	60A 233	"	1	"
	60A 3	便 器	2	"
	60A 237	ながし (木製)	1	"
	60A 239	" (石製)	1	"
	60A 347	桐たんす	2	若林 重光 (稲里町)
	60A 118	長 持	1	野口 市雄 (栗田)
(家具調度)	60A 298	下駄箱	1	美谷島今朝雄 (安茂里)
	60A 186	鏡 台	1	大 室 昂 (川中島町)
	60A 223	"	1	若林 典寿 (松代町)
	60A 219	小物入れ	2	"
	60A 19	行 火	1	"
	60A 104	"	1	中条 正勝 (徳間)
	60A 192	"	1	大 室 昂 (川中島町)
	60A 56	行火用火入れ	1	若林 典寿 (松代町)
	60A 36	練炭ストーブ	1	"
	60A 252	ヒーター	1	岩下 安好 (大門町)
	60A 52	湯タンポ	2	若林 典寿 (松代町)
	60A 42	炭入れ	5	"
	60A 231	"	2	"
	60A 7	台十能	1	"
	60A 134	付け木	10	野村 三男 (松代町)
	60A 257	電球の傘	3	岩下 安好 (大門町)
	60A 138	ランプ鉄枠	1	野村 三男 (松代町)
	60A 291	懐中電燈	1	美谷島今朝雄 (安茂里)
	60A 357	蚊帳の吊手	1組	中条 正勝 (徳間)
	60A 232	洗面器	2	若林 典寿 (松代町)
	60A 162	フリキ箱	1	西沢 武彦 (松代町)

	60A294	水 漂	1	美谷島今朝雄（安茂里）
	60A64	まさかり	1	飯島はま代（稻里町）
	60A336	"	1	若林重光（稻里町）
	60A226	雪かき	1	若林典寿（松代町）
2・a 農耕(耕作用具)	60A69	鋤	1	飯島はま代（稻里町）
	60A139	"	1	野村堯春（松代町）
	60A155	"	1	西沢武彦（松代町）
	60A71	犁	1	飯島はま代（稻里町）
	60A1	細 鋤	1	若林典寿（松代町）
	60A150	"	1	西沢武彦（松代町）
	60A60	木 鋤	1	飯島はま代（稻里町）
	60A338	板 鋤	1	若林重光（稻里町）
	60A333	備中鋤	2	"
	60A61	馬 鋤	1	飯島はま代（稻里町）
	60A205	"	1	八田勝行（田子）
	60A307	"	1	滝沢良辰（篠ノ井）
	60A68	振り馬鋤	1	飯島はま代（稻里町）
	60A340	"	1	若林重光（稻里町）
	60A66	カルチベーター	1	飯島はま代（稻里町）
	60A174	えぶり	1	西沢武彦（松代町）
	60A332	"	2	若林重光（稻里町）
	60A107	筋引き鎌	1	中条正勝（徳間）
	60A143	筋付け	1	西沢武彦（松代町）
	60A149	"	1	"
	60A156	すじ薄用ふるい	1	"
	60A335	種蒔機	1	若林重光（稻里町）
(管理用具)	60A22	麦のくれたたき	1	若林典寿（松代町）
	60A331	"	1	若林重光（稻里町）
	60A160	ガンゾメ	1	西沢武彦（松代町）
	60A110	田打ち車	3	中条正勝（徳間）
	60A210	田ころがし	3	八田勝行（田子）
	60A209	除草機	1	"
	60A159	"	1	西沢武彦（松代町）
	60A67	麦の土入れ	1	飯島はま代（稻里町）
	60A141	"	2	西沢正彦（松代町）
	60A301	"	1	滝沢良辰（篠ノ井）
	60A108	肥柄杓	1	中条正勝（徳間）
	60A213	消毒機	1	八田勝行（田子）
(収穫・調整用具)	60A106	稲刈機	1	中条正勝（徳間）
	60A167	"	1	西沢武彦（松代町）
	60A211	"	1	八田勝行（田子）
	60A300	"	1	滝沢良辰（篠ノ井）
	60A62	千歯こき	1	飯島はま代（稻里町）
	60A352	"	1	滝沢良辰（篠ノ井）
	60A176	唐 瓶	1	西沢武彦（松代町）
	60A343	ふるい	2	若林重光（稻里町）
	60A65	万 石	1	飯島はま代（稻里町）
	60A299	摺 白	1	滝沢良辰（篠ノ井）
	60A145	俵編み機	1	西沢武彦（松代町）
	60A158	もみ焼き煙突	1	"
	60A177	豆たたき台	1	"
	60A13	横打ち杵	1	若林典寿（松代町）
	60A172	槌	3	西沢武彦（松代町）
	60A175	種入れ	1	"

2・b 山樵	60A146	トチ	1	西沢 武彦 (松代町)
	60A212	"	1	八田 勝行 (田子)
	60A247	"	1	若林 典寿 (松代町)
	60A 9	背負子	1	"
	60A 70	"	1	飯島はま代 (稻里町)
	60A 16	ソリ	1	若林 典寿 (松代町)
2・c 漁撈	60A320	伏籠	1	平林 藤吉 (大町市)
	60A316	四ツ手網	2	丸山袈裟雄 (松代町)
	60A315	投網	1	"
	60A317	魚籠	1	"
	60A318	網針	4	"
	60A319	網糸巻き	1	"
	60A314	漁業鑑札	1	"
	60A313	"	1	丸山 定善 (篠ノ井)
2・d 養蚕	60A119	桑摘み用爪	2	野口 市雄 (栗田)
	60A157	桑こき	1	西沢 武彦 (松代町)
	60A284	"	4	"
	60A285	桑こき箕	2	"
	60A131	桑切り機	1	野村 三男 (松代町)
	60A287	"	1	西沢 武彦 (松代町)
	60A238	蚕棚	1	若林 典寿 (松代町)
	60A346	稚蚕飼育箱	1	若林 重光 (稻里町)
	60A136	糸網	1	野村 三男 (松代町)
	60A135	繩網	5	"
	60A 63	繩編み機	1	飯島はま代 (稻里町)
	60A 54	蚕室用火桶	1	若林 典寿 (松代町)
	60A194	蚕消毒用ホルマリンピン	2	大室 昂 (川中島町)
	60A133	蔟	10	野村 三男 (松代町)
	60A199	"	15	大室 昂 (川中島町)
	60A271	"	20	田口 直衛 (松代町)
	60A272	"	10	"
	60A273	"	5	"
	60A196	回転蔟	30	大室 昂 (川中島町)
	60A269	"	10	田口 直衛 (松代町)
	60A195	回転蔟木枠	4	大室 昂 (川中島町)
	60A270	"	1	田口 直衛 (松代町)
	60A197	回転蔟組立台	2	大室 昂 (川中島町)
	60A125	スクラ折り器	2	野村 三男 (松代町)
	60A169	"	1	西沢 武彦 (松代町)
	60A353	"	1	滝沢 良辰 (篠ノ井)
	60A201	繭押し器	1	大室 昂 (川中島町)
	60A 58	繭毛羽取り機	1	飯島はま代 (稻里町)
	60A103	"	1	中条 正勝 (徳間)
	60A132	"	1	野村 三男 (松代町)
	60A168	"	1	西沢 武彦 (松代町)
	60A189	"	1	大室 昂 (川中島町)
	60A268	"	1	田口 直衛 (松代町)
	60A 23	繭選別器	1	若林 典寿 (松代町)
2・e 畜産	60A203	牛の鞍	2	八田 勝行 (田子)
	60A207	牛の首かけ	1	"
	60A216	牛のわらじ	2	"
	60A101	押鎌	1	中条 正勝 (徳間)

2・f 整糸・染織(整糸)	60A126	真綿むき	2	野村三男(松代町)
	60A190	"	2	大室昂(川中島町)
	60A303	小杵	4	滝沢良辰(篠ノ井)
	60A161	大杵	1	西沢武彦(松代町)
	60A129	長杵	1	野村三男(松代町)
	60A10	糸巻き台	1	若林典寿(松代町)
	60A105	糸紡ぎ機	1	中条正勝(徳間)
	60A188	糸とり車	1	大室昂(川中島町)
	60A304	糸車	1	滝沢良辰(篠ノ井)
	60A124	座縄	2	野村三男(松代町)
	60A164	"	2	西沢武彦(松代町)
	60A187	"	2	大室昂(川中島町)
	60A302	"	1	滝沢良辰(篠ノ井)
	60A127	撚り車	1	野村三男(松代町)
	60A193	"	1	大室昂(川中島町)
	60A266	糸撚機(?)	1	久保田伸一(篠ノ井)
	60A128	かな返し	1	野村三男(松代町)
	60A163	"	2	西沢武彦(松代町)
	60A191	"	1	大室昂(川中島町)
(機織)	60A 8	経台	1	若林典寿(松代町)
	60A171	"	1	西沢武彦(松代町)
	60A130	機織具一式	1	野村三男(松代町)
	60A 59	地機	1	飯島はま代(稲里町)
	60A265	"	1	大室昂(川中島町)
	60A264	高機	1	"
2・g 手工・諸職(手工)	60A 29	ウソカケ(わら製)	1	若林典寿(松代町)
	60A 30	沓(わら製)	1	"
	60A 88	馬(わら製)	1	宮原重勝(上山田町)
	60A 89	鶴(わら製)	1	"
	60A 90	亀(わら製)	1	"
	60A 91	宝船(わら製)	1	"
	60A173	わらすぐり	2	西沢武彦(松代町)
	60A241	わら打ち杵	1	若林典寿(松代町)
	60A 25	ぞうり編み器	1	"
	60A151	"	1	西沢武彦(松代町)
	60A 72	俵編み棒	1	飯島はま代(稲里町)
	60A 24	ろくろ	1	八田勝行(田子)
	60A 34	煙管のラオ殺し	1	若林典寿(松代町)
(諸職)	60A259	大工道具	5	岩下安好(大門町)
3・a 運輸・通信(運輸)	60A142	背負子	2	西沢武彦(松代町)
	60A214	"	1	八田勝行(田子)
	60A334	"	1	若林重光(稲里町)
	60A 35	手車	1	若林典寿(松代町)
	60A202	荷車	1	八田勝行(田子)
	60A206	牛の荷鞍	1	"
	60A208	ソリ	1	"
	60A261	"	1	小出昭三(鶴賀)
	60A154	天びん棒	1	西沢武彦(松代町)
	60A257	かご	1	上平実(篠ノ井)
	60A 26	両掛け	1	若林典寿(松代町)
	60A305	"	1	滝沢良辰(篠ノ井)
	60A256	滑車	2	岩下安好(大門町)
	60A351	"	2	上平実(篠ノ井)
(通信)	60A102	電話線	1	中条正勝(徳間)

4・a 交易(商業用具)	60A100	麿ばて	2	中条正勝(徳間)
	60A355	アイスキャンディー販売用木箱	1	米沢進(鶴賀)
	60A 53	紙入れ	1	若林典寿(松代町)
	60A 55	錢袋	1	"
(計量具)	60A 57	棹ばかり	1	"
	60A113	"	1	野口市雄(栗田)
	60A255	"	1	岩下安好(大門町)
	60A289	"	2	美谷島今朝雄(安茂里)
	60A342	"	1	若林重光(稻里町)
	60A250	台ばかり	2	岩下安好(大門町)
	60A288	"	1	美谷島今朝雄(安茂里)
	60A253	台ばかりのおもり	7	岩下安好(大門町)
	60A 20	斗 棒	1	若林典寿(松代町)
	60A 21	斗 棒	1	"
	60A341	桶 棒	1	若林重光(稻里町)
	60A360	物 差	3	"
	60A359	計算機	1	米沢進(鶴賀)
(証書・手形類)	60A277	工場手帳	1	古川良孝(篠ノ井)
	60A278	精算明細通帳	1	"
	60A279	貯蓄金通帳	1	"
	60A280	保険者証	1	"
5・a 社会生活	60A153	消防ポンプ	1	西沢武彦(松代町)
6・a 信仰	60A200	祈禱札	2	大室昂(川中島町)
	60A262	護摩札	44	若林典寿(松代町)
	60A263	神社札	8	"
7・a 民俗知識	60A312	腕時計	1	久保村たか子(中村)
8・a 芸能娯楽(娯楽)	60A306	ラジオ	1	滝沢良孝(篠ノ井)
	60A281	レコード・プレーヤー	1	小林勇(県町)
	60A283	レコード	16	"
	60A282	レコードケース	1	"
	60A 14	スキー一式	1	若林典寿(松代町)
	60A 15	"	1	"
	60A198	"	1	大室昂(川中島町)
	60A 18	スキー靴	1	若林典寿(松代町)
	60A121	スキー靴	2	野口市雄(栗田)
	60A122	スキー板	1	"
	60A123	スキー・ストック	1	"
	60A248	スキーのろう塗り器	1	若林典寿(松代町)
	60A166	竹スキー	1	西沢武彦(松代町)
	60A120	下駄スキー	1	野口市雄(栗田)
	60A185	ペーパーおこし	1束	大室昂(川中島)
(童戯)	60A246	こま	1	若林典寿(松代町)
	60A354	カタカタ	1	山口純一(若穂)
9・a 人生儀礼	60A148	ツグラ	1	西沢武彦(松代町)
	60A274	嫁入仕度控帳	3	古川良孝(篠ノ井)
	60A275	近親書	1	"
	60A276	金包	2	"
10・a 年中行事	60A328	道祖神祭具(オンマラ)	3	徳武秀寅(戸隠村)
	60A329	" (オソソ)	1	"

60 A 330	小豆粥の箸	1	徳武秀寅(戸隠村)
60 A 73	節供人形	1	柳島皇(稻里町)
60 A 74	"	1	"
60 A 75	"	1	"
60 A 76	"	10	"

4) 文献資料

書名	寄贈者
望月町文化財調査報告書第15集 望月城跡	望月町教育委員会
郷土資料館資料シリーズ第24号 石川日記(7)	八王子市教育委員会
東京都の自然第11号	東京都高尾自然科学博物館
八王子市郷土資料館 考古資料収蔵目録I	八王子市郷土資料館
甲斐善光寺	甲斐善光寺
読谷村民話資料集6 宇座の民話	沖縄県読谷村教育委員会
国学院大学考古学資料館紀要第1集	国学院大学考古学資料館
国学院大学博物館学紀要第9集	国学院大学博物館学研究室
特別展 音の民俗学	静岡市立登呂博物館
稲作の作期拡大のための技術進歩の過程	岩手県立農業博物館
沼津市文化財調査報告第32集 奥国寺城跡伝天守台跡・伝東船着場跡発掘調査報告書	沼津市教育委員会
" 第34集 福地鼻北遺跡発掘調査概報	"
第32回全国博物館大会報告書 S60年	日本博物館協会
鎌ヶ屋遺跡群 野火付遺跡	御代田町教育委員会
豊田市郷土資料館報告22 豊田市郷土資料館収蔵品図録V	豊田市郷土資料館
研究報告第7巻	香川県自然科學館
古戦場村々の記録	川中島町公民館
沖縄の船 サバニ	白石勝彦
第2回特別展 北前船と越前・若狭	福井県立博物館
博物館の概要	"
福井県立博物館 常設展示図録	"
小松市立博物館研究紀要第22集	小松市立博物館
所蔵品目録II	"
小諸市埋蔵文化財発掘調査報告第9集 宮ノ反	小諸市教育委員会
尼崎市文化財調査報告第17集 尼崎の農具	尼崎市教育委員会
調布の年中行事	調布市郷土博物館
収蔵品展 木とくらし	"
年報	福井県立若狭歴史民俗資料館
目で見る八戸の歴史2 繩文の美	八戸市博物館
浜松市半田山遺跡(III)・下滝遺跡(I)発掘調査報告書	浜松市教育委員会
1985年2月 引佐郡三ヶ日町殿畠遺跡	三ヶ日町教育委員会
宮反一宮反遺跡緊急発掘調査報告書	中野市教育委員会
長野市統計書 S58年版	長野市企画調整部
特別展 濃飛の繩文時代	岐阜県博物館
岐阜県博物館調査研究報告第6号	"
ガイドブック6 平塚の遺跡 見つける・調べる・歩く	平塚市博物館
平塚市博物館資料No.31 湘南植物誌I	"
" No.32 大磯丘陵の地質3	"
平塚市博物館年報No.8	"
富山県氷見市小久米A遺跡発掘調査報告書	氷見市教育委員会
氷見の石造美術	氷見市博物館
平塚市博物館研究報告 自然と文化No.8	平塚市博物館
福岡市立歴史資料館 研究報告第9集	福岡市立歴史資料館
歴博第9号	国立歴史民俗博物館
国立歴史民俗博物館研究報告第5集	"

長野県アトラス 風土・生活・歴史	平凡社
飯山市埋蔵文化財調査報告第11集 長野県飯山市長者清水・水の沢遺跡	飯山市教育委員会
県単道路改良事業(沢渡・高遠線伊那市中殿島)一緊急発掘調査報告一 宮場間様1号墳	伊那市教育委員会
広域営農団地農道整備事業(長野県伊那西部地区)一緊急発掘調査報告一 小沢原遺跡	"
国営伊那西部農業水利事業一緊急発掘調査報告一 名廻・北丘B・柳沢・山の下遺跡	"
上田市文化財調査報告書第23集 原田遺跡	上田市教育委員会
〃 第24集 染屋台条里水田跡遺跡調査概報 創置の信濃國府跡推定地確認調査概報	"
山ノ神 一長野県塙尻市山ノ神遺跡発掘調査報告書一	塙尻市教育委員会
堂の前・福沢・背木沢 塙尻東区県営圃場整備事業発掘調査報告書	"
郷土の文化財15 梨久保遺跡(写真図版編)	岡谷市教育委員会
大町市埋蔵文化財調査報告書第6集 借馬遺跡III・追分遺跡・前田遺跡・南原遺跡	大町市教育委員会
〃 第9集 借馬遺跡IV・花見遺跡	"
広郷8遺跡(II)	北見市郷土博物館
収蔵資料目録第1集 西区拾六町ツイジ遺跡	福岡市埋蔵文化財センター
日本産新生代貝類の群集特性 研究成果要旨集	昭和59年度科学研究費補助金 —総合研究A: 59340053—
第20回企画展 弥生文化と日高遺跡	群馬県立歴史博物館
大宮大寺 一飛鳥最大の寺一	飛鳥資料館
研究調査報告書第12集	浦和市立郷土博物館
沼津市文化財調査報告第33集 寺林南遺跡発掘調査報告書	沼津市教育委員会
〃 第35集 埋蔵文化財発掘調査報告書	"
展示解説(理工編)一水と雪の世界一	富山市科学文化センター
沼津市明治史料館 江原素六記念館	沼津市明治史料館
特別展 万博の殿様	水戸市立博物館
福井市立郷土自然科学博物館研究報告	福井市立郷土自然科学博物館
研究紀要第7号	埼玉県立歴史資料館
山形県の絵馬 一所在目録一	山形県立博物館
櫛原考古学研究所紀要 考古学論攷	奈良県立櫛原考古学研究所
安房・華房蓮華寺跡の調査	立正大学文学部考古学研究室
昭和60年度事業計画	山形県立博物館
細川家コレクションを中心とした中国の仏像展	熊本県立美術館
研究紀要 一2一	群馬県埋蔵文化財調査事業団
文化財を守るためにNo.24	文化財保存全国協議会
〃 No.26	"
シンポジウム「文化財と自然環境を守る」浜松大会発表要旨	"
'85特別展 古代人の衣・食・住II 古代の住まい	島根県立八雲立つ風土記の丘
水見市立博物館年報第3号	水見市立博物館
池ノ内遺跡発掘調査概報	米子市教育委員会
市原市文化財センター調査報告書第2集 石川城郭跡	千葉県市原市文化財センター
〃 第3集 片又木遺跡	"
京都府埋蔵文化財情報第13号	京都府埋蔵文化財調査研究センター
神奈川県川崎市細山代官山遺跡	細山代官山遺跡発掘調査団
川崎市文化財調査集録20	川崎市教育委員会
東京都埋蔵文化財センター調査報告第5集 多摩ニュータウン遺跡 S 58年度(第1分冊)	東京都埋蔵文化財センター
〃	"
〃	"
〃	(第2分冊)
〃	"
〃	(第3分冊)
〃	"
〃	(第4分冊)
〃	"
〃	(第5分冊)
〃	"
〃	(第6分冊)
〃	"
〃	(第7分冊)
東京都埋蔵文化財センター 年報4	"
〃 研究論集III	"
浦和市遺跡調査会報告書第44集 松木・三室・南宿南・馬場小室山遺跡発掘調査報告書	浦和市遺跡調査会
〃 第45集 大間木内谷・和田北・和田南・西谷・宮前遺跡発掘調査報告書	"
〃 第46集 井沼方遺跡(第7次)発掘調査報告書	"
〃 第47集 東原遺跡発掘調査報告書	"

浦和市遺跡調査会報告書第48集 大古里遺跡(第6地点)発掘調査報告書
宇都宮市埋蔵文化財報告第1集(再版)牛塚古墳

- 〃 第15集 駒生道下塚
〃 第16集 権現山古墳
〃 第17集 稲荷古墳
〃 第18集 聖山公園遺跡
〃 第19集 瓦塚古墳群 日満遺跡

国学院大学文学部考古学実習報告第9集 北堂C遺跡・明神堂遺跡
〃 第10集 物見処遺跡

東京大学文学部考古学研究紀要第3号

金沢市文化財紀要50 金沢市東市瀬遺跡

- 〃 52 金沢市松寺遺跡
〃 52 金沢市千木イワクリ遺跡
〃 54 金沢市新保本町東遺跡・西遺跡・金沢市近岡カンタンボ遺跡
〃 55 昭和59年度金沢市埋蔵文化財調査年報

長者ヶ平

長者ヶ平遺跡II

- 〃 III
〃 IV

豊沢貝塚

中村遺跡

秋田県立博物館研究報告第10号

埼玉県立自然史博物館研究報告第3号

松代藩文化施設の概要

生活科学資料室収蔵品目録第1集

- 〃 第2集

聖母女学院短期大学研究紀要第14集(抜刷)生活用具に関する研究

年報第1号 S58年度

研究紀要第1巻

学秀・津要仏 ふるさとの仏像

産業文化会館博物館紀要第7号

長野県更埴市横沢遺跡群

松本市文化財調査報告No.34 松本市赤木山遺跡群 I

- 〃 No.35 松本市島立南栗・北栗遺跡、高綱中学校遺跡、条里的遺構
〃 No.36 松本市島内遺跡群 北方遺跡・南中遺跡
〃 No.37 推定信濃國府 一第3次調査報告書

相原遺跡

森将軍塚古墳 一保存整備第4年次発掘調査概報一

せたがやの文化財

大迫町埋蔵文化財報告第10集 観音堂遺跡 一第6次発掘調査概報一

奥沢 世田谷区民俗調査第5次報告

瑞浪市化石博物館研究報告第11号

日田の文化財

日田文化28

昭和59年度ガランドヤ古墳群発掘調査概報

日本の歴史と文化 国立歴史民俗博物館展示案内

写真と文字で綴る麦作りとその用具

特別展図録 埋もれていた日用品の美

沼津市歴史民俗資料館紀要9

神奈川県立博物館研究報告第11号

- 〃 人文科学第12号

神奈川県立博物館人文部門資料目録(7)

設問板~自然教育園12ヶ月~

自然教育園報告第16号

文化財グラフ ぎふ 第8号 特集岐阜市の仏像

浦和市遺跡調査会
宇都宮市教育委員会

- 〃
〃
〃
〃
〃
〃

国学院大学文学部考古学研究室

〃

東京大学文学部考古学研究室
金沢市教育委員会

- 〃
〃
〃
〃
〃

長野市南千歳町 高木厚史

- 〃
〃
〃
〃
〃

秋田県立博物館

埼玉県立自然史博物館
松代藩文化施設管理事務所
聖母女学院短期大学生活科学資料室

- 〃
〃

八戸市博物館

- 〃
〃

川崎市立産業文化会館

更埴市教育委員会
松本市教育委員会

- 〃
〃
〃

高木厚史

更埴市教育委員会
世田谷区教育委員会
岩手県大迫町教育委員会
世田谷区教育委員会

瑞浪市化石博物館

日田市教育委員会

- 〃
〃

国立歴史民俗博物館

埼玉県立歴史資料館

大田区立郷土博物館

沼津市歴史民俗資料館

神奈川県立博物館

- 〃
〃

国立科学博物館附属自然教育園

〃

岐阜市教育委員会

展示等改善事業の記録	埼玉県立博物館
西宮市立郷土資料館紀要 西宮の歴史と文化	西宮市立郷土資料館
西宮市立郷土資料館図録	"
神戸市立博物館研究紀要第2号	神戸市立博物館
神戸市立博物館年報No.2	"
富山市科学文化センター館報第6号	富山市科学文化センター
第26回特別展図録 津軽こぎんと南部菱ざし	北海道開拓記念館
北海道開拓記念館収蔵資料分類目録5 産業II	"
北海道開拓記念館一括資料目録第17集 松木恒男氏資料	"
北海道開拓記念館調査報告第24号	"
北海道開拓記念館研究年報第13号	"
調査報告第5集 壬遺跡1983	国学院大学文学部考古学研究室
伊能忠敬	千葉県立大利根博物館
東北歴史資料館資料集14 江合川流域の旧石器	東北歴史資料館
柏木北山塚	水口町教育委員会
仙台市科学館時報第17号	仙台市科学館
紀要第8号	読谷村教育委員会
瓦屋西C古墳群・瓦屋西II遺跡	浜松市遺跡調査会
第32回信州書芸展図録	信州書芸会
地蔵平遺跡範囲確認調査報告書	浜松市遺跡調査会
下滝遺跡 "	"
山形県立博物館報59年度	山形県立博物館
中世のくらし図録	東大阪市立郷土博物館
紀要第4号	板橋区教育委員会
文化財シリーズ第46集 いたばしの金石文	"
自然科学普及シリーズ5 野村町付近の地質	愛媛県立博物館
愛媛の自然文献資料集 その3	"
愛媛の自然第27巻1号	愛媛自然科学教室
" 第27巻2号	"
" 第27巻3号	"
" 第27巻4号	"
" 第27巻5号	"
" 第27巻6号	"
県宝開善寺経蔵保存修理工事調査報告書	長野市
ながの市民の権利手帳	長野市職員労働組合
教職社会教育主事・学芸員課程年報	明治大学
山岳信仰の遺宝	奈良国立博物館
家 憲	ヒサヤ大黒堂
遊行寺宝物館図録	遊行寺宝物館
国東半島・宇佐の文化第14号	国東半島宇佐の文化を守る会
年報第12号	仙台市博物館
貝塚博物館紀要第12号	千葉市立加曾利貝塚博物館
収蔵資料目録(VI)	仙台市博物館
調査研究報告第5号	"
宮平遺跡(遺構編)	御代田町教育委員会
岐阜県博物館報第8号	岐阜県博物館
永田、不入窯跡	市原市文化財センター
池ノ谷遺跡・福増遺跡	"
プラネタリウム・ジャーナル Vol.15 No.2	日本プラネタリウム研究会
三沢西原遺跡	菊川町教育委員会
特別企画展図録 若山牧水と沼津	沼津市歴史民俗資料館
年報No.13	福岡市立歴史資料館
年報 昭和59年度	熊本県立美術館
川越の歴史	川越市教育委員会
ハンドブック 川越の歴史	"

川越の伝説	川越市教育委員会
続 川越の伝説	"
川越の人物誌第1集	"
芝王遺跡	伊那市教育委員会
収蔵資料目録 民俗資料編	宮崎県立総合博物館
長野歴史散歩50コース	長野歴史散歩編集事務局
信州の星空	大藏 満
年 報 1	長野県埋蔵文化財センター
大境・中原・細ヶ谷B遺跡	伊那市教育委員会
長野市教育要覧	長野市教育委員会
事業概要昭和60年度	名古屋市立名古屋科学館
科学館フロアガイド	"
市立名古屋科学館パンフレット	"
科学館ニュースNo.227	"
" No.228	"
天文クラブ一般クラス機関誌No.14	"
" No.16	"
はじめての天体観察	"
鎧塚第2号古墳	須坂市教育委員会
第21回企画展 おじいさん、おばあさんのちいさかったころ	群馬県立歴史博物館
紀要第6号	"
調査報告書第1号	"
歴博第10号	国立歴史民俗博物館
" 第11号	"
文化財調査報告17集 天神掘遺跡	伊万里市教育委員会
" 18集 阿房谷下窯跡	"
第11回企画展 空とぶ宝石 昆虫	小山市立博物館
文化財報告 XIII	富士見市教育委員会
遺跡調査会調査報告第26集	"
文化財報告第33集	"
" 第34集	"
奈良地区遺跡群II	横浜市奈良地区遺跡調査団
若狭の田の神祭り	福井県教育委員会
年報No.2	神戸市博物館
博物館だよりNo.12	"
愛知県古窯跡群分布調査報告(IV)	愛知県教育委員会
調査報告書第5集 馬場小室山遺跡(第9次)	浦和市教育委員会
年 報 4	茨城県教育財團
讃岐国分僧・尼寺跡	国分寺町教育委員会
特別史跡 讃岐国分寺跡	"
長法寺南原古墳III	大阪大学南原古墳調査団
埋蔵文化財情報第14号	京都府埋文センター
" 第15号	"
研究紀要第2号	神戸市立博物館
広島市の文化財31集	広島市教育委員会
" 32集	"
文化財調査報告第6集	五名市教育委員会
宮平遺跡	御代田町教育委員会
横沢遺跡群III	更埴市教育委員会
鎧塚第2号古墳	須坂市教育委員会
北原遺跡IV	飯山市教育委員会
郷土と博物館第30巻2号	鳥取県立博物館
藪田遺跡	群馬県埋文事業団
相模原の地名	相模原市教育委員会
埋蔵文化財調査報告10	"

横山礫部遺跡	相模原市横山礫部遺跡調査団
相模原の地形・地質第2報	相模原市地形地質調査会
館報第25号	長崎市立博物館
要覧1985	日本常民文化研究所
紀要第14号	石川県立郷土資料館
大鋸コレクション目録	"
館報12	大阪市立自然史博物館
写真集「影向寺」	川崎市市民ミュージアム準備室
民俗調査報告13 足柄の民俗(II)	神奈川県立博物館
年報1	長野県埋文センター
川西市加茂遺跡	川西市教育委員会
沼津市博物館紀要10	沼津市歴史民俗資料館
山形県立博物館研究報告第6号	山形県立博物館
京都市埋蔵文化財情報	(財)京都府埋文センター
最後の将軍徳川慶喜とその時代図録	水戸市博
飛鳥・藤原宮発掘調査概報15	奈文研
'85要覧	(財)北海道開拓の村
'85要覧	北海道開拓記念館
北海道一億年図録	"
多摩ニュータウン遺跡No.769	(財)東京都埋文センター
北方民族展図録	アイヌ民族博物館
子ノ神(II)	厚木市教育委員会
厚木の民俗1 生業1	"
" 2 "	"
" 3 講	"
" 4 年中行事	"
厚木の民家2	"
" 3	"
研究論集10	九州歴史資料館
年報 昭和59年度	"
常設展示解説 佐野の歴史	佐野市郷土博物館
昭和59年度 館報	秋田県立博物館
よみがえるクビナガリュウ	總別町立博物館
八幡原遺跡の発掘	東北新幹線赤羽地区遺跡調査会
総合案内	北海道開拓記念館
北海道自然と人	八木健三
年報第4号	福岡市埋文センター
山口県の自然第5卷5号	山口県立山口博物館
館報	"
研究報告第11号	"
金剛寺城遺跡発掘調査報告書	近江八幡市教育委員会
堀上遺跡・余内遺跡・堂ノ内遺跡	"
森ノ前遺跡発掘調査報告書	"
宇津呂館遺跡・馬渕城遺跡他	"
わが里の風土誌	矢島憲之
星野日記	厚木市教育委員会
氷河時代の動物の糞化石図録	信濃町立野尻湖博物館
成合寺	大阪府教育委員会
千葉地遺跡	神奈川県埋文センター
研究紀要第4号	東大文学部考古学研究室
武藏・大井鹿島遺跡	立正大文学部考古学研究室
考古学資料館要覧	国学院大学考古学資料館
田草川尻遺跡IV	飯山市教育委員会
成立遺跡	東部町教育委員会
深大寺池ノ上遺跡	調布市教育委員会

飛田給遺跡	調布市教育委員会
染地遺跡	"
増補大谷古墳	和歌山市教育委員会
和田山未寺山古墳群	寺井町教育委員会
松原市遺跡発掘調査概要	松原市教育委員会
広綱遺跡	郡山市教育委員会
宮田B・艮耕地C・D遺跡	"
郡山東部V	"
本丸遺跡	"
研究紀要	"
不動坂遺跡群他	東部町教育委員会
平城京左京四条二坊十五坪発掘報告	奈良県教育委員会
東北原遺跡発掘調査報告 一第6次—	大宮市教育委員会
宮ヶ谷塔遺跡群発掘調査報告	"
東京・石川天野遺跡5次調査	駒沢大学考古学研究室
" 6次調査	"
年報11	権原考古学研究所
石田1号墳	"
岩室池古墳他	天理市教育委員会
年報4	神奈川県埋文センター
銘文入太刀の世界	島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
火 一くらしと祈り一	石川県立郷土資料館
戦国の上州武将	群馬県立歴史博物館
故中村正義学士古生物学著作集	掛川一夫
稻垣黄鶴作品展	軽井沢町追分宿郷土館
萩田菜師中世墓発掘調査報告書	水見市教育委員会
上並木南遺跡	群馬県埋文事業団
里浜貝塚IV	東北歴史資料館
紀要1号	福井県立博物館
日本と韓国の塑像	飛鳥資料館
鳥浜貝塚	若狭歴史民俗資料館
いま甦る丸木舟	"
小川城址	群馬県埋文事業団
糸井宮前遺跡I	" 他
松本城の歴史展	松本市立博物館
山ノ入遺跡発掘調査報告書	豊川市教育委員会
信濃の須恵器	信濃国分寺資料館
史跡虎塚古墳	勝田市教育委員会
勝田市埋蔵文化財分布調査報告書昭和56年度版	"
市内遺跡発掘調査報告書昭和58年度	"
" 昭和59年度	"
馬渡埴輪製作遺跡	"
東北大学考古学研究報告1	東北大学文学部考古学教室
ようこそハレー	蒼風社
明治大学刑事博物館資料第7集	明治大学刑事博物館
" 年報	"
筑紫・吉備・大和の遺宝	岡山県立博物館
石川県立白山ろく民俗資料館	石川県立白山ろく民俗資料館
備前・藤原雄展	藤原 雄
松平氏史料展	上田市立博物館
神奈川県立博物館研究報告 自然科学16号	神奈川県立博物館
年報 一4一	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
近世大名の生活と美	岐阜市歴史博物館
山梨の中世陶磁	山梨県立考古博物館
近江出土の中世陶磁 一常滑と輸入陶磁を中心として一	滋賀県立近江風土記の丘資料館

千葉県文化財センター年報No.10	(財)千葉県文化財センター
〃 研究紀要9 昭和60年3月	〃
研究連絡誌第9号	〃
〃 第10号	〃
〃 第11号	〃
〃 第12号	〃
〃 第13号	〃
〃 第14号	〃
房総考古学ライブラリー2 繩文時代(1)	長野県同和教育推進協議会
被差別部落の歴史と民俗 一長野市松代町市場の場合一	佐賀県教育委員会
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 金立開拓遺跡	八王子市郷土資料館
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報 第8集	佐野市郷土資料館
特別展図録 かご 一多摩地区を中心として一	浜松市遺跡調査会
天明鉄物展 一匠の技と美一	太田市教育委員会
椿野遺跡	士別市立博物館
太田市の文化財	〃
土別市立博物館報告第3号	豊田市郷土資料館
きみもファーブルになれる 昆虫と自然展開館4周年記念第9回特別展解説書	軽井沢町追分宿郷土館
三河湾から伊那谷へ川船と中馬	太田市教育委員会
開館記念特別展 稲垣寅鶴作品展	〃
市内遺跡II	乙訓文化財事務連絡協議会編
(付) 〃 出土遺物観察表 一舞台D遺跡第III次調査一	国学院大学考古学資料館
長岡京遷都1200年記念 長岡京跡	三重県斎宮跡調査事務所・明和町
国学院大学考古学資料館要覧	群馬県埋蔵文化財調査事業団
よみがえる“竹の都”国史跡斎宮跡	柳沢はるよし
上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 三ツ寺山遺跡・保渡田遺跡(第1分冊)・中里天神坂遺跡(第2分冊)	小山市立博物館
中国敦煌展	(財)東京都埋蔵文化財センター
小山市立博物館紀要第1号	静岡県教育委員会
東京都埋蔵文化財センター年報5 昭和59年度	士別市博物館
静岡県 ふるさとの文化財	調布市教育委員会
開館3周年記念 野に出よう鳥と語ろう 特別企画展解説書 北の野鳥展	〃
調布市埋蔵文化財調査報告19 調布市染地遺跡 一第VII地区一	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
調布市埋蔵文化財調査報告書21 調布市深大寺池ノ上遺跡	近江八幡市教育委員会
年報 一4一	〃
宇津呂館遺跡・馬渓城遺跡、鷹飼遺跡、出町遺跡	名古屋市博物館
金剛寺城遺跡発掘調査報告書	(信濃教育会) 池田貢
堀上遺跡・余内遺跡・堂ノ内遺跡	松山市教育委員会
森ノ前遺跡発掘調査報告書	奈良県立橿原考古学研究所
吉田富夫コレクション	〃
道草の記	浦和市遺跡調査会
国道11号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書	〃
奈良県遺跡調査概報第一分冊	調布市教育委員会
〃 第二分冊	読谷村立歴史民俗資料館
本村I 遺跡発掘調査報告書	厚木市教育委員会
馬場北・馬場小室山遺跡発掘調査報告書	福井市立郷土自然科学博物館
別所西野台遺跡発掘調査報告書	北上市立博物館
北宿遺跡発掘調査報告書	調布市郷土博物館
調布市飛田給遺跡	富山市科学文化センター
読谷村立歴史民俗資料館紀要9号	国学院大学考古学資料館
七沢浅間神社とその周辺に関する調査	
福井市立郷土自然科学博物館研究報告第32号	
北上・和賀地方の絵馬展	
近藤勇と新選組	
特別展エビ・カニとその仲間たち	
余山貝塚資料図譜	

図書目録 追録	(財)大阪文化財センター
考古資料目録 2 山形大学附属博物館所蔵目録 7	山形大学附属博物館
大阪府の銅鐸図録	大阪府立泉北考古資料館
長野市の農業	長野市企画調整部企画課
瀬戸内海歴史民俗資料館紀要	瀬戸内海歴史民俗資料館
〃 年報	〃
昭和58年度収集 収蔵品目録	福岡市博物館建設準備室
歴 博 14	国立歴史民俗博物館
渡慶次の民話	読谷村立歴史民俗資料館
伝統工芸 高岡銅器 大型作品集	高岡市商工労働部商工振興課
収蔵品目録	津南町歴史民俗資料館
国立歴史民俗博物館研究報告第7集	国立歴史民俗博物館
〃 第6集	〃
坂城地域の地質	地質調査所
信濃池田地域の地質	〃
三ツ木遺跡	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
木地屋の世界	神奈川県立博物館

3 寄託資料

1) 歴史資料

名 称	数 量	寄 託 者
象山全集（信毎刊）	5	近山与士郎
象山の書	1	〃
佐久間象山遺墨集（象山社刊）	1	〃
井出孫六著小説佐久間象山	2	〃
カメラの歩み（朝日新聞社刊）	1	〃
海南手帳 2（高知大仏文研究室）	1	〃
前野喜代治著佐久間象山再考	1	〃
蘭学資料研究会研究報告	2	〃
佐久間象山と蘭学	1	〃
通信博物館書面	10	〃

2) 民俗資料

分 類	収蔵番号	名 称	数 量	寄 託 者
1・a 衣	60D 63	わらぐつ	2	上野千鶴子（若穂）
	60D 77	袴	2	〃
	60D 79	下駄	1	〃
	60D 82	くし	9	〃
	60D 83	こうがい	8	〃
	60D 86	髪飾	1	〃
	60D 142	裁断帳	1	〃
	60D 43	くけ台	1	〃
	60D 137	柄物掛	1	堀内道彦（問御所）
	60D 125	電気ごて	1	〃
1・b 食	60D 57	酒びん	2	上野千鶴子（若穂）
	60D 61	ベンケイ	1	〃
	60D 71	石臼	2	〃
	60D 75	徳利	8	〃

	60D 76	そばちょこ	5	上野千鶴子(若穂)
	60D 84	箱 膳	2	"
	60D 87	飯 梶	4	"
	60D 88	汁 梶	6	"
	60D 89	坪 梶(ふた)	10	"
	60D 90	平 梶(ふた)	1	"
	60D 91	汁 梶(ふた)	2	"
	60D 95	銘々皿	9	"
	60D 130	湯飲茶椀	2	堀内道彦(問御所)
	60D 131	コーヒー・カップ	3	"
	60D 132	とり皿	15	"
	60D 133	ちょこ	5	"
	60D 134	浅 鉢	2	"
	60D 135	徳 利	4	"
1・c 住	60D 56	ランプ	1	上野千鶴子(若穂)
	60D 117	ぶらちょうちん	3	堀内道彦(問御所)
	60D 118	弓張ちょうちん	1	"
	60D 120	あんどん	1	"
	60D 123	火 鉢	2	"
	60D 119	戸 棚	1	"
	60D 115	タンス	2	"
	60D 138	旅行カバン	1	"
	60D 127	レコード収納棚	1	"
	60D 47	梯 子	1	上野千鶴子(若穂)
	60D 62	踏 台	1	"
2・a 農耕	60D 66	細 鋤	1	"
	60D 70	風呂鋤	1	"
	60D 65	じょれん	2	"
	60D 49	麦のくればたき	2	"
	60D 45	麦の土入れ	1	"
	60D 34	筋付鎌	1	"
	60D 68	竹 簗	1	"
	60D 42	ガンゾメ	1	"
	60D 46	田 車	1	"
	60D 36	千歯こき	2	"
	60D 37	豆はたき	1	"
	60D 39	横丁杵	3	"
	60D 73	土摺臼把手	1	"
2・b 山樵	60D 41	ト チ	2	"
2・c 養蚕	60D 52	桑こき台	3	"
	60D 40	桑切り板	2	"
	60D 50	スクラ折り器	2	"
	60D 74	蚕室暖房用火桶	1	"
	60D 51	豆板削り機	1	"
2・d 整糸・染織	60D 54	綿縫り機	1	"
	60D 64	小 桟	2	"
	60D 72	経 台	3	"
	60D 96	機織用具	1式	"
	60D 30	地 機	1	"
2・e 手工・諸職	60D 60	わらすぐり	1	"
	60D 55	わら打ち杵	1	"
	60D 38	俵編み機	2	"
	60D 69	俵編み用木製錘	2組	"
	60D 92	俵編み用竹鉤	1	"
	60D 33	むろし機	1	"

	60D 44	縄ない機	1	上野千鶴子（若穂）
	60D 48	ぞうり縄み台	1	"
	60D 93	石臼目立用手斧	1	"
(諸職)	60D 97	町医者用具一括（手洗い置き）	1	堀内道彦（問御所）
	60D 101	" (台ばかり)	1	"
	60D 100	" (顕微鏡)	1	"
	60D 108	" (プレパラート資料)	3箱	"
	60D 109	" (消毒器)	1	"
	60D 106	" (血圧計)	2	"
	60D 110	" (携待用血圧計)	1	"
	60D 151	" (乳鉢)	1	"
	60D 111	" (医療機器具)	1箱	"
	60D 149	" (野戦医療機器具)	1箱	"
	60D 98	" (診察ベット)	1	"
	60D 154	" (机)	1	"
	60D 136	" (椅子)	2	"
	60D 102	" (カルテ収納棚)	2	"
	60D 103	" (医療用具収納棚)	1	"
	60D 150	" (薬品棚)	1	"
	60D 105	" ()	1	"
	60D 104	" (薬調合机)	1	"
	60D 99	" (救急箱)	1	"
	60D 145	" (身体検査書)	12	"
	60D 155	" (診察用書類入)	1	"
	60D 107	" (応診用カバン)	1	"
	60D 121	" (壁掛時計)	1	"
	60D 152	" (寒暖計)	1	"
	60D 112	" (掛札「診療室」)	1	"
	60D 153	" (医療銘板)	1	"
	60D 147	" (医薬品目録)	1	"
	60D 156	" (ポスター「乳幼児の育て方」)	1	"
	60D 159	" (診断書)	14	"
3・a 運輸・通信	60D 53	もっこ	2	上野千鶴子（若穂）
	60D 67	てんびん棒	4	"
	60D 59	わら製ピン容器	1	"
4・a 交易	60D 31	棹ばかり	2	"
	32	分銅	1	"
	58	一斗丼	1	"
	60D 85	一合丼	1	"
	60D 78	そろばん	2	"
	60D 81	物差	2	"
	60D 80	古銭	77	"
	60D 157	硬貨	15	堀内道彦（問御所）
5・a 社会生活	60D 116	手榴弾消火器	1	"
6・a 信仰	60D 16	信仰関係文書	10	上野千鶴子（若穂）
	60D 141	伊勢大々神楽図	1	"
7・a 民俗知識	60D 94	もぐさ	10	"
	60D 113	写真現象用具	1式	堀内道彦（問御所）
	60D 122	柱時計	1	"
9・a 人生儀礼	60D 15	婚礼関係文書	9	上野千鶴子（若穂）

IV 博物館管理・運営

1 茶臼山自然史館建物等建設工事

(1) 建物主体

- | | |
|-----------|-------------|
| ① 建物主体工事 | 84,860,000円 |
| ② 電気工事 | 10,330,000円 |
| ③ 機械設備工事 | 24,500,000円 |
| ④ その他付帯工事 | 4,318,000円 |

(2) 展示関係工事

- | | |
|--------|-------------|
| 展示製作工事 | 55,600,000円 |
|--------|-------------|

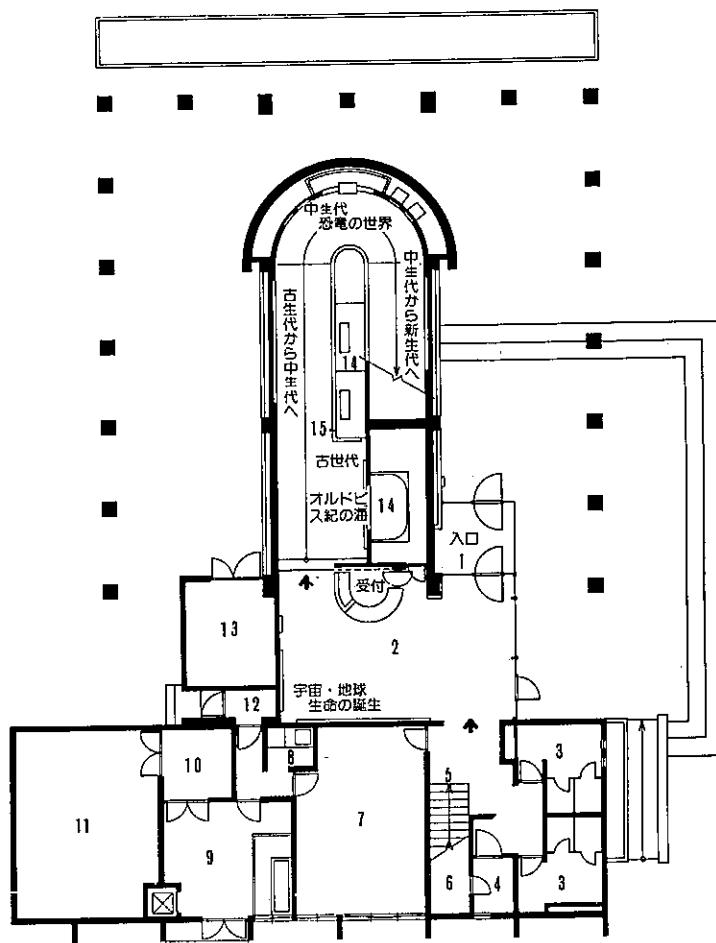
(3) 委託関係

- | | |
|-----------|-------------|
| ① 建築設計委託 | 3,000,000円 |
| ② 地盤測量〃 | 960,000円 |
| ③ 展示設計〃 | 2,000,000円 |
| ④ レプリカ製作〃 | 21,620,000円 |
| ⑤ その他委託 | 1,268,000円 |

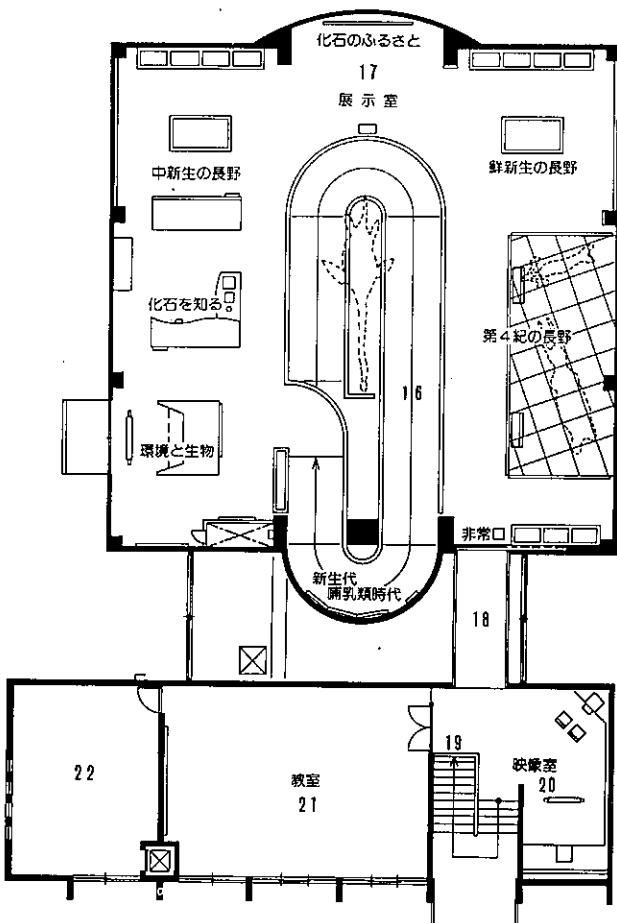
2 茶臼山自然史館建物・設備の概要

- | | |
|-----------|--|
| (1) 位 置 | 長野市篠ノ井岡田2696番地（茶臼山公園内） |
| (2) 敷 地 | 茶臼山動物園駐車場内 |
| (3) 建築面積 | 477.51m ² |
| (4) 延床面積 | 656.33m ² |
| (5) 建築構造 | 鉄筋コンクリート造・地上2階建・最高12.8m・軒高12.5m |
| (6) 主 室 | 1階 事務室・収蔵庫・機械室ほか(264.64m ²)
2階 展示室・教室・準備室・視聴覚ホールほか(391.69m ²) |
| (7) 建 物 | ① 主外装 壁：レンガタイル貼り、合板型枠、コンクリート打放し
屋根：カラー鉄板平葺
建具：アルミ製建具、スチール製建具
② 主内装 床：カーペット敷、塩ビシート
壁：プラスボードAEP、合板型枠コンクリート打放し
天井：プラスボードAEP |
| (8) 設 備 | ① 電気 受電電圧 100V 60Hz
② 防災 自動火災報知設備、非常照明設備、警報設備
③ 衛生 給排水設備、ガス設備、換気設備
④ 空調 グクト方式・ファンコイルユニット方式・冷温水発生機…1基・
冷房…90,720kcal/h・暖房…108,860kcal/h
⑤ 昇降機 小荷物用ダムウェーダー 1台
⑥ 净化槽設備 くみ取り方式 |
| (9) 工 期 | 着工 昭和59年12月 完成 昭和60年7月 |
| (10) 総事業費 | 208,456,000円 |

3 茶臼山自然史館部屋別床面積



階	No.	室名	面積m ²	階別面積m ²
1 階	1	風除室	6.36	264.64
	2	ホ一ル	51.99	
	3	便所	18.25	
	4	身障者便所	3.53	
	5	階段段	3.0	
	6	ポンプ室	3.75	
	7	事務室	28.16	
	8	湯沸室	2.47	
	9	作業室	18.0	
	10	前室	6.25	
	11	収蔵庫	32.5	
	12	通用口	6.26	
	13	機械室	11.58	
	14	展示室	21.49	
	15	スロープ	51.05	



階	No.	室名	面積m ²	階別面積m ²
2階	16	スロープ	31.78	391.69
	17	展示室	220.82	
	18	ブリッジ	7.61	
	19	階段	20.98	
	20	映像室	19.5	
	21	教室	58.5	
	22	研究室	32.5	
1階		計	656.33	

4 昭和60年度歳出予算概要

(単位千円)

内訳 節	予算額	運営費	事業費				A事業	自然史館
			善光寺信仰	台所と什器の世界	漁とくらし	各種講座		
(1)報酬	1,923	1,923						
(2)給料	19,164	19,164						
(3)職員手当等	11,694	11,215	35	100	150	150		44
(4)共済費	5,495	5,104						391
(7)賃金	13,933	9,638	285	150	180			3,680
(8)報償費	1,850	155	950	200	300	155		90
(9)旅費	927	427	150	80	100			170
(11)需用費	38,404	30,334	30	670	620	54	270	6,426
(消耗品)	(3,360)	(2,183)		(50)	(50)	(43)	(270)	(764)
(燃料費)	(5,323)	(4,456)						(867)
(食糧費)	(176)	(55)	(30)	(29)	(20)	(11)		(40)
(印刷製本費)	(5,572)	(2,772)		(600)	(550)			(1,650)
(光熱水費)	(23,303)	(20,203)						(3,100)
(修繕料)	(660)	(660)						
(医薬材料費)	(10)	(5)						(5)
(12)役務費	3,232	568	1,850	150	150			514
(13)委託料	43,734	17,696		300	400		300	25,038
(14)使用料及び賃借料	744	356		100	200	20		68
(15)工事請負費	128,550	100		150	200		1,100	127,000
(16)原材料費	280			80	200			
(18)備品購入費	12,500	1,800					2,000	8,700
(19)負担金及び交付金	145	145						
(27)公課費	9	9						
計	282,584	98,634	3,300	1,980	2,500	379	3,670	172,121

A事業 ……館内電気設備工事・浄化槽ポンプ取替工事

バッテリー触媒栓取替工事・応用器具購入

5 管理委託業務

(単位千円)

名 称	金 額		
空調設備等管理	5,450	警備業務(本館)	384
し尿浄化槽	648	" (自然史館)	120
清掃業務(本館)	5,920	庭園管理業務	420
" (自然史館)	900	プラネットリウム保守点検	770
自家用電気保安点検	379	ターボン冷凍機保守点検	500
エレベーター保守	576	展示模型映像機器	816
玄関マットレンタル	216	くん蒸処理	400
		合 計	17,499

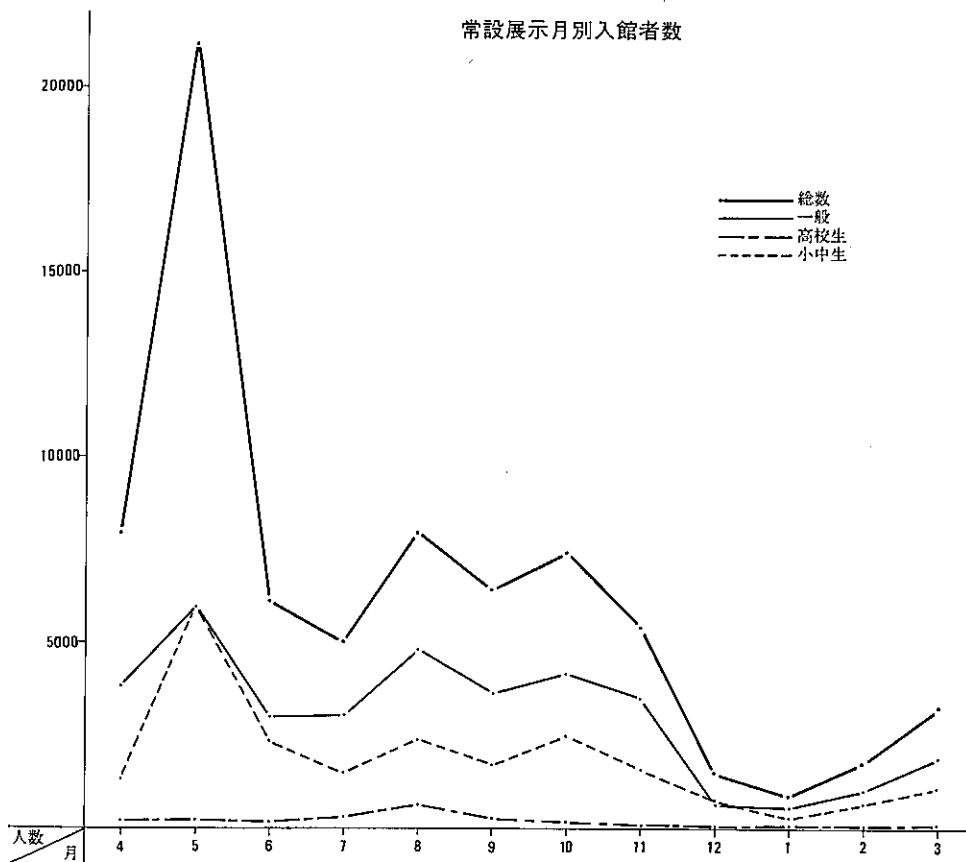
6 入館者状況

(昭和60年4月～昭和61年3月)

1) 博物館常設展示

常設展示月別入館者数

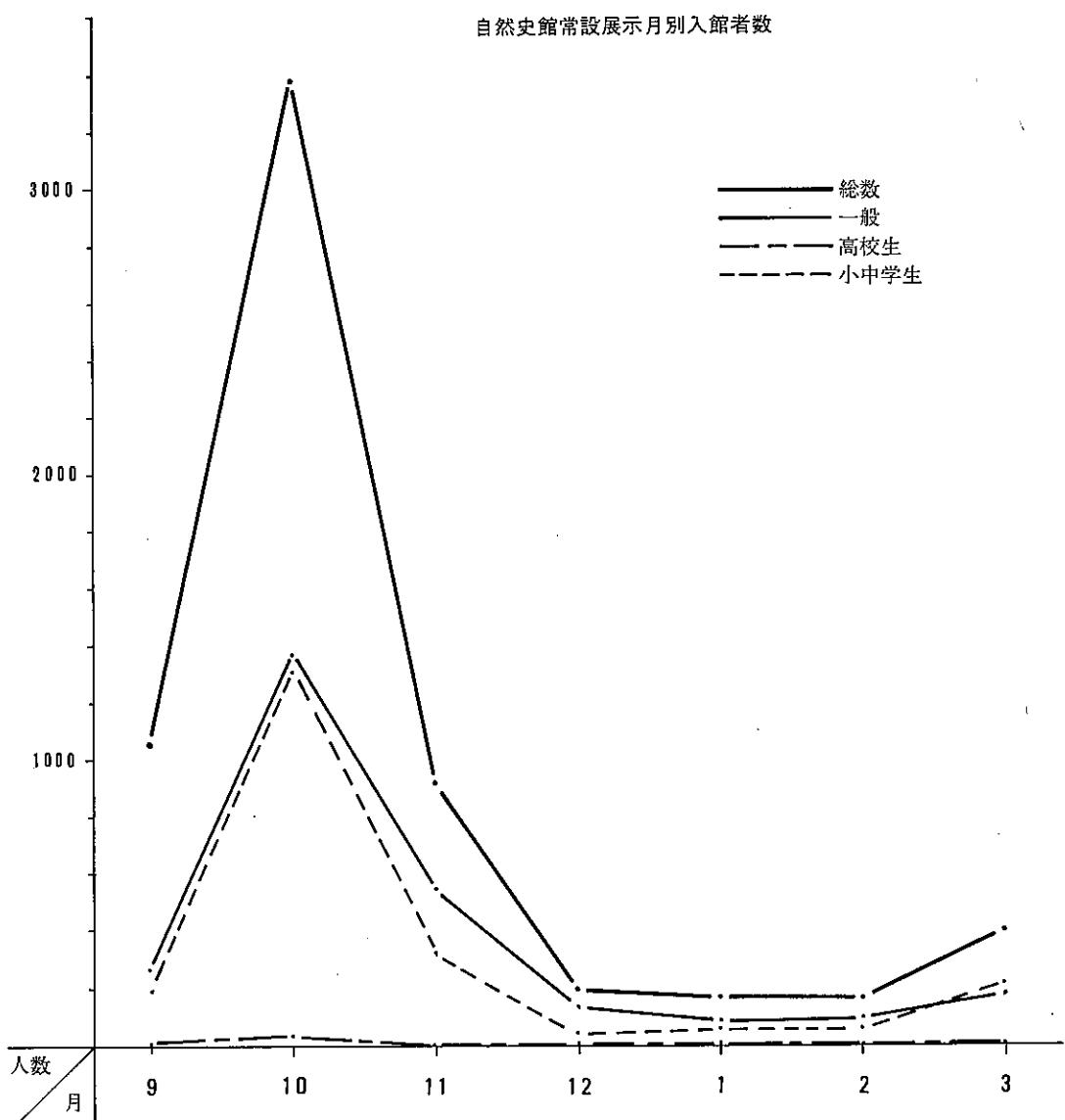
区分 月	個 人			團 体			合 計			視察等	総合計	開館 日数	一日 平均
	一 般	高 校 生	小 中 学 生	一 般	高 校 生	小 中 学 生	一 般	高 校 生	小 中 学 生				
4	2,233	69	1,073	1,506	133	256	3,739	202	1,329	174	7,893	25	316
5	4,027	118	1,439	2,893	85	5,483	6,920	203	6,922	111	21,152	27	784
6	1,913	42	649	1,045	46	1,686	2,958	88	2,335	730	6,111	26	235
7	1,564	59	462	1,475	220	1,045	3,039	279	1,507	167	4,992	26	192
8	3,739	237	2,075	1,074	397	287	4,813	634	2,362	189	7,998	27	297
9	1,994	41	876	1,599	244	864	3,593	285	1,740	752	6,370	26	245
10	1,891	33	778	2,248	123	1,679	4,139	156	2,457	628	7,380	26	284
11	1,964	44	647	1,559	54	935	3,523	98	1,582	158	5,361	26	206
12	551	27	214	63	0	527	614	27	741	90	1,472	24	61
1	546	18	272	0	0	0	546	18	272	0	836	17	49
2	976	20	315	26	0	350	1,002	20	665	54	1,741	23	76
3	1,733	95	1,028	186	0	58	1,919	95	1,086	141	3,241	26	125
計	23,131	803	9,828	13,674	1,302	13,170	36,805	2,105	22,998	3,194	74,547	299	249



2) 自然史館常設展示

常設展示月別入館者数

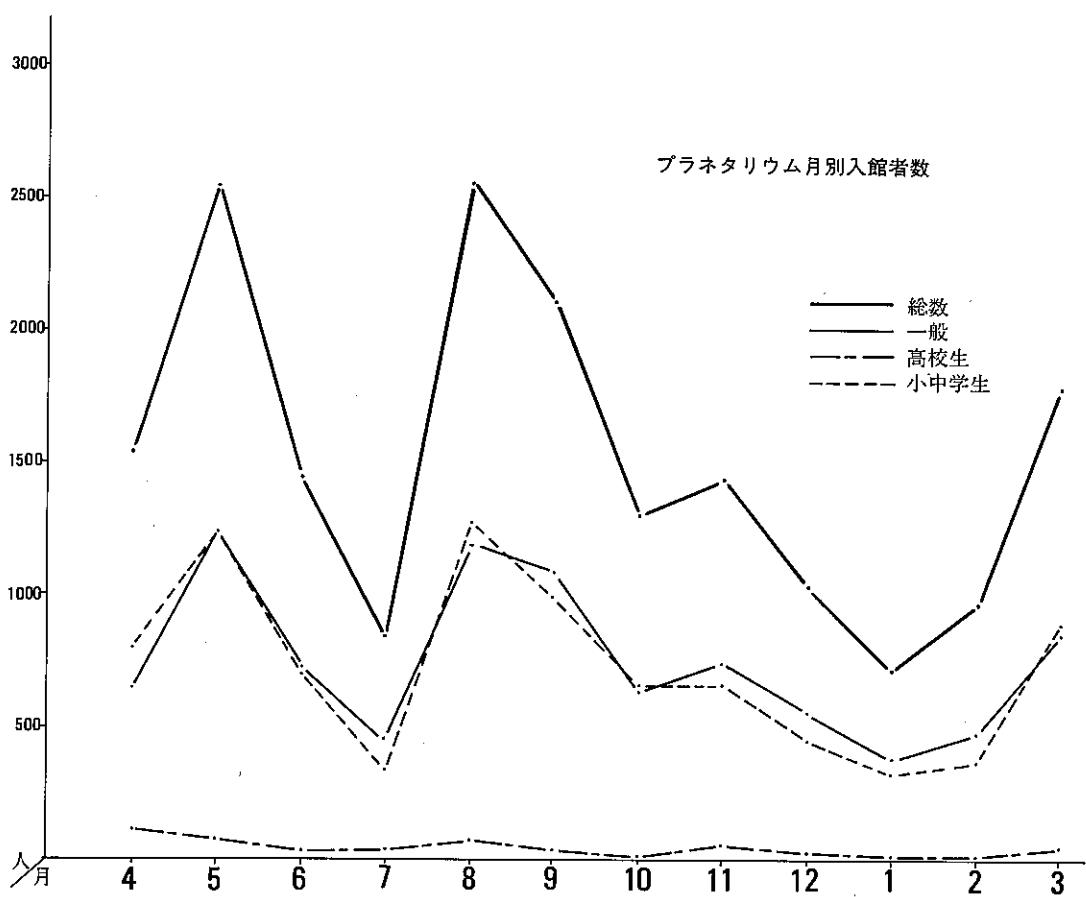
区分 月	個 人			團 体			合 計			視察等		総合計	開館 日数	一日 平均
	一 般	高 校 生	小 中 学 生	一 般	高 校 生	小 中 学 生	一 般	高 校 生	小 中 学 生	県 内	県 外			
9	235	2	176	30	0	15	265	2	191	606	0	1,064	6	177
10	1,209	24	1,056	160	0	252	1,369	24	1,308	668	4	3,373	26	130
11	500	4	323	37	0	0	537	4	323	56	2	922	26	35
12	85	1	39	57	0	0	142	1	39	11	0	193	24	8
1	83	3	46	0	0	0	83	3	46	34	0	166	23	7
2	94	0	50	0	0	0	94	0	50	21	2	167	23	7
3	178	0	212	0	0	0	178	0	212	12	2	404	26	16
計	2,384	34	1,902	284	0	267	2,668	34	2,169	1,408	10	6,289	154	41



3) 天体学習室（プラネタリウム）

プラネタリウム投影月別入館者数

月	個 人				團 体				合 計				実施回数 (回)	一回平均 (人)	
	一 般	高 校 生	小 中 学 生	合 計	一 般	高 校 生	小 中 学 生	合 計	件 数	一 般	高 校 生	小 中 学 生	合 計		
4	611	21	733	1,365	30	86	58	174	3	641	107	791	1,539	27	57
5	1,112	64	951	2,127	117	20	276	413	11	1,229	84	1,227	2,540	45	56
6	659	34	600	1,293	59	0	103	162	4	718	34	703	1,455	35	42
7	439	29	345	813	27	0	0	27	1	466	29	345	840	31	27
8	1,157	79	1,192	2,428	39	0	83	122	4	1,196	79	1,275	2,550	59	43
9	1,066	29	964	2,059	23	0	25	48	2	1,089	29	989	2,107	36	58
10	524	14	496	1,034	99	2	166	267	6	623	16	662	1,301	34	38
11	696	41	598	1,335	34	0	53	87	2	730	41	651	1,422	34	42
12	423	19	350	792	140	0	100	240	3	563	19	450	1,032	26	40
1	388	11	321	720	0	0	0	0	0	388	11	321	720	23	31
2	482	14	375	871	0	0	0	0	0	482	14	375	871	29	30
3	785	48	856	1,689	53	0	33	86	2	838	48	889	1,775	43	41
計	8,342	403	7,781	16,526	621	108	897	1,626	38	8,963	511	8,678	18,152	422	43



4) 特別企画展示・企画展示

(1) 「昭和59年度新収蔵資料展」

昭和60年7月21日～9月23日

開催日数	入館者計	1日平均
56日	15,168人	271人

(2) 第10回特別企画展「善光寺信仰」

昭和60年度4月7日～5月26日

区分	一般	高校生	小中学生	合計
個人	5,731	105	987	6,823
団体	916	94	1,612	2,622
合計	6,647	199	2,559	9,445

開催日数43日 1日平均220人

(3) 第11回企画展「台所と什器の世界」

昭和60年10月10日～11月17日

開催日数	入館者計	1日平均
33日	4,733人	143人

(4) 第12回企画展「漁とくらし」

昭和60年2月23日～3月30日

開催日数	入館者計	1日平均
31日	3,105人	100人

(5) 茶臼山自然史館開館記念特別展示「地学を進めた郷土の先覚者たち」

昭和60年9月23日～11月30日

区分	一般	高校生	小中学生	合計
個人	1,944	30	1,555	3,529
団体	227	0	267	494
合計	2,171	30	1,822	4,023

開催日数60日 1日平均67人

5) 博物館教室参加者の声

8月25日に「石器をつくろう」考古学教室を開催しましたが、その際に参加者がいろいろと感想を寄せてくださいました。

石器をつくってみて

神田 佳恵

とっても、おおきな、石から、2cmくらいのナイフをつくってみて、の感想は、いろいろあります。

とっても古い時代の人がつくったくらいだから、わたしにつくれないはずがないと思って、さんかしました。でも、じっさいにつくっていたら、そんなに、かんたんにできませんでした。古い時代の人たちの生活をあまくみすぎていたと思いました。

ぜんぜんうまくわれないため、だんだん、ナイフの形ができてきましたら、よろこびがこみあがってきました。自分自身一人でつくったものを、つかうというのも、あまりやったことがないため、ナイフをつかうときは、びくびくしました。

している人が、ぜんぜんいないから、とっても、心配でしたが、しっかりできました。映画でも、いろいろな土器や石器など、むかしの人がつくったものをみたけれど、とっても、苦ろうした様子が頭の中に、うかびあがってきました。

これからも、こういう、いろいろなこうざいでいろいろなたいけんをしてみたいです。きょうは、こんなたいけんができる、とてもよかったです。

中島 也之

やってみておもったことは、さいしょはあまりうまくできなかつたけど、やっていくうちにだんだんなれてきて、うまくできるようになつた。さいしょにきたときは、なにをやるのかなあとおもつたけど、えいがをみてから、はなしをきいて、さいしょに、ピンをわってから、そのところだけとってみろといわれたときは、あまりうまくできなくて、すぐにわれてしまつた。

せんせいにまたもらってやつたら、だんだんうまくできるようになつてきた。せんせいに、いちばんいいのがあるといわれて、とてもうれしかつたです。そのあと、ナイフをつくってみて、しんぶんしなどをきつてみたらとてもよくきて、とてもうれしかつたです。さいごに、シカのつのなどでやって、とてもたのしかつたです。

中島 丈之

きてからぼくは、うまくつくれるかなとおもいました。そしてはじめは、ビールびんを、わってためしてみました。そのあとじっさいにこくようせきでやってナイフをつくってみたらよくできました。そしてこくようせきのわりかたも、だんだんなれてうまくわれました。そしてさいごにシカのつので、こくようせきをわってみたらはじめは、あまりうまくできなかつたけどあとになつたらうまくできてよかったです。そしてこくよう石のわりかたやこつもだいたいわかりよかったです。そしてもらったこくようせきでまたつくるひまがあつたらつくりたいです。そしてこくようせきのわり方やこつなどがわかってよかったです。

小林 正光

ぼくは、せっきをつくったのはきょうではじめてです。学校のじゅぎょうでせっきをつくろうといってみんなでつくろうとおもってやつたけれどこくようせきがないからふつうのいしでともだちとつくりました。でもふつうの石ではできませんでした。でもきょうこくようせきをもらつたし、つくりかたもわかったからまたつくれてみたいとおもいます。これからは、おそわつたとうりにいろいろなものをつくれてみたいです。それとたてなみとよこなみはどうしてできるのかふしげでした。

またいろいろいえにかえつてせっきのことやたてなみとよこなみはどうしてできるかをしらべてみたいですね。

石崎 憲司

ぼくは、担任の先生に石器を作つてみろといわれてつくろうとしたけど石がかたくてわれなくてあきらめてしまつてみました。それで石器を作ろうの会があるのでいってみた。

ぼくは、いっかいつくろうとしてだめだったからすごくむずかしいと思った。先生にたてのせんとよこのなみをおそわつた。

黒よう石をわっているときは、最初は何回やってもわれなかつたがだんだんとわれ、1発でもわれるようになつた。これからは、もつとうすくわる練習をしたい。

ナイフをつくつて切れ味をためしたとき、わりばしがけずれたのでうれしかつた。他の道具を使つてやつたがなかなかむずかしい。これからもあつた黒よう石でいろいろなものを作つてみたい。

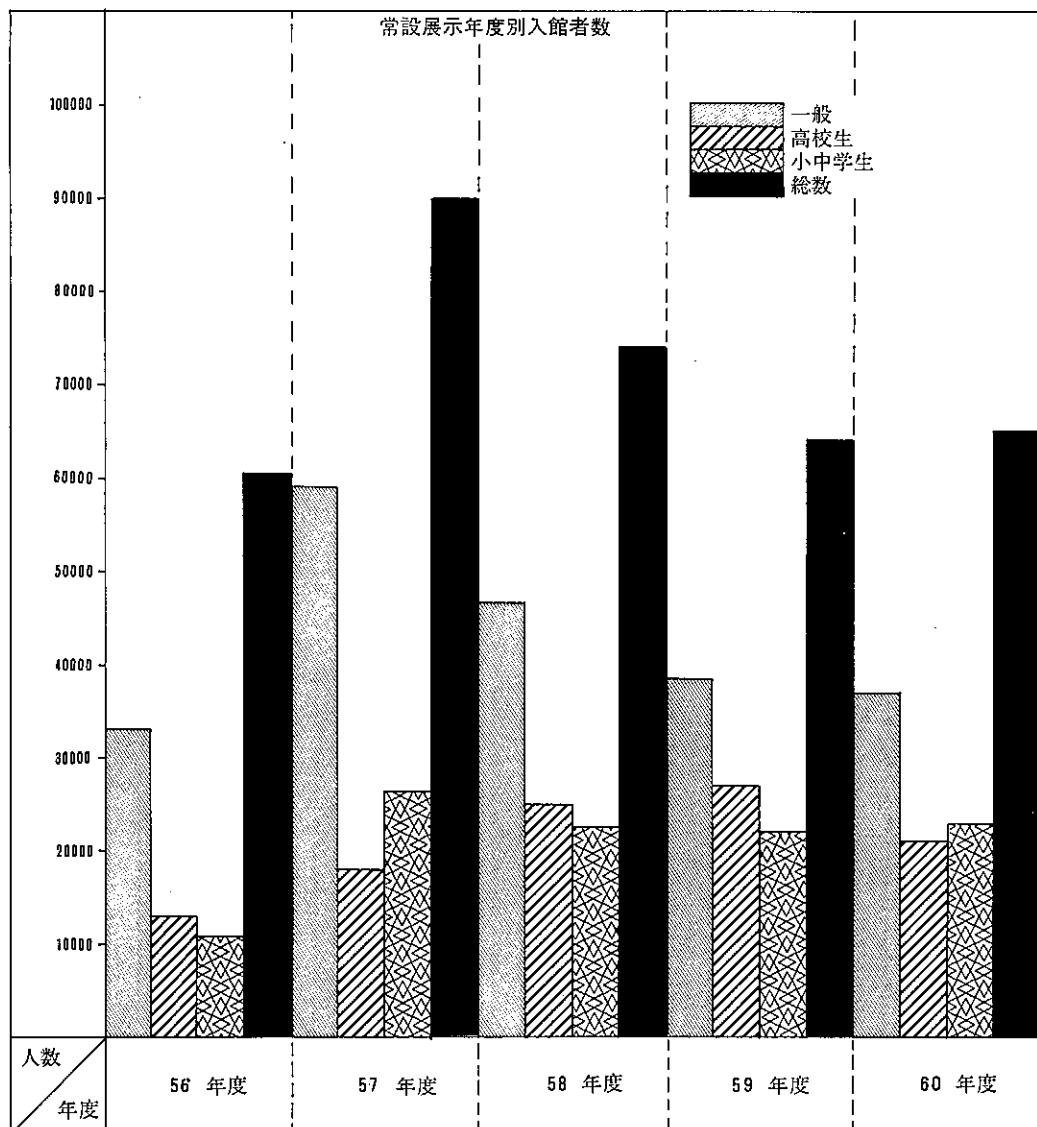
7 入館者5年間の動向

1) 常設展示

年度別入館者数

年度	区分	一般	高校生	小中学生	視察等	合計	開館日数	1日平均
56		33,181	1,302	11,952	1,316	60,766	153	397
57		59,109	1,816	26,742	2,315	89,982	295	305
58		46,481	2,540	22,339	1,495	72,855	299	247
59		38,417	2,708	21,972	851	63,948	300	213
60		36,805	2,105	22,998	3,194	65,102	299	217
計		213,993	10,471	106,003	9,171	352,653	1,346	262

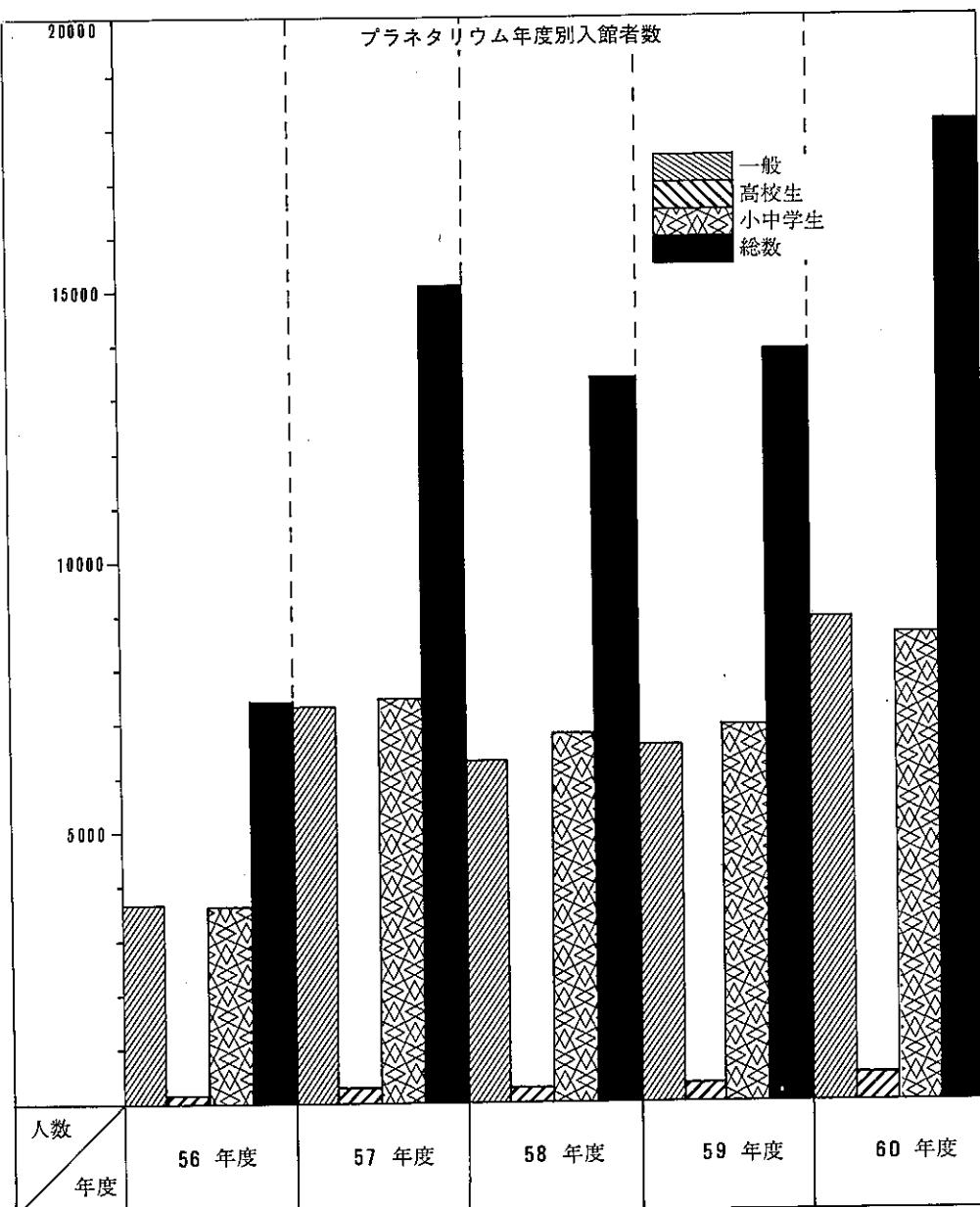
(56年度合計には13,015人の無料入館者を含む)



2) 天体学習室（プラネタリウム）

年度別入館者数

年 度	区 分	一 般	高 校 生	小 中 学 生	合 計	投 影 回 数	1 日 平 均
56		3,648	130	3,631	7,409	182	41
57		7,368	264	7,465	15,097	420	36
58		6,362	268	6,796	13,426	373	36
59		6,605	315	6,980	13,900	390	36
60		8,963	511	8,678	18,152	422	43
計		32,946	1,488	33,550	67,984	1,787	38



8 利用状況

1) 資料の館外貸出し

貸出番号	貸出先	貸出資料名	点数
60-01	須坂市立博物館	伝川柳將軍塚古墳出土珠文鏡紙焼	2点
02	市立岡谷美術考古館	壺(塙崎遺跡)、高坏(神樂橋遺跡)	2点
03	上田市立信濃国分寺資料館	松ノ山古窯出土須恵器ほか	17点
04	象山記念館	象山幼時の写本ほか	21点

2) 資料等の特別利用

利用番号	申請者名	利用資料名	点数	利用の方法	利用月日
60-01	長野工業高校建築科	博物館建物		写真撮影	5月16日
02	松代商工会議所	「石器をつくる」ビデオ		"	6月15日
03	丹青社	常設展示		"	7月6日
04	京都科学標本	ヘラジカ	1	"	7月24日
05	山田太郎(東京)	建物本体屋根		"	7月26日
06	徳日展(愛知)	常設展示		"	7月28日
07	富士市立博物館	"		"	8月1日
08	ポール・グローニア(アメリカ)	"		"	8月7日
09	伊東やよい(東京)	博物館建物		"	8月16日
10	泥昌伸(兵庫)	"		"	8月23日
11	塩入弘一(長野市)	常設展示土器		"	8月31日
12	木村利雄(東京)	博物館建物		"	9月8日
13	岩淵令治(東京)	常設展示		"	9月12日
14	関本新太郎(東京)	博物館建物		"	10月13日
15	勝田市教育委員会	常設展示		"	10月15日
16	吉田調(富山)	博物館施設		"	10月24日
27	芳川英仁(ブラジル)	煙火筒		"	10月29日
28	中川敏哉(東京)	博物館建物		"	11月12日
29	金井清隆(長野市)	"		"	11月16日
20	北村勝則(戸倉町)	常設展示		"	11月30日
21	上田多一(長野市)	常設展示		"	12月20日
22	元興寺文化財研究所	常設展示古墳時代鉄製品		"	1月9日
23	小池洋一(更埴市)	展示ケース		"	3月12日
24	穂高町郷土資料館	企画展「漁とくらし」展示		"	3月13日
25	読売新聞長野支局	" 取材		"	"
26	群馬県立歴史博物館	" 展示		"	3月20日
27	建設省千曲川工事事務所	" 漁具		"	3月23日
28	関東地方建設局	博物館建物		"	3月25日
29	柴崎高陽(上田市)	企画展「漁とくらし」展示		"	3月26日
30	トラベルメイツ(東京)	川柳將軍塚古墳出土品	12	写真撮影・掲載	2月23日

V 畠 報

1 長野市立博物館条例改正

博物館条例改正（6月26日・条例第29号）

（設置）

第2条 自然科学及び人文科学等に関する資料を収集し、保管し、及び展示して教育的配慮の下に市民の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するとともに、これらの資料に関する調査研究を行うため、博物館を長野市小島田町1414番地に設置する。

2 博物館に、分館を設置する。

3 分館の名称は、長野市立博物館茶臼山自然史館とし、長野市篠ノ井岡田2696番地に設置する。

（入館料）

第4条 博物館に入館しようとする者は、入館の際に別表第1に定める入館料（以下「入館料」という。）を納付しなければならない。

別表第1（第4条関係）

区分	長野市立博物館				長野市立博物館 茶臼山自然史館	
	常設展示		プラネタリウム		個人	団体（20人以上の場合は1人につき）
	個人	団体（20人以上の場合は1人につき）	個人	団体（20人以上の場合は1人につき）		
一般	250円	200円	150円	120円	150円	120円
高校生	100円	80円	50円	40円	50円	40円
小・中学生	50円	40円	30円	20円	30円	20円

2 長野市立博物館協議会

1) 協議会委員

（任期 昭和59年9月25日から2年間）

職名	氏名	住所	選出区分
会長	花岡直一	長野市上松二丁目20-9	
副会長	小出ふみ子	" 中御所78-1	社会教育
委員	浅川欽一	" 駒沢3333-4	学識経験
"	倉田稔	" 松代町松代1475-2	学校教育
"	小林計一郎	" 鶴賀658-2	"
"	佐藤進	" 箱清水2221	"
"	島垣	" 上松三丁目11-5	"
"	中島正美	" 上松一丁目6-39	学識経験
"	矢沢頼忠	" 松代町松代163	社会教育
"	米山一政	" 妻科750	学識経験

2) 協議会審議経過

昭和60年10月31日開催

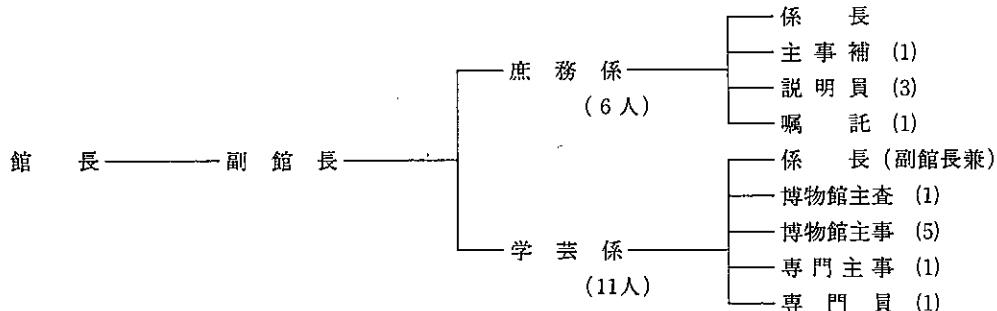
- (1)長野市立博物館運営について
- (2)自然史館開館報告について
- (3)その他

昭和61年3月13日開催

- (1)昭和60年度博物館事業報告について
- (2)昭和61年度事業計画及び予算について
- (3)その他

3 組織

1) 組織図



(昭和60年4月1日現在)

2) 職員 (18人)

館長	掛川 一夫
副館長	山口 純一
庶務係長	佐野 孝康
主事補	河口 英明
説明員	水晶 紫乃 (学芸員) 〃 相原 敬子 (〃) 〃 竹内 栄 (〃)
嘱託	水島千恵子
学芸係長	(山口 純一)
博物館主査	矢口 忠良 (学芸員、考古担当)
博物館主事	山口 明 (〃、民俗担当) 〃 大藏 満 (〃、自然担当) 〃 青木 知明 (〃、考古担当) 〃 安室 知 (〃、民俗担当) 〃 唐沢 茂 (〃、自然担当、自然史館)
専門主事	藤森 治幸 (〃、歴史担当) 〃 和田 博 (歴史担当) 〃 塩入 清嗣 (自然担当、自然史館)
専門員	西川 昭史 (自然担当)

(昭和60年4月1日現在)

VI 講演会収録

1 善光寺と庶民信仰

五来 重（大谷大学名誉教授）

善光寺と庶民信仰という題でこの特別展示のお話をせよというお話をございますが、時間も制約されておりますので、あらあらのお話を致します。この話の趣旨としましては、善光寺という庶民信仰の寺を理解するには、善光寺だけみてもちっともわからない。それでこの善光寺理解の前提という問題をまずお話し申上げます。

善光寺という寺は不思議な寺であります。まあ、地元の皆さんもそうお考えなっていると思いまます。私もさきほど善光寺にまずお参りしようと思いまして、如来さんに敬意を表さないとこの講演ができないと思ったものですから、県庁のところまで参りましたけれど、それ以上は車が近づけない。渋滞の車をみると全国からのナンバーをつけております。ということで、あらためてこの善光寺如来の信仰というものが広い範囲にわたっていることを感じた次第であります。皆さんもこの不思議な力を持つ如来様とは一体何だろう、と平生からお考えと思いますし、何かしら偉い仏様であるらしいということでありましょうけれど、やはりその由来をお知りになった上でお参り致しますと、ひとしおありがたさも増すのではないかと考えます。これは善光寺信仰を深めるためでもあり、善光寺理解のためでもあるので、そのような話を申し上げたいと思います。話を能率的にするために種本のプリントを作つておいたんすけれど、実際作つてみますととても全部お話できる量ではありません。したがつてところどころ省略しながらお話を致します。

まず善光寺という仏様を理解するには、一つは仏様そのものが一体何であるか、という仏様の問題、もう一つは、仏様は難波からということになつておりますが、一応難波からここまで運んでこられてここにおまつりした本田善光という方、そしてそれを継承されて、お仕えしてきました僧侶といいますか聖とも呼ばれておりますが、こういう人々の問題、と二つあると思います。仏様だけがありがたくて、この様になったとばかりも言えないし、本田善光さんだけの力でもない、まつられるもの、まつるもののが一体となって善光寺如来の信仰が出来上がつたと思います。

この仏さんは、一応、仏教公伝と申しまして、欽明天皇13年に百濟から日本に奉獻されました、その仏さんということになつております。しかし実際にその通りなんであろうか、という問題がまず1つあるわけです。この仏さんの形式とか印相とかと言いますといろいろ問題はありますけれども、どうして善光寺如来の縁起を作ります時に、この仏さんは、仏教が伝わった時の最初の仏さんであるということを言ったかという、その意識が問題であります。そう考えまして、庶民仏教の寺を見回してみると、実は仏教が日本に伝わる前から日本にあった仏さんだと主張される仏さんがしばしばあるのです。そう言いますと、日本書紀に欽明天皇13年、また、「上宮聖德法王帝説」にもう一つの異説がありまして、欽明天皇7年戊午の年という説もありますけれども、それをまた越えてもっと古いという伝承をもつたものがいくつかあるのです。ただ欽明天皇13年、552年というこの年号に、仏教伝来をあててしまつたものですから、それ以前の仏さんでもそう言えなくなつたと見えまして、その同じ年（欽明天皇13年）に来た仏さんであるとか、その翌年に来た仏さんであるとか、というふうに主張をしていると私は考えるのです。これは、仏教伝来を国家の正史で決めた「欽明天皇13年」に遠慮をして、仏教伝来と同じ年である、もしくはその年より1年遅れて、というような主張がなされたのだと思います。

その中で、日本書紀に仏教伝来に続いて来たと書かれておりますのは大和の吉野にある、吉野寺放光仏といわれる仏さんです。ちょうどこの百濟から仏さんを奉獻したという10月位にはもう大阪湾に流れて来た計算になる仏さんです。しかし百濟奉獻仏より古いというのは、不敬にあたると思ったんでしょうか。あるいはそれよりも日本書紀編纂委員会なるものがあったとすれば、公伝より前に出したらまずいのじゃないかという議論があって、欽明天皇13年に大阪湾へ流れて来て、翌年に引上げられたことにしたのではないかと思います。

この吉野寺の放光仏は、このとき楠の材木として流れてきたんですね。この木が梵音を発したり光を放ったりするのを翌年の5月に引きあげて仏像に彫刻したので、仏像になりましたやはり光を放ったというのです。これが吉野寺の放光仏であります。もともとは何仏さんであったか、わからないので、善光寺如来の名前も最初わからなかったと同じように、わからなかったものを、のちに阿弥陀如来ということに致しました。これが比曾寺、今世尊寺という寺の阿弥陀如来です。

そういういきさつがあったとしますと、「彦山縁起」なども、繼体天皇25年に伝來したと言っていますが、たいていの人はどうせ縁起だからウソであろう、と考えますがウソというものでも似たウソがいくつかありますと何か理由があつてウソをついたんじゃないかと考える必要があります。そのウソをつく元の理由を探し出すのが歴史という学問だと思います。全部ウソであろうと否定しまいますと、むしろ真実すらも見のがしてしまうことがあると思います。で、この繼体天皇25年ですと、ちょうどその年に北魏という国が滅びまして多くの亡命者が日本にやってきたわけです。その中に北魏の王子で坊さんになった、善正という人があったというのですが、中国で王朝が滅ぶる度にたくさんの亡命者が外に出て参ります。特に日本にやってくる。その人達が中国の文化を持って来る中に仏教文化をもって来る者もある。そのパターンにこれを入れますと、繼体天皇25年に彦山が善正によって開かれたというのも理由があることになります。善光寺如来については善光寺縁起が欽明天皇13年に奉獻された仏ということにしたけれども13年もしくはそれ以前の仏である可能性もあると思います。それを日本書紀の公伝と同時としたために奉獻仏そのものということにしてしまったのだと思います。

このことは後に、百濟奉獻の仏像と幡蓋ということで、また、お話をすることに致しまして、次の問題は、これを祀りました本田善光さんという方が一体どういう宗教的身分を持った人であるか、ということを考えておく必要があると思います。こういう妻子をもち、俗名をもつ宗教者というものは、公の国家の許可した坊さんではないですね。国家の許可した坊さんを官度僧=国家試験で得度した坊さん=と言いまして、この官度僧は、そうたくさんは作りませんし、国家がこの官度僧の衣食住をすべて支給するということになっております。したがってこれは数に限度があります。これに対して、私度僧の方は、国家の保護を受けないまま宗教や社会活動をする。仏像を勝手に作ったり、どこからか持って来て自分の家をお寺にしたてて、これを人々に拝ませたりする。あるいは、その仏さんを背負って門付けをして賽銭をもらって歩く。そのように門付けをして歩く私度僧は奈良時代には聖とか沙弥とか優婆塞とか禪師とか呼ばれます。これを禪師と呼んだのは、山に行って修行するのを禪定というので禪定の師または先輩という意味で禪師と言ったのです。そういう名前で呼ばれる人達は、仏像を持って歩いたり、庶民信仰の寺を作ったりして、その開祖になります。のちの山伏とか、六十六部というような人達は、笈の中に仏さんを入れて歩いて、それをところどころで開帳いたしまして、石の上にすえたり、木の根っここの上にすえたりして仏の由来を説き、あるいはそれに伴つていろいろの因果応報の仏教的縁起の話をします。このような宗教活動をする聖がいかに奈良時代に多かったかは、『続日本紀』を見ればおどろくほどです。

そういう時に僧尼取締まりの役人（僧綱）から目の敵にされたのが、行基という人です。行基は後になりますと、東大寺大仏の造立の資金に、聖武天皇がゆきづまって、行基に金集めを頼まなけ

ればならなくなる。——大衆から金を集めることを勧進と申しますが、それには東大寺大仏の尊い由来を説き、また、それに協賛することによってどういう功德があるかという平易な話をしながら一紙半錢の喜捨を願うのが勧進です。聖武天皇の大仏造立の詔の中には、一握りの土、一本の枝でも持つて来る者には、大仏の功德を頒けようといっています。『続日本紀』の法令ではこのような勧進や功德の説教をしてはいけないといって来たのを、行基に頼らざるを得なくなりまして、今まで非難していた行基を、突如大僧正に任じて大仏造立に協賛させるということがおこつておるわけです。そして大僧正に任せられた行基が亡くなった時には、伝記が『続日本紀』に載せられます。この時点での行基の伝ができたものですから、非常にりっぱなほめた人物になっているんです。それまでの『続日本紀』における行基の扱い方というのは、(行基を) 悪者扱いにしているわけですね。それはさきにのべたように聖であり私度僧であるからです。役人から見ればもぐりの坊さんですから、その勧進活動は戸別訪問して説教をする。これを歴門仮説と言いますが、「仮」というのは、うその説教、いつわりの説教ということです。歴門というのは一軒一軒門付けをして、そういう説教をしていく。これが聖であり私度僧であります。

本田善光という方の身分がそのような聖、私度僧であるとしますと、行基やその徒衆と同じ様な活動をしながら善光寺如来の功德を説いてあるいた、と考えてさしつかえないわけであります。要するに、誰も本田善光を見ておらない時代のことですから、これに似た最大多数の同じ様な身分、同じ様なグループに属する人々の働きの中で、そのグループの一人としての本田善光をみると、ことになります。そうすると善光寺如来の功德を説く旅を続けながら信濃の国にやって来たということになります。ところがこれは僧綱という僧尼取締り所の方からみると、あまり歓迎されない活動だつたのですね。役人は民衆のための働きとは考えておりません。特に中国でできたいいろいろの仏教上の統制をそのまま大宝律令の中の僧尼令というものに入れますと、私度僧は不法行為にあたるということだったんですけども、民衆の方からは、そういう人こそ菩薩である、あるいは化主というものである、教化の主である、民衆を教化するところの先生である、というふうに評価されます。すなわち国家とは逆に評価されたのですね。従って善光寺や本田善光をみると、その見方を変えなければいけないと思います。国家仏教からみたならば、値うちのないものが、民衆側からは、民衆の味方である、民衆のために働いて下さる仏さんであり、民衆のために働いてくれる聖である、となります。これが庶民信仰というものであります、その現代版が、御開帳中の善光寺のにぎわいになるんです。中には、にぎやかだから見物に行こうかという方もあるかもしれません、その見物されるにぎやかさっていうのは、やはり庶民信仰の總体であると私は思います。信仰とこういうと、全身全靈を打ち込んでしまう、と固く考へてしまいがちですけれど、庶民信仰というものは、そんな固いものではないのです。坊さんだったら信仰はそれこそ全身全靈ですね。それに生涯をささげるわけですから。ところが一般庶民というのは、片手間の信仰なんです。ところがこの片手間の信仰というのは大きな結果を生むのですね。一方では経済活動も労働もする。あるいは娯楽も楽しむ、家庭を楽しむ、というふうなことをしながら一方で、また、仏を信仰する。実は民衆の信仰というのはそれで十分なんです。

一方国家仏教といいますのは、鎮護国家のための仏教であり國威発揚のための仏教ですから、そのために大変な国費を使ったと思います。南都七大寺なり、十五大寺なりいわれますもので、坊さんを養ったり、建築をしたりする費用は莫大です。今は、古代寺院址が発掘されたとか大変珍しい瓦が出たとか、珍しい礎石が出た、鷗尾が出たなどと喜んでるわけですが、その費用と労力を負担した民衆が一方にあるわけです。それにもかかわらず民衆の救済には一つもなっていない。国家全体が富みかつ豊かになれば民衆全体も豊かになりますけれど、直接にはやはりつながらないんです。個人的な幸福を願うというのが目的ではなくて、鎮護国家といいまして、國を安泰にする金光明四

天王護国の寺というものが国立の国分寺であります。この場合は、護国の寺というのが主眼でありました。だから、民衆はそのような寺には入れられなかつたんですね。ただ特定のお祭の時、今なら御開帳の時ですね。そういう時なら、どんなところでも民衆を入れたという特色があります。その時には施しとして炊出しあるということがありました。これは無遮大会といつて年に数回あるわけですがそれ以上は民衆をシャットアウトする、というのが国家仏教です。そうすると民衆がいろいろ願いごとをする仏さんが必要であります。ということになりますと聖達が自宅に自分のかついで歩いた仏さんをお祭りをしたところの寺に詣ります。このような寺をその頃「道場」と言ったことが僧尼令に出ていますが、これが善光寺の発祥であると思います。麻績の里みのちでも水内の郷でも善光の家、それも陋屋の庇の間に如来を祀ったのは道場だったわけです。しかし僧尼令はこの道場さえも禁止していたのです。善光はこの禁令を犯して善光寺を建てたということはあまり知られていません。このような道場はつい最近まで山間部にあったのですが、今は大てい寺院に昇格してしまいました。これは個人の家そのものが道場であった場合もありますが、村の総道場というのもあります。親鸞聖人の言葉に、寺を作つてはならない、普通の民家にちょっと小棟を上げた程度の道場で説教をすればよろしいと『改邪抄』に言っています。それが古代から中世、近世を通じての道場というものです。浄土真宗ではあまり大きなお寺を作るのは、親鸞聖人の御意にそむくことなのです。

こういう私度僧と民間の道場というものがもとになって善光寺ができるて来たことは今まで長々と話したことから御理解願えたと思いますが、そうすれば、あまり大きな御堂は如來の御本意ではないかもしれません。

次はこの御仏がどうして難波から信濃おいでになつたかということですが、だいたい、民間の聖の行動というものは、遊行するという性質がありますので、本田善光という方が持仏と共に遊行して信濃に落付いたことはまちがいありません。のちになりますと善光は信濃出身ということになるわけですが、その間にはどうしても遊行ということを考えなければなりません。その時に勧進といつて仏さんにお金をあげたり、穀物をあげたりするところの功德をすすめながら来たにちがいありません。そういう勧進によって得られ集められたところのお金は一体どうなるかという問題もあります。中にはそのまま自分の懐に入れる悪い聖もあったかもしれません、本来は作善さきせんということを致します。これが民間仏教の特色であります。今、残っております古代中世の寺院で、国家仏教によって建てられたお寺というのは、ほとんどありませんね。法隆寺、東招提寺、東大寺ぐらいなものでしょう。そのほかはほとんど民間仏教によって作られあるいは、維持されたお寺ばかりであります。国家仏教で建てられた寺、例えば奈良の元興寺というお寺としますと、これは鎮護国家のための部分の金堂や講堂や塔などは皆廃滅してしまっています。民衆の信仰していた智光曼陀羅という、曼陀羅を拝むお堂だけが残っていて、奈良時代の元興寺というおもかげを現在に伝えていくわけです。国家的なものは、国家が弱ったりあるいはこれを護持する貴族が没落しますと、そのまま一緒に没落してしまう。しかし、民衆というものは生まれ変わり生き変わりして永遠なるものですから、こういったお寺は、また、永遠に続く。ということで、勧進によってできるお寺というものは、一方では宗教的作善ということで、仏像を作つたり、お寺を作つたり、お経を写したり、或いはそれぞれのお寺の特色のある法要と年中行事が続けられたりする。これが民間仏教の作善というものです。宗教には必ずこの作善というものがついてまわっているのです。

もう1つには、それと裏腹にした社会的作善というものがあります。宗教的作善に対してですね。仏さんや神様のためにするとともに、社会のためになることをする。仏教の社会事業といわれますがこれが聖の勧進する作善であることがわかってきました。これは聖達の説教にそういうことをすすめたことがわかっています。お経を写すことは、橋をかけることだという説教が行われた例が、

写経の奥書きから出て来たわけです。天平11年から天平勝宝4年までの間に写された紀州花園村大般若経というものがあります。河内の智識寺という民衆の作りました大仏と大伽藍がありました。ここの大仏は今の奈良の東大寺大仏よりもどうも大きかったようです。六丈あったと言いますから、五丈六尺五寸の（東大寺の）大仏よりも大きかったんですね。この寺に聖武天皇が、難波京と奈良の都との間を何回か往来をしている間に河内で休まれたことがあって、この大仏を見て「朕もかくの如き仏を作りたい」とこういうことを発願されたのがもとで東大寺大仏造立になったのです。そういう知識寺という寺や仏像やお経を作る一方では橋を作る勧進をした。ことに大般若経を作るとということは、大般若経というお経はプラジュニヤーパーラミターと言いましてバラはあちらへ、ミターは行くという意味で、向こうへ行く、向う岸に行く、これは仏教では、「彼の岸」すなわち彼岸とは悟りにたとえます。すると悟りに致るための般若。すなわち知恵ですね。したがって大般若經は知恵のお経である、ということになる、そういうお経を写すことは現実には、河の「此の岸」から河の「彼の岸」にわたることだというので橋を作る功德とおなじだということなんです。まったくこじつけなんですが、そのおかげで大河に橋がかけられる、こういう巧妙なウソと言えばウソ、すなわち「仮説」という説経によって橋ができる。その結果社会の人々がいつも船で渡ってはひっくり返っておぼれ死ぬということなくなつたのです。道が悪い時には切通しを作ることによって人や馬の疲れを助けたり、交通に関する社会的作善というのが一番多いんです。空也聖は峠を平らにしたという様なことがあって、中世までは少なくとも建設省の仕事をこの聖達がやっていましたというわけです。これは仏の功德を受けながら実は世の中のためになることをする。こういうことがいわゆる勧進による作善なのです。

それでは民衆がこれに参加するのは一体どんな理由で参加するのかといいますと、また、これが聖達の因果の説経というものでありまして、後で善光寺縁起としてしばしば出て参りますけれども犯した罪の結果、この世でも来世でも苦しむということです。全て人間というのは罪人だということはどの宗教でも言います。仏教でもいわゆる罪業ということを説きます。仏教ではまた煩惱とか無明と言いますが。具体的にいえば、病気をしたり災難に会えばそれはあなたの今世が前世に犯した罪の報いだと説くのです。いや私には覚えはありません、と言ったら、おまえの3代前の先祖の犯した罪の報いだ、という様なことまで言います。まあこれもウソ「仮説」かもしれませんけれど、それによってその人は罪をほろぼすための勧進に応じて寺や仏をつくり、橋をかける作善に加わります。これはその人の安心につながり、精神の安定につながるということで病気も治ります。宗教というのはそういうからくりを持っていて個人にも社会にも大きなはたらきをしているものなんですね。あんまりはじめに合理的に哲学的に考えますと、宗教というのは苦しくて息がつまりそうなものです。インテリや理性のある者からみると、3代前の先祖の罪だといわれると、それに本気になる者はバカだと考えるかもしれません。しかし本気に信じた人は幸福になるのです。これが宗教というものの構造だとおもえば気が楽になるんじゃないでしょうか。そういうウソから出たまことと言いましょうか。ウソから出た橋の例では、私は前に「高野聖」という本に書いたことがありますけれど、河内大橋というのは、智識寺大仏とそこに納める大般若經600巻を写経している間にかかつた橋で、それが河内大橋だったということは『万葉集』（巻九）の歌と詞書をみて始めてわかったのです。これによると智識寺の前に朱塗の橋があったことがわかるのでして、奈良時代に朱塗の橋があったというのは大変珍しいことなんですけれど、これは当時の大和川にかかっていた橋であることがわかります。その橋を1人の乙女が渡るを見て詠んだうた=河内大橋をひとりゆく乙女を見て詠めるうた=というのが、万葉集の巻の9にのっております。そして、まさしくこの時に、化主萬福法師という聖の勧進によって作られた橋であることが、さきにいった大般若經写経の奥書きと萬葉集をつき合わせてわかったわけです。

罪を払うために作善に賛同する。肉親の死後を安樂にするためにそれに労力を提供する。あるいは一紙半錢のお金を出すことによって罪も減ぼす、という具合に民衆の罪を減ぼすのはとても簡単なことでして、今なら10円か百円をそれに喜捨をする。ところがこれに大勢の人が集まると、それが何万円とか何億円とかになって大きな事業ができる。そのようにして集まったお金全体の事業の功德は、十円か百円しか出さなかった人も洩らすことなく全部受けられる、というのが民衆の共同体論理というものだと私は主張しております。のちになってこの論理は念佛というものと同じ様に考えられる様になります。これが融通念佛です。集団で百人なり千人なりが集まって念佛を唱えます。1人が唱えるのは10遍かもしれないけれど、全体を結集し功德を融通し合いますと何百万何億万遍にもなります。百人の人が念佛を唱えるとしまして、これを相乘的にかけ合わせる。百角形というものを書きましてその対角線を全部引きます。そうすると $100 \times 100 \times 100$ で実際百万本引けるといいます。百人の人が百遍ずつ念佛を融通したら、百万遍になるわけです。その百万遍の功德を百人が平等に全部受けられる。同じ様に、百円ずつ出したものを、集まったお金の功德全体をその集団のメンバー一人一人が受けられる、というのが融通念佛の論理です。そういうことで、わずかずつでも集団が大きければ大きいほど多くの功德が受けられる。そうすると、非常に重い罪だけれど、大きな集団の中で宗教的な喜捨をするというとどんな大きな罪でも減びてしまうというのです。1人では滅ぼせない罪が、大勢で滅ぼせる。お互いに滅ぼしあう。こういうことで、勧進の目的というのは滅罪にある、ということがわかつてきましたのであります。

この罪を減ぼすという宗教的目的のために実は、善光寺の回壇巡りというものがあったと私は考えております。いろいろ民間仏教には目的がありますけれど、国家仏教においては、お葬式の様なものもやらなかつたんですが、1人1人の死を悲しむ、あるいはその死者の靈が生前犯した罪のために、死後の苦しみを受けないようにという願いで、聖達は安心立命できる様な葬送の儀礼をつくりまして、そしてお葬式をするということになります。民間寺院で現在お葬式をしないというお寺はないという理由はこの聖の崇高な宗教的救済の伝統を継承したものにほかならないのです。ところが1人1人の死の問題を解決していくばかりではなく、生きている間に安心したいというためには「逆修」という方法を考え出したのです。

今でも浄土真宗では、“おかみそり”ということがありまして、帰敬式ともいっています。多くこれは本山において行いますけれど、このおかみそりというのは頭を剃ってもらうという意味です。頭を剃ってもらうということによって仏道に入る形をとります。そうすると俗人としてはそこで死ぬと同時に坊さんとして生まれかわる。死ないと俗人の時のすべての罪がとれませんので、全ての罪を払ってしまうために得度の形をとる。得度するということは「棄恩入無為」ということで一度死ぬということですね。日本人は死ぬことによって全ての罪が減びるというのを「死んでおわびを致します」という表現をする。これで全て決済がつく様に考えております。そのとき戒名というものをもらいます。我々は普通死んだ時戒名をあわててもらう。というのが一般的な風習になってしまいましたけれど、本来は、生きている間に全部自分の罪を減ぼしてしまって生まれかわりをする、再生という信仰が、日本人の間にはあったと推定されます。そうでないと逆修とか入道とか阿弥陀というのは説明ができないわけです。実際に死んでしまったのでは、もとも子もないから儀式で死んだことにする。これが得度であり入道である。歴史上の人物で入道をした人はだいぶありますね。信玄にしても謙信にしても入道をしてそして戒名で呼ばれる。そうなりますと今度は罪業の報いによる病気や不幸はなくなりますから、武将の場合は困ったことに、武運長久になるものですから尚勇ましくなって、ますます戦争を続けるということになります。一度死んで罪を減ぼすことによって、健康で幸福な第2の人生が出来あがる。というのが逆修というものであります。

そこで善光寺で聖が考案した簡易な逆修が恐らく回壇巡りであろうと私は推定しております。古

代寺院では、善光寺に似た寺がたくさんあるのですが、^{たい ま でら}^{かいこう}当麻寺の場合、回壇巡りはありませんで、^{ねりく よう}迎講というものがあります。これが逆修として当麻寺の、練供養と言います。毎年5月14日に行われていますが大和全体のお祭りといわれて、この日には当麻寺に関係のない人々でも仕事を休む。当麻の“れんどう”（練道）といいます。“れんどう”「お練り」という言葉を“れんぞ”と言って仕事を休むことにしていました。この“おねり”というのは婆娑堂というものから、橋がかりがずっと本堂の曼陀羅堂までかかります。ここに有名な中将姫の当麻曼陀羅というものがまつられています。“おねり”をして婆娑堂から曼陀羅堂へ入りますと、この中は浄土での世ですから、ここで一旦死んだことになる。そしてここでまた生まれかわりの儀式をして成仏して仏さんになり、また橋がかりを渡って婆娑堂へ戻って来る。ここで再生して健康で幸福な余生を送るというわけです。この様な儀式をするのが迎講というものです。後になって迎講は死んだ時に阿弥陀さんが迎えに来る儀式だということになりました。しかし今のこっている迎講というものは自分の自由意志で参加してそこで生まれ変わりの儀式をして、ここで十念の念仏を授かるものばかりです。この十念というのは善光寺の“おあさじ”（御朝事）に念仏を10回唱えることと同じことですから、善光寺のお十念というものも回壇巡りの途中、または出来たときに授かったものと考えられます。伊那の座光寺の方ではこれに似たことを行っていて、回壇の中で御印文を押します。

これに対して四国の善通寺の方では、真言宗のやり方で、回壇のちょうど真中に広間がありまして、そこで儀式があって、即身成仏の儀式ということをして出て来るんです。まあ善光寺の方では、善光（よしみつ）の寺、善通寺は善通（よしみち）の寺といって非常に似ているんですが、こちらにももとは、阿弥陀さんを祀ってあった証拠もあるのですが、今は誕生院と申しまして、弘法大師の生まれたところである。そしてこの善通という人は、弘法大師のお父さんであるということになっております。善通寺には善光寺とおなじ白鳳の瓦が出ており、また白鳳の頃の仏頭が出ていて、善光寺とよく似た歴史や伽藍配置が推定できるのです。のちに、弘法大師の誕生院にしたものですから真言宗の儀式では、生まれ変わりの儀式をする。これは回壇巡りの地下をぐるっと回ってくる途中の広間で行うということになりましたが、同じ様なことが、善光寺の回壇巡りにも考えられるだろと私は思っております。善光寺如来がもと祀られていた四天王寺には、今のところ回壇巡り跡はないのですけれど、当麻寺の曼陀羅堂にあたる六時念佛堂の前に池があり、橋かかりに相当する石舞台がありますから、ここに当麻寺とおなじ迎講の逆修があったことが考えられます。

善光寺の場合は、今ちょうど展示されている一遍聖絵の一遍聖人の絵伝の中に出てくる一番古い善光寺の伽藍配置図からみまして、東門、東大門から入って、ここに五重の塔があります。そして如来堂は東向きで東から入る様になっております。しかもこの母屋の屋根は南北で屋根が、十文字になっているという、今はちょっと考えられない様な形です。今の長野駅の駅舎の屋根がこれを真似たとみて十字棟をとっております。現在の善光寺本堂は南向で南から入り、撞木形の棟ですから、元来は東向で東から入るということは東門を非常に大事にしたということで、これには、また、別の理由が実はあるのです。

ここでついでながら古代寺院と民間寺院の関係について話をしてしまっておきますと、不思議に古代寺院というものは飛鳥白鳳の瓦が出ます。善光寺でも旧本堂（如来堂）の跡と現本堂の北側との両方から白鳳の瓦が出ると言われておりますが、これは、全面的な発掘をしないと何も言えないことですが、白鳳の瓦が出ることは事実ですね。そうしますと白鳳の伽藍配置は南北に配列されます。南面の金堂と講堂があってそして塔があって南大門があるという形ですから、善光寺でも南北に伽藍配置の白鳳の寺院が想定されます。そして恐らく奈良時代位に善光寺如来の如来堂ができる、これが庶民信仰になる。しかし白鳳の古代寺院はかつての豪族のお寺ですね。これが果たして秦氏であるのか、その他の帰化人であるのかわかりませんけれど、とにかくそういう奈良時代以前

の伽藍が存在し、奈良時代後半になりますとそれと交錯する形で庶民信仰の寺院ができたと考えられます。これは東側から入る様になった。当麻寺もおなじで、現在古代寺院の金堂本尊は白鳳の本尊さんなのです。この白鳳の本尊は塑像と言いまして泥で作った弥勒如来というものです。弥勒というのは、普通は菩薩なんですが、56億7千年の修行の末、やがて如来になる、その如来がここにまつられている。がこの場合、理由を話すと大変長くなるので申し上げませんが、弥勒如来の塑像がありそして金堂と講堂があって、東塔と西塔をいう奈良時代の塔がまだ残っている。まれなことですね。そして南大門があるはずなんですが、このお寺は不思議なことに南大門が山にぶつかってしましますので、一体南大門をどう処理しておったかということが、我々の疑問になっております。そこへ、奈良時代に曼陀羅堂、いわゆる中将姫で有名な当麻曼陀羅をおさめたお堂が出来ました。蓮の糸で織ったという伝説の曼陀羅です。それは庶民信仰の対象になったもので東向、これを東からおがむとその上に二上山があって、二上山も一緒におがむ。このおがまれる二上山は飛鳥以前からの山岳信仰の山ですけれども、とにかく曼陀羅堂は庶民信仰として善光寺如来堂に匹敵するものです。これが、かつての豪族の白鳳仏の古代仏教寺院の南北配置と十字交叉する形で東面の庶民信仰寺院ができた点で、まったく共通するのです。

善通寺の方になると、昭和48、49年位の発掘で、白鳳の瓦と白鳳の楚石が出て参りました。もっともその瓦も楚石も知っている人は知っていたんですが、こっそり持って帰って自分のところに収蔵しておった人達が、講堂などの発掘が行われました機会に皆提出をしました。かなりの数の白鳳瓦、白鳳楚石で、白鳳の楚石は、この金堂の回りの土壇の石垣にも使っておりまして、現在ここにおいてになりますと、四面に8枚程の楚石を見ることができます。この寺には本堂と金堂があつて、金堂の本尊さんは薬師如来ですけど、古代仏教では薬師如来と弥勒如来というのは同体に扱われたものです。その意味も時間があれば、お話申し上げるといいんですけど、理由があります薬師と弥勒とがほぼ同じ仏として信仰されたのです。そして焼跡から掘り出された仏頭を白鳳寺院であることがわかってから急いで出して宝物館に陳列することになりました。去年、弘法大師の1100年御遠忌ということがあって放送やシンポジウムで二回ここを訪れてこの仏頭が白鳳時代の塑像薬師如來のものである確信を得ました。このように大きな塑像は飛鳥か白鳳にしかないもので、当麻寺の塑像弥勒如来に匹敵するものです。ことによると善光寺の白鳳の前身寺院の本尊も塑像だったかもしれません。これは大変に珍しいことがわかったわけで、善通寺の本堂はこれと交錯する庶民信仰のお寺であったわけです。善通寺は弘法大師の生まれたところといいながら、いろいろの阿弥陀信仰の痕跡がのこっている。この本堂は東向で東門を大事にする。これを赤門というのも善光寺と共に通する。しかも善光寺と同じ様に回壇巡りがある。これは現在の誕生院になる前からだといっています。善光寺如来は恐らくもと四天王寺にあったのだろうと私は推定をしておりますけれど、この寺の庶民信仰は西門に集中しています。これも古代寺院の南北軸と交叉する東西軸を考えなければなりません。善光寺如来は四天王寺から聖によって運ばれたが、もとあった場所は西門あたりのお堂であったということが、実は江戸時代に出来た「四天王寺法事記」というものの中に出でています。そして今の六時念佛堂というのは実際はそこにあったのです。いわゆる四天王寺様式という大変に整った講堂・金堂・五重塔・南大門という国家仏教の伽藍にはほとんどお参りの人は入らないで、お参りは全部念佛堂の方です。有名な彼岸のお参りも皆こちらの方で供養が行われ何万、何十万の人がおしよせる。あるいは六時念佛堂の前の石舞台で聖靈会舞楽が行われる。善光寺の方でも、一遍の遊行上人絵に出てきますのは、如来堂のすぐ前に石舞台があります。ここで踊り念佛をしているのが描かれております。このように庶民信仰の構造に皆共通性がある。つまり、四天王寺ではもとは西門を中心に東西に庶民信仰の対象があり、国家仏教の四天王寺は南北につながっていて庶民は近付かなかったという図式が示されるわけです。

それから、朝護孫子寺という寺も四天王寺の下に入れときましたが、平安時代の絵巻物で大変有名な「信貴山縁起」というものに出てくる寺です。この寺にも回壇巡りがあります。このいわれはお寺の方でもわからなくなっていますけれど、回壇巡りという点、しかもこの信貴山の寺を作った坊さんは信濃の聖であることから善光寺と共通性があったかもしれません。この信濃聖は平安時代の説話集『宇治拾遺物語』に出て参ります。命蓮という聖ですが、この命蓮聖もやはり善光寺に関係のある人だったかもしれません。正式には朝護孫子寺で朝廷のためにその永続を祈ったのではないかと考えられますが、そのような古代寺院には同時に庶民信仰の寺や堂がついてまわる。一方では国家寺院としての役目も果たしながら、一方では庶民のための願いをかなえる、という図式が、こういう寺の配置になっていると思います。しかも現在までのこったのは庶民信仰だけというわけです。そこでどうして東西という線が重要視されるかという点に移っていきたいと思いますが、それは、百濟奉獻の仏像と幡蓋ということでお話をすることになります。

善光寺縁起はすでに平安時代の『扶桑略記』に載ったのを見ても三国伝来の善光寺如来は仏教伝来のとき、百濟から渡った仏ということになっています。しかしその証明はできませんから、ことによるとその後で渡った仏かもしれないけれども、ことによるとそれより古く渡った仏かもしれない。仏教伝来のときの仏だということが証明されれば文句はありませんが多少でも疑いがあることになりますいろいろのケースを考えなければなりません。先ほど申しました様に仏教伝来の時の仏さんよりも古い仏さんもありうるわけです。むしろそういう意味では民衆の拝む仏というものは国家仏教より古いことがあると私は考えています。その他の現象でもそうですが、民衆の間の文化の往来があって、のちには国家間の文化の受け渡しになる。私はいつも日中国交というものを例にひくんですが、日中国交というものは、第2次世界大戦がすんで10年位たつたら民間の交流が始まっているわけです。それは会社同志、また、共産党が窓口になつたりして交流が回復しているんですが、尚20年もたたないと国家同志の国交が開かれないと。このように民衆の方の仏教受容の方が早くて、それを見ていた国家が重い腰を上げる。まあ民衆があんなに信仰するなら朝廷も仏教を受容しようという進歩的ジェスチャーをする貴族や文化人が出てくる。それは政争の具にもなったりしながら進歩派の分がよいと国家的な仏教の受容、いわゆる仏教公伝というものになるという順序が想定される。そうすると庶民信仰の対象となる善光寺如来も、仏教公伝以前のものである可能性がある。中国に仏教が公伝したのはAD67年ですから、後漢の明帝の時に蔡愔が西域から加葉摩騰と竺法蘭という2人の坊さんをつれて來た。白い馬にお経をつんでやってきたので白馬寺という寺が始めて長安にできた。これが、公伝ですね。ところが、漢書の方にはすでに確かAD122年だったと思いますが、張騫りょうけんという人が匈奴を攻めるために大月氏と交通しました時に「金人を得て帰る」というのは、東洋史学者は仏像だと言っております。実際にはそのころは西域では仏教は全盛ですから、商人の往来でプライベートにはいくらでも渡っているんです。1世紀に中国に渡りました仏教が、それから3世紀になりますと高句麗に入り、それからしばらくして新羅、百濟に入る。これが3世紀から4世紀のことです。そうしますとそれから6世紀半ばまで2,300年間も、一衣帶水の対馬海峡を隔てて仏教が入ってこないと考える方が非常識なんです。それをうけ容れたのは民間宗教者のなかでも山岳宗教者であったろうと思われ、修驗道の山には仏教伝来以前の開創を主張するものが非常に多い。そういう中に善光寺さんもあったと考えますと、百濟奉獻の仏像がそのまま現在の善光寺如来でなくてもよいわけです。いやそれより功德なり、庶民への利益や宗教的意味はすぐれていると思います。

しかしこれは証明できないからしばらくおくとして、この仏教公伝の日本書紀の文句は「釈迦仏の金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷を獻る」とありますと、これははっきりと百濟聖明王の使のものが船にのせてもって來たことを意味するわけです。ところが『扶桑略記』という本は、いろ

いろいろの官製の歴史を民衆の側からみた伝承のようなものを仏教の記事に書き添えているのです。これは平安の末頃に古代以来の仏教に関する記録や伝承をずっとまとめた本なんですが、その中に引用された善光寺縁起がありまして、これは、「或記に云う」と「善光寺縁起に云う」のと2つの伝承をのせております。「或記に云う」というのは、「信濃国善光寺阿弥陀仏像は則ち此の仏なり」ということで、仏教伝来の時の仏さんが信濃善光寺の仏さんである、それも推古天皇の時に、秦巨勢ハクコセイ大夫によってここにおくられた、とこういうを書いています。「善光寺縁起に云う」の方になりますと、欽明天皇13年に「百濟国より阿弥陀三尊、浪に浮かんで來り」とあり、これは解釈のしようによりますと、船だって浪に浮かんでいるんだから舟にのせてきたのを浪に浮かんでといったってさしつかえない様ですけれど、わざわざ舟といわずに浪に浮かんでといったのは、いわゆる漂着渡来仏という1つの信仰をあらわしているのだろうと私は考えていいと思います。

そうすると、日本書紀が吉野寺縁起というものを引いて、欽明天皇14年の5月に吉野の放光仏は河内国の泉郡の海岸に流れ寄ってきた材木をあげて、仏像に作ったものだとあります、やはり『扶桑略記』によりますと、その前年から土佐のあたりに材木は流れきていたのだといい、それがしだいに大阪湾に入ってきたのが吉野寺放光仏だということで、やはり漂着仏としております。これは欽明天皇14年の吉野寺放光仏でも欽明天皇13年にはすでに日本へ來ていたといおうとしたものにほかならないのです。日本書紀に遠慮して14年としたのです。この漂着仏という伝承は善光寺如来を考える上できわめて重要です。『扶桑略記』に引く善光寺縁起の「浪に浮かんで來り」という文章は從来注意する者はありませんでしたが、漂着渡来仏というものは日本人の信仰の核心にかかわるものですが、実は日本では海のかなたから渡ってきた神、あるいは流れ寄って来た仏は「寄り来る神」の信仰として特別に功德の多いもの、という信仰があったのです。このことはこの2つの例だけでも知ることができます。

不思議なことに弥勒さんと薬師さんという仏は、海の向こうから流れ寄ってきたという伝承が大変多いのです。薬師如来の場合には、プリントにA・B・CのCにあげました、「生身の如来」という、人間と同じ体温のある仏さん、従って我々の願いも直接耳できいてくださって、かなえて下さる、単なる木や金物の偶像ではなくて、本当に生きた血のかよった仏さんであると信じられたので、善光寺如来はその生身の如来信仰であります。したがってこの博物館に今陳列している金物として信仰されているのではなくて、それは1つのシンボルにすぎないもので、本当の善光寺如来というのは、姿は見えないけれども生きて私どもを見守っていて、いつでも願うことをかなえて下さるというのです。こういう生身の如来信仰は寄り来る仏信仰であり、庶民信仰の本質であります。

東大寺の二月堂十一面觀音というのもやはり生身の如来の信仰があります、これは大仏開眼の時にやはり大阪湾に流れよって来たところの仏である。その流れ寄るのにこの仏さんは、おしき(折敷)の上に乗ってきたとこういいます。そのくらい小さな仏で「小觀音さま」といい、誰も姿を見たことはありません。このおしきというのは、神様にあげる小さなお膳があります、うすい白木の板ですね。これは觀音と神様の区別がないことをしめしており神様にあげるおしきに乗るのは神様のシンボルです。それに「おみたまさま」というお餅と「かみたまめし」というごはんをのせてあげます。東大寺の二月堂の小觀音さまは、これにのってきたといいます。大変に小さな仏像ではありますが、私は前に書きましたように、小觀音をまつった実忠和尚と大仏をつくった良弁僧正は張合った仲ですから、良弁は実忠の小觀音に対抗するために特別大きな大仏をつくるよう聖武天皇にけしかけたにちがいありません。一寸法師のように小さな小觀音は小さいことと漂着仏として御利益があり生きた人肌の觀音と信じられたのです。今だにこの仏を本尊とする“お水取り”と俗称する大変に珍しい行事が東大寺で行われています。正しくは東大寺二月堂修二会というのですが、俗称「お水取り」と言います。正月の若水をくむ行事で、この水によってすべての病気が治る。

少彦名命や薬師とおなじ功德です。お水取りは、現在では新暦でだんだん日が移って三月十二日の日になっておりますけれど、若狭井という戸からくみあげたお水を須弥壇の下に置いときまして、今でも重病で助からないかもしないという病人のために、このお水をいただきにくる人は絶えないので。そのために1人の係の人が二月堂についているくらいでこの信仰というものは、やはり漂着渡来仏の信仰がもとで、それは人の作った仏ではないということ、そしておしきにのせられたように若水で病気を治す神様のはたらきを持っているという二つの信仰によると思います。

そうしますと善光寺如来に引き合わせて考えていくと、善光寺如来の功德というものの中には、純粹な仏教としてではなくに、日本人のもっている神によせる信仰が仏教と混然一体となってそこにあるといわなければなりません。そう考えませんと、普通の仏像に対する仏教信仰では考えられない善光寺信仰の説明ができないのです。そうすると善光寺如来が浪にうかんで流れて来たという解釈は軽々と見のがせないのでして、これを欽明天皇13年としたのは、日本で一番古い仏ということを、仏教公伝の年にかけたにすぎません。以上が浪に浮かんで来たという縁起の私の解釈であります。

それからもう一つ浅草の觀音さんの縁起では、海に浮かんで流れて来たというと、小さくとも金仏ですから、沈んでしまう。おしきにのせて、と言わないといけないのですが、これは海の底に沈んでいて、それを“桧熊の浜成、竹成”という兄弟の獵師が網でもって引きあげたという縁起になっているのです。これでも漂着渡来仏に入るんですね。それから因幡薬師という、これは京都で平安から中世に一番信仰のあった薬師なんですが、どういうわけか近世に入ってから信仰が衰えて今では京都の真中のビルの間にほとんど埋もれた状態であります。これは善光寺とちがってその功德を説く人々がなくなったのが本尊信仰の衰えだと思います。本来は功德の多い仏だったんですけど、因幡の海岸の漂着渡来仏ですから、先程申し上げました様に薬師仏そのものの功德というものと、それを祀り、功德をとく宗教者の力というものが両方相またなければ、どんな功德のある仏でもその功德は發揮されません。因幡薬師の場合は宗教者の方の衰えで昔の様な信仰はなくなったのですけれど、京都隨一の靈仏として拝まれて参りました。それも因幡の国の賀露という鳥取の海岸に寄つて来た仏である。このような仏にはよく同木信仰というものがあり一本の木から三体とったという様な仏の信仰があります。いくつかの因幡薬師の同仏信仰があります。

それから一畠薬師というのも西日本で随一の薬師信仰です。長野県あたりでは、お参りになる方は少ないかもしれません、関西以西でしたら大変多いのです。それは出雲の今の平田という市に入っておりますが、島根半島の真中位です。そこの山の頂上に祀られた臨済宗一畠寺の薬師さんです。この薬師さんはすぐ下の海岸に赤浦というところがあり、そこに流れ寄つて来た薬師仏さんであるといいます。この漂着仏の信仰は次のような信仰形式ができるとその功德をずっと持ち続けるものと思われます。これは眼の薬師ですが、眼の悪い人は、戦前までは籠堂があり、今でも二階作りのコンクリートの籠堂がありますけれど、ここへおこもりをして、一ヵ月なり半年なり、一年なりおこもりをします。そして毎日海岸まで降りていって海藻を拾うのです。最近私もこの海岸まで下りて見ましたが、往復一時間位と聞いて、実際に歩いてみると、往復3時間位かかります。眼の悪い方がそこまで降りて行って赤浦海岸のワカメを拾つてこの薬師さんに供えるのです。今ではこの意味が坊さんにもわからなくなつて、臨済宗で立派な禪僧が威張つておるのでしょうか、この海藻を大分虐待しています。海藻をあげると勾欄や格子戸が汚くなると思ったか外にあげさせたり縁の下に掛けさせております。しかし海から漂着した庶民信仰の仏には本当はこれが一番喜ばれる御御供だったのです。

こういう庶民信仰というのは実は、プリントのa・b・c・dの中のa・bの方（a=少彦名神と常世、b=常世と薬師如来）の方に話を持ってゆけばわかるわけです。即ち日本人は、海の彼方

に仏教の渡る以前から理想郷があると信じておきました。それは常世に神の世界がありまして本来は靈の世界ですね、先に死んだ先祖の靈が常世にとどまつていて子孫が病気や疫病や飢饉で非常に困った時に、その靈が常世から助けにくるという信仰です。これは薬師信仰、弥勒信仰に代つてゆきますが、後に中世になり觀音信仰が栄えてくると、南の方にその常世があるという考え方へ變ります。觀音信仰では、觀音の淨土は印度の南の海の向こうにある普陀落だと説かれたためです。すなわち南方海中の普陀落世界に觀音さんの淨土があつて、觀音さんに本当に願いがあれば、その南の方の海にこぎ出して行ってその普陀落の島で觀音さんに会つて直々にお願いすればよいと考えたかどうかわかりませんが、この様なことから普陀落渡海という信仰ができました。これは平安時代から鎌倉時代、室町時代にかけてたくさんの普陀落渡海者の記録がありますし、そのための碑も各地に建つております。本当に30日分の食糧を積んで那智からこぎ出していったという人もあります。鎌倉武士の「下河辺行秀」という武士ですが、頼朝の前で巻狩の時に鹿を射そんじた恥で坊さんになり普陀落渡海した、という伝が「吾妻鏡」にのつたりします。それで常世というものが南の方にある様な考えがもたれる様になりました。この普陀落世界が南にあるという考え方へたちますと、柳田國男先生が「海上の道」というものをお書きになつて、日本人の理想世界は南にあるのは日本人が、南の方からしだいにこの島国に渡ってきたからだという発想を得たのは無理からぬことと思います。その発端は三河の伊良湖崎に島崎藤村と一緒に旅行した時に、1つの椰子の実が流れよるのを見たときだというのは、実にロマンチックです。このとき藤村は流れ寄る椰子の実1つの歌を作り、一方、柳田先生の方はこの発想を一生持ち続けるんです。

ところが一方、常世というものは東の方にあると考えたことは、垂仁天皇記に出てきます様に、伊勢の国は東の方に常世があつてその常世から流れてくる波の寄るところ、「神風の伊勢の国は常世の浪の重浪帰する國なり」といわれますから東に向う伊勢が一番いい国だ、と天照大神様がおっしゃつた、ということになります。これは日本書紀の中に出で来ます。また倭姫命世記には伊勢は「朝日の來向う國、夕日の來向う國」とあるのです。倭姫命はちょうど善光寺如來の託宣でもって本田善光が信濃にやって来たと同じ様に、天照大神の御杖代になりまして神託の命ずるところにしたがつて近畿地方から美濃あたり、西は備前あたりまで歩いて、最後に、「常世の浪、重浪寄する國、伊勢の国はかた國のうまし國なり」との神託でそこに落ちつかれた。その海岸が二見ヶ浦ですから、ちょうど東からくる太陽の登る方に理想郷がある、そういう考え方方が1つあったのです。この方が古いと思います。

このさきに庶民信仰の寺で東門というのを非常に大事にすると申しましたが、これは庶民信仰の背後には、東に理想郷がある、そこから神や仏が来る即ち漂着度來仏が来る、という観念のためと思われます。善光寺如來の場合には如來は本田善光の私宅の西庇に東向にまつられたとあるので人々は西に向いて拝むのが西方極樂淨土という考えがありますが、漂着度來仏には常世から來た信仰があつたものと思います。しかしもつとも古い常世あるいは根の國（ニライカナイ）の觀念は、方向を定めずに「海の彼方」だけであったといえる証拠もたくさんあるのです。したがつてどの方向から來る神でも「寄り来る神」（帰り来る神）であり、靈験多い漂着仏だったわけです。それを柳田國男先生は普陀落の話から南の方からというふうに考えまして、南の沖縄・琉球の方面から日本の文化が來たという仮説を立てたわけあります。とくに日本の米の文化というものが南からきた、ということを強調されたのです。しかし今いった様に常世というものが多くは東である。それで靈仏と言われるものもそこから浪によつて流れよつてきたものという信仰が多いのですが、阿弥陀如來信仰の場合は西に常世をおき、これを淨土とするようになります。たとえば四天王寺で特に西門念仏が盛んになりますが、西門は大阪湾がすぐ下まで入つていて、西はさえぎるものがない海だったからです。ここでは、彼岸の中日には入日の方向が真西に見えますから、その向こうに十万億土

の極楽世界があると観念することができました。そこで西門で念佛がさかんに行われ西門念佛堂ができました。そして彼岸の七日間の不断念佛に十二交代の番をとるために、善光寺にもあったような不断念佛衆ができたのです。平安末期になりますと、上皇から摂政関白までこの四天王寺の不断念佛衆に結番し、西門から西に向って念佛したのです。このような寺では西を聖なる方向とすることができますから、西からの渡来仏も漂着仏としての靈験信仰があたえられたわけです。そこでもうすこし日本人の「寄り来る神」(帰り来る神) 信仰をのべて、善光寺信仰の根源にあるものをおきらかにしたいと思います。

先程申しました『扶桑略起』の善光寺縁起というものには、浪に浮かんで来る、という問題と、善光寺如来は日本の全ての仏の中で一番古い仏である。すなわち本師如来であるということが眼目として書かれています。そこでここでは漂着渡来仏と「帰り来る神」の信仰についてすこしくわしくのべて、善光寺如来には先祖または祖靈の信仰があり、如來の死者の靈を救済する靈験が「帰り来る神」にあることを申したいと思います。まず帰りくる神という言葉は、古事記・日本書記に三ヶ所ばかり出てきます。その場合、多くは、1つだけ別の“依りくる”という字を書いたのがありますけれど多くは“帰りくる”となっているのです。“帰りくる”を“よりくる”と読ませるにはなにか意味があるのでないでしょうか。これは海の向こうから寄ってきた功徳の多い神というものは、実際は一度向こうに去ったのが再び帰って来る意味があるように思います。例えば少彦名神というものは、大国主命が出雲の美保の岬に立って海をながめていたときに、海の彼方から寄って来た小さな神であった。『古事記』はこれを「帰り来る神」と書いていますが、この神は『日本書紀』によると、もと熊野の岬から「常世郷」へ去った神であるという。したがって美保の岬へ来たときは「帰り来る神」だったのでして、この少彦名神のことは『古事記』と『日本書紀』を合せて解釈しないとわからないのです。海のかなたを見てたら、この海上を照らしながらより来る神がきた、それは小さい神だった。というのが日本書紀・古事記の神話なんです。そうするとこの少彦名神という神様は向こうからやって来たということなんですが、この少彦名神の話は、また、別のところでは、熊野岬から、海のかなた常世へ去っていった神だったと書かれています。その両方は前後して書かれていますけれど、順序からいえば熊野なりあるいは淡島、『日本書紀』の一説としては淡島から常世に去っていったとも書かれておりまして、淡島とは今の紀淡海峡の友ヶ島のことですが、いずれにせよ一度死んで常世に去った神が常世にとどまっておって、本土の子孫達に困ったことがおこると助けに帰ってくる。少彦名神はご承知の様に医薬とまじないの神様として、今では薬の製造の神様として祀られる神様あります。非常に小さい乱暴な神様であったので親神の指の間から洩れ落ちて行方不明になった神とも書かれていますが、常世は海洋他界といって死者の靈の行く世界です。また死んで海に流された神として記紀に書かれた神様というのは、別に“蛭子神”があります。——蛭子という神様は伊弉諾伊弉冉の神から最初に生まれた神様で、足腰が立たない虚弱児なので葦舟にのせて流されたというのです。これは水葬をさしていると思います。この神は後になって西宮に流れより、これが西宮の恵比須であるというのです。——また常世へ去った神としてはっきりと日本書紀に書かれているのは「三毛入野命」とその弟の「稻飯命」がいます。——三毛入野命というのは神武天皇のお兄さんで彦五瀬命の次の兄です。神武神話では彦五瀬命というのは紀淡海峡の雄水門で死んで、この2番目と3番目の兄さんとともに4番目の、いわゆる末子相続者である神武天皇が熊野へやって來た。熊野に上陸して大和へ入ったというのが皆さんにご承知の神武東征神話です——その2番目の兄さんと3番目の兄さん、これが三毛入野命と稻飯命であり、2人とも常世の國へ去った神として書かれています。というのは熊野灘で大変な暴風雨に会いまして、海に沈んだのです。この海難の状況はくわしく書かれていて、自分達のお母さんは海神の娘の玉依姫であるのに——神代神話の中で、海の神の娘がこの本土へお嫁に来て神武天皇

とその兄さん3人を生んだことになっており、その母の妹の豊玉姫も海神の娘である、ということです——自分達は皆海人の子であるのに苦しめて海に溺らすのであるか、となげきながら常世へ去っていった——ということは死んで海中に沈んだということですね——となっているのです。これを私は死んで水葬されたと考えているわけです。そういう場合は魂は海の彼方へ去って常世にとどまるという信仰を想定しなければなりません。したがって海のかなたからたくさんのお客様がやってくるということを、折口信夫先生は『まれびと論』といついくつかの論文に書いてらっしゃるんですが、海の向こうからくるお客様というふうに考えておったわけです。しかし実際は海の向こうに去った先祖の靈ですね。これがある場合には神となって子孫を助けに来るということになり、また、薬師さんとして祀られたり、弥勒として祀られたりするのです。弥勒として祀られるのは、そこに書きました様に——常世あるいはこれを根の國と言ったりしますが、「根」というのは先祖という意味で、人間のルーツであり先祖であります。それから沖縄では根の國というのを、『根』を『ニライ』といい、国を『カナイ』と言いますから根の國は『ニライカナイ』です。その言葉が南西諸島で訛りまして、ニールとかニラとかミルと言ったりニールクと言ったりミールクと言ったりしています。このいろいろの変移語があるということは、柳田先生の「海上の道」をごらんになりますと書いております。そうすると弥勒上生經とか弥勒下生經という仏教のお経から出た弥勒ではなく、根の國という意味でのミールク、すなわち弥勒ですね。日本古代の弥勒信仰はこんな具合に庶民信仰の上から考えられる。のちになってそれを仏教經典の弥勒上生經、弥勒下生經にあててしまうものですから、そんな仏さんが海からやってくるのはおかしい、という考えになりますが、民衆はおかしくもなんともないんで、飢饉の年には弥勒さんの舟が救いに来て金と米をもって来るという信仰を表明したのが、「弥勒踊り」というものです。現在弥勒踊りは、「鹿島踊り」とも言って、伊豆から房総そして常陸の海岸、鹿島の海岸まで分布しておる。その歌の中には、弥勒の神が舟で日本にやって来て、この海岸についた、だから『黄金三合も撒こうよ、黄金三合はおよびもござらん、米の三合も撒こうよ』という様な歌があります。この弥勒がくる時には米を持って来たり、黄金を持って来たりする。という考え方があったことが、この歌からも推定されます。この歌と踊がはやった時は大てい飢饉があった、ということであります。今「弥勒」という私年号が使われたのは室町の中頃です。平安に1つあったという説がありますけれど、室町期には民衆が使ったようで、仏像の背銘とか巡礼札なんかに弥勒元年とか身禄二年とかいう私年号があります。これのつかわれた永正4年、享禄元年とかいう年には飢饉がおこっている。このことは海の彼方に常世があって、そこから神なり仏なり先祖なりが幸福をもって来るという信仰があったことをしめすものです。漂着渡来仏の信仰はこの常世信仰をのぞいては考えられません。

そうすると、常世というものは必ずしも日本の南でもなければ東でもない、どこでも海の彼方であればよいことになります。「海のかなた」というのが一番古い形であろうと思われます。そうしますと、京都府の丹後半島に常世信仰がある場合には北か東ということになります。丹後半島には与謝郡という郡がありまして、そこに、管川の水江の浦島子という者が後に浦島太郎と言われますが、海の彼方の常世へ龜に導かれて行ったという話は『日本書紀』にも『万葉集』にも『丹後風土記』にも出て来ます。のちにこれは竜神の宮、竜宮となります。そこが常世であった、ということは『日本書紀』雄略天皇の條に書かれております。永久不変の常世だから浦島は年をとらなかったのです。常なる世——不老不死の世すなわち死者の世界——というのはそれ以上年をとらないわけです。私も26歳で死んだ妹がありましたが、この妹はいつまでも年をとらずに私の追憶に思い出されます。こういう記憶の中にだけ生きている死者というものは年をとりません。それが常世というものです。そこへ行けば年をとらない、という伝承があったものですから、沖縄では、失踪した者が30年たつて、或いは50年たって、失踪した時と同じ容相で帰って来た、と書かれた伝がいくつかあり、それ

は儀来河内（ぎらいかない）とあります。浦島太郎の竜宮というものがお伽草子に出てくるのは、もっと後ですがこれも常世であったわけです。またもう少し日本の西の方にも常世の事例があります。『大和物語』或いは『蜉蝣日記』に出て参りますが、主人公のおばさんが亡くなつて、そのお葬式の時に、あのおばさんにもう一辺会いたいものだと考えておりましたら、あつまつた坊さん達の話をしているのを聞くと、西の方の“みみらく”という所へ行けばまた死んだ人に会えるそうだ、という話をしていたとかかれております。“みみらく”とはかなり常識的に知られておったようですが現存する島なんです。今では漁港になっており、五島列島の南の方に現在は、三井樂みついらくという名前になつております。“みみらく”という名前では、万葉集に遣唐使の風待の港として出てきます。そういう実在の港が海の彼方なるがゆえに常世の様に考えられて、京都の方からみれば西の方ですが、死者が行く世界、そこへ行けば死者に会えるという信仰があつたことがわかります。海のかなたであれば、どこでもよかったです。特に日本の神祇信仰の側から言えば、東の方の海を非常に大事にしたことは事実で、善光寺にしても当麻寺にしても善通寺にしても四天王寺は西門に変わりましたけれど東門を非常に大事にした理由があるのだろうと思います。

時間がなくなりましたが、灌頂幡と幡蓋という問題を大いそぎで申上げます。善光寺如来といっしょに百濟から日本に奉獻された仏教上の道具としまして、幡蓋があります。お経の方は全々手がかりありませんけれど、幡蓋の方には手がかりがあることがわかりました。それで善光寺如來のついでにお話をします。最初に申しました様に日本人の大変な宗教觀の中に罪業觀というものがあります。我々の全ての災いとか、悩みのみならず人生の不幸、或いは突然の天災というものでさえも、自分達の知らずに犯した罪なり穢れなりの報いである、と考えることが日本人の罪業觀であるということができますが、それを滅ぼすための宗教上の道具として幡蓋が現存するわけです。大体歴史は一時代毎に完結して一回生起ですが、「文化史、民俗史には繼起性がある。佛教伝来」という一つの歴史は現在の善光寺如來にまで継続してきています。同時にその時に渡って来ました幡蓋が現在でもものこっているのです。その幡蓋を私は隨分追跡をして、数年前に1つの論文にまとめたことがあるんですが、これは、東京国立博物館に灌頂幡としてのこっています。これを欽明天皇13年のものそのものとは決めにくいんですが、それに近いものであることはまちがいありません。しかし幡蓋はのちに灌頂幡といわれたと推定できます。幡蓋といいますのは、幡と天蓋のこと、どこの本堂にもかけてありますが、善光寺さんから上杉謙信によって越後にもち去られた幡は、やがて上杉氏が米沢へ行ったとき、米沢に移っていた、あの幡蓋が今博物館へ戻ってきております。御開帳だからということで、出品してくれた幡ですが、その幡蓋の幡は本来5本あります、天蓋の下に下がるんです。時間がなくなったので急いで図を書きます。天蓋の中央に下ったこれが大幡と言一本、その四隅に下ったのを小幡といい、4本こう下がります。こういう形のものが幡蓋というもので、これは從来、佛教史の方でも幡蓋というものが「日本書紀」にあっても、それがどんなものか、あるいは今ものこっているかを追求しようとしなかつたのです。私は民俗の方から現在幡蓋が、一方では葬式に使われていること、そして山伏修驗達が行います正灌頂という即身成仏の儀式に使われるのがそれではないかと考えて追求してきました。そうするともう1つの幡蓋の後裔が信州から三河へ入りますと、花祭りという山伏神樂の花宿の天井に白蓋びわかいという紙製の天蓋がその後裔だということがわかつて来ました。その他の文献にはたくさん幡蓋が出てくるのでして、これは決して佛教伝来の時で終わったものではないのです。いろいろに形を変え目的をえてずっと継続していることがわかりました。現在お寺でも使っている天蓋や幢幡はこれの変化です。ただお寺の方でも仏具屋さんでもどうしてこういうものがあるのかわからなくなつてしまつてはいるだけで幢幡などは、非常に違った形のものになつてしまつてはいます。どこのお寺でも本堂に下がつて木製で金泥塗りの柱か筒のようなものが幢幡です。

この幡蓋を灌頂幡と呼んだであろうということは、推古天皇31年の時の『日本書紀』に新羅の国が日本に灌頂幡を贈ってきたという記事が出てくるので、これが仏教伝来のときの幡蓋とおなじものと思われます。この時は実は、聖德太子の一一周忌にあたるんですね。恐らくそのための奉納物であろうと思います。日本書紀は聖徳太子の亡くなつた年紀を1年まちがえておりまして、正しいとされる『上宮聖徳法王帝説』によれば、推古天皇30年に亡くなつて今の31年が一周忌となるのです。それが、『日本書紀』の方には29年に亡くなつたと書かれてあるのです。全般に『上宮聖徳法王帝説』は仏教に関するかぎり正しいということがみとめられています。——だからこれは一周忌と考える。それはどう考えたって飛鳥時代のものに違いないんですが、時がちがい名がちがいます。これは伝わってきてから四天王寺にとどめたと『日本書紀』にあるから、もと四天王寺にあったんでしょうけれど恐らくこの貴重な物は、法隆寺と四天王寺が交互に使つたと見えて、一番最後に残つたのが法隆寺であったため、明治まで法隆寺に残っていたのだと思います。その法隆寺が明治初年に他の四十八体その他と共に御物として献上したのです。この灌頂幡は現存する日本最高の工芸品だと思いますがこれは東京の国立博物館の法隆寺献納御物特別陳列館の方におさめてあります。特別の保存設備をした建物で、水曜日にだけあけており見ることができます。この灌頂幡の下へ行って、その幡足（幡の足といいます）に頭が触れると罪が消えるといって法隆寺で使つてきたものだといいます。それでこれを灌頂幡といったのには理由のあることがわかってきました。これが善光寺如来や回壇めぐりの信仰のもとをなす死者滅罪信仰で、罪をほろぼし滅することを庶民信仰では「灌頂」といったのです。これはのちの密教の金剛界胎藏界、両部の灌頂というものはちがう概念だということがわかりました。法隆寺金堂のような、よほど大きな建物でないと下がらないという長いものですから、こういう伝承で残ってきたのですね。それにさわれば罪が消える、という伝承は貴重です。何故かと言いますと、灌頂というのは、頭に水をそそぐことによってすなわち灌頂することによって罪が消える、罪があらわれるところということです。お年召した方々は、「流れ灌頂」という言葉をよくお聞きになったことあると思いますが、特にお産で亡くなつた方の供養では、生前身につけた着物にみんなで水をかけてあげる。一尺四方ぐらいの紅絹のきれを下げておいて水をかけて色がさめた時にはその罪は消えたというのです。お産で死ぬのは罪が重いと昔は信じていたものですから、特に産死者のための流れ灌頂が一番あとまでのこつたのでしょうか。或いは、『血盆經』という紙を水に浮かべてそれが沈めば罪が消えると、成仏したというような信仰も、流れ灌頂です。また或いは、産死者のために、地蔵菩薩の摺札、或いはその名号のお札を流してやる、千枚なり一万枚なりを流して流れ灌頂をする。そういうことで罪を減ぼすということに使われたんです。しかし幡蓋は流れ灌頂には使いませんが、天蓋と四本幡というものを、お葬式の時、葬列に立てたり棺にさしかけます。これが灌頂幡の使い方で、これは実に仏教伝来から今までのこつたと考えると仏教伝承の持続性におどろくのです。四本幡の方は、これに「諸行無常、是生滅法 生滅々已、寂滅為樂」と書いて、仏教の最高の理と信仰を人々に教えました。

以上のように善光寺如来は仏教伝来とともに渡來したという伝承をもちながら庶民信仰化して最高の死者救済の仏となって今日におよんでおります。また幡蓋も仏教伝来とともに渡つて庶民信仰化したこととは只今のべた通りです。これらはこの仏や道具が庶民仏教者としての聖の手にわたつたために永く無数の人々を救済することになったのです。無知な聖のはたらきもまことに偉大だと思います。

しかしその善光寺聖の話は、時間がなくなつてできませんでした。今後善光寺については、もうしばらく信濃毎日新聞の方の連載を続けていきますので、その方でご理解願えればありがたいと思います。大変時間を超過致しましたが、これで終りとします。

(昭和61年5月12日 第10回特別企画展記念講演会にて収録)

2 台所と人間性

倉島 日露子(長野生活学園長)

今日はこういう題をいただきましたが、こういういかめしい話のできる私でないということはもうご存じだと思いますので……、今私80歳ですから、20歳で主婦になっての60年の私の台所観を聞いていただきたいと思います。

私はこの什器展を見せていただきまして、人類の始めから現在の私達の台所に至までの、いろんな経過を見せていただいて感無量でございました。というのは、人というものは「何といみじきものよ」ということだったんです。すばらしいものだと思いました。最初は石でたたいていてそれが段々土器を作る様になって、次にお皿になり、最後に塗りものになってきました。そういう進歩——何にもない、物のないとぼしい時、私達は働く頭と手をいただいているということの感謝だったのです。それを今私達は忘れてはならないのだということを教えられたと思います。

昔はきっと、とってもそれに味つけをすることも知らないでそのまま焼いたり煮たりして食べたのだと思います。また中には毒のある草もあったかもしれませんし、食べておいしくないものもあったかもしれません。それをどけて、よけて、そしてこれがよろしいよというものが受け継がれ、それが現在の私達の食べ方になっているんだし、その台所道具の一つ一つが皆その受けつぎでできているんだと思います。こう思ったら、今の私達は何をあとに残していくかと、あれを見ていて、私は胸にこたえました。祖先の生命掛けの実験だと思います。この生命掛けの実験のおかげで今まで私たちはきたのです。

衣食住と私達は昔から呼んでおりますが、そうではなくて食がもとだと思います。生きていくうえに——というのは、私は引き揚げ者でございますから、引き揚げてきてまず第一に欲しかったものは食べ物でした。着るものは何でもよかったです。その頃長野市にいわゆる乞食と言われる様な形の人が随分おりましたけれど、着るものは寒かったら何でも上からぶら下げて、胸には飯合を下げる、食べるものだけはしっかりと使っておりました。住はどこでもころがれる。あれを見ても一番の根源は“食”であるということがよくわかります。昔の人はただ食べる、お腹がすいたら食べる、それだけのことを朝から晩まで考えていたから、お腹がすいたら山へ行って獣をとってくるとか、草をぬいてくるとかしたんだと思いますけれど、だんだん食が少しずつ豊かになってくると、頭は食のことを考える様になってきて現在にきたんだと思います。家のことも考えようと思ったでしょうね。だけど、今私が引き揚げのことを申し上げましたけれど、終戦後に私達は、自分の得た収入をほとんど全て食べることに使っていた様な気がします。あの時のエンゲル係数は80、90と高いものでしたが、とったお金は手から口へという生活をみんなしていたと思います。食べることがなんといっても命の一番大事なもとになる。現代はどうかというと、食べ物が満ちあふれている中で、必要以上に食べて必要以上に着かざって、必要以上に家の中もかざって暮らしている。そのくせ頭の中は何を考えているのか、本当は満ちたりたらもっと考えなくてはいけないことがあるのにぬかしているんじゃないかな。満ち足りたことの中でもう満足してしまっているのではないか、と思いました。

本当は今度のお話をご相談いただきました時に、これはすばらしい台所が並ぶのだと思いました。絵本にある様な外国の台所もありますけれど、日本の台所だってすばらしいです。それが出るんだ、と思ったものですから、私も死ぬまでにそんな台所で一度でもいいからお料理を作ってみたいと思ってますと申し上げて伺ったらそうではなかった——そのことが私とてもおもしろかったです。りっぱなのが出てきたらもっと悪口を言いたいところあったんですけど、根源を見せてください

たために私は考え直すことができて本当に良かったと思っております。

台所は、私達女の城です。この頃女でありたくない、飛び出そうとするために、男が入ってくる様になりました。この頃、男の料理教室などというのがありますと男の人がなさる。だいぶ城がおびやかされ始めた様な気がしますけれど、台所は、家の中で一番主婦の活躍するところです。私は女の命のあり場所だと思っているくらいです。

ちょうど今60歳前後の方が、若い頃家をお建てになる頃は、りっぱな台所——いろんなそろった規格品の台所がまだなかったので、皆さん普通のをお建てになったわけです。今の若い人が家をお建てになる時はみなりっぱな台所がちゃんと規格で出ているわけです。私若い方のお家へ行くと、「ああ、あれで台所仕事をやってみたいなあ」と思います。ちょっとこうやればすぐできて、うしろ向いたらこうなってというのを見ていてうらやましいと思いますが、あまりきれいになさったがために、それを汚したくないから、揚げ物はあげて持って来て下さい、ということになってしましました。それは当たりまえでしょう。家があまりみごとになると汚さないという方に重点がいってしまう。私共の会にも一人とても住居のことにやかましい方がいて、台所のステンレスなど何年使ってもピカカピカ光っている。そこで皆がお菓子を作る。ケーキを作ると粉がそこいらにちらばったり水がとんだりするとその方は横にきて、しゅっしゅっとふかれるのだそうです。そうすると作っている人は気が気でないと言うのですね。それをやられると気になってもうお菓子作るのいやよ、と言うと、その方は私はあなたの汚すのが気になるのよ、と言われたと言います。どっちが本当なのだろうか、何のための台所かということになる。だからりっぱな台所にしたおかげで揚げ物ができなくなるという状態そういうこともありまするのじゃないかなと思いました。今朝もテレビで、何か全部機械じかけでしゅっとやって、朝ごはんを食べるというのが出ましたけれど、その結果はどうなるのでしょうか。運動不足になっていけないから朝ジョギングだといって走るんですね。ちょっとしか動かないですむ、要は動作線が少ないために、食べすぎになってしまったわけです。食べすぎて太りたくないから水泳に行くとかテニスをやるとか、悪いとはいいませんけれど、旦那様は働いているのです。その間に一生懸命運動をして、旦那様が働いて疲れて帰ってくると、今日は忙しくて暇がなかったのよ、と言ってインスタント料理を出すという状態が事実随分あるようです。私はそれを聞いた時本当かしらと思いましたが、まな板と包丁のない家。あるいはあるけれど使ったことがないという人がある。いらないものそんなものと言ってらしたのを聞いてなるほどと思いました。

終戦後に、アメリカ文化センターというのが城山にできまして、そこの館長がイエツという航空少佐でした。女人です。その方は厳しい方でとってもきれい好きな人です。私は友の会をあそこでやらせていただいていたので、イエツさんに、「アメリカの家庭生活の話をして下さい。アメリカの婦人雑誌をみると、すばらしい台所が出ているけれど、ああいう台所で私たちもやってみたいと思うのですが、その台所の話をして下さい」と言いましたら、「アメリカ人が全部あんな台所をもっているのじゃないですよ」と言われたんです。「あれはあこがれだから婦人雑誌に出るんですよ」と。終戦後ですよ、40年前です。それから、「あれを動かすことのできるのは、飛行機の操縦ができるほどの頭をもっている人でなければ無理、ボタン1つで、何もかも動かすのですから。そこへいくとあなた方は幸せですよ。全て自分の頭で考えて自分の手でするのだから」と言って下さったのです。私はアッと思いました。始めはほめられたのか、くさされたのか、わからなかったんですが、自分の手でできてあなた方は幸せですよ、と言われて正直言って不平を持っていました自分の台所に対してハッとさせられました。引きあげてきて今の自分の家に帰ってきました。母が農家育ちなもので、台所は天井もなく煤が下がっている。終戦後ですから薪をたいていてその煙が家中にまわっていて壁が黒くなっている。床はコンクリートで竈子をのっけている。母はそれでも大改革のつもり

で“立ち流し”をこしらえたのです。すわり流しの大改革をしたと自慢するんですけれど、本当は私にとってはとてもつらかったのです。こんな台所で一生終わるの嫌だなあ、と不平をもっていたのです。自分の頭と手でできて幸せよと言われた時、私の仕事はこれからなんだ、ということが胸にきました。お金がないものですからお金が少しできると目標を持って、まず第一に床をはりました。あがりおりしない様に高さを一つにし、天井の板をはり、かまどをやめて、それから廊下の行き止まりが台所でしたから部屋のしきりをしたりして自分の動き方の都合のよいように変えました。母は、そこら辺に醤油の一升びんをおいて、料理する時にそれを持ってきてこうやって醤油を入れる。ですからいいお料理ができっこないんです。だからどうしても野菜をたくさん入れたみそ汁一点ぱりと野沢菜というのがあたりまえの食べ方になるわけです。それを何とかかえたいと思いました。そうするには1つ理由があったんです。終戦後に私達の団体友の会の羽仁もと子先生が、全国の農村にセツルメントを作って、農村の若い娘を集めて教育をしたことがありました。長野はないので私は佐久の岸野というところに行って一週間泊まりこんで一緒に勉強しました。私は農村育ちでないので、そこへ行って始めて農家の娘さんと接したんです。60人ばかりと一緒に寝たり起きたりする。そこへ自由学園の生徒が5人きておりました。私は食の係だったのでその自由学園の生徒さんといっしょにやってましたら、その生徒さんが九州の人なんですが佐久の2月といえば寒いです。紙をもってきましてこたつにあたって台所の図面を書いています。そして、「倉島さん、こここの戸棚は何間でしたっけ」って言うから、「一間の戸棚よ」って言ったら、「あのテーブルの大きさはどの位でしたっけ」……。何をしているのかと見たら台所の図面を書いていますね。「何をするのそれ」って聞いたら、「明日から5人で当番で代わる代わる出てくるので、その5人の動き方を書いているんです」と。形に切りまして、こう置いたりこの机どこへ置いたらいいだろうとやっているんですね。私おこたにあたりながら、「今の若い人達の考え方方はおもしろいわね」。私はその頃40歳でしたが私だったら台所に行って机はここがいい、あそこがいいと置いてみて言うのに、あの人入るこうだわ、おこたにあたって紙だけでこっちに持ってきたりあっちにもってきたりしているって笑っていたのです。ところが朝になってみておどろいたのは、その図面が壁に貼ってあって、Aさんはここからこう行ってこの汚れ物をもってここへ行って何をする、Bさんは……って皆ABCDEと5人の動作線が色分けで書いてあったのです。説明しなくとも、当番5人が出てくるとABCDEと自分の番号の線でその動きの通りにすればいいということです。いい教育をなさる先生だと感心しました。それで私も自分の家に帰って動作線というものを考えてみたいと思ったのです。ちょうどその時に新潟の長岡の友の会のリーダーが、赤ちゃんを連れて友の会の大会で私達と一緒に東京に泊まったことがあります。赤ちゃんは部屋の入口に行李に入ってるのですが、私達が通る時みんなが代わる代わるバーアーと顔を出しているものですから赤ちゃん泣かないでニコニコと寝ているわけです。6時に起床なので、6時にピシャッと起きて洗面。支度。いつも一番早く支度のできるのがその長岡のリーダーだったのです。赤ちゃんと自分と、その方は着物をきていましたが全部きちんとしてました。私達より早いんです。どうして早いのか、ということが問題になりましたが全部きちんとしてました。お主人が朝ごはんを食べながら、「おまえは今日朝ごはんを作るのに〇〇分かかったぞ」とおっしゃったので、奥さんが怒って、「黙ってするなんてひどい、明日もう一度みて下さい」と言って、その後のうちにものの置き場所を考えてかえました。動作線ですね。翌朝調べてもらったら20分早くできました。それが『婦人の友』にずっと図面ででたのです。私はそれまでそんな世界のことを知らなかったのです。台所をただ何でも動いてたらいいんだと思ってたんです。この無駄な足を使わないということがどんなに大事かという時に思い出したのは、実家におります時にじいやがおりまして、何か外に買い物やら使いにいくわけです。帰ってくると、母が「あれまた忘れたの」と言う

と、じいやは「はい、また行ってきます」と同じ所に行くんです。母が「忘れなきやいいのに」と言い、そうしますとじいやは「いいえ何も仕事です」と言って出て行きました。母は言ってました。「あの人は仕事かもしれないけれどこっちは損だ、無駄に行ったり来たりされても、もう少しする仕事があるのにこれは損だ」と。私はああ、あれが動作線だったんだと思いました。それからは、私は体を動かすのに損得を考えるようになりました。損得を考えるというのはおかしいかもしれません、動かさないですむところは動かさないで、動くところは動くという気で家の中をかたづけたのです。羽仁先生の本の中に、日本人は台所をはずかしいがってみせない、と書いてあります。外人ですと、「お家見せて下さいますか」って言うと、「はい、どうぞ」と寝室から御不淨から台所から皆見せるんです。私達はどうかっていうと、お食事しているところに誰か来ますね。先生がこのことを書いてらっしゃるんですが、大根の煮つけしか食べられなかったら、大根の煮つけを食べているところを見せればいいじゃないか、それをすぐにどこかへ持っていくてかくしてしまう。それからもし人が勝手口から入ってきて掲板の下をあけてみせて下さいといつたらどうするか。事実あけられるか、自信があるか、そういう自信のない生活をしている者に、必ず他の方で見栄を張る、と先生が言られたのが、私は耳にいやというほど入りました。だから汚くとも、粗末な台所でも、整理がきちんとできていれば、誰にでも見ていただける、とまず思いまして、それを実行したいと思いました。自分の小さな想ですが、「台所をみせて下さい」とおっしゃられると、「はい、どうぞ、家の中どうぞごらん下さい、どこをあけてもいいですよ」と言うんです。皆さん自分達身に覚えがありますから、「あけても本当にいいんでしょうか」とお聞きになる。「あけてもよろしゅうござりますよ」というと、もう一度念をおされる「ええ、どこでもあけて下さい、押し入れでも引き出してもどこでもあけて下さい、ちらかっていたら私またそこを直しますから」と言います。台所を皆さんごらんになって、三色の見方があります。まあよくこのお金のないところでここまでやったなあ、という人と、こんなくだらない汚いものをえらそうによくみせるなあ、という人と、あんな道具だったら家の蔵にだってあったわ、という人と三色ありました。沢山な方が見て下さいました。中にはバスで集団でいらしたりして、今に私長野駅の名所案内のところに書き出そうか、と言ったほど。今はもう方々にりっぱなものができるてきていますから見る人はありません。ごらんになって一番よく急所をとってくるのは男の人でした。女人より男の人の方がよく急所をとって下さいました。あそこをああしたのはどういう理由ですか、とかと言われるのです。女人はあそこに何とかのお皿があったとか、残りものがあったとかそういうものばっかり見て行っちゃうんです。私は男と女の目のつけどころのちがいを考えさせられましたが、そういうことで、先生が自分の食べ方が、もしも大根しか食べられなかったらそれでいいじゃないかって言われた、その言葉がとても胸にしみました。本当に私達は小さい時から、今は給食で同じものを食べているからいいでしょけれど、私達の時代はお弁当でしたが食べる時、皆こうやってかくして食べたものですね。何故親が作ってくれたおかずをかくして食べなくてはならないか、本当に自信がない家庭生活、一体台所が一番人間の本性を見せているところかもしれません。

私は戦争中に北京おりましたけれど、北京では12月8日に台所のかまどの神様をおまつりします。12月というのは、臘の月と書いて *làyuè* と言います。8日ですからその日にお粥を吃るのは、臘八粥 (*làbāzhōu*) と言います。その日女は台所に出ないで、男の人が正装をしてかまどの神様の前に飴をいっぱいおそなえします。飴とそれから日本のかりん糖の様な菓子でこしらえた碁になつたお菓子です。それをおそなえして、三拝九拝をする。ご主人が何を訴えるかというと、かまどの神様が1年に1度天に上がって、ここの家はこうでした、ああでしたと報告なさるんださうで、だから「私の家のいろんなところをごらんになりましたでしょけれど、どうぞ天の神様に言いつけないで下さい」と訴えるんです。そのために、飴をあげるとその飴で口がねばっちゃって言えなく

なると言うんです。私は、おもしろいおまつりだと思いました。その時には、女人は絶対に出ないことにしてあるのが面白い。やっぱり中国でも台所には、いろいろなあらがでているんだなあ、と思いました。台所は本当に私達の全てのかくしごとを持っているところなんですね。

中国というのは、私も最近にも行ってきましたけれど、台所はそんなに大げさなものではないんです。簡単なものなんです。中国にも韓国にもオンドルというものがあります。韓国はオンドルのたきものを燃やした熱を使って部屋をあたためそのままの熱でごはんを炊いたりお湯をわかしたりしている。煙が煙道を通って部屋をあたためるという構造になっており、台所は土で固めた様な粗末なものです。最近は、冷蔵庫を盛んに買う様になったので、冷蔵庫が玄関のあがったところにでんとすわっている。冷蔵庫をあけると鍋ごと料理がはいっていたりしている。皆台所は簡単で、料理ができたのは土間に板の間に並べるんです。つい先日、佐賀で、大隅さんの生まれたお家というのを見ました、入ったところがすぐ台所でしたので、昔の台所とはと一生懸命見てきました。立ち流しとかまとありました。あとは土間です。そこに板の間があって料理を板のところできざんでやるんだと思います。それが昔の四百石どりの侍の家だってことでしたけれど、こういうのを見ていて随分素朴な台所だったし、お料理も素朴だったんだなあ、と思いました。しかし、この頃お料理が変わってきました。料理によってその国々の台所が皆違います。アメリカの台所も随分いろいろありますけれど、私の息子の家に行きましたら、これはまことに簡単な台所でして、火のところは大きなレンジが置いてあって、冷蔵庫も大きいのがあるんですけど、流しは小さいので料理台のところはそんなに大きくなかった、オーバーでないんです。それで大変動きやすくできているんです。私が布でふきそじをしようとすると、息子が、「いいよ、お母さんそこにペーパータオルがあるから、ペーパータオルでふけばいいんだよ、お皿もそれでふいてから洗えばいいんだよ」と言いますから、「あなたね、ロサンゼルスは木が多いから、ペーパータオル使ってもいいでしょけれど、私達の習慣は、紙を無駄にしてはいけないと、小さい頃から育っているから雑巾という布を使って最後まで破れるまでやるという様に育っているんだから」と言うと、「それは日本の習慣でここはいいんだ」って言うけれど、どうしても私にはそれができなかったんです。そして日本に帰ってきてティッシュペーパーをみた時、外国の姿をまねをして、ティッシュペーパー、ティッシュペーパーを使うけれども、日本では、あれだけのティッシュペーパーを出すために、どれだけの木を伐るか、と思ったら、やっぱりいろんな国の習慣を入れるのには、もとから考えなくてはいけない、ということを痛感しました。

私は自分の台所を見ていただいて自慢しているものが1つあるんです。それは、何かと言いますと、私は油料理をよくいたします。毎日朝、にんにくを炒めて主人に食べさせるのですが、サラダ油でいためたあと、フライパンをあまり洗わないんです。使い捨て雑巾という、これ位の大きさ半分位に切ったものを、ちょうど火の横のところに箱を作つて入れておき、それでシェットとふいて捨てるんです。紙でふいてはうまくいかない。きれいにふきとれないんですね。この使い捨て雑巾は、昔から思えば、こんな布をちゃんと切つて捨ててはと罪悪感なのですが、下着だとか、タオルの古いのとか、台布の古くなったのとか、皆暇にまかせて切つて入れておいてそれを使います。そうすると本当に油のものがきれいにとれます。それから、まだおもしろいのは、使った油は、鍋のまま入れとけないので、こして入れるんですが、そのこすのが大変ですから、考えまして、広口びんがありますね、あの広口ビンにしいたけの袋がありますでしょう、その袋をとっておいてそれをかけて、油の冷えたのを入れます。——あついのを入れると袋がやぶれてしまいます。いろいろ失敗をしながらですけれど——入れると、それでこせるんです。びんは透明ですから汚れているのがすぐわかりますし、ぴったりフタをしとけば油はいたまないんです。そうやって油を上手に上手に使うことをしていますから、1か月にどの位かかるかすぐに計算できるのです。台所というのは実に

楽しい所です。勉強することが多くて。

今私は主人と子供と3人暮らしです。2人が男、私1人女ですから、80歳になって三度三度の食事をこしらえて、あと始末、容易じゃないです。何で、私がこんな目に会わなくてはならないかと、愚痴を言ってみたことがあります、考えてみたらまだ私に頭をつかわしてくれる、おもしろいですね。あと始末ほど楽しいものはない。台所がこんなに汚れていても、それが見る間に、すっときれいになる。本当に世の中きれいになる仕事は楽しいです。

什器の問題に入りますけれど、日本の茶碗と洋皿と、どちらが洗うのに能率的か。洋皿だったらさーっと洗って、うしろもさーと洗えばそれでおしまいですが、日本の茶碗は、中をこう洗って、うしろを洗って、糸底ももう一度やらなくてはなりません。そうしないと指でさわった時、ネットとなります。そしておもしろいことを発見したんですが、日本の茶碗だけですね、持ち主が決まっているのは。人の茶碗で食べると気持ちが悪いでしょ。お箸もいやでしょ。どうしてだろう、と自分で洗う様になってから考えたんです。要するに、それぞれが口をつけるからだ、とわかりました。お箸も口に入るから、それぞれのものときまっているのですね。そういうところは、ちょっと能率的には損かもしれない、しかし日本の茶碗の良さは下に置いて食べるのではなくて手にもって食べるところにあると思います。今の人々はお行儀が悪くなっています、生徒さんを見ても、肘をつく様な格好をしてお皿から口へ運ぶ癖がついてしまって、日本の今までの良さがなくなっています。

家中を見せるということを言いましたけれど、今度ここを拝見して、鍋や擂鉢は、焼き物がでてきてから、だいぶ遅れてできた道具だ、ということです。終戦後に来たドイツの人が何年かたってまた、日本に来たら、依然として擂鉢が台所にあるのに驚いた、と言うのですが、あれは実に便利なもので、擂鉢と、おろし金は、外人がとても喜ぶものです。おろし金というああいう便利なものは外国にはなくてよく私はお土産に持っていました。擂鉢というのもいいですが、この置き場所です。終戦後に、西高に安藤はつという女の代議士と私が家庭科の顧問になって、行ったことがありました。あるお母さんが先生に、「先生、こないだ台所のかたづけ方をお話になったんですね、困りました」と言うんです。生徒であるお嬢さんが帰って来て、「こんな台所のかたづけたではダメよ、美しくしなくてはいけない」と、これはここに置いて、あそこに置いて、と全部かたづけてくれたそうです。そして翌日、お母さんの方では、どうも台所の使い勝手が悪いというので、またもとの場所に戻したのですね。そうすると娘さんが帰って来て、怒りながらまた直す。毎日その繰り返しなんだそうです。私はおもしろい話だと思いました。整理というのは使う人がするのが一番いい整頓ができるんですね。使わない娘が美しいと言って並べても、擂鉢が上の方にあって、プリン型が下の方にあったりしたら、これはもう使いにくいんです。美しいより便利な使い方というのが大事であって、やっぱり使わない人がやることと、実際働くもののやることとは違うな、ということを教えてもらいました。

私は今自分で食器を洗っています。今便利だなあ、と思う道具は乾燥機です。これは結婚のお返しにいただいたものです。家事を助けてくれる人がいて、自分で洗わなくてすんだ時にはいいませんでしたが自分でしてみると、拭くという仕事、そして布巾というものの処分がまた、ひと仕事なのです。それで乾燥機を出して使ったんです。2年使って、こわれたので又新しいのを入れましたが、この2年の間に改良されていろんなものがくっついて取って、めんどうなものになっています。冷蔵庫でも洗濯機でもそういうことがあります。あんまり人の生活に知恵をおしつけられても困ります。

私は、皿洗機は高いから買いません。アメリカ人がその時も言いました。「皿洗機なんて言っても、皿の上ののっているゴミはみんな自分の手でとらなくてはいけない、手がやっぱり一番動くんですよ」と。あの電子レンジができた時も、電気会社が説明してくれました、「電子レンジは便利ですよ、

グラタンも何でもピシャとできますよ」と言うので、牛乳とバターと粉を入れておいたらグラタンができるのかと聞きましたら、全部自分でこしらえて入れるんじゃないですか。そうそう楽々というものはないんですね。まあ、便利だなあと思う道具なら早くお使いになつた方が得ですし、不要なものはお買いにならない方がいいのに、人が使っているのをみて一緒に買つてしまい、不要なものがあるって必要なものがない、という台所が随分有ります。

余計な道具は思い切ってかたづけてしまうことです。私の家は、2人だったので食器は2人分しか出してなかつたのですが、今度3人になったので、3人分入れると、それだけでもう戸棚がせまくなります。必要な道具だけにすればいいのですけれど、家は学校ですから、特別に生徒さんがいろいろなものを使うので出でています。余分なものを出せばそれだけそこを掃除する手数がかかるということで本当に、物は最小限度持つてゐるのでいいなと考えております。

それから日本の、この水というものが台所でふんだんに使えるということ、これは日本にいるとわからない恩恵なんです。外国へ行くと水が飲めません。水を買わなくてはならない。それをうつかりホテルで飲んだばかりに病気になつた人もあります。私は一人北京で子供を、それで死なしているものですから尚つらいのですけれど。「ああ、のどがかわいた」と水をすぐのめることは喜びです。水がふんだんに使える日本だから、水の料理が発達しているわけです。菜っ葉を見たらすぐ茹でるでしょ。中国では、菜っ葉を見たら油で炒めますもの、それだけ料理法が違つてゐるわけです。水をふんだんに使って自分で汚れものを洗いながら、私の家一軒でさえもこれだけ水を使うのに、だいじょうぶかしら、と思うことがたびたびあります。だからお米を洗うのにも、どれ位の水で最小限度洗えるか、そうした考えが、台所で養われていくのです。

日本人は、どういうんでしようか、食通という顔をして和洋中と全部取り入れていますね。だから食器も鍋類も随分余計になってくる。中国では支那鍋1つです。支那鍋1つにせいろだけで仕事しています。私はコックを使っていたのですが、台所には煉炭入れた大きな炉が一つあって、コックは、その炉の横でちよこちよことものをきざんで半調理したらそれが冷えない様に炉のまわりにずっと並べています。そこはあたたかいからなんですね。流しがあって、ただそれだけでちゃんと料理をします。それを見ていておもしろいと思いました。私達だったら、やっぱりもう少ししくみがないとできない様な気がしました。

日本料理というのは、割合にスペースがいるんです。日本料理は、私は世界に誇つていい料理だと思います。料理の本を見ていますと日本料理ほどめんどうなことを書いてある料理書はありません。外国のはただ、煮る焼くです。日本のは、火をどうとか、これをこうやってとか、蒸らしておくるとか、ふくらませるとか、いろいろ料理用語のむずかしいのがあります。そういう料理を私達は誇りに思いたいと思いますけれど、日本料理は基本はお米ですね。お米から始まって、私達は二言目には主食・副食という言葉を使いますが、外国では主食なんて言わないですね。私達は昔料理のコンクールを見に行きますと、これでごはんが何杯食べられるか、というのを標準に考えたものでした。今は余りしませんが二口でごはんを食べておかず。又ごはん二口食べておかず。というのが日本の作法でした。今そんなことを言つたら、若い人にきらわれますが。2対1で、ごはんとおかずがありました、外国料理は、主食、副食なしで、肉も主食、パンも主食と言えば主食でしょうね。肉を食べて、口直しにパン食べて、又肉を食べるというやり方ですから、違つてます。主食があるのは、アメリカの、土着の人のトウモロコシ、エスキモーの人達の肉、日本のお米、このくらいです。日本は、そのお米を主題にしておかずを作つてゐたわけです。それを主食のない国の副食をもってきて副食にしたので食いつぎで、皆太つてしまつました。こっちの主食を食べて、あっちの主食を食べてゐるんですからね。だから太らざるを得なくなつた、太れば心臓病が出てきます。先日からお葬式が日に三つもありました。心筋梗塞とか、心臓病が随分多くなりました。若いのに心

臓をこわしたり何かしたりするのをみるたびに食べ方の大しさを思います。日本のこれまでの食べ方に、牛乳と卵をくっつければこれは誇ってよい食べ方になります。アメリカでは今、お豆腐の研究が盛んです。お豆腐も味噌も、正油も使います。モヤシも食べます。随分モヤシを食べますね。納豆も今生けんめい食べる努力をしているらしいですが、あれはまだなかなかでしょうね。だけど一生けんめい豆の研究を始めているんです。アメリカといってもそんなに肉を食べるわけではないんです。行ってみると豆の食べ方が随分多いところです。だけど私達は、外人と言えば、朝から晩まで肉を食べているのかと思ってましたけれどそういうわけではないんでして、私達はそれをまちがって、贅沢な食べ方をし、食べあさる様になってしまった様な気がしますね。世界に誇っていい日本料理なんですから、それをどうかして上手に伝えていける様になったらいいんですが。

外国旅行をする時、皆さんの持っていく荷物の中に何が入っているかといいますと、お茶とお米と、味噌汁——お湯をさせば味噌汁になる——などです。その国に来たら、その国のものを食べていれば一番いいんです。私は北京に2年おりましたけれど、北京にいる時は、北京でできるものを買えば、一番安いし、一番栄養があるのです。それを日本人は、北京で家は、板ノ間に畳を入れて、台所も日本的にして、そこで浅草のりやたくあんを食べて、高い生活をするわけです。私は、北京にいる間ずっと向こうの料理の方法で食べました。その国の方法で食べるのが一番よろしいようです。

食というのは、衣食住の中で一番保守的なので、例えば、猿にキャラメルをやると、紙に包んであるので中味がわかりませんね。じっと見ていて、まずとて食べるには、赤ん坊猿だそうです。お猿の赤ちゃんが包み紙をむいて食べて、おいしいよ、という顔をすると、その次に出て来て吃るのは、母親猿だそうです。その次に出てきて吃るのは、あまり偉くない男だそうです。ボスは最後まで抵抗しているのだそうです。だから、お父さんは、50歳くらいになると、昔の食べ方にもどって、昔のものを食べなくなるんですね。今の若い人が年をとったら、何を吃る様になるか、私も疑問ですが。ラーメン食べたいなんて言うのじゃ困ると思いますが、どういうふうになりますか。悪くない日本の食べ方を、けっして私達の時代で悪くしてはならないと考えています。

今、食の原点に戻らなくてはならない時だと思います。生活状態が豊かになってきますと、エンゲル係数は下がってきます。これは経済の原則です。ところが生活が向上して食費が上がってくると、死亡がふえてくるのです。摂取量がふえ、お砂糖もふえてくると、お医者さんも繁盛するわけです。昔は、日本のお菓子といえば、せいぜい餅菓子の甘さでした。そこへ油が加わって、チーズケーキやら何かがでてきて、水を飲んでいればいいところをコーラかなんか飲んで、それでだんだん体がこわれていく様になっています。私は、本当は、コーヒーなんてきらいなんです。だからアメリカに行く時いやだなあ、と思いました。お茶でなくてあんなコーヒーを朝から飲むなんいやだなあ、と思って行きましたら、そのコーヒーが苦にならないんです。アメリカンコーヒーなんていうあの薄いコーヒーですから苦にならないし、お砂糖を入れないで飲めるものですから、朝から飲んでいました。肉もあんまり食べないし、あんまり食べ方で苦になるものはなかったのです。だからその土地にすんでいる時はその土地の食べ方でたべるということが、一番大事なことだと思います。日本人は、米で作られた体を持っているのですからそれに慣れた食べ方をしないといけないです。この頃、甘さをおさえたお菓子というのがありますね。甘さをおさえて何を入れていると思いますか。お菓子は、ある程度お砂糖を入れないと、ケーキなんかふくらまないんです。だから精製されたお砂糖が入っているんです。そしてお酒とか、他の高級材料が入っているんです。それで甘さをおさえていますので、喜んでパクパクと2倍食べていますと同じことになるのです。甘さを感じさせない様に作ってある、ということを私達はもう少し考えなければいけないと思います。

毎日の暮らしというのは、食事で時間が区切られています。だれが決めたか、いつの間にか3食、

食べる様になりました。朝・昼・晩と。だから私達の生活は、食事がもとになっています。朝ごはん・昼ごはん・夕ごはんそれにつれて家事が動いていきます。食のためにお父さんは働いていますし、稼いできたお金の使い方も、料理を作る時間、労力もこれ全部、衣食住の中で食が一番なのです。だから食べることは文化の始まりだと言っていいと思います。その文化の始まりをやる台所は、本当に、私達の使い易く、自分の勝手のいい様に、清潔にしておかないといけないと思います。いろいろな形がありますね。コの字形とか、L字形とか、それはもうその家の使い方一つです。いろいろ自分のしたい様になさればいいですが、講習を受けた時は、ああ便利だなあ、と道具を買いくんできて、そのまま使わない人が随分あります。私も昔、ミシンを買ってくれば、主人のワイシャツでも背広でもなんでもぬう様な顔をして、ミシンを買ってもらいましたが、ふとんカバーぐらいしかぬわなかつた覚えがあります。道具があればそれで安心しているだけことがあります。外国の人は、すぐにオープンに入れちゃいますが、まだ私達の家庭では、外人が使うほどオープンが必要じゃない、と思うくらいの料理ですが、それでも大きなオープンを持っていたり、いろいろりっぱな道具を持っていたりします。先日、私のところへ共働きをしている友達がたずねてきました。その友達の夫は、帰りが遅く、夕食を済まして帰ってくる仕事です。だから夕ごはんは、子供は大学へ出でていっていないものですから、1人で食べる、奥さん1人で吃るのはわびしいものですから、出来あいを買って来て食べるそうです。朝は、夫婦で、喫茶店へ行って、モーニングサービスというコーヒーとトーストを食べるそうです。「あれはいいわ、倉島さん、後始末しなくて済むから」、お昼は職場で出るお弁当を食べるんだそうで、その話をしたあと、「楽になったわ」と言いいながら、何を言うかと思ったら、「だけどいけないですよねえ、ものを切ったり、煮たり、焼いたりってことがどんなに大脳のために大切なことがわかってきたわ、自分は何のために働いているのか、この頃はわからなくなってきたのよ」とて、「何のためにお金をとっているのかわからなくなってきた、かといって自分一人が吃るのに手間暇かけるのはバカバカしいし」ということだったのです。ところがその奥さんは、大変女らしい、美しい、しっとりした人だったんですが、しばらく見ないうちに、何ともがさつになっていました。荒れた感じでした。私は、ああこれだなと思いました。近頃は、若い人が、作るより食べる名人になってきました。あそここの何とかはおいしいだの、まずいだの、^{ひとかど}一角の口を聞きますが、私は、自分が作れる様になったら、そういう口を聞きなさい、と言います。自分でつくれもしないのに、あそこのはいいとか、まずいとか言ってはならないと言っているんです。時々、デパートへ行ってみていて、あのいたれり尽くせりのおかずを手をかけずに食べられるものを売っていますものねえ。あれは、終戦後、5年か、6年たちましてね、もっと10年くらいたってからかもしれません、小島屋という天ぷら屋が、もとの市役所のそばにできたんです。それでうちの学校でコロッケを教えてましたので、学校で作ったのと、買ってきたのとを全部中をあけてみて、目方を計って分析しました。そうしたら、うちのには、ちゃんと肉が40g 入っていたのですが、かつてたのには10gしか入っていない、肉だと思ったらおいもの皮だったんです。値段は同じでね。手をかけるということを今の家庭はもっとしなければ家庭はバラバラになると思います。心が通い合う場所がなくなってしまう、悲しいことだと思います。私共の料理の先生が、「料理は愛情である」とおっしゃいました。自分一人が吃る時は自分の身体に愛情を感じるから、なるだけ動かないで済まそうと考えるけれど、誰かそこに一人対象がいると、その人のために喜ばせたい、もてなしたい、おいしいものを食べさせたい、その思いであの材料、この材料と走りまわってこしらえるので、馳走というのです。自分が食べないでも、その人が吃るのでじっと見て、満足したかどうかということをながめて、ああ良かった、と思うこの喜びが、人への思いやりであり愛情なんです。先ほどの奥さんはこれがなくなったから、しっとりしなくなつたんです。今、若いものは、自分のことしか考えない、人への思いやりがない、と言いますが、あ

まりにまわりに物がありすぎて、大事なものを、心を、見失っている現在だと思います。

料理は愛情だと言われていますが、それは人に対するばかりではなく、その材料のもっている特徴を生かして、欠点をそっとカバーしてやるのが、料理なんです。自分の腕を見せるのが料理ではないんです。材料にも人にも愛情を豊かに見せる——これが女の使命なんです。私達女はこの光榮ある使命をもらっているのに、この頃、女自らがそれを捨てようとする人が多いのは残念だと思います。私共は、結婚60年目です。先日、夫の出版記念会の時に、話をしたんですが、私達は朝、グレープフルーツを食べます。グレープフルーツを半分に割るんですが、随分考えてきれいに割つたつもりでも、どっちかが大きい。私はこの少しでも大きい方を、夫に出すと、夫は、「おまえはいつも大きい方をおれにくれるな」って言うんです。私は、夫が見ているから大きい方をわたすのではないんです、夫が私より年をとっているから、私と同じ様に生きてもらいたいと思うから、少しでも栄養をとってもらいたいと思うから、夫につけるのです。愛情です。それを私達は忘れたくないと思います。一年365日ですから、私は千回以上夫の食事を作ります。私は80歳になっても、一回でも欠かさず自分の手で作りたいと思っています。それをさせてもらえることは、本当に感謝です。台所に立った時、まな板に向かった時、どうぞこの一切りが夫を丈夫にしてくれますように、どうぞこの一すくいが、子供を丈夫に育ててくれます様にと尊い祈り心を持って料理を作るのでなければ、女の形をした化け物だと私はいいます。世の中に化け物が多くなると台所は化け物の住処になってしまいます。化け物の住処になれば荒れてしまいます。台所というのは、そこの家の台所に入ると、そこの家の奥さんの性格がわかる、と言われるくらいです。だらしのない人は、どことんまでだらしなくなるのです。あれは、本当に汚れますからね。本当に人格をそのまま出しているのが台所ですから、人に見せたくないんです。外だけきれいに見せて、座敷だけ飾りたてて、中を見せたくない、そうではなくて、どことんまで見ていただくことは、自分の励みになります。私の家は、生徒がどかどかと入ってきますから、年中油断なく、年中きちんととしとくという気持ちが生徒のおかげで私はできているんです。ありがたいと思っています。この年になっても、夫のために魚をさき、野菜を煮ることのできる幸せというものを心から感謝しております。それにはやはり正しい食べ方というのが必要なんです。1回といえどもいいかげんにできない食べ方ですね。そしてさっさから申しますように、女が家事から、特にまな板から離れると、心がすきむ、ということをよく考えてみて下さい。それは愛情が乏しくなるからです。心の細やかさがなくなるから、注意深くなるからです。そしてどんな材料も上手に使いこなせる人になって欲しいと思いますね。今、私が考えていることは、これは、羽仁恵子さんが言われた言葉ですが、この広い世界に、この長い人類の歴史の中に、私の人生はただ一度です。生きてただ死んでしまうのではなくて、私達の時代が、あの石器時代の人達の様に、何をあとの人に残すことができるか、ということなんです。もう、あと何年かで、20世紀が終わりますね。20世紀が何を残したでしょうか。食い荒らしたものだけを残したのでは意味ないし、もしかするとそう遠くない将来、丸薬ぐらいでごはんが済んでしまうのではないかと思います。おしまいには、お腹すいたね、じゃああの薬飲もうか、飲んだらもうこれでおしまい、というふうに、台所がいらなくなるかもしれません。台所がいらなくなったら、その頭どこへ使うかと言ったら、女も男も一緒になって何か他のことをするようになるでしょう。その時に、どうぞ、いい考え方ならいいけれど、本当に栄えていくものにもっていかれるならいいけれど、地球の人類の破滅の方にもっていくのは困ります。台所はまあ今ここに来ていらっしゃる人が、生きている間はなくならないと思いますから、私達は本当に、次に何を若い人に伝えていけるか、今の若い人に夢がないということをよく言いますが、それはさっきも申し上げた様に、ものに溺れてしまって心を見失ってしまったんだと思いますので、どうぞお母さんでいらしたらまずお母さんの姿から示して欲しいと思います。腹がたったら台所にそのまま出ないで下さい。腹がたったらその

ままの顔をして台所へ出て行って、そのまま大根を切ると、大根の中に腹のたつ思いが入ってしまう。ですから私は台所に鏡をかけなさい、と言っているんです。女の人は、鏡を見ると笑うんです。不思議なものでどんな時でも誰も見ていてもニヤッと笑うんです。だからその鏡を見てそこで一つニヤッと笑って、そして大根にとりかかって下さい。すると心が澄んでくるのです、本当にいい思いでお料理を作りたいと思います。憎ったらしい、憎ったらしいとやると、あっちこっちに憎ったらしい思いが入って、今度はご主人の方が怒りますからね。女と生まれた幸せをお思いになりませんか。手品みたいに、こんなナス1つをちょこちょことやると違ったものがしゅっと出てくる。この魔法使いみたいな手つき、それを子供達がじっと見ているんです。今私のところに13年離れていた息子が帰ってきて、私が料理を作る度に息子は、あっそれは昔食べた料理だと思い出して懐かしがるんです。それを見る度に、ああやっぱり昔からやっていることを息子は知らないふりをしてみていたな、と感じました。息子は自炊していましたので、「あなた料理何してたの」というと、「こういうふうにして、ハンバーグはこうして作った」と「誰に習ったの」と言うと「お母さんの見よう見まねさ」って言うんです、母親如何ですね。子供なんて知らない顔をしていると思ったら、そうではないということです。

女として与えられたこの光栄ある仕事を無自覚に生きたくないと思います。働いてそこに帰ってきたご主人に対してインスタントを出すんではなくて、心をこめたものが出来るこれが家庭なんでしょう。私は家にいて働いているから損で、外へ出て働いているから得というそんなこと何が損得でしょう。両方とも同じ働きだと思います。両方共にあって2人が1つになれるんだと思います。どうぞもう一度、ご自分の台所を見直して、どこをどうしたらよいか、あのものに、子供に、良いものが伝えられるか、それを考えていただきたいと思います。

私の家の冷蔵庫を見学にいらっしゃる方が皆、「へえ」とおっしゃいます。りっぱで「へえ」と言うんではなく、電気屋さんがきて、「古典ものですネエ」とおっしゃるんです。いつ買ったかと言いますと、我が家の財産ノートで、見てみると、電気冷蔵庫は、昭和34年7月に、6万8千円で買つております。対応年限10年、今はもう26年、まだ無事に動いています。そのかわりもうボロになりましたが。それでは電気代損よって言うんですが、それはわかっているんですけどこんなによく動いているものを可哀相でね。全ての家の道具がそうなので、皆さん、「よく物をもたせますねえ」とおっしゃいます。台所は、さっき申しあげた様に、ほとんど粗末なものですけれど、それでも自分とすれば、こうしたい、ああしたい、という形になってきているものですから、私、本当に人生というのはすばらしいと思います。

今朝、細川隆元の対談の中で、40年、40年で時代は変わる、という話をしてらして、ああそうなのかと思いました。私も40年、40年で変わったなあ、と思いました。長野に帰りましたで今年で40年です。その前の40年は物質的に幸せで、しかし心は全然考えなかつた時代でした。官舎でしたから、台所は行くところ、行くところ、おしきせできまり切つた形でした。本当に、40年、40年で、今度12月19日から次の40年の第一歩をふみ出して、いつまで生きるかわかりませんが、自分が生きた限りは、これからでもいいから何か残したいというのが、願いであります。

今日は、私の駄弁を聞いていただきて、ありがとうございました。

(昭和60年11月3日企画展記念講演会にて収録)

3 信州の漁業と文化

市 川 健 夫(東京学芸大学教授)

今日、掛川館長から「信州の漁業と文化」というテーマをいただいたわけですが、山国信州には山国なりきの漁業とその文化があると思います。そういうことで短時間ではありますが、日頃私が考えております信州の漁業文化について話を進めたいと思います。

日本民族というものは本来畜産とはあまり縁がありませんでした。ただし、縄文時代などをみると私たちの先祖は犬を食べています。また、縄文時代にかぎらず、弥生・古墳時代にかけて信州では犬を食べていたということは平出遺跡などをみてもはっきりしています。現在でも中国の華南にいきますと最高の料理は狗肉です。「羊頭狗肉」の狗肉です。犬肉というのは最高のごちそうになります。とくに旧正月を中心とした料理には、どの家でも犬を食べます。犬の肉は冬体が暖まるということで、大変貴重な存在になっています。

このような時代もありましたが、我々の先祖は仏教文化の過程で、肉食との関係がだんだん無くなっています。しかし、山肉つまり熊とか猪とか鹿というものは食べてもいいわけです。その場合日本人というのはなかなか頭が良く、鹿の肉とはいわず「もみじ」といっています。それから猪の肉は「ぼたん」といい、ぼたん鍋にして食べます。こういう点で日本人はなかなかユーモアがあります。猪の肉を食べるのではなく、ぼたんを食べるというわけです。なお信州では山肉の場合、カモシカ（クラシシ・アオシシ・ニク・イワシカ）が主流でした。

しかし、歴史時代になると、動物タンパク源では魚肉が中心となります。信州は山国で、海に関係無いのではないかというと、そうではなく古くから安曇族あづみといわれる海人族アマがいたところだといわれます。したがって、9月に穗高神社で行われる御舟祭は明らかに海洋民族タガミナカタノミコトのお祭りだということができます。今年は諏訪大社の御柱祭りがありますが、諏訪社の祭神である健御方名命は、オオタケニヌシノミコトと越後の姫川流域を支配していた奴國の酋長、淳奈河姫スノクニ、スナガワヒメとの間に生まれた御子だとされています。このことは「古事記」や「日本書紀」に書いてあります。それを裏書きするように、諏訪湖には丸木舟があります。これは出雲系の丸木舟で、その北限は秋田県の男鹿半島です。今でも男鹿半島では大きな杉の丸太をくりぬいた舟が使われています。

それと同じ構造のものが、青木湖の湖底から発掘されています。また今でも諏訪湖で使われています。ただし材料が違います。諏訪湖の場合は杉がないためカラ松を使っております。ともかく諏訪湖では出雲系の割り舟がいまだに使われているわけです。この丸木は非常に安定していますから冬の季節風の強い時でも安心して漁ができるわけです。

こういうわけで、信州は山国でありながら海の文化、漁業文化を持っているわけです。「諏訪の湖タキは魚多し……」と『信濃の国』に歌われていますが、諏訪の文化は出雲文化であることを裏付けている民俗学的な資料が、いくつか残されています。

また、信州では海の魚をよく利用しています。今でも大町市では塩イカをつくっています。これは信州独特なものです。他の県では塩イカは売っていません。このように信州でも海の魚を十分に使ってきました。

よく「塩の道」といいますが、現在糸魚川街道を指します。この街道は千国街道ともいい、越後の人は松本街道といっています。夕方に糸魚川を出発したボッカが籠に入れた魚をかついで行くと、翌朝には小谷オタリに着きます。そして、その日のうちに大町へ、三日目に松本につきます。「一日塩」「二日塩」「三日塩」という言葉がありますが、遠くへ運ぶ魚ほど塩をたくさん魚にふりかけたわけです。そこで信州で一番おいしい魚を食べたのが小谷の人たちで、次が大町で、一番内陸部にある松本が

一番おいしくない魚を食べたことになります。

では、北信ではどうかといいますと、魚は直江津から入ってきました。そのため北信の方で一番おいしい魚を食べていたのは飯山の人たちでした。そこで飯山には肴町さかなまちという町名があります。名前のごとく越後からやってきた魚屋が商売をしている町でした。今でもその地名が残っています。この魚は飯山を経由して中野はおろか草津温泉まで運ばれていきました。当時草津温泉の海の魚は全部信州経由のものでした。そこで飯山はかつて大変栄えました。

長野に来る魚は、北国街道経由でやってきました。この街道は最初に新町に入るわけですが、長野の魚市場の変遷をみるとたいへんおもしろい。江戸時代には魚市場は岩石町にありました。今でも町に行くと当時の魚屋さんが残っていますが、店の戸を開けるとその下が地下室になっています。冬降った雪を全部地下室に踏み固めて入れておき、夏冷蔵用いたわけです。明治時代馬車が通るようになると、降った雪に砂利が混ざってしまうため、馬車が通らない4時頃に家中の人が起きて家の付近の道の雪をかき入れたわけです。このような家の間取りが今でも残っています。その後魚市場は明治21年に信越本線が開通すると千歳町に移り、第二次大戦になると18号線の若里に移りました。やがて、中央道や関越道が長野まで開通するとインターチェンジ付近にこの魚市場が移っていくと思います。このように信州人が魚の文化を持っており、交通手段の変遷とともに魚市場の位置も変わるというおもしろい現象を見ることができるわけです。

このように魚の文化を抜きにして日本人を語れないと思います。ヨーロッパでは、カトリックの強い国ほど魚をよく食べます。ポルトガル、スペイン、イタリアなどではたくさんの魚を食べます。これらの諸国では、キリストが処刑された金曜日には肉を食べられないので、魚をよく食べるわけです。

日本も仏教の戒律で、獣の肉を食べることを禁止しました。このような建て前があるため魚を大量に食べることになりました。

その場合、日本人はヨーロッパ人とどのように違うのかというと、生の魚を食べることです。江戸前の寿司や刺身がそういうことです。日本人の食文化で特徴のあることは、醤油と香辛料のワサビです。これと生の魚と結び付いた食文化です。

同じ東アジアでも韓国・中国へ行くと生の魚を食べません。しかし、厳密にいいますと、中国でも例外がありまして、華南の広州・香港に行くと一部の人が生の魚を食べています。ただし、東南アジアでは全く食べません。

世界的にみても生の魚を吃るのは日本人とエスキモーとアメリカインディアンだけです。彼らはアジア大陸から渡来したわけですから、東北アジアとつながっています。世界46億の人類の中非常にユニークな食文化を持っているのは、日本人とエスキモー・アメリカインディアンなのです。ちなみに、エスキモーというのはインディアンの言葉で「生肉を食べる人」という意味です。私たちにはエスキモーやアメリカインディアンと共通の文化を持っているわけです。

それでは、序論はそのぐらいにして、信州の魚の文化についてお話ししたいと思います。

信州は山国であるためイワナとヤマメなどの渓流魚に特徴があります。このイワナとヤマメは棲み分けをしています。つまり、水温が13度から15度以下がイワナ、以上がヤマメということになっています。両者の共通点は何かというと、サケ科の陸封性の魚であることです。氷河時代は海に下つたけれども、その後暖かくなると海に下れなくなって渓流の冷水のところにだけ生きているのが、陸封性の魚です。それに対して、稚魚が海に下り、その後成魚になると川に帰ってくるというのが、遡河性の魚です。サケ科の魚にはこの2つがあります。イワナにしろヤマメにしろ陸封性です。ところが、ヤマメはおもしろい性質をもっていて、雌の多くは川にいないで海に下って、サクラマスになります。ヤマメの雄はこの辺の言葉で言うとズクが無くて海に下らない。昔から「くだらぬも

の」と言います。これは京都から下るものには灘の酒のように良いものが多くあるのに対し、地方から京都へ行くものにはろくなものがないことを表しています。ところが、魚は下るものの方がいいです。人間もそうだと思います。男と女を比べると女の方がズクがあります。ヤマメの場合、雌の大部分は海に下ります。海に下って大きくなつたサクラマスの雌が千曲川へ帰つてくると、ズクの無いヤマメの雄が成熟しており、ノミのような夫婦になります。雌の方が体は大きいが、数は雄の方が多い。海に下ると天敵が多いから生存率が非常に低いです。そこで、一匹のサクラマスに20匹もヤマメの雄が群がつてきて、けんかをして一番強いやつが交尾をするのです。ヤマメの雄とサクラマスの雌はもともと同じなので、受精して立派な発眼卵ができるわけなのです。このようなことはあまり教科書には書いていません。サクラマスとヤマメは別なものとして書いてあります。たまたま生活環境が違つていたため、一見違つたものに見えます。

さて、渓流魚の女王といわれるイワナですが、これもまた魅力のある魚です。博物館の展示の中で、イワナがカワマスやヤマメと一緒に水槽の中に入れられています。充分に餌を与えないどうなるか。まず、カワマスがイワナに食べられてしまいます。イワナは食欲なので、一緒に入れておくとまずヤマメやカワマスを背びれから食べて行きます。背びれが食べられて白くなつたとなると、これは餌が足りないのですぐにあげなくてはいけません。カワマスやヤマメを食べてまだ餌が無いとなると、イワナは互いに共食いをします。イワナはヘビを食べてしまうくらい食欲な魚です。

また、イワナに関しては「岩魚止」というものがあります。これはイワナの棲息範囲を示すものです。高度1200メートルのところもあれば、1800メートルのところもあります。また、あとでアカウオの話が出てきますが、「^{ツバメ}止」もあります。どこまでウグイが棲んでいるのかということです。これは各河川の勾配や流水量によって変わってきます。一緒に行った案内人に山を歩きながら、「ここでは岩魚止はどこですか」と聞くのは楽しいことです。

さて、信州の山の中はイワナの豊庫ですが、日本で一番豊富にイワナがいるところはどこかというと、それは黒部川でしょう。黒部渓谷を行くと、渓流地帯に「上廊下」というところがあります。平小屋からの上流部です。ここは日本で最高のイワナの漁場です。

信州には有名な猟師たちがいます。たとえば上高地の上条嘉門次です。あるいは大町野口新田の遠山品右衛門は「黒部の主」です。品右衛門や嘉門次や遠山林平（品右衛門の弟子）や小林喜作などが、なぜ黒部川へ行ったのかというと、針ノ木峠を越えて黒部へ行った方がはるかに量が捕れるからです。1時間で200尾も獲れたという話を聞きます。このような話は話し半分にしても1時間に100尾も獲れたことになります。

リョウシには2つの意味があります。夏は漁師で、冬は猟師なのです。なぜ夏に漁がいいかというと、イワナがうまくなるのが4月以降からせいぜい8月いっぱいまでだからです。9月から10月にかけてイワナは産卵するので、やせこけて脂も無くなり、おいしくありません。深い山だと5月から8月までが漁のシーズンで、そのシーズンが終わると猟師たちは里へ下りてきます。そして、10月から（大正からは11月から）、針ノ木峠を越えてカモシカを獲りに行きます。このような彼らの生活はちゃんと季節的になりわいを分けていました。

では、黒部で獲ったイワナはどうするのかというと猟師たちはいろいろな工夫をしています。まず、自分たちで食べるイワナは貯蔵するためにクマザサで巻きます。冷蔵庫などありませんからクマザサに巻きます。クマザサというのは葉に白い隈取りがついているからクマザサというのであって、ペアという意味ではありません。

クマザサがどういう意味があるかというと、みなさん刺身を見て下さい。刺身や寿司の下に敷いてあります。殺菌力があるから敷くのです。ところが、私の今居ます小金井市では寿司をとりますとビニールのクマザサです。しかし、銀座あたりで寿司を食べると本物のクマザサです。だからこ

これから寿司を食べるとき、下に敷いてあるクマザサが本物なのか偽物なのか、これによって店の品定めをすることが大切です。北海道には植生的にクマザサがありません。ところが北海道の松前町に行ってみると城のまわりにクマザサが植えられています。だから本土から渡ってきた松前藩士はせめて寿司だけは本土なみに食べたいとクマザサを持って行って植えたわけです。それが日本人の心なのです。ところが、今の寿司屋さんの大部分はクマザサを忘れた寿司を出す。歌を忘れたカナリアではなくて、クマザサを忘れた寿司屋さんです。いかに堕落しているかということの一つの証明になります。信州ではそういうことはあまりないと思いたいのですが、残念ながらあるのが現実です。

さて、クマザサを巻いたイワナを滝壺に置いておくのです。そうすると一週間くらいは全くかわりなく食べられます。こういうように秋山郷の漁師は今でも魚を貯蔵しています。

魚の貯蔵法の一つに燻製があります。黒部の平小屋に行くとイロリがありますが、それはただ炊事や採暖のためではなく、イワナの燻製を作るためのものです。燻製を作る場合何がこつかと聞いたところ、ミヤマハンノキでつくるのが一番いいと言います。シナノキなど他の落葉樹でやるものかまわらないが、やはり一番いいのはミヤマハンノキだといいます。これは私の知っている獵師、遠山林平氏に聞いた話です。先年彼は亡くなってしまいましたが。ミヤマハンノキでやると、イワナの燻製が飴色にあがるので。今この技術を持っている唯一の人は、王滝村の濁川温泉の経営者半場千秋氏だけです。ここのおやじさんの作ったイワナの燻製は、すごくおいしいです。たいへんやわらかくて。これでビールを飲むとやめられなくなってしまいます。イワナの燻製のようにうまいものが信州にあるのだけれども、それはお店には出ません。現代の信州人は勉強心がありません。こういう先人が持っているイワナの燻製技術を使えば、自制心が無くなってしまうくらいおいしいものができる。それが忘れ去られようとしています。かつて、日本を代表する登山家の楨有恒氏などが最も好んだのがこの燻製なのです。上高地ではたいしてイワナが獲れないで、ポッカが8貫づつ背負って黒部から運んできました。これが燻製イワナロードです。塩の道だけでなく、イワナの道もあったのです。

そのほかにどんなものがうまいのかというと、クマザサで巻いたイワナの蒸し焼きです。イワナをクマザサの葉で巻いておき、穴を掘って石を焼きます。焼いた石の上にクマザサで巻いたイワナをのせ、その上にさらにクマザサを敷いて上から土をかけます。イワナのササ巻きしたものを蒸し焼きにするのです。隣の新潟県粟島に行くと、石を焼いて魚を蒸す料理法があります。それからポリネシア料理にはいわゆるストーン・ポイリングがあります。イワナのササ巻き蒸しは、一種のストーン・ポイリングだと思います。このような料理法を残していたのはどこかというと、乗鞍山麓の番所原パンドコハラです。今ここは、乗鞍高原というハイカラな名前になりましたが。ここに来て、ホテルや民宿のおばさんに聞いてもこのことは誰も知りません。私が昭和の初めまであったことを文献で知っているだけです。

秋山郷に浩宮様がみえたことがあります。和山温泉に仁清館という旅館がありますが、その関谷清さんという御主人が、「先生、よわった。浩宮様がいらっしゃるが出す料理がない」と言うのです。「うまいものくれちゃいけない。普段から浩宮様はうまいものを食べいらっしゃるから、秋山のジャガイモの煮っころがしを出しなさい。それが一番いい」と言うと、「それだけでは」と言うので、「それならイワナをササで巻いて蒸し焼きにして出しなさい」と答えておきました。これが当つて「浩宮様がおかわりしてくれた」と関谷氏が喜んでくれました。

こういうわけで、信州にもうまいものがいろいろありますが、これを出さずにまずいものを出しているところに問題があります。

うまいイワナ料理に王滝村の「万年寿司」があります。信州人はなかなか発想が豊かです。万年

寿司とはイワナの馴れ寿司のことです。江戸前の寿司は生の魚を使う押し寿司ですが、馴れ寿司は塩漬けした魚を炊いたご飯で醸酵させたものです。これは慣れないと抵抗があります。上方風の寿司で、滋賀県のフナ寿司や京都のサバ寿司と同じです。また、和歌山県や奈良県には柿の葉で巻いたカキノハ寿司がありますが、これもサバ寿司です。こういう馴れ寿司をイワナに応用したもの、これが万年寿司です。

こういうわけで、探してみれば信州にもすばらしい料理がたくさんあります。けれども、地元へ行っても多くが忘れられている。普段から地域で作っているものにご馳走は無いと思っているからです。スーパーや農協で買ってきただのがご馳走だと思っている人が多いのです。そこが少しおかしいのではないかと思います。信州を代表する魚、イワナもただ塩焼きにして食べるというだけではのうがありません。信州にはいろいろな調理法があることをもっと知っていただきたいものです。

次に、信州の漁業について話を進めたいと思います。信州の漁業でまず触れなければならないものに諏訪湖の漁業があります。

信州では諏訪湖などとは言いません。諏訪湖と言うようになったのは近代以降のことであって、昔は諏訪の海と呼んでいました。『信濃の国』にも「諏訪の湖には魚多し」とうたわれています。これはドイツ語でも同じです。定冠詞は違いますが、湖でも海でも See です。

この諏訪のウミ(州羽海)ですが、こここの漁業は大変おもしろい。諏訪湖はご承知の通り大変浅いです。一番深いところで7メートルしかありません。諏訪湖はできた当時水深200メートル以上もあったのですが、たくさんの川があるため急速に土砂が堆積して浅いところでは1メートルにみたないような湖になってしまいました。浅いゆえに冬に凍るわけです。野尻湖はなぜ凍らないかというと深いからです。野尻湖で死ぬ人がいますが、なかなか死骸が出てきません。この湖には湖底森林があるからです。野尻湖は、斑尾火山の熔岩が流れてきて池尻川をせきとめてできたものです。そこにはかつての森林が下に残っています。深いと下から水が熱を補給しますから凍らない。ところが、諏訪湖の場合は浅いものだからすぐに凍み上がります。

ご承知だと思いますが、室町時代から御神渡りの記録があります。御神渡りは上社の男の神様が下社の女神のところに通う恋の道であると言われます。この御神渡りは日本だけでなく、北海公園など北京の人造湖にもすべて御神渡りがあります。ただし、北京では御神渡りとは言いません。日本人の方が中国人よりも情緒豊かで、御神渡り現象を詩的に説明しています。

氷の湖で行われるのが氷上漁業です。まず「氷引き」という漁業があります。諏訪湖ではみなさんご存知だと思いますが、30センチ凍ると上を戦車が走っても大丈夫です。昔は飛行機が諏訪湖の上へ着陸したことがあります。厚く凍るとそこへ穴を2つあけ、こちらの穴から網を入れて、あちらの穴へ引いて行く。これがようするに氷引きです。以前ですと、諏訪湖には氷引き漁業が48ヶ所も行われていました。これは一種のかき網ですが、網を建てて引いてきます。これは地曳き網といつてもいいかと思います。獲った魚は20貫入りの俵に入れるのですが、何十俵も獲れたという時代がありました。

それから「ゴロ曳き」という漁法もありました。これは島木赤彦の諏訪湖を描いた文の中に出でています。「タタキ」と言って、刺し網のように網を氷の下に張っておいて、氷を網に向かってたたいていく。そうすると氷の下にいる魚はあわてて逃げてきて、みなその網にかかりてしまいます。これがゴロ曳きというもので、明治20年頃まで行われていた漁法です。

今お話ししたような氷曳きやゴロ曳きといった漁法は、現在禁止されています。たくさん獲れる漁法だと魚が一網打尽になってしまうからです。明治以後乱獲が行われるようになり、諏訪湖の漁業はこれではだめになってしまったので禁止されたのです。これは諏訪湖だけではありません。

明治以降、漁業が自由になると、その結果大量の人が漁業に従事して魚を乱獲してしまいました。

そこで、長野県では当時の漁法についての調査をしています。当時の漁法が全部絵で描かれていて、大変わもしろいものです。新潟県のものは私ももらっていましたが、県のお役人がガリ版で漁法をスケッチしたものです。それを『日本のサケ』(NHKブックス)という本の中で利用させていただきました。また、信濃川の漁法については農商務省が日本中の漁法を調べた資料の中にものっています。

明治政府は乱獲につながるような漁法をやめさせようというための資料として作ったのです。その中にゴロ曳きだとか氷曳きがあったわけです。

さて、水上漁業の中には展示物としても出ていますが、「ヤツカ」漁があります。これは漢字で書くと「矢塚」です。秋のうちに湖に石を沈めておきます。そうすると、冬になると魚は寒いものでそこに沈めた石の中に入るわけです。畑の中に石をたくさん積んだものを「ヤックラ」と呼びますが、それと同じ語源です。石の中に集まってじっとしているところを、氷を割って石の周囲に網を魚が逃げられないように張ります。そうしておいてこの石を氷の上にすくい上げるわけです。そうするともう魚の逃げ場が無いので、それを網ですくい取るのです。これが「ヤツカ漁」です。これは諏訪湖独自の漁法と考えていいと思います。ただし、これは深いところではダメです。水深が2メートルから3メートルくらいのところに、石を100個から200個入れます。この石を柄の長いクワですくいあげなくてはならないので、あまり深いところではできないのです。ヤツカは今諏訪湖へ行ってもいくつもありません。秋のうちにたくさんの石を入れ、それを囲い、中の石を1つ1つあげて中の魚を獲るやっかいなことを、現代人はばかばかしくてやれないとおもいます。

その他に諏訪湖の漁業でおもしろいものは鵜飼いです。鵜飼いというとみなさんは岐阜県長良川を思い出すかもしれません、信州にも江戸時代には常まれていたのです。諏訪湖の花岡（現在岡谷市）がそうです。鵜飼いは世界的にみてもあまりありません。日本と中国だけです。照葉樹林文化の一つの漁法といわれます。みなさん桂林に行かれた方もあるかと思いますが、桂林のような中国華南の地域にはいたるところで行われています。これが日本に伝わったわけです。岐阜の鵜飼いの鵜使いは7人しかいません。あれは世襲であってだれでもなれるというわけではありません。その7人の人たちは宮内庁の役人です。宮内庁の嘱託になっています。一年間の給料は驚くなかれ3000円です。これでは生活していくので彼らは岐阜市の臨時職員になっています。観光用に岐阜市から月給をもらっているのです。岡谷市でも市職員に鵜使いをしてもらい、鵜飼いを復活させたら楽しいでしょうが、おそらくそれはできないことでしょう。

さて、この諏訪湖の氷が解けると「明海」です。根室の方に行くと海あけと言います。流氷が去つて行くことを言うのです。それと同じように諏訪湖では明海といいます。ウミが空ける、氷が無くなるという意味です。

そうなると「キヨメ網」が行われます。これは霞網を使ってやります。だから霞とも言います。

それから投網も行われます。この投網漁も一人が打つとそのあと逃げて行くやつを捕るためにもう一人が打つというやり方もあります。フナとかコイはこういうとり方が多いです。

ここで今少し注目してみたいことがあります。かつて諏訪湖の漁業の中で非常に重要だったのはウナギです。大正の末までは年一万貫以上のウナギが獲れたといいます。今は獲れません。というのは、ウナギはサケと同じように海に下っていく魚だからです。秋葉ダム、佐久間ダム、平岡ダム、泰阜ダムと次々とダムが出来たため、天然のものが遡ってこないので、養殖したもの放流したのが獲れるだけです。それで諏訪湖のウナギが全滅してしまったのです。

諏訪湖というとワカサギが有名ですが、現在ワカサギが全漁獲の3分の1を占めています。しかし、ワカサギがたくさんとれるということはあまりいいことではありません。ワカサギやフナやコイという魚は水質汚染に強く、少しくらい汚い水でも平気です。また、この辺にはジンケン（オイ

カワ）が多くいますが、ジンケンの多い川もあまりきれいな川とはいえません。こういうことで、諏訪湖でコイの生簀養殖をやっているのはコイぐらいしか生簀で飼えないということを示しています。ワカサギも同様です。

ワカサギが諏訪湖に入ってきたのは大正3年のことです。諏訪湖沿岸は観光地や温泉が多くあり、汚染がどんどん進んで行きました。汚染が進んでウナギなどの魚が獲れなくなりました。そこで霞ヶ浦からワカサギの種を入れて人工ふ化して放流している。これが現在諏訪湖における最大の漁業になっているわけです。

それから諏訪湖の浅いところではジョレンでシジミを採っていますが、このシジミも幕末の天保年間に甲斐国から移入されたものです。それから、佃煮にされているエビですが、これは18世紀末の寛政年間に霞ヶ浦から手長エビを入れています。このように長野県では現在たくさん獲れるものの中には移入されてきたものがたいへん多くあります。カワマスもそうです。昭和4年に上高地の明神池に養魚池が作られましたが、そのときアメリカから移入されてきたカワマスが現在増えているのです。アメリカから来たカワマスとともに居るイワナが自然交配してF₁ができているというのが現状です。だから今上高地で泳ぐイワナと称される魚はほとんど純粋なイワナではありません。

このように川の生態系も人間が手を加えることによりどんどん変わっていくわけです。諏訪湖においても同様です。

なお、諏訪湖の漁業でもう一つ忘れてはならないことがあります。漁業権の問題です。封建時代には漁業権は自由ではなく、三浜といって、小和田（諏訪市）・小坂（岡谷市）、それと先ほど述べた花岡（旧湊村）の三つの集落しか魚が獲れなかったのです。明海の場合はこの三集落だけです。しかし、冬冰が張るともう2つ、有賀と岡谷がそれに加わりました。水上漁業の場合でも5ヶ村しか漁業権はありませんでした。他の村々は切浜といって、藩の許可を得たときだけしか魚をとれませんでした。海の場合、海岸に集落があるとその前は地元漁業権といって普通は集落の前はその集落だけが漁業権を持っていますところが、地元漁業権のない集落が全国各地にあります。それと同じように諏訪湖にもたくさんの集落がありましたが、江戸時代に魚をとれたのは5つしかなかったのです。

明治になるとそれが自由になり、乱獲が行われるようになりました。それではいけないということで、いろいろな漁法の制限が行われたというのが先ほど述べたことです。

ここで我々長野県人は反省しなくてはならないことがあります。長野県人は漁業に関する限り略奪専門で、漁業の保護だとか水産資源の保護をあまりやりません。信州人というのは人柄がいいと言われますが、魚に関しては非常に悪い。魚を保護するには、ただ魚を獲ってはいけないだけではなく、禁忌（英語ではタブーと言います）がなくてはなりません。東北地方に行くといろいろなタブーがあります。たとえば、サケが川を遡ってくるとき、「大助が帰ってくる日には絶対にサケを獲ってはいけない」とか「大助が遡ってくる日にサケを獲った人は三日間以内に死ぬ」とかいわれます。すぐ死ぬのではなく、3日間以内に死ぬというのがいいところです。だから、大助が遡ってくる日には3日間は実質的に禁漁になってしまうのです。昔から言い伝えて、魚を獲ってはならない日が3日間ある。この日に遡ってきたサケの子が天然ふ化して帰っていくのです。長野県の場合どこに行ってもそういうタブーがありません。遡ってきたらみなかたっぽしから獲ってしまう。この辺を我々は反省しなくてはいけません。

なお、花岡や小坂といった諏訪湖の西岸の集落では割り舟（丸木舟）が使われています。小和田など東岸の方はどうちらかというとサンバ舟という板をはぎ合わせた舟です。サンバ舟を使っているところは波が静かなところです。季節風をまともに受けるような西岸が割り舟になっています。諏訪湖で今でも丸木舟が残っているのはどこかをみると、地域の自然条件と漁業の関係がはっきりわ

かります。

諏訪湖はそれくらいにして、次に川の方に移っていきたいと思います。^サ梁漁ですが、梁というの
は上り梁と下り梁があります。サケも梁で獲る場合があります。一番有名なのがアユです。こうし
た梁が一番発展しているのが天竜川です。天竜川の梁では、4月から7月にはハヤやフナ、9月か
ら10月にはクダリウナギ、10月から11月にはワカサギ、というようにいろんな魚が獲れます。隣の
群馬県に行っても梁が多いです。ただし梁というのは川をせき止めるわけですから、洪水が一番こ
わい。洪水で上から流木が流れてくるとこわれてしまいます。梁漁というのは労せずして獲れるわ
けですが危険も多い。信州の場合は荒れ川が多いため、梁をかけるにはリスクが伴います。そこで、
信州には梁が少ないのだと思います。

信州には柴崎高陽先生の写真にもありますが、「つけ場」があります。これは種付け場の意味です。
ハヤ（信州ではアカウオ・ウグイともいいます）は産卵期になると体に赤い婚姻線が出ます。これ
は産卵期のハヤの体側に赤い線が出ることです。サケでもベニザケは川を遡ってくると体側にやは
り赤い線が出てきます。これも婚姻線です。シロザケの場合は婚姻線がでません。そのかわりオス
の場合鼻が曲がってきます。これを鼻曲りザケというわけです。これが一種の性徴です。性が熟す
ることを意味します。この婚姻線に赤い色が出てくるのでアカウオというわけです。これが春にな
ると千曲川に産卵にやってくる。産卵場はどこでも同じですが、小さな玉石があり、下から湧水が
出ているところというのが産卵に適しています。そういう種付け場を人工的に作ってやります。そ
こに交尾にやってきたウグイを投網でとるわけです。これがいわゆる信州を代表する付け場漁です。

産卵にやってくるアカウオを獲るのはサケの場合と同じです。明科から穂高にかけての地域は、
犀川になる奈良井川や梓川、高瀬川という川が集まっていますが、そこにサケが集まっています。
そこが信州で一番サケの獲れるところです。ウグイと同じやり方です。ただし違う点があります。
メスのサケを獲ってエラのところを麻ひもで結んで縛りつけて、他のサケを誘い寄せます。そうす
るとオスのサケが求愛に来ます。そこを投網で獲ってしまう。メスが獲れない場合はオスを縛つ
ておくと、オス同志がけんかにやって来ます。それを投網で獲ります。いわゆるオトリ漁です。友釣
と同じです。こんなふうにウグイのツケバやサケのオトリ漁に投網を使っていました。

信州は天然の魚だけでは生活できないので、養殖が行われてきました。この養殖で一番古いのが
^{ヨウリ}水田養鯉です。上高地の明神池には養鱒場がありました。水田養鯉は佐久ではじまりました。水田
養鯉にはいろいろな利点があります。水田でコイを飼うと水田の草取りがいらなくなります。一年魚をはなすと中で虫を捕って常に動きまわるので草が生えません。また、害虫も食べてくれます。水田養鯉は生態系にかなったまことにすばらしい養殖法だと思います。ところが今は水田養
鯉がほとんど消えています。除草剤を使うため飼えないのです。それが溜池にかわっているわけです。
塩田鯉というのは溜池養鯉で、第二次大戦後になってから発展したものです。泥臭いため塩田
の鯉などはすぐ食べられません。そのため塩田の鯉は千曲川の水で1ヶ月以上泥抜きをしてから調
理されます。佐久の人たちは昔から「鯉で儲けるには炬燵で飼うことだ」といっています。炬燵で
飼うというのは、秋に群馬県の碓氷鯉を買ってきて、家の前の生け簀で飼い泥を抜いてから、佐久
鯉という名で高く売ることです。このように養鯉は投機的なものだったのです。千曲川の水はきれ
いなので、泥抜きするにはうってつけなわけです。製糸業が華やかなりしころ、佐久の人たちは天
秤棒をかついでたらいに入れたコイを諏訪まで売りに行き、関東大震災後の東京市場では佐久鯉は
大変なものでした。しかし、今佐久鯉といってもすっかり衰えてしまいました。どうしてかと言う
と、思わぬ伏兵が現れたのです。かつて信州のコイが一番多かったわけですが、現在日本で一番コ
イの養殖が多いのは茨城県です。霞ヶ浦は汚染で有名な湖ですが、そこで養殖されています。今筑
波学園都市は日本で汚染がひどい霞ヶ浦の水を使っています。水質の悪い水でも育つのがコイです。

霞ヶ浦では汚染が進んで魚が獲れなくなったので、生け簀でコイを飼っているのです。それが過剰生産になって、諏訪湖の生け簀養鯉も採算に合わなくなりました。霞ヶ浦の汚染が長野県の養鯉にも大きなインパクトを与えています。長野県におけるコイの養殖をみると、昭和48年がピークで、5107トンの生産がありました。しかし、現在は半分以下になっています。生産が減った原因は何かといえば、それは霞ヶ浦の汚染だと言えます。

ニジマス養殖の方ですが、ニジマスはもともとカリフォルニアのシエラネバタ山脈原産のサケ科の魚です。サケ科の魚にはサケ属・イワナ属・ニジマス属があります。ニジマス属を代表する魚がニジマスです。これは陸封性の魚です。アメリカから入ってきたとき、レインポートラウトを直訳してニジマスとしました。ニジマスは明治10年に入ってきました。現在世界的な産地はデンマークです。日本ではマスというとニジマスをさすくらいで、信州にも多く養殖されています。しかし、これはあまりうまいものではありません。養殖の魚はイワナにしろヤマメにしろ水分が多くてうまくありません。しかし、養殖の魚も燻製にすると天然ものと変わらなくなります。養植物をうまくするには燻製にすれば最高です。

最後に、サケの話をしたいと思います。サケ科サケ属の中には、ベニザケ・ギンザケ・マスノスケ(キングサーモン)・シロザケ・サクラマス・カラフトマスがいます。北ヨーロッパやイギリスなどの川に遡ってくるサケは大西洋サケ(アトランティックサーモン)で、これはサケ科ニジマス属の魚です。厳密にはサケではありません。大西洋サケにはロマンがありません。テームズ川などを遡っていって卵を生むと海に帰っていきます。日本のサケはサケ科サケ属で、卵を生むとことごとく死にます。それに対し、ニジマス属やイワナ属は3回も4回も卵を生みます。イワナは1回で死んでしまうものもいますが、やはり大部分は3回以上卵を生みます。そこが同じサケ科でもニジマス属・イワナ属との違いです。そこがおもしろいところです。

サケ科サケ属というのは大西洋にはいません。それから南極にもいません。つまり北太平洋にしかいません。言いかえれば、アメリカ・カナダ・ソビエト・日本しか獲れないことになります。それ以外の国にはサケ科サケ属の魚はいません。一般にサケ・マスと言いますが、ベニザケはピンクサーモンと言っていますが、昔はピントラウト(ベニマス)と言っていました。マスという名称に惑わされるといけません。生物の分類は生殖の仕方で分けられます。

ベニザケは一番高くておいしいです。ベニザケ、ギンザケ、マスノスケも北洋でしか獲れません。マスノスケは英語でいうとキングサーモンです。一番大きいものは体長1メートル50センチ、体重80キロもあります。日本語では、なんとなく魅力の無い名前です。キングサーモンというと魅力があります。シロザケというのはホワイトサーモンです。これは私たちが普通に歳取り魚に使うものです。千曲川に遡ってきたのはこのサケです。アラスカではこれをドックサーモンと言います。犬ぐらいたしか食べないのでドックサーモンというのです。カラフトマスは北海道、樺太などで獲れるサケです。富山の鱒寿司は普通サクラマスで作りますが、材料が足りないとカラフトマスも使います。見るとすぐわかりますが、サクラマスの方が色が赤いです。

このようにサケ科サケ属のサケでもこんなに種類があります。私たちは普通サケというとベニザケ・ギンザケ・シロザケをさし、マスというとサクラマス・カラフトマスをさしています。しかし、科・属でいうと同種です。

サケというのは「母川国主義」といい、たとえ経済水域200カイリ外にいるものでも、アメリカやカナダやソビエトへ帰るサケにはそれぞれ国籍があるのです。日本の北洋漁業というのは、アメリカやソビエトやカナダに帰っていくサケを公海上で獲っているのです。日本では北洋漁業は遠洋漁業だと言っていますが、向う側からみれば自国の沖合で魚を獲られているようなものです。母川国主義というのは今では国際的に認められています。千曲川で放したサケは長野県の戸籍があるわけ

です。

シロザケは川に放した場合、生きて帰ったサケのうち70~80%が母川に戻ってきます。残りの20~30%はどこか違う川へ行ってしまいます。ところがベニザケの場合100%がその川に帰ってきます。なぜシロザケが70%でベニザケが100%なのか。これは知能指数の問題ではありません。ベニザケの場合はふ化したらその年はずっとその川にとどまります。次の年に下るのはまだいい方で、多くは3年目に海へ下っていきます。そこで川の水をよく覚えているわけです。シロザケの方はわずか2ヶ月くらいで海に下ってしまうので、川の水をあまり覚えていないものは、とんでもない川へ行ってしまうのです。

長野県の千曲川、犀川と姫川にはシロザケとサクラマスが遡ってきます。ところが、太平洋にそぐ天竜川や木曾川にはサクラマスしか遡ってきません。諏訪大社で神前に奉納されるのはサクラマスです。ただし、サクラマスも立派なサケですから、サケは北信や中信だけでなく、南信にも遡ってきたことになります。しかし、この事実を長野県のマスコミはいっさい報告しません。言い換えれば、サケ・マスに関する知識にまことにうといといわざるをえません。

現在、野尻湖ではヒメマスが養殖されています。ヒメマスとはベニザケを湖で飼ったものです。ヒメマスの刺身はベニザケと全く同じ味です。たまたま野尻湖で育てるからヒメマスといい、それを川に放流して海に下るとベニザケになるのです。ベニザケが遡河性でヒメマスは陸封性といった違いです。

今から1000年前の平安時代に日本で一番サケが獲れたのはどこかというと信濃国です。新暦で10月から11月になると千曲川が真黒になるほどサケが遡ってきました。なぜ真黒になるのかというと、サケは最初は銀毛といって銀色をしているのですが、それが信濃川の河口に入って真水につかると体がだんだん黒ずんでいます。これを「ブナゲ」といいます。多摩川などを遡るサケはみなブナゲになっているのでコイにまちがえられて獲られてしまいます。確かに上から見るとコイにそっくりです。つかまえてみてやっと分かります。真水に入るとサケは一切餌を取りません。サケが遡ってくると他の魚を食べてしまうというのはとんでもない話です。真水に入ってからは、あとは生殖のためだけに川を遡っていきます。

海にいるサケは脂が多すぎます。少し川を遡って脂がとれたころがおいしい。だから日本で一番サケがおいしいのは、三面川の村上市です。三面川を遡ってくる過程で、脂が適度にとれたものいろいろと加工するからおいしいのです。加工すると脂が出ますので、形は悪いけれども銀毛よりもブナゲのがいいのです。

今から1000年前は何千万尾という単位で遡ってきたと思います。東北地方はもっと遡ってきたはずですが、当時の東北地方は奈良や京都の律令政府から余りに遠く、平安時代には信濃国・越中国・越後国からサケを献上されていました。

この辺で獲れたサケはさまざまに加工して送られています。「楚割鮭」、これは腹わたを取って干したサケで、江戸時代には干鮭といわれていました。平安・奈良時代には楚割鮭が主流です。新巻鮭はありません。塩が貴重なため干したわけです。氷頭はサケの頭を干したもので、サケの頭は干すと氷のように透き通ってきます。背腸はサケの背骨についている血を塩辛にしたものです。鮭子はサケの卵です。

こういうものを税（調）として貢納していました。一番多いのは楚割鮭です。これを竹の籠に入れ、馬に積んで出します。こうしてはるばる京都まで送っていました。これは貴重品なため途中で盗賊に盗まれたりしました。

その当時、善光寺から京都まで何日かかっていったと思いますか。信濃の国府松本から21日かかっていますので、善光寺平からだともっとかかっていたでしょう。当時の人間はあまり栄養状態がよ

くなかったので、あまり遠く歩くと死んでしまいます。だからゆっくり歩いていったわけです。

武田信玄が信濃を支配したとき、「鮭川」という制度を作りました。サケの獲れる川が鮭川なのですが、これがすべて税の対象になっていました。10本獲れたら4本出すというきびしいものです。

明治時代の諏訪湖の漁獲高と現在のを比べると、統計の上では現在のが多いです。明治時代をみると、ヤツカを3つ作っても1つくらいしか報告していません。そこで、統計だけを見て、江戸時代や明治時代に比べて、今のが漁獲高が多いというのは科学的ではありません。統計の精度が高くなった現代と非常に低かった時代と比較しても意味がありません。そこで、漁業の場合には歴史的にみる時に注意しなければなりません。

長野県でサケが消えたのはなぜでしょうか。それはダム建設のせいです。飯山市の東北端に西大滝ダムがあります。以前は上田から西大滝まで通船が運航していました。私の小さいころは、橋があると帆柱を倒し、橋をやりすごすとまたすぐに帆柱を立て白帆を張るといった光景がみられました。子供心に、すごい技術だなと感じました。その通船の終点が西大滝で、そこは名前のごとく早瀬で急流になっていました。このようなところには岩盤が出ていて、ダム建設の適地です。犀川をみると、小田切ダム・笹平ダムなどはみな岩盤のところにあります。ダムを設けた場合、魚道をつくらないと、サケが遡ってこれません。魚道を魚梯ともいいます。梯子段のことです。魚道に一定の流水がないと、サケはのぼれません。水がたくさんあるとサケは2メートルもジャンプができますが、西大滝ダムの魚道は水がちよろちよろ流れているだけです。これではジャンプしたサケがけがをしてしまいます。現在、普段は1秒間に0.3トンの水を魚道に流していますが、その10倍流さないとサケは遡っていけません。ダムが作り始められたのが昭和9年で、完成したのが昭和11年5月です。作る過程でサケの遡る数はだんだん減っていました。当時の魚道は階段式とエスカレーター式との2つがありました。エスカレーター式のものはサケがのると上にあがるようになっていました。しかし、これがかえって仇になりました。その地域の漁民が魚道で待ちかまえてみんな獲ってしまったからです。そこで4年たったらサケが消えてしまったのです。あの辺の漁民はひどいもので、全部獲ってしまえば、サケ資源が消えてしまうということを忘れていました。

なぜ昭和31年以来毎年厳しくソビエトが制限してもサケ資源が減るのか。これははっきりしています。日本の漁民は、たとえば30トンの割り当てがあったとすると、極端な場合90トンのサケを獲るわけです。そうして、港に帰ってくるとき、単価の安い順に捨てていきます。単価の高いものから30トン残すわけです。だから制限しているにもかかわらずどんどんサケが減っています。捨てられた大量のサケがカムチャッカの沿岸に流れ付いたりします。カモメなどの海鳥は日本語、ソビエト語も知りませんが、日の丸をかけた漁船についていけば、餌にありつけることを知っているのです。日本の漁船が捨てているということをソビエトは知っているわけです。獲ったサケは捨ててはならないという厳しい規制をしなくてはいけません。それが守られないから世界のサケ資源が減っていくのです。

ダム建設に当たり長野県の漁協は魚道をつくらないことを条件に漁業補償をもらってしまいました。そのため、小田切、笹平など、犀川筋のダムにはいっさい魚道がありません。かつては上高地まで遡っていったサケはまったく遡らなくなってしまいました。アメリカでは河口から1600キロ上流にまでサケが遡っています。魚道がちゃんとあるためです。そこがアメリカと日本の違います。アメリカは自然保護に関しては日本よりはるかに進んでいます。日本ぐらいのダムであったら、魚道をちゃんとすれば上流までサケは遡ってきます。天竜川でいえば河口から諏訪湖までサクラマスは遡っていくはずです。そうすれば、昔ながらにマスを諏訪大社に奉納することができます。

いかにしてサケやマスを復活させるかが問題です。最後に長野県にはどうしてサケが帰ってこないのかということを話して締めくくりとしたいと思います。長野県では年に50万尾も放流してもあ

まりサケは帰ってきません。シロザケの回帰率は天然ふ化だと0.5%。これを人工ふ化にすると1.5%くらいになります。さらにそれを餌付放流つまり5センチくらいの稚魚にしてから放流すると3.5%になります。ただし、これは県ごとでだいぶ違います。一番回帰率が高いのは北海道です。しかし、北海道は見掛け上高いにすぎません。日本じゅうの放流サケはすべて北海道経由で北洋へ行き、また北海道経由で帰ってくるのですが、そのとき北海道沿岸の定置網にかかってしまうのです。千曲川に帰ってくるサケは、まず北海道の定置網にかかり、次に青森・秋田・山形・新潟諸県の網にかかりてしまいます。運動会の障害物競争と同じで、ようやく運のいいやつが戻ってこれるわけです。しかし、信濃川に入ってからも地曳網や刺網で獲られてしまいます。おそらく千曲川まで戻ってくるのは何万分の1という確率でしょう。

サケというのは北洋に行っている間に大部分食べられてしまいます。また、放流したときに、千曲川・信濃川でハゼなどの天敵に食べられてしまうことも多いです。稚魚を5センチにすると3センチで放流したものに比べ、倍の確率で戻ってくるようになります。今一番回帰率が高いのは岩手県です。岩手県は長野県とは少しやり方が違います。岩手県では、ふ化槽の中の砂利をつねにきれいに洗ってやり、糞などが溜まらないようにしています。だから、ビールスの発生が少なく、病気にならないのです。砂利も洗いやすいように、プラスチック製の穴があいたものを使っています。そこまで芸が細かいのです。こんなことをしているのは岩手県だけです。今岩手県は北海道以上に回帰率が高くなっています。岩手県では年間3万トン以上もシロザケが獲れます。北洋を除くと、今日日本の沿岸で獲れるサケの量は国内全部合わせて10万トンほどです。その3分の1が岩手県で獲られているわけです。

長野県のサケ回帰作戦で問題となることがあります。放流期日が遅いことです。4月中放流していますが、海に出るまでに1ヶ月かかるのだからもっと早く放流しなくてはいけません。千曲川は冷たいのでいいのですが、日本海に出ると暖流が流れています。対馬海流は真冬でも10度の水温を保っています。これが5月になると17度になってしまいます。冷たい水の川を下ってきて新潟の海まで来ると、そこは暖かい水なので、海に出すに河口で回遊している。やがて河水の水温があがっていくと、サケは13度くらいでおかしくなり、18度で死んでしまいます。これが問題です。どうすればいいか。サケの稚魚はふ化してからの積算水温が1000度になると放流できます。水温10度だとするとサケがふ化してから放流するまで100日かかることがあります。明科では水温は約8度ですから、放流するまでに125日の日数がかかります。しかし、13度まで加温して、循環式の飼育槽にしてやれば、放流までの日数が77日くらいに縮まります。そうすれば、今より早く放流できるようになります。長野県はふ化技術が日本一といわれていますが、新潟県の海はどうなっているかなど、サケの稚魚に対する気くばりが充分ではありません。

それから、長野県での放流を見てみると、上から水と一緒に稚魚を投げ入れています。これはよくありません。バケツを川の水につけて、静かに放流してやらなくてはいけません。上から放つことは、人間を5・6階の高さから蹴とばすのと同じです。サケの稚魚はびっくりして粘液を出してしまいます。この粘液は本来ビールスが進入したような場合に出すものです。こうして粘液を出してしまうと、万一本体が押し寄せた場合にもう出す粘液がありません。長野県ではこんな乱暴な放流をしているのです。これもサケに対する思いやりがないからです。

西大滝ダムには導水管がありますが、そこに稚魚が入ると水圧で死んでしまいます。そこで導水管の入口には電気カーテンを張って稚魚が入らないようにしています。しかし、本当に電気カーテンのスイッチが入れられているのか確認しておく必要があります。東京電力の人など忘れているかもしれませんから。

諏訪湖の水は汚いと言われますが、総量では諏訪湖よりも千曲川の方が汚れています。したがつ

てサケは千曲川へ帰らず、信濃川の支流の魚野川などの清流へ行ってしまいます。サケを帰らすためには、ふ化放流の期日を早めるとかダムの電気カーテンを入れてもらうといったこととともに、川をきれいにしなくてはいけません。それには、合成洗剤を使わない運動が必要です。合成洗剤を溶かした水の中に稚魚を入れると、稚魚は死んでしまいます。しかし、植物油で作った石鹼なら死にません。サケの稚魚を放流するのはいいですが、それとともに合成洗剤を使わないという県民運動をやらないと成功はむずかしいでしょう。長野県には、県樹としてシラカバがあり、県獣としてカモシカがありますが、県の魚は指定されていません。県魚としてはシロザケがいいと思います。しかしせっかく県魚に指定してもらつとも帰ってこないので困ります。そこで、みなさんに合成洗剤はいっさい使わない運動をおののの場で高めていただくことが、やがて千曲川にサケを戻らせる決め手になるのではないかと考えております。

とりとめもないことを喋りましたが、長時間ご清聴ありがとうございました。

(昭和61年3月21日企画展記念講演会にて収録)

VII 特別寄稿

長野県内古建築用材の年代測定

光 谷 拓 実（奈良国立文化財研究所）

はじめに

樹木の年輪の変動パターンを手がかりにしてその樹木の伐採年代を推定し、それによってその樹木に関連する過去の事象の年代を推定する学問が年輪年代学である。

年輪年代学は、アメリカ・アリゾナ大学の天文学者A・E・ダグラス博士が1910年代から研究を開始した。当初、ダグラス博士は、イエローパイン(*Pinus ponderosa*)を用いて樹木の年輪の変動パターンから気候変化の周期性、太陽の黒点活動を見いだそうとした。やがて、この研究は進展し、北アメリカ南西部にあるアズテク族・プエブロ族などのインディアンの遺跡の年代決定に応用されるようになった。

わが国においても、第2次世界大戦以前から年輪年代学の可能性について何人かの研究者が過去に取りくんだことがあったが、いずれも明解な結論に達し得ないままに終わっていた。そのなかで、年輪年代学はアリゾナ州のような乾燥地帯ではじめて成功する方法であり、わが国のように温暖多湿で微気象に富み、複雑な地形をもつ地域で生育する樹木の年輪は、それらの微細な気候要素の影響を受け、大きな気候変動を反映しにくいのではないかと考え、わが国の適用はきわめて困難であるという一般的な見方が広まっていた。

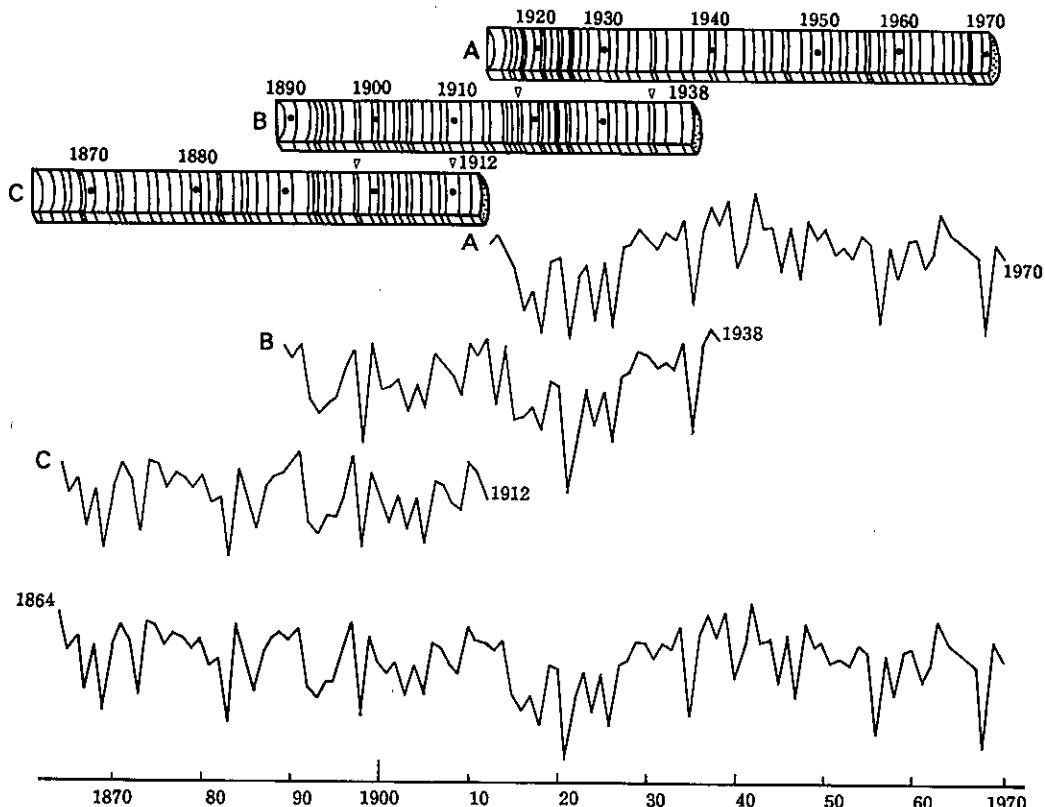
とはいっても、わが国は「木の文化」の国といわれているように千年以上前の古い木造建造物が豊富に存在し、さらに全国各地の遺跡からは、多量の木製遺物が出土している。また数百年の樹齢をもつ現生木が豊富に存在している。こうした条件を考慮した場合、日本は年輪年代学を研究する上で、世界に類をみない好条件に恵まれた国ということができる。

奈良国立文化財研究所は、最近の欧米の研究状況をかえりみて、年輪年代学のわが国における問題点がきわめて多いことは認識しながら、なおこうした豊富な資料の存在を考えあわせ、あえてその可能性を探る必要性を認め1980年度からこの研究に取りくんできた。その開始にあたって、問題はあまりにも多かった。研究対象樹種の選定、試料の採取方法、年輪幅の測定法、年輪グラフの表現方法等すべてが解決すべき問題点をはらんでいた。しかし、研究開始以来数年間に及ぶ研究結果から、これまでの通説に反して、わが国でも少なくともヒノキ、コウヤマキでは年輪年代学が十分に適用できることが判明した。

I 年輪年代学の原理

図1によって、年輪年代学の原理を説明しよう。右上の試料Aは、1970年秋に伐採された樹木から取ったものである。この試料Aの外側から中心に向かって順次年輪幅を読みとり、下図のように年輪グラフを作成する。つぎにAより古い建物からBという試料を得たとする。これもAと同様に年輪グラフを作成して、Aの年輪グラフに重ね合わせ、両者の年輪パターンが合致するところを見つける。この場合、Bの年輪グラフは1938年か、あるいはそれ以後に建てられたことがわかる。CはBよりもさらに古い建物から得た試料である。同様にCの年輪グラフとBの年輪グラフとを重ね

年輪年代学の原理



合わせると、Cは1912年で合致する。従ってCが使われていた建物は1912年以後に建てられたことがわかる。以上、A・B・Cの3試料を順々に重ね合わせることにより、1970年から1864年までの年輪曲線が得られる。こうした一連の作業をクロスデーティング(crossdating)という。数百・数千という試料をクロスデーティングすることにより、長年月にわたる標準年輪曲線を作成することができる。これが準備されると、年代未知の試料から得た年輪グラフを標準年輪曲線に重ね合わせ、相互の年輪パターンが合致するところを見つけだすことによって試料の年代がわかる。それによってその試料を使用した構築物あるいはそれが出土した遺跡の年代を推定できる。かりにその試料が最外の年輪をもつものであれば、数年の誤差範囲内でその樹木の伐採年代、ひいてはその遺跡・構築物の年代を決定できる。この精度は、現在から何千年前にさかのぼろうとも変わらないという長所を持っている。ちなみに、アメリカでは現在から8200年前まで、西ドイツでは6700年前まで、アイルランドでは7000年前までの標準年輪曲線が完成している。

II 年輪年代学研究の成果——古建築用材の年代測定——

ヒノキ材による年輪標準パターンの年代測定範囲は、現在のところ西暦1009年から1984年までである。これは木曾産ヒノキを主にして、現生木と古建築用材（主に東大寺参籠所の板材等）から得た年輪データをもとに作成したものである。この年代確定範囲内においては、実際に年代未知の資料材の実年代を確定し始めている。ここでは、この標準パターンと長野県内に所在する2棟の古建築の解体修理の際に取り換えた用材4点との比較によって年代測定を行った結果を報告する。

若宮八幡神社本殿（元松本城鎮守）——長野県松本市大字筑摩3210

建立年代——桃山時代

資料は、12cm角の身舎柱（ヒノキ材）1点である。年輪数は143年分を数えた。標準パターンとの照合の結果、最も新しい年輪は1614年と推定できた。この資料は、外観からは辺材部分が確認できないし、これに続く心材部分がどの程度削り取られているかも推定しにくい。したがって、資料の伐採年代は、削り取られたこれら周辺部の年輪数を1614年に加算しなければならない。削りとられた心材部分の年輪数は推定しがたいが、辺材部分の年輪数については、矢沢亀吉の研究によって、50~60年と推定することができる。このことから、資料の伐採は1654年は1654年~1664年をさかのぼらないことになる。この結果、この資料は桃山時代（1573年~1614年）ではなく、江戸時代に伐採されたことがわかる。若宮八幡神社本殿の建立年代は、この身舎柱が当初材であるとすれば、江戸初期となり、そうでなければ、この時期に取り換えた材ということになる。ただし、年輪測定から建物の建立年代を推定するには、同一建物につきさらに多数の資料について測定を行う必要がある。

真田信之靈屋（重要文化財）——長野県長野市松代町松代

建立年代——万治3年（1660年）

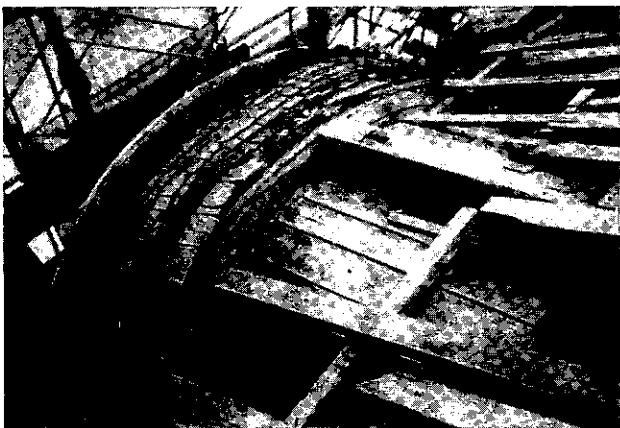
資料は、厚さ3cm、幅14.5cmの板材の断片3点である。材種は、3点ともサワラ材（ヒノキ科）である。これらをA、B、Cとすると、年輪数はそれぞれ273、291、131年を数え、樹種が異なるにもかかわらず、ヒノキの標準パターンとよく合致した。その結果、それぞれの下限年代は、A—1503年、B—1526年、C—1568年となった。最も新しい年代を示したのはCである。3点とも辺材部分が失われており、これに続く心材部分も加工する際に削り取られているため、周辺部分の総年輪数は不明である。したがって、Cの伐採年代は1618~1628年以後にとどまる。この建物の場合、建立年代が明らかであることから、削り取られた心材部の年輪数を考慮に入れると、これらは当初材の可能性が高い。

以上、年代未知の建築部材4点の測定によって、それぞれの最終年輪の実年代を明らかにし、さらにヒノキの標準パターンとサワラの年輪パターンとの相関性が高いことが判明した。

おわりに

わが国における年輪年代学の研究は途に着いたばかりである。幸いにして、軌道にのりはじめ、明るい見通しを持つにいたり、すでにいくつかの成果を得るにいたった。しかし、問題はなお山積みしている。たとえば、年輪幅の変異と気候因子との関係が未解決であり、これが解明されれば年輪幅の変移を手がかりに過去の気候復元が可能となろう。更に樹木の产地推定、木材流通の問題と、わが国の年輪年代学の研究は単に年代決定のみにとどまらず、その成果は多くの分野の研究に波及することが予測できる。

〔 本稿は、「II 年輪年代学研究の成果」を『奈良国立文化財研究所年報 1985』より引用し、その他は名古屋営林局誌『みどり』312号・1984年を基に抜粋・加筆したものである。 〕

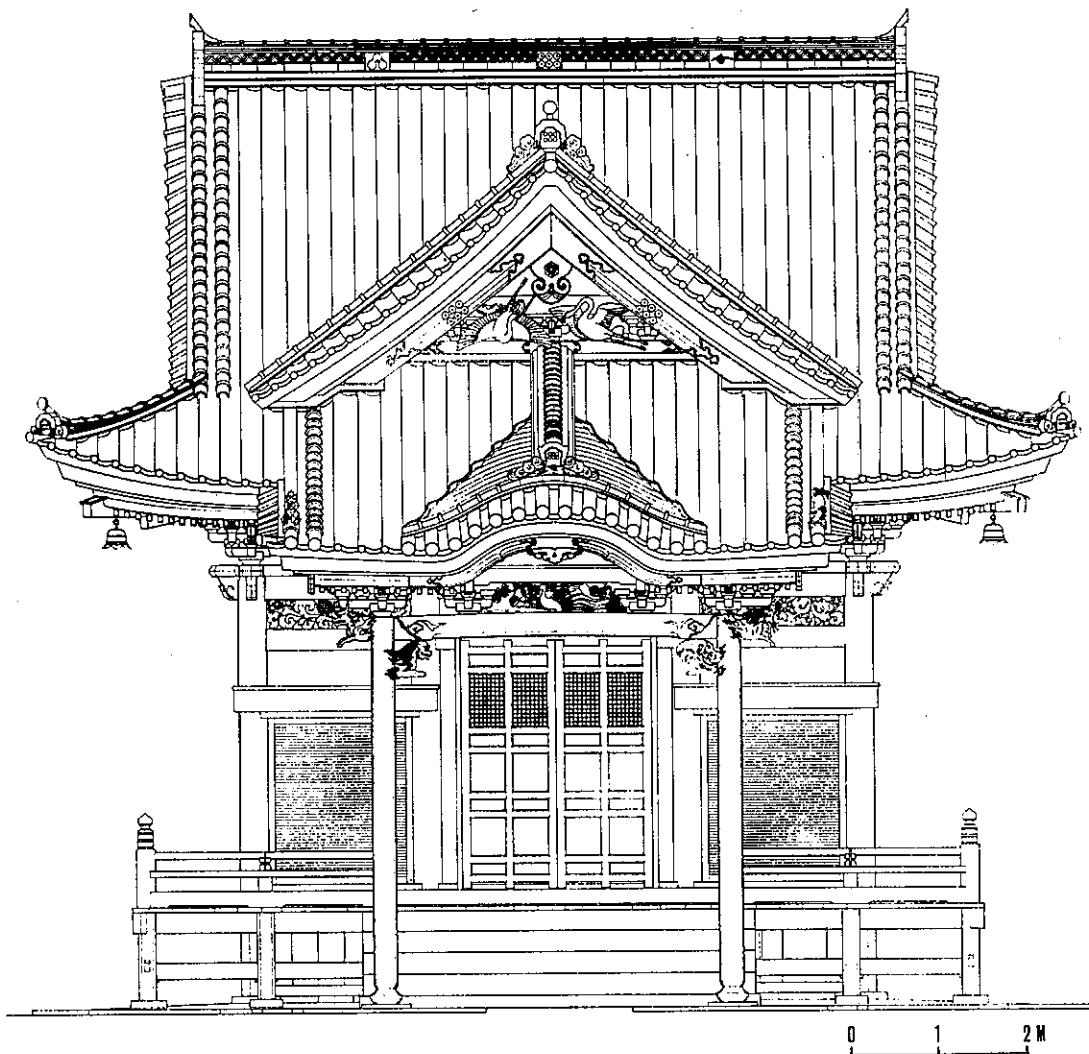


真田信之靈屋修理工事の後、宝殿向拝の軒唐破風柿葺板材の一部が保存されており、今回の年輪年代の測定が行われました。

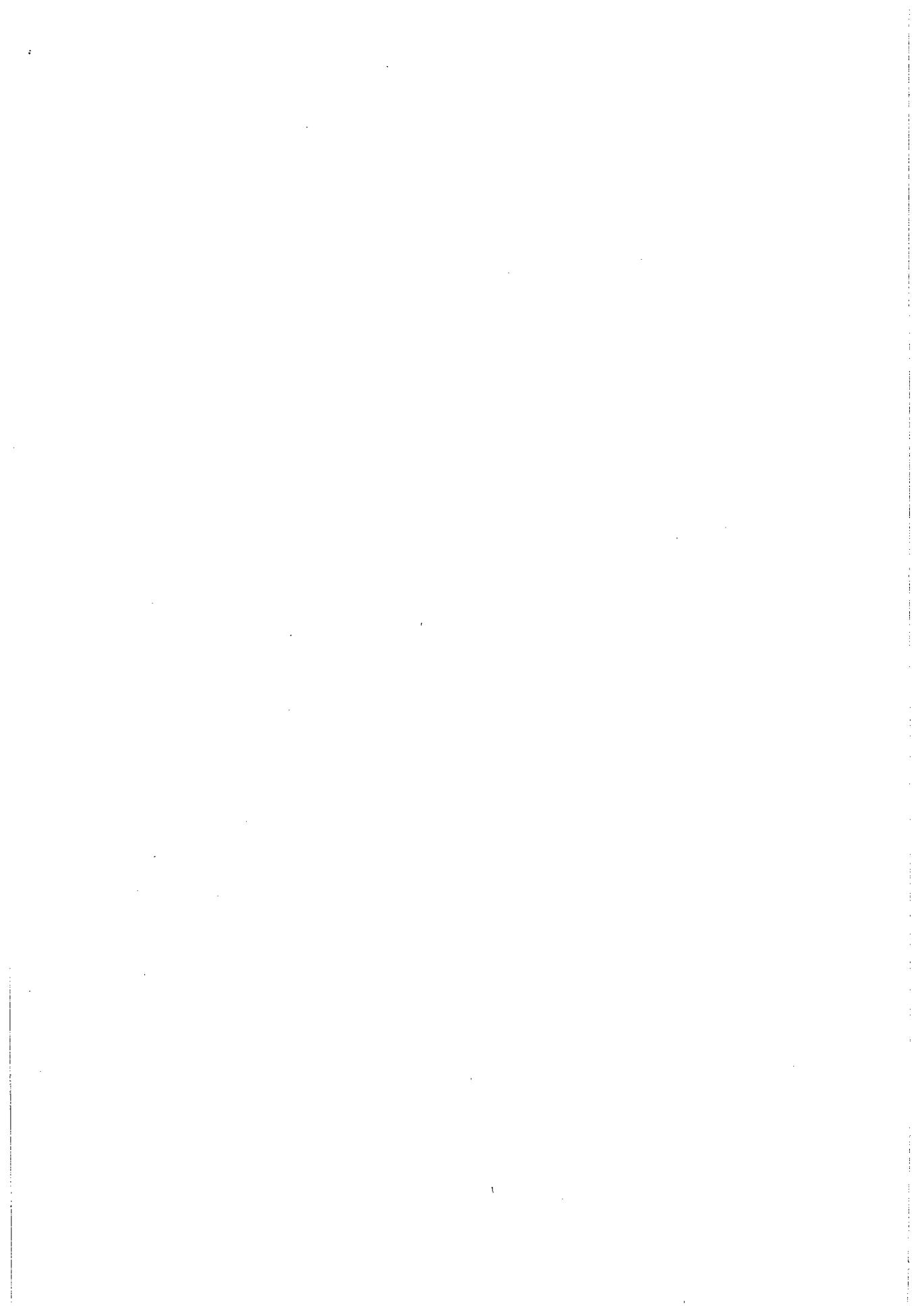
柿葺板材の資料提供については、北信土建株式会社松代出張所長木下茂氏に御協力を賜りました。感謝申し上げます。

宝殿向拝軒唐破風柿葺

左上写真・下図は重要文化財「真田信之靈屋修理工事報告書」より



重要文化財 真田信之靈屋宝殿 修理工事前の正面図



年 報 VOL. 4

—昭和60年4月～昭和61年3月—

発行 昭和61年10月30日

編集
発行 長野市立博物館

長野市小島田町八幡原史跡公園内

☎ 0262 (84) 9011

印刷 西沢印刷株式会社

